

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第207集

権 六 遺 跡

2017

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

美浜町は、知多半島の南側に位置し、西を伊勢湾に東を三河湾に面した海の恩恵を受けて文化が形成されてきた地域であります。この度報告します権六遺跡のある美浜町野間地域は、平安時代末に京都で起きた平治の乱から逃れてきた源義朝公が最後を遂げた地であり、遺跡周辺においても義朝公ゆかりの大御堂寺・野間大坊、源義朝公墓、鎌田正清公墓、法山寺、湯舟跡、千人塚、乱橋、長田礫の松など多くの史跡が残されております。

さて、権六遺跡の発掘調査では、弥生時代から江戸時代にかけての遺構と遺物がみつかりました。特に平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構と遺物は、まさに遺跡周辺に所在する史跡とも関連し、同時代にこの地域に所在した安楽寿院領野間内海荘の歴史をひもとく資料の一つになるものと思われる。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成 29 年 3 月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 中 野 幹 也

例 言

1. 本書は、知多郡美浜町大字野間字権六に所在する権六遺跡(県遺跡番号 490119)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県建設部道路建設課(知多建設事務所)による県道野間河和線建設に伴い、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 発掘調査期間は平成 26 年 10 月 1 日から平成 27 年 3 月 20 日で、調査面積は 2,400m²である。
4. 調査担当者は、宮腰健司(センター長兼調査課長)・蔭山誠一(調査研究専門員)である。
5. 整理および報告書作成作業は、平成 27 年 4 月から平成 28 年 3 月までで、蔭山が担当した。
6. 発掘調査に関して、株式会社アコードより支援を受けた。
調査体制 代 理 人：大倉 崇・歌枕 勝
調査補助員：藤田明弘
測 量 技 師：田村和久
7. 遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。
山田有美子・瀧 智美・時田典子・阿部裕恵・前田弘子・鈴木好美(整理補助員)
遺物実測・デジタルトレースについては、株式会社島田組に委託し、蔭山が校正した。
8. 出土遺物の写真撮影については金子知久氏(スタジオ遊)の手を煩わせた。
9. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。
愛知県建設部道路建設課知多建設事務所・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・大御堂寺・法山寺・美浜町教育委員会(五十音順、敬称略)
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。
相川多恵子・石田泰弘・磯部利彦・梅本真雄利・奥川弘成・小栗康寛・鎌倉由受・河村伸吉・佐藤繁雄・佐藤英世・城ヶ谷和広・田中城久・中野晴久・夏目安敏・坂野俊哉・羽柴亜弥・廣重弘和・富谷全永・水野真圓・宮向好明・山下 泉・山下勝年(五十音順・敬称略)
美浜ふるさと研究会・とこなめ陶の森資料館・大府市歴史民俗資料館
11. 本書の執筆は、主に蔭山誠一が担当し、第 4 章は鬼頭 剛(愛知県埋蔵文化財センター調査研究専門員)が担当した。
12. 本書の編集は蔭山誠一が行った。
13. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記している。
14. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24 TEL：0567-67-4163
15. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24 TEL：0567-67-4164

目 次

第1章	前 言	
第1節	調査の経緯と方法	1
第2節	地理的環境	1
第3節	周辺の遺跡と歴史的環境	1
第2章	遺 構	
第1節	基本層序	7
第2節	14A 区の遺構	19
第3節	14B 区の遺構	27
第4節	14C 区の遺構	47
第5節	14D 区の遺構	55
第3章	出 土 遺 物	
第1節	遺物整理の方法と分類	60
第2節	14A 区出土の土器・陶磁器	60
第3節	14B 区出土の土器・陶磁器	66
第4節	14C 区出土の土器・陶磁器	75
第5節	14D 区出土の土器・陶磁器	75
第6節	石製品	81
第7節	木製品	81
第4章	権六遺跡における地下層序と古地理・古環境	
第1節	はじめに	86
第2節	試料および分析方法	86
第3節	分析結果	87
第4節	遺跡周辺の等高線図	89
第5節	考察	91
第5章	総 括	
第1節	遺構の変遷	94
第2節	主要遺物の状況	96
第3節	中世における権六遺跡の特徴	97

写真図版

遺 構：写真図版 1～写真図版 8
出土遺物：写真図版 9～写真図版 16

抄 録

挿図・挿表目次

図 1	権六遺跡位置図	1	図 41	14C 区個別遺構図 1(1:100)	50
図 2	権六遺跡調査区位置図 (1:5,000)	2	図 42	14C 区 091NR 上面検出の土坑 (1:100)	51
図 3	知多半島の地質 (1:200,000)	3	図 43	14C 区個別遺構図 2(1:100)	51
図 4	権六遺跡周辺の遺跡 (1:50,000)	4	図 44	14C 区個別遺構図 3(1:100)	52
図 5	権六遺跡の地形と基本層序の地点 (1:1,250)	7	図 45	14C 区遺構平面図 3・ 14D 区遺構平面図 2(1:100)	54
図 6	14A 区・B 区北壁土層断面図 1(1:100)	8	図 46	14C 区個別遺構図 4・ 14D 区遺構平面図 3(1:100)	56
図 7	14A 区・B 区北壁土層断面図 2(1:100)	9	図 47	14D 区個別遺構図 (1:100)	57
図 8	14B 区 177SE 平面図 (1:50)・ 土層断面図 (1:100)	9	図 48	14D 区 047NR(1:100)	58
図 9	14A 区・B 区北壁土層断面図 3	10	図 49	14 D 区遺構平面図 4(1:100)	59
図 10	14A 区・B 区南壁土層断面図 1(1:100)	11	図 50	14A 区出土土器・陶磁器 1(1:4)	61
図 11	14A 区・B 区南壁土層断面図 2	12	図 51	14A 区出土土器・陶磁器 2(1:4)	62
図 12	14C 区北壁西側土層断面図 (1:100)	13	図 52	14A 区出土土器・陶磁器 3(1:4)	64
図 13	14C 区北壁東側土層断面図 (1:100)	14	図 53	14A 区出土土器・陶磁器 4(1:4)	65
図 14	14C 区南壁土層断面図 (1:100)	15	図 54	14B 区出土土器・陶磁器 1(1:4)	67
図 15	14 D 区北壁土層断面図 1(1:100)	16	図 55	14B 区出土土器・陶磁器 2(1:4)	68
図 16	14D 区北壁土層断面図 2	17	図 56	14B 区出土土器・陶磁器 3(1:4)	70
図 17	14D 区東壁土層断面図 (1:100)	17	図 57	14B 区出土土器・陶磁器 4(1:4)	71
図 18	14D 区南壁土層断面図 (1:100)	18	図 58	14B 区出土土器・陶磁器 5(1:4)	73
図 19	14A 区遺構平面図 1(1:100)	20	図 59	14B 区出土土器・陶磁器 6(1:4)	74
図 20	14A 区遺構平面図 2(1:100)	21	図 60	14B 区出土土器・陶磁器 7、 14C 区出土土器・陶磁器 1(1:4)	76
図 21	14A 区個別遺構図 1(1:100)	22	図 61	14C 区出土土器・陶磁器 2(1:4)	77
図 22	14A 区個別遺構図 2・ 14B 区個別遺構図 1(1:100)	23	図 62	14C 区出土土器・陶磁器 3、 14D 区出土土器・陶磁器 1(1:4)	78
図 23	14A 区 035SD・036SD(1:100)	25	図 63	14D 区出土土器・陶磁器 2(1:4)	79
図 24	14A 区南東隅部上面遺構 (1:100)	25	図 64	14D 区出土土器・陶磁器 3(1:4)	80
図 25	14A 区 001SK・003NR・005NR(1:100)	26	図 65	石製品 (1:4)	82
図 26	14A 区遺構平面図 3・ 14B 区遺構平面図 1(1:100)	28	図 66	木製品 1(1:4)	83
図 27	14A 区遺構平面図 4・ 14B 区遺構平面図 2(1:100)	29	図 67	木製品 2(1:4)	84
図 28	14B 区遺構平面図 3(1:100)	32	図 68	木製品 3(1:4)	85
図 29	14B 区個別遺構図 2(1:100)	35	図 69	権六遺跡における試錐調査地点	86
図 30	14B 区個別遺構図 3(1:100)	36	図 70	試錐調査地点の層序と 分析試料採取層準	87
図 31	14B 区個別遺構図 4(1:100)	37	図 71	権六遺跡周辺の 標高値を基にした地形解析図	90
図 32	14B 区個別遺構図 5(1:100)	38	図 72	権六遺跡の主要遺構の変遷 (1:1,250)	94
図 33	14B 区個別遺構図 6(1:100)	40	図 73	中世の遺構変遷 (1:400)	95
図 34	14B 区個別遺構図 7(1:100)	41	図 74	権六遺跡周辺の地籍図 (約 1:30,000)	98
図 35	14B 区個別遺構図 8(1:100)	42	表 1	権六遺跡周辺の遺跡一覧	5
図 36	14B 区個別遺構図 9(1:100)	43	表 2	試錐調査試料における火山灰の 粒子組成分析結果	89
図 37	14B 区遺構平面図 4(1:100)	44	表 3	試錐調査試料における 放射性炭素年代測定結果	89
図 38	14B 区北東隅部上面遺構 (1:100)	46			
図 39	14C 区遺構平面図 1(1:100)	48			
図 40	14C 区遺構平面図 2・ 14D 区遺構平面図 1(1:100)	49			

第1章 前 言

第1節 調査の経緯と方法

権六遺跡は愛知県知多郡美浜町大字野間字権六に所在する遺跡で（図1）、名古屋鉄道知多新線野間駅より東北東約150mの地点に位置する。本遺跡は愛知県埋蔵文化財包蔵地一覧に権六遺跡（県遺跡番号490119、北緯34度46分25秒、東経136度51分44秒）として登録されている遺跡である。愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室では、平成26年度の発掘調査を愛知県建設部道路建設課知多建設事務所による県道野間河和線建設事業に伴う事前調査として計画された。これらの発掘調査について、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じた委託を受けて、平成26年度の発掘調査を平成26年10月1日から平成27年3月20日にかけての期間で実施した。

調査面積は2,400㎡で、調査区は、調査対象地の中央にある丘陵を挟んで西の14A区・14B区と東の14C区・14D区の4ヶ所に分けて、西の調査区より順に調査を実施した。（図2）。

発掘調査終了後の平成27年度に出土遺物の整理作業と報告書作成を行った。

調査方法はショベルカーにて表土となる最近の盛り土と近世以後の旧水田耕作土と思われる地層を除去した後、発掘調査作業（人力による遺構検出・遺構検出状況の写真撮影・人力による遺構掘削・遺構の完掘状況の写真撮影・遺構の測量と観察など）を順次行い、作業終了次第埋め戻した。

第2節 地理的環境

権六遺跡の所在する愛知県知多郡美浜町は、知多半島の中央部南側にある（図3）。知多半島では、半島の南先端部に中新統師崎層群があり、その北側に焼き物素材の粘土層となる新第三系の常滑層群がみられ、さらにその上部に第四系の更新統の地層がみられる。これら更新統以前の丘陵地と丘陵地の間となる谷部に沖積層がみられる。本遺跡のある美浜町野間地域は、知多半島の中では沖積層が発達した地域で、本遺跡も標高6m～8m前後の更新統野間層・浦戸層の丘陵地から沖積層に移る地点に立地する。知多半島の沖積層には、半島尾根部から丘陵谷部を流れる小河川がみられ、野間地域では、権六遺跡の南を流れる杉谷川、北の奥田地区を流れる山王川、南の富具地区を流れる富具崎川があり、西に面する伊勢湾にそそぐ。また権六遺跡周辺にもみられるが、知多半島の丘陵谷部には大小の用水と治水をかねた溜め池が多数あり、権六遺跡の14C区の北側丘陵にも小型の溜め池があった。

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境 （図4・表1）

旧石器時代の遺跡はあまり知られていないが、知多半島では縄文時代の遺跡が多く知られている。とくに権六遺跡周辺の遺跡では、縄文時代早期の押型文土器が採集された美浜町奥田の坪山遺跡（24）、名鉄知多

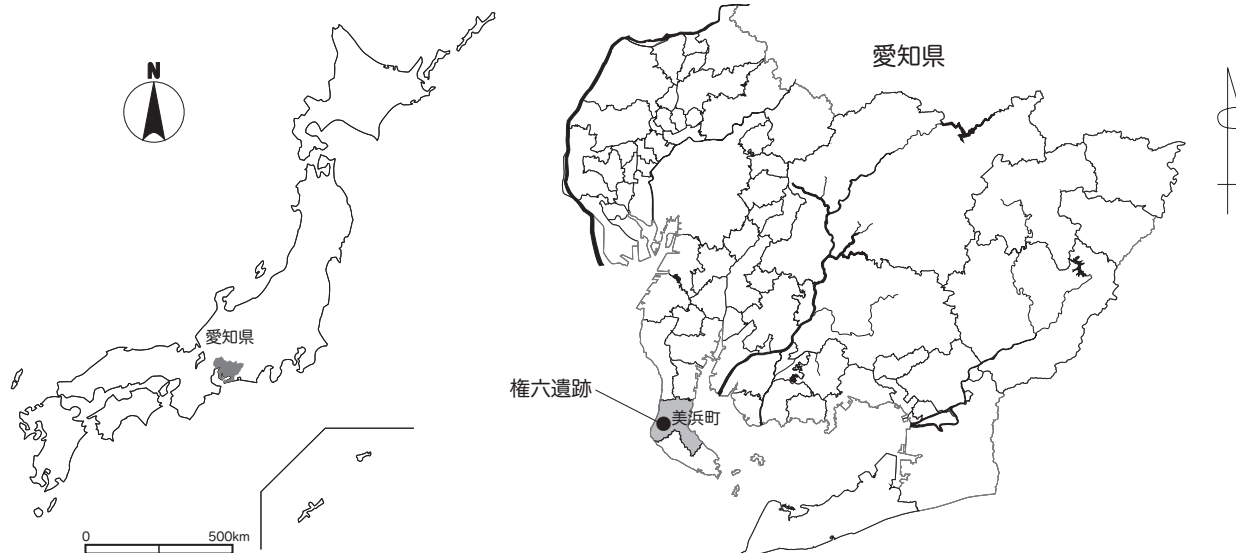


図1 権六遺跡位置図

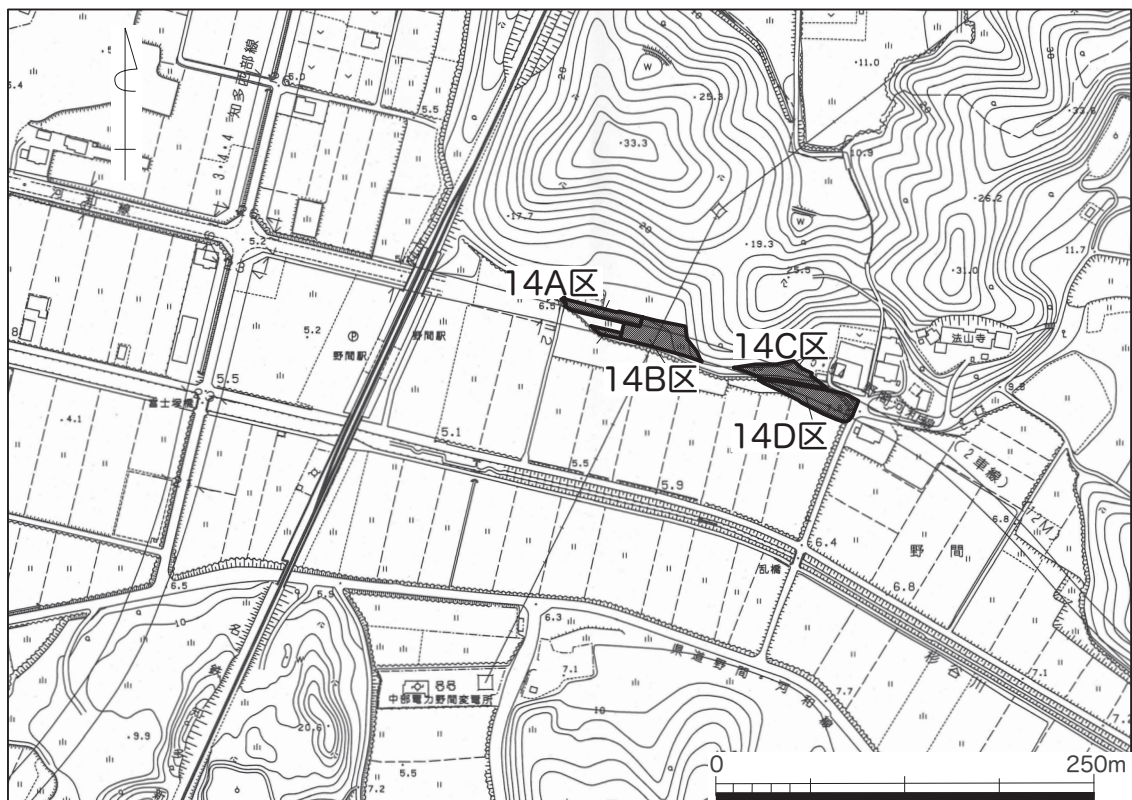


図2 権六遺跡調査区位置図（1：5,000）

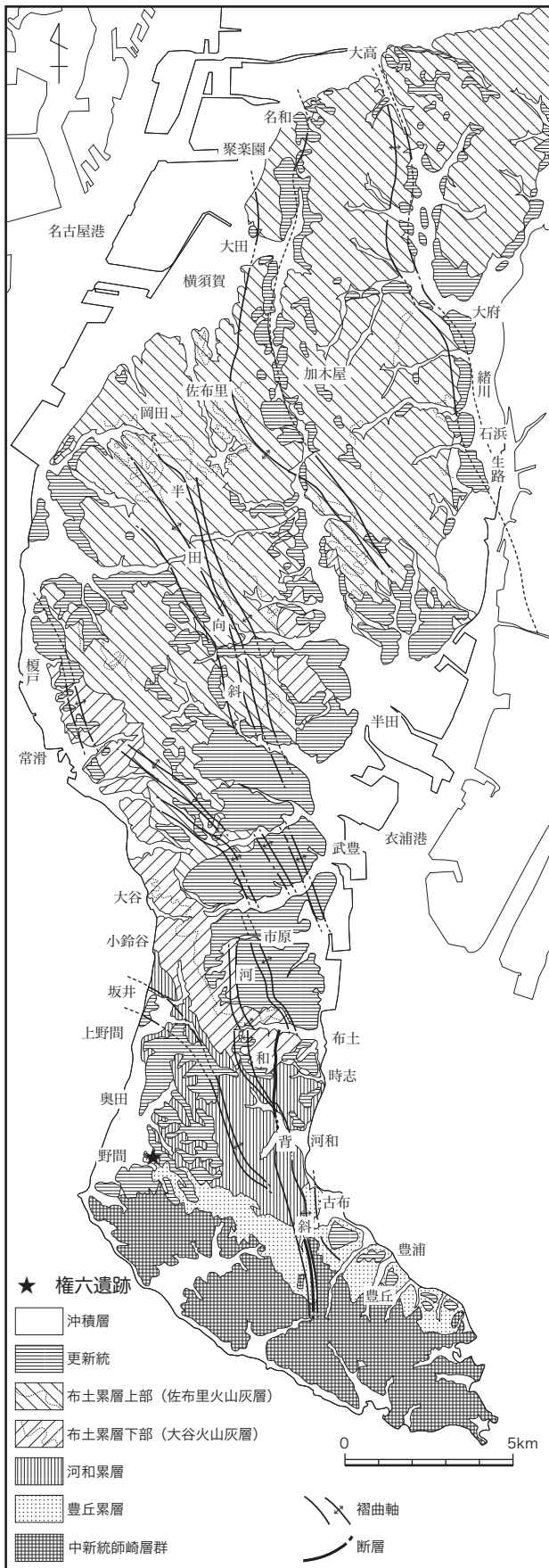
新線の内海駅高架工事の際に発見され、その後調査・研究がなされた南知多町内海の先苅貝塚（118）、同内海の遺跡で縄文時代前期に主体のある清水ノ上貝塚（119）、同内海の遺跡で縄文時代中期に主体のある林ノ峰貝塚（115）がよく知られている。この中で先苅貝塚は標高・10m 程の地層から縄文土器とともにハイガイ・サルボウを主体にマガキ・イタボガキ・アカニシなどが出土した貝塚遺跡で、縄文時代早期の海水準の低下を示す遺跡として著名である。林ノ峰貝塚では縄文時代後期の住居跡1軒と埋葬人骨7体が検出されており、住居跡は敷石住居跡とされるもので、敷石の中央に石囲炉がみついている。また埋葬人骨は小児から老年成人までのものがあり、当時の葬送や人々の体型などを研究する上で貴重な資料と思われる。

権六遺跡周辺で調査されている弥生時代の遺跡には、権六遺跡の南西0.3kmにある下高田遺跡（20）と下高田丸山遺跡（21）がある。下高田遺跡は沖積面にある微高地上にみつかった遺跡で、耕地整理の工事中に多くの出土遺物が採集されている。縄文時代前期から中世にかけての出土遺物が発見されているが、その中の中心遺物として弥生時代前期から後期にかけての弥生土器や石包丁などが採集されており、稲作を伴う弥生文化が知多半島にいち早く伝わったことを示す遺跡である。また丘陵側に隣接する下高田丸山遺跡（21）は、中世の流路とも思われる遺構の中から、弥生時代中期

の弥生土器が多数出土しており、当地域の弥生土器研究の基礎資料となっている。

古墳時代の遺跡では、東に0.2km程の谷頭にある田上遺跡（22）において古墳時代前期初頭の土師器の高杯や甕などが出土しており、先に述べた下高田遺跡（20）では6世紀前半から7世紀にかけての須恵器の杯身・杯蓋、甕、器台、埴などが出土している。この他にも中平井の北郷中遺跡（33）では須恵器の甕、北郷中遺跡の近くの谷頭では提瓶などの出土が知られており、須恵器の残存状態の良いものが出土する類例については、付近に古墳が存在し、その副葬品であった須恵器が見つけられている可能性がある。

古代の遺跡では、製塩土器が出土する遺跡が知多半島の海岸に沿って分布している。権六遺跡のある伊勢湾岸の地域は、平城京跡から出土した調塩の木簡にみられる尾張国知多郡富具郷野間里にあたる地域と考えられており、美浜町の製塩遺跡としては奥田石原製塩遺跡（16）、奥田砂原製塩遺跡（32）があり、南知多町では小杵遺跡（121）、清水遺跡（123）、天神西遺跡（131）、中洲遺跡などが知られている。権六遺跡の北北西約1.5kmにある奥田石原製塩遺跡では昭和47年8月に発掘調査が美浜町教育委員会により行われ、平安時代前期の4基の製塩炉跡が検出されている。出土遺物には古墳時代の脚部が中空の製塩土器片や奈良時代の須恵器も出土しており、古墳時代から製塩がこの



一新第三系 (常滑層群) 一



一第四系一

図3 知多半島の地質 (牧之内 1988 より作成した『夏敷古窯跡 蛇廻間古窯跡』第6図を一部加工 1:200,000)

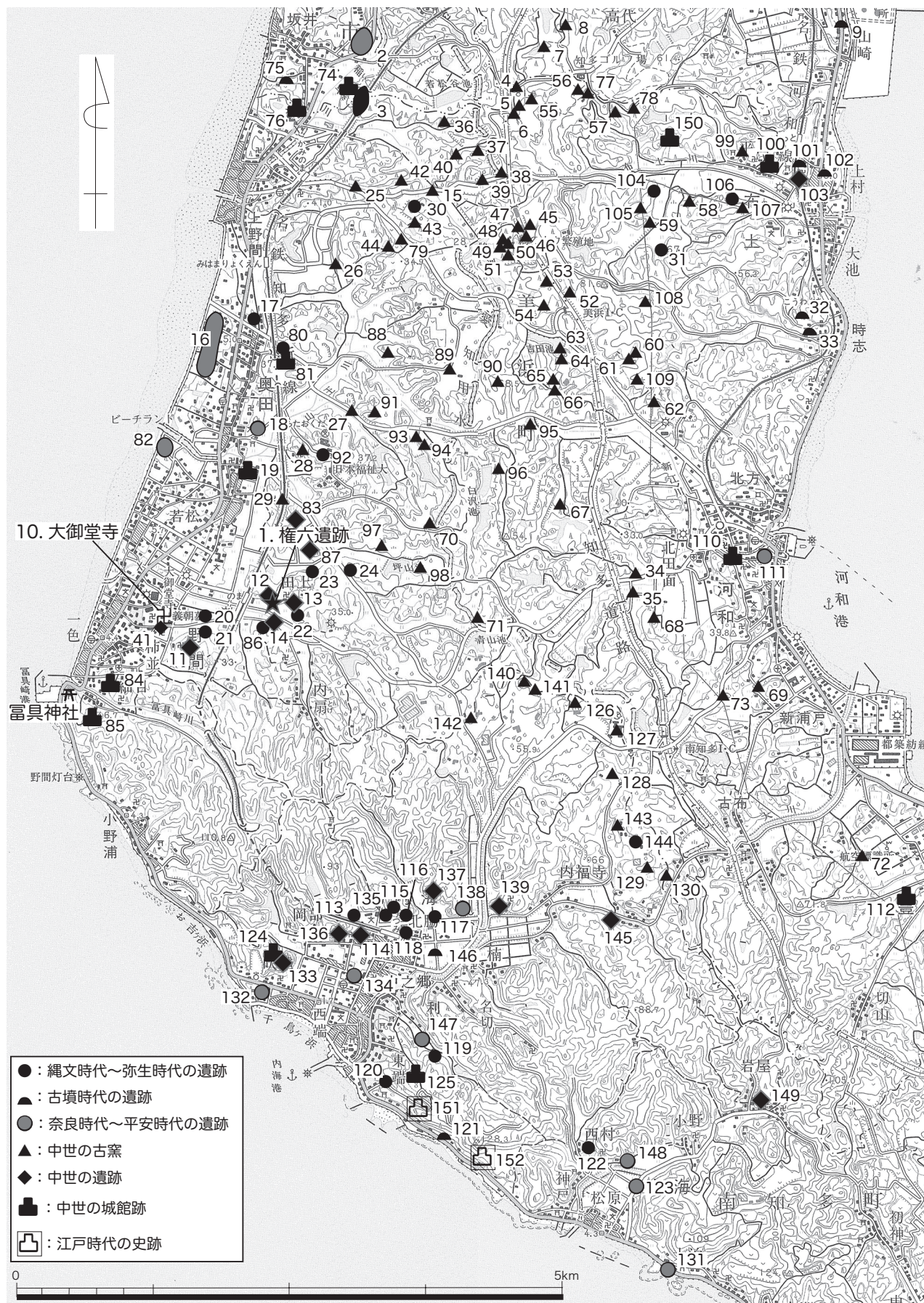


図4 権六遺跡周辺の遺跡 (1 : 50,000)

表1 権六遺跡周辺の遺跡一覧

1. 権六遺跡（弥生時代～古墳時代前期・平安時代後期～鎌倉時代・江戸時代）
2. 水戸狭間遺跡（平安時代）
3. 城塚遺跡（弥生時代）
4. 細谷古窯群（中世）
5. 立楠 A 古窯（中世）
6. 立楠 B 古窯（中世）
7. 兎池古窯群（中世）
8. 下別曾古窯群（5 基、中世）
9. 山崎古墳群（4 基、古墳時代）
10. 国指定史跡大御堂寺（中世～）
11. 町指定史跡（伝）長田忠致はりつけの松
12. 町指定史跡（伝）千人塚
13. 町指定史跡（伝）源義朝公湯舟跡
14. 町指定史跡（伝）乱橋
15. 大廻間古窯（中世）
16. 奥田石畑製塩遺跡（奈良時代、製塩土器）
17. 石亀遺跡（弥生時代）
18. 海道田遺跡（古墳時代～中世）
19. 岩川三太夫屋敷跡（中世）
20. 下高田遺跡（縄文時代～弥生時代）
21. 下高田丸山遺跡（弥生時代中期～古墳時代）
22. 田上遺跡（弥生時代）
23. 相模谷遺跡（弥生時代）
24. 坪山遺跡（縄文時代）
25. 深廻間古窯群（3 基以上、中世）
26. 小原池古窯群（2 基、中世）
27. 奥田前古窯群（中世）
28. 会下前古窯群（中世）
29. 廻間田古窯群（中世）
30. 西五入道遺跡（縄文時代）
31. 孫太郎遺跡（弥生時代）
32. 中平井遺跡（古墳時代）
33. 北郷中遺跡（古墳時代）
34. 岡ノ前古墓（中世）
35. 大種木古墓（中世）
36. 池田口古窯（中世）
37. 畦大明 A 古窯群（2 基以上、中世）
38. 畦大明 B 古窯群（3 基以上、中世）
39. 畦大明 C 古窯（中世）
40. 明星谷古窯群（中世）
41. 伝池禅尼経塚（中世）
42. 蛭谷古窯（中世）
43. 曾山古窯（中世）
44. 滝谷 A 古窯（中世）
45. 鵜の池 A 古窯（中世）
46. 鵜の池 B 古窯（中世）
47. 鵜の池 C 古窯（中世）
48. 鵜の池 D 古窯（中世）
49. 鵜の池 E 古窯（中世）
50. 鵜の池 F 古窯群（2 基、中世）
51. 鵜の池 G 古窯（2 基、中世）
52. 鵜の池 H 古窯（中世）
53. 鵜の池 I 古窯群（3 基以上、中世）
54. 鵜の池 K 古窯群（3 基以上、中世）
55. 豆池 A 古窯群（3 基、中世）
56. 菅池 A 古窯（中世）
57. 祭山 B 古窯群（中世）
58. 砂下古窯（中世）
59. 菅刈古窯群（2 基、中世）
60. 井柳 A 古窯（中世）
61. 井柳 B 古窯群（2 基、中世）
62. 山鼻古窯群（3 基以上、中世）
63. 吉田 A 古窯群（2 基、中世）
64. 吉田 B 古窯群（3 基、中世）
65. 十二谷 A 古窯群（5 基以上、中世）
66. 十二谷 B 古窯（中世）
67. 姥八反古窯（中世）
68. 小坂古窯（中世）
69. 上前田古窯（中世）
70. 中山平井古窯（中世）
71. 青山池古窯群（4 基、中世）
72. 古布平井古窯群（中世）
73. 細田古窯群（2 基以上、中世）
74. 越智伊賀守屋敷跡（中世）
75. 芳狭間遺跡（古墳時代）
76. 上野間城跡（中世）
77. 向山 A 古窯群（中世）
78. 祭山 A 古窯群（中世）
79. 滝谷 C 古窯（中世）
80. 谷遺跡（弥生時代）
81. 奥田城跡（中世）
82. 奥田砂原製塩遺跡（古墳時代～中世、製塩土器）
83. 打越遺跡（中世）
84. 細目城跡 A 地点（中世）
85. 細目城跡 B 地点（中世）
86. 斧廻間遺跡（弥生時代～中世）
87. 若王子遺跡（中世）
88. 込水古窯群（中世）
89. 下平井古窯（中世）
90. 十二谷口古窯群（中世）
91. 口白沢古窯（中世）
92. 足廻間遺跡（弥生時代）
93. 中山 A 古窯群（中世）
94. 中山 B 古窯群（中世）
95. 棒山池古窯群（中世）
96. 白沢下池古窯（中世）
97. 坪山池 A 古窯（中世）
98. 坪山池 B 古窯（中世）
99. 明山古窯（中世）
100. 布土城跡（中世）
101. 平井遺跡（古墳時代～中世）
102. 北浜田遺跡（古墳時代～平安時代）
103. 韋航寺遺跡（中世）
104. 八鐘遺跡（弥生時代）
105. 管刈 B 古窯群（中世）
106. 砂之下遺跡（弥生時代）
107. 半月古窯（中世）
108. 猿田古窯群（中世）
109. 山井古窯群（中世）
110. 河和城跡（中世）
111. 河和北屋敷遺跡（奈良時代～近世）
112. 天神山城跡（中世）
113. 下別所遺跡（縄文時代～弥生時代・中世）
114. 阿麻遺跡（弥生時代中期～弥生時代後期）
115. 林ノ峰貝塚（縄文時代前期～縄文時代後期）
116. 潮干天神遺跡（弥生時代中期～弥生時代後期）
117. 乙福谷遺跡（縄文時代前期～縄文時代中期・弥生時代後期）
118. 先苅貝塚（縄文時代早期）
119. 清水ノ上貝塚（縄文時代早期～縄文時代後期・弥生時代中期～弥生時代後期）
120. 山尾遺跡（弥生時代前期）
121. 小樹遺跡（古墳時代、製塩土器）
122. 欠前遺跡（縄文時代後期～縄文時代晩期・弥生時代中期～弥生時代後期）
123. 清水遺跡（奈良時代、製塩土器）
124. 岡部城跡（中世）
125. 一色城跡（中世）
126. 西鈴ヶ谷古窯（中世）
127. 鈴ヶ谷古窯群（5 基、中世）
128. ハヶ池古窯（中世）
129. 打越 A 古窯群（2 基、中世）
130. 打越 B 古窯（中世）
131. 天神西遺跡（奈良時代～平安時代、製塩土器）
132. 寺前遺跡（奈良時代～平安時代、製塩土器）
133. 城山遺跡（中世）
134. 中前田遺跡（奈良時代～近世、製塩土器）
135. 円通寺東遺跡（中世）
136. 早稲倉遺跡（中世）
137. 乙福谷東遺跡（中世）
138. 中添遺跡（奈良時代～中世）
139. 性海寺古墓（中世）
140. 奥榎木 C 古窯群（中世）
141. 奥榎木 B 古窯群（中世）
142. 芋沢古窯群（中世）
143. 杵ヶ奥古窯（中世）
144. 汁谷遺跡（弥生時代・奈良時代～平安時代）
145. 内福寺廻間遺跡（中世）
146. 中塩田遺跡（古墳時代～中世）
147. 小廻間遺跡（奈良時代～中世）
148. 山崎遺跡（奈良時代・中世）
149. 岩屋寺古墓（中世）
150. 布土烽火台跡（江戸時代）
151. 内海砲台跡（江戸時代）
152. 内海烽火台跡（江戸時代）

地域で行われてきたことを示す遺跡である。また権六遺跡の北約 1.0km の海道田、大己貴神社のある丘陵には奥田廃寺跡として知られていた海道田遺跡 (18) があり、白鳳時代から奈良時代にかけての素弁蓮華文軒丸瓦と複弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦と四重弧文軒平瓦などが採集されていた (水野 1921)。平成 6 年の発掘調査が行われ、同時期の瓦が出土し、その出土状況が寺院跡というよりは古窯の灰原のような状況であるという指摘があり、海道田遺跡と遺跡の名称を変更された (磯部・奥川・森 1998)。

平安時代末の権六遺跡周辺は鳥羽上皇が京都桂に営んだ安楽寿院領としての野間内海荘が展開していたとされ、周辺地域には平安時代末から鎌倉時代の山茶碗・小皿・片口鉢・甕・壺を焼成する古窯が多数ある。美浜町内においても小原池古窯群 (26)、鵜の池 A～K 古窯群 (45～54)、込水古窯群 (88)、吉田 A・B 古窯群 (63・64)、細田古窯群 (73) など多くの調査・研究がなされている。近年調査されたものでは、細田古窯群 (73) では 2 基の窯跡が調査され、12 世紀末～13 世紀前葉の山茶碗と小皿を焼成する窯であることが分かった。美浜町奥田にある込水古窯群 (88) では 1 基の窯跡と 2 ヶ所の灰原が調査されており、12 世紀末の山茶碗・小皿・甕・片口鉢・鉢・広口壺などが出土している。美浜町吉田 A・B 古窯群では、6 基の窯跡が調査され、山茶碗・小皿の他、片口鉢や甕、壺も焼成する窯であった。これらは美浜町内のほぼ同時期の古窯においても、山茶碗・小皿の専焼窯と山茶碗・小皿と甕・壺・片口鉢も焼成する古窯があり、中世における知多半島の窯業生産において 2 系統の工人集団が存在するという研究成果を反映したものと考えられる (中野 1990)。また知多半島では平安時代末から鎌倉時代にかけて、先に述べた京都桂の離宮の造営を契機に始まった瓦も焼成していた。美浜町内にも鎌倉時代にかかる時期のものと思われる三巴文軒丸瓦や宝相華文軒平瓦や唐草文軒平瓦などを焼成する蛭谷古窯 (42)、下平井古窯 (89)、滝谷 A 古窯 (44) などが知られている。とくに下平井古窯出土の覗き花文軒平瓦とされるものは、大御堂寺境内 (10) から出土している覗き花文軒平瓦のものと同文とされていて、大御堂寺の堂宇建立の際には周辺の地域で製作された瓦が供給されたものと考えられている。

戦国時代には、伊勢湾を見下ろす丘陵地や三河湾を望む丘陵地上に立地する城が造られた。権六遺跡周辺では、奥田城跡 (81)、細目城 A (84) と細目城 B (85)、岡部城跡 (124)、内海城・馬場城)、河和城跡 (110) などがある。奥田城跡 (81) は、大野の佐治氏や緒川の緒川水野氏との関わりでの伝承が残り、主郭と思われる曲輪が大きく、横堀が発達した戦国時代末の発展し

た特徴を持つ。細目城 A (84)・細目城 B (85) は緒川水野氏との関わりを持つ伝承が富具神社に残る文献史料にみられるが、明確な城の遺構は不明瞭である。岡部城跡 (124) は、内海城や馬場城とも呼ばれる城で、丘陵上の城山部分と平地の居館である馬場村城屋敷と組み合わせて使われた城との指摘がある。河和城跡 (110) は、三河田原の戸田宗光により長祿年間 (1457～1459) に築城された城とされ、戸田守光が天正 17 年 (1589) の小田原攻めで討ち死にした際に破却されたと伝えられる城で、三河湾を望む丘陵北東隅に主郭となる曲輪が築かれ、横堀を挟んで複数の曲輪がめぐる求心性の高い城とされる。このように戦国時代の当地域で伝承などに残る城跡は、大野の佐治氏、田原の戸田氏、緒川の水野氏と在地の勢力の関わりの中で形成されたものと思われる。

【参考文献】

- 山下勝年 1983 「第一章 原始時代」『美浜町誌』本文編、第二編 歴史、美浜町役場
磯部幸男・杉崎章・福岡猛志 1983 「第二章 古代から中世へ」『美浜町誌』本文編、第二編 歴史、美浜町役場
山下勝年・奥川弘成 1985 「第一章 史跡考古資料 第一節 原始・古代」『美浜町誌』資料編二、第二編 文化財、美浜町役場
磯部幸男・森下雅彦 1985 「第一章 史跡考古資料 第一節 古代・中世」『美浜町誌』資料編二、第二編 文化財、美浜町役場
牧之内猛 1988 「常滑層群」・「知多半島地域」『日本の地質 5 中部地方Ⅱ』共立出版
山下勝年・中野晴久 1991 「第一章 先史」『南知多町誌』本文編、第二編 歴史、南知多町
磯部幸男 1991 「第二章 古代」『南知多町誌』本文編、第二編 歴史、南知多町
奥川弘成 1991 「第二章 中世」『南知多町誌』本文編、第二編 歴史、南知多町
山下勝年・磯部幸男・奥川弘成・中野晴久 1997 「第二節 遺跡・遺物」『南知多町誌』資料編六、第一編 考古資料、南知多町
水野興圓 1921 「尾張国知多郡野間村に於ける窯址出土の古瓦」『考古学雑誌』第 13 巻第 1 号、日本考古学協会
杉崎章・磯部幸男・宮川芳照・山下勝年 1972 『奥田製塩遺跡』「美浜町文化財調査報告 第一集」愛知県知多郡美浜町教育委員会
杉崎章・磯部幸男・山下勝年 1977 「下高田遺跡」『美浜町文化財報告 第 4 集』美浜町教育委員会
磯部幸男・奥川弘成・森崇史 1998 『海道田遺跡緊急調査報告書』「美浜町文化財調査報告 第 5 集」美浜町教育委員会
磯部利彦・安田幸市・深見佳世・飯塚邦男 2004 『込水古窯群発掘調査報告書』「美浜町文化財調査報告 第 6 集」美浜町教育委員会
山下勝年・増子康真編 2012 『美浜吉田古窯群分布調査概報』「美浜町文化財報告 第 7 集」美浜町教育委員会
杉崎章・磯部幸男・山下勝年 1976 『清水ノ上貝塚』「南知多町文化財調査報告書 第一集」南知多町教育委員会
山下勝年編 1980 『先苅貝塚』「南知多町文化財調査報告書 第四集」南知多町教育委員会
磯部幸男・山下勝年・奥川弘成・坂野俊哉・青木修 1983 『林ノ峰貝塚Ⅰ』「南知多町文化財調査報告書 第五集」南知多町教育委員会
山下勝年・江原昭善 1989 『林ノ峰貝塚Ⅱ』「南知多町文化財調査報告書 第 7 集」南知多町教育委員会
中野晴久 1990 「第 6 章 中世の古窯」『平田市史』本文編上巻、愛知県平田市
愛知県教育委員会 1998 『愛知県中世城館跡調査報告Ⅳ (知多地区)』
早野浩二編 2007 『夏敷古窯跡 蛇廻間古窯跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 152 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
松田訓編 2008 『細田古窯群』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 149 集」財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

地表面から中世以前の遺構検出面までは 14A 区と

遺構検出面の下にある地山は、遺跡の西側にある14A区から14B区西側では、亞円礫～亞角礫の小礫を少し含む明黄褐色の細粒砂～極細粒砂、褐灰色や灰白色のシルト～粘土質シルトの流水性堆積物となって



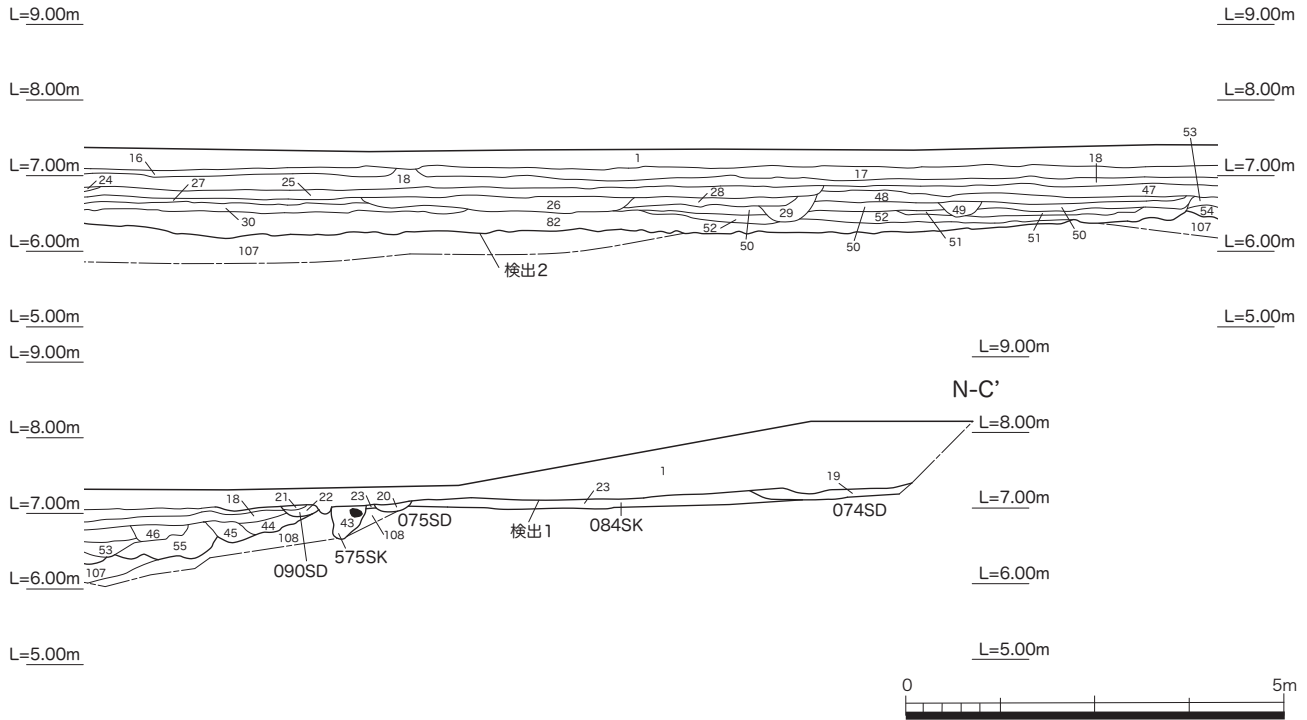


図7 14A区・B区北壁土層断面図2 (1:100)

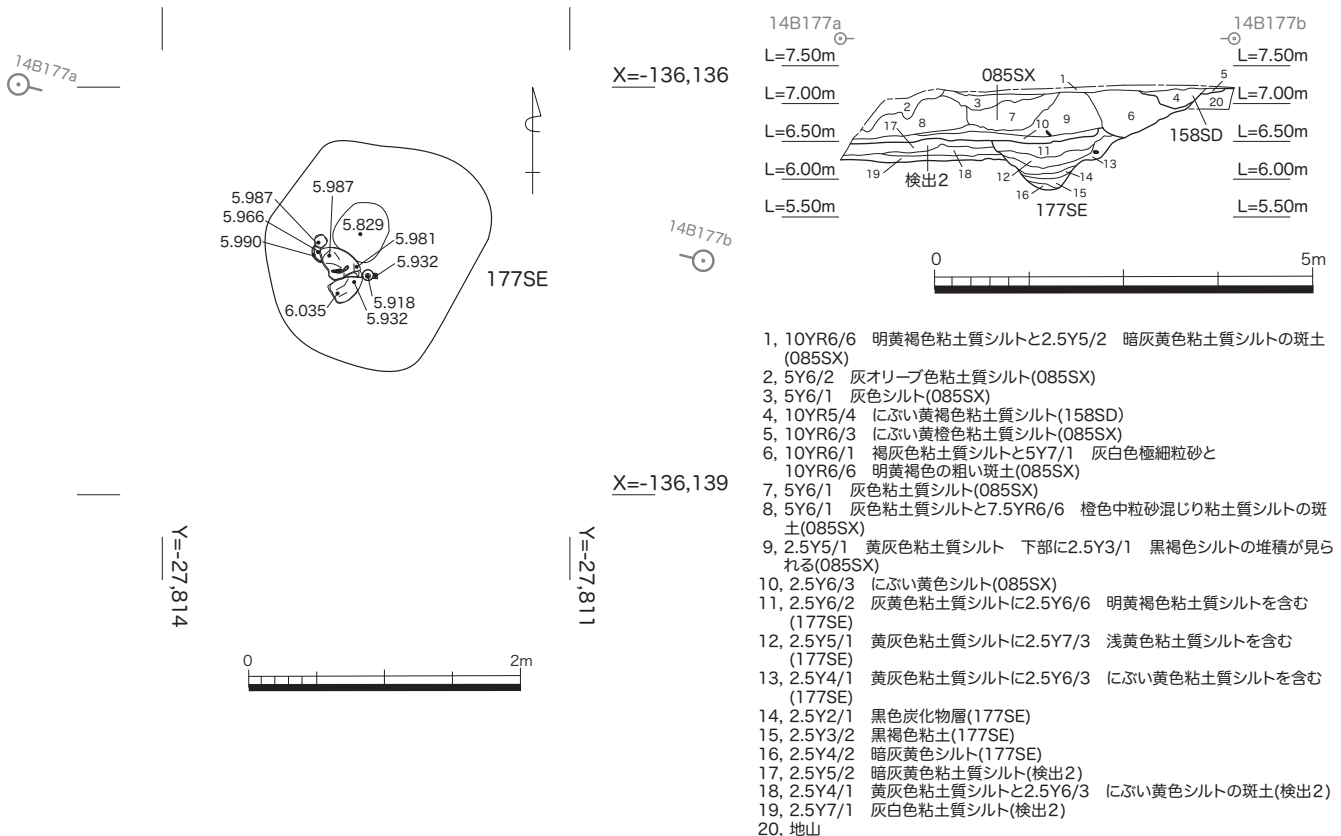


図8 14B区 177SE 平面図 (1:50)・土層断面図 (1:100)

14A 区・14B 区北壁土色

- 1, 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト(現表土・耕土)
- 2, 2.5Y4/1 黄灰色シルト(旧耕土)
- 3, 2.5Y7/1 灰白色粘土質シルト(旧耕土)
- 4, 2.5Y4/1 黄灰色シルト(旧耕土)
- 5, 2.5Y4/1 黄灰色シルト(旧耕土)
- 6, 10YR5/1 褐灰色極細粒砂
- 7, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂
- 8, 10YR5/1 褐灰色シルト 直径5mm大礫少量含む鉄分含む
- 9, 2.5Y7/1 灰白色シルト(005NR)
- 10, 7.5Y7/1 灰白色中粒砂
- 11, 10YR7/1 灰白色中粒砂(003NR)
- 12, 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土質シルト
- 13, 10YR7/3 にぶい黄橙色粘土質シルト
- 14, 10YR7/1 灰白色細粒砂 鉄分含む
- 15, 10YR7/1 灰白色中粒砂 鉄分含む
- 16, 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルト(旧耕作土)
- 17, 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルト(旧耕作土)
- 18, 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト(旧耕作土)
- 19, 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトと2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトの斑土(074SD)
- 20, 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト(075SD)
- 21, 2.5Y5/1 黄灰色シルト(090SD)
- 22, 2.5Y6/1 黄灰色シルト(090SD)
- 23, 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト(084SK)
- 24, 5Y5/3 灰オリーブ色粘土質シルト
- 25, 10YR4/4 褐色シルト
- 26, 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 27, 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
- 28, 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 29, 5Y5/3 灰オリーブ色シルト
- 30, 5Y5/3 灰オリーブ色シルト
- 31, 5Y5/3 灰オリーブ色シルト
- 32, 7.5YR6/3 にぶい褐色粘土質シルト
- 33, 2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルト
- 34, 10YR6/3 にぶい黄橙色粘土質シルト
- 35, 2.5GY8/1 灰白色粘質土と10YR7/6 明黄褐色シルトの斑土
- 36, 2.5GY8/1 灰白色粘質土
- 37, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土に2.5Y4/1 黄灰色粘土ブロック含む(008SD)
- 38, 2.5Y6/8 明黄褐色シルト(012SK)
- 39, 7.5YR6/6 橙色極細粒砂と5Y6/1 灰色シルトの斑土(004SD)
- 40, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と7.5Y6/1 灰色シルトの斑土
- 41, 7.5Y6/1 灰色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色極細粒砂の斑土
- 42, 7.5Y6/1 灰色粘土質シルト マンガンを多量含む
- 43, 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト(575SK)
- 44, 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
- 45, 上部は10YR6/3 にぶい黄橙色極細粒砂 下部は2.5Y5/2 暗灰黄色粘土質シルト
- 46, 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
- 47, 5Y5/3 灰オリーブ色粘土質シルト
- 48, 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 49, 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂
- 50, 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 51, 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 52, 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
- 53, 5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルト
- 54, 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトと2.5Y6/2 灰黄色シルトの斑土
- 55, 上部は10YR3/3 暗褐色シルト下部は5Y5/2 灰オリーブ色粘土
- 56, 10YR7/6 明黄褐色シルト
- 57, 7.5YR6/6 橙色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土
- 58, 2.5Y6/2 灰黄色中粒砂 鉄分含む(051SD)
- 59, 5Y7/1 灰白色極細粒砂 ラミナ堆積あり(051SD)
- 60, 10YR6/6 明黄褐色粗粒砂 直径3cm大の礫含むラミナ堆積あり(055SK)
- 61, 2.5GY8/1 明オリーブ灰色粘質土と10YR7/6 明黄褐色シルトの斑土(005NR)
- 62, 2.5GY8/1 明オリーブ灰色粘質土 鉄分多く含む(005NR)
- 63, 2.5GY8/1 明オリーブ灰色粘質土と10YR7/6 明黄褐色シルトの斑土(005NR)
- 64, 5Y6/1 灰色極細粒砂 鉄分・マンガン多く含む少量の炭化物含む
- 65, 10YR7/1 灰白色極細粒砂 礫を含む 下層に炭化物少量含む ラミナ堆積あり
- 66, 10YR7/1 灰白色シルトに7.5YR4/4 褐色マンガブロック入る
- 67, 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂と10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂 鉄分・マンガン多く含む(005NR)
- 68, 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂 鉄分・マンガン含む直径5mm大少量含む(005NR)
- 69, 10YR7/2 にぶい黄橙色細粒砂 鉄分・マンガン含む(054SK)
- 70, 2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルト 炭化物少量含む(054SK)
- 71, 2.5Y7/3 浅黄色シルト(043SD)
- 72, 7.5Y4/1 灰色粘土質シルトに2.5GY7/1明オリーブ灰色シルトブロック含む ラミナ堆積あり 炭化物多く含む(043SD)
- 73, 5GY7/1 明オリーブ灰色極細粒砂(043SD)
- 74, 7.5YR6/6 橙色細粒砂
- 75, 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂と10YR5/4 にぶい黄褐色極細粒砂 鉄分・マンガン多く含む
- 76, 7.5YR5/6 明褐色細粒砂
- 77, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土
- 78, 7.5YR5/6 明褐色細粒砂(005NR)
- 79, 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(070SD)
- 80, 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/1 褐灰色シルトと2.5Y4/1 黄灰色粘土の粗い斑土
- 81, 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土
- 82, 2.5Y3/1 黒褐色粘土
- 83, 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
- 84, 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土質シルト 炭化物を含む
- 85, 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
- 86, 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトと10YR5/6 黄褐色シルトの斑土
- 87, 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂
- 88, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 89, 7.5YR6/4 にぶい橙色極細粒砂(地山)
- 90, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 91, 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 92, 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂と10YR6/4 にぶい黄褐色極細粒砂の斑土 直径5～20mm大の礫多量を含む(地山)
- 93, 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 94, 7.5Y2/1 黒色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質土の斑土 小礫含む(地山)
- 95, 10YR3/3 暗褐色シルト 炭化物多く含む(地山)
- 96, 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトシルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 97, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 98, 7.5YR6/4 にぶい橙色粘土質シルト(地山)
- 99, 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 100, 10YR7/6 明黄褐色極細粒砂(地山)
- 101, 2.5Y6/6 明黄褐色極細粒砂(地山)
- 102, 2.5Y6/6 明黄褐色シルト(地山)
- 103, 2.5Y6/6 明黄褐色細粒砂 鉄分強い(地山)
- 104, 2.5Y6/6 明黄褐色細粒砂(地山)
- 105, 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂と10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 106, 10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/1 褐灰色シルトの斑土(地山)
- 107, 10YR6/1 褐灰色シルトに直径5mm大以上の礫を含む(地山)
- 108, 2.5Y6/6 明黄褐色粘土質シルト(地山)
- 109, 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト(地山)
- 110, 5Y7/1 灰白色粘土 (地山)
- 111, 10YR6/3 にぶい黄褐色中粒砂(地山)
- 112, 2.5GY6/1 オリーブ灰色細粒砂 鉄分含む(地山)
- 113, 5Y5/1 灰色粘土質シルト 直径3mm大の礫少量含む(地山)
- 114, 10YR7/1 灰白色粘土質シルト(地山)
- 115, 5GY8/1 灰白色シルト(地山)
- 116, 5GY7/1 明オリーブ灰色シルト 同色中粒砂含む(地山)
- 117, 5GY8/1 灰白色シルト(地山)
- 118, 5GY8/1 灰白色シルト(地山)
- 119, 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂と2.5Y7/2 灰黄色細粒砂と2.5Y6/6 明黄褐色粘質土の斑土(002SE)
- 120, 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂(002SE)
- 121, 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルトと2.5Y7/1 灰白色粘質土と2.5Y7/2 灰黄色細粒砂混じりの荒い斑土 最下部松材入る(002SE)
- 122, 5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルトと5Y5/3 灰オリーブ色粘土の荒い斑土(002SE)
- 123, 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルトに2.5Y7/2 灰黄色細粒砂と2.5Y6/6 明黄褐色粘土の荒い斑土(002SE)
- 124, 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルトに2.5Y7/2 灰黄色粘質細粒砂と2.5Y3/2 黒褐色粘質シルトの荒い斑土(002SE)
- 125, 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルトと7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土の斑土(002SE)
- 126, 2.5Y6/2 灰黄色細粒砂混じり粘質シルトと2.5Y6/6 明黄褐色中粒砂の互層(002SE)
- 127, 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂混じり粘質シルト
- 128, 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂混じり粘土 002SE側は還元色
- 129, 5Y5/2 灰オリーブ色粘土

図 9 14A 区・B 区北壁土層断面図 3

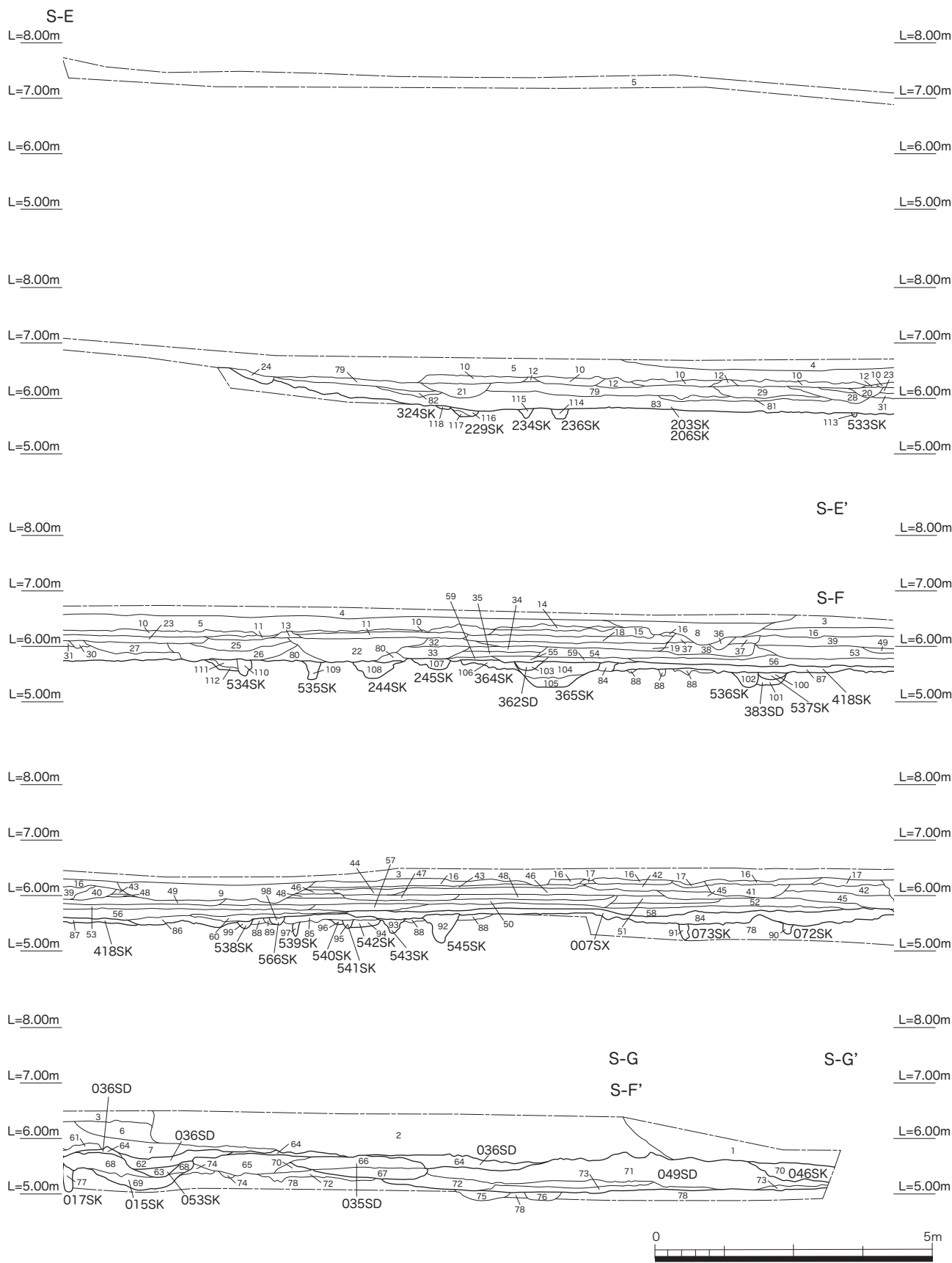


図 10 14A 区・B 区南壁土層断面図 1 (1 : 100)

14A区・14B区南壁土色

- 1,2.5Y8/8 黄色中粒砂と2.5Y4/1 黄灰色中粒砂
(A区 盛土・攪乱土A)
- 2,5GY7/1 明オリープ灰色中粒砂(A区 盛土・攪乱土B)
- 3,7.5YR6/2 灰褐色シルト(A区 盛土・表土)
- 4,7.5YR6/4 にぶい橙色中粒砂(B区 盛土・防草シートより上)
- 5,7.5YR7/2 明褐灰色中粒砂(B区 盛土・防草シートより下)
- 6,7.5YR7/1 明褐灰色粗粒砂と10Y6/1 灰色粘土質シルトの斑土(A区 下層盛土)
- 7,7.5YR7/1 明褐灰色中粒砂と10Y6/1 灰色粘土質シルトの斑土 鉄分少量含む(A区 下層盛土)
- 8,5YR6/1 褐灰色中粒砂(A区 攪乱坑A)
- 9,2.5YR5/1 黄灰色中粒砂(B区 攪乱坑B)
- 10,7.5Y6/3 オリープ黄色シルト(耕土)
- 11,2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(耕土)
- 12,2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂(耕土)
- 13,2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂と7.5Y6/2 灰オリープ色極細粒砂の斑土(耕土)
- 14,7.5YR6/6 橙色シルトに5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 鉄分・直径10mm大の礫少量含む(耕土)
- 15,5GY7/1 明オリープ灰色極細粒砂 鉄分・マンガン含む 直径5〜20mm大の大礫含む(耕土)
- 16,7.5YR7/6 橙色シルト(床土)
- 17,7.5YR7/6 橙色シルトと5Y7/1 灰白色シルトの斑土(床土)
- 18,2.5Y6/6 明黄褐色極細粒砂に5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 鉄分・マンガン含む
- 19,2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂に5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 鉄分・マンガン含む
- 20,2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 21,2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
- 22,5Y6/2 灰オリープ色シルト
- 23,2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 24,10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト
- 25,2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 26,2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 27,2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂
- 28,5Y6/3 オリープ黄色シルト
- 29,5Y5/2 灰オリープ色粘土質シルト
- 30,5Y6/2 灰オリープ色シルト
- 31,5Y6/2 灰オリープ色極細粒砂
- 32,2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 33,10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂
- 34,10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
- 35,10YR5/1 褐灰色シルト
- 36,10YR7/6 明黄褐色シルト
- 37,10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 38,10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト
- 39,2.5Y7/2 灰黄色シルト
- 40,2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
- 41,7.5YR7/6 橙色シルトに5Y7/1 灰白色シルトブロック多量含む
- 42,7.5YR6/6 橙色極細粒砂
- 43,7.5YR6/6 橙色シルトに5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 直径10mm大の礫を少量含む 鉄分含む
- 44,5GY7/1 明オリープ灰色シルト 炭化物・鉄分マンガン含む
- 45,5GY7/1 明オリープ灰色シルト
- 46,5GY7/1 明オリープ灰色極細粒砂
- 47,2.5Y6/2 灰黄色シルトに5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 炭化物・鉄分マンガン含む
- 48,2.5Y6/6 明黄褐色極細粒砂に5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 炭化物・鉄分マンガン含む
- 49,2.5Y6/2 灰黄色シルトと7.5Y7/1 灰白色極細粒砂の斑土
- 50,2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂に5Y7/1 灰白色シルトブロック含む 炭化物・鉄分マンガン含む
- 51,2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂
- 52,2.5Y6/2 灰黄色細粒砂と7.5Y7/1 灰白色シルトの斑土 炭化物・鉄分マンガン含む
- 53,2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 54,2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 55,10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 56,2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 57,2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 58,2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトと10YR4/2 灰黄褐色シルトの斑土(007SX上層)
- 59,2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 60,10YR5/1 褐灰色シルト
- 61,2.5Y6/2 灰黄色細粒砂と7.5Y7/1 灰白色シルトの斑土 51層より鉄分強い
- 62,7.5Y7/1 灰白色極細粒砂と10Y6/1 灰色粘土質シルトの斑土(036SD)
- 63,5GY6/1 オリープ灰色粘土質シルトと7.5Y7/1 灰白色中粒砂の斑土 鉄分含む(053SK)
- 64,2.5Y6/2 灰黄色細粒砂と7.5Y7/1 灰白色シルトの斑土(036SD)
- 65,10Y6/1 灰色粘土質シルト 鉄分・土器片含む(流路?)
- 66,5Y6/1 灰色粘土質シルト 鉄分含む 直径3cm大の礫含む(035SD)
- 67,10Y6/1 灰色粘土質シルト 66層より色薄く鉄分少なめ(035SD)
- 68,5Y6/1 灰色粘土質シルト 鉄分含む 直径3cm大の礫含む(015SK)
- 69,10Y6/1 灰色粘土質シルトと7.5Y7/1 灰白色細粒砂の斑土 鉄分含む(015SK)
- 70,5Y6/1 灰色シルトに5Y6/1 灰色中粒砂ブロック含む ラミナ堆積あり 炭化物・鉄分含む(046SK)
- 71,5GY6/1 オリープ灰色極細粒砂 鉄分・炭化物少量含む ラミナ堆積あり(049SD)
- 72,2.5GY7/1 明オリープ灰色粘土質シルト 鉄分含む ラミナ堆積あり(049SD)
- 73,10Y5/1 灰色シルト(049SD)
- 74,5Y5/1 灰色シルト 炭化物・鉄分含む
- 75,7.5Y4/1 灰黄色粘土質シルトと2.5GY7/1明オリープ灰色シルトブロックと5GY7/1明オリープ灰色極細粒砂の斑土 炭化物多く含む(069SD)
- 76,2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 77,2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト(017SK) 土留め杭・矢板痕?
- 78,10YR7/6 明黄褐色粘土質シルト(地山)
- 79,2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト
- 80,5Y6/2 灰オリープ色極細粒砂
- 81,5Y7/2 灰白色粘土質シルト
- 82,5Y7/2 灰白色シルト
- 83,7.5Y6/1 灰色極細粒砂(203SK・206SK)
- 84,2.5Y4/1 黄灰色シルト 地山ブロック含む 炭化物・土器片含む(007SX下層)
- 85,7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
- 86,10YR6/1 褐灰色シルト
- 87,10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト 中粒砂混じり(418SK)
- 88,7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルトと7.5Y4/1 灰色粘土質シルトの斑土 炭化物少量含む
- 89,2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色極細粒砂の細かい斑土
- 90,2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトに2.5Y6/2 灰黄色粘土ブロック含む 炭化物・土器片含む(072SK)
- 91,10YR6/1 褐灰色シルト 地山ブロック含む 炭化物含む(073SK)
- 92,10YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト中粒砂混じりの斑土(545SK)
- 93,10YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト中粒砂混じりの斑土(543SK)
- 94,7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(542SK)
- 95,10YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト(541SK)
- 96,7.5YR3/1 黒褐色シルト(540SK)
- 97,2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの細かい斑土(539SK)
- 98,2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの細かい斑土(566SK)
- 99,2.5Y3/1 黒褐色シルトと10YR6/6 明黄褐色シルトの細かい斑土(538SK)
- 100,5Y4/1 灰色粘土質シルト(537SK)
- 101,5Y3/1 オリープ黒色粘土質シルト(383SD)
- 102,5Y3/2 オリープ黒色粘土質シルト 炭化物含む(536SK)
- 103,7.5Y5/3 灰オリープ色シルトと7.5YR6/6 橙色粘土質シルトの斑土(362SD)
- 104,10YR4/1 褐灰色粘土質シルトと10YR7/3 にぶい黄橙色粘土質シルトの斑土 炭化物含む(365SK)
- 105,10YR3/1 黒褐色粘土質シルト(365SK)
- 106,2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト(364SK)
- 107,2.5Y6/1 黄灰色シルト(245SK)
- 108,2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルトと10YR6/1 褐灰色粘土の斑土(244SK)
- 109,10YR5/1 褐灰色粘土質シルトと10YR6/4 にぶい黄橙色シルトの斑土 炭化物少量含む(535SK)
- 110,2.5Y7/2 灰黄色シルトと10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトの斑土(534SK)
- 111,10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトと10YR7/2 にぶい黄橙色シルトの斑土(534SK)
- 112,10YR7/4 にぶい黄橙色シルト(534SK)
- 113,10YR7/4 にぶい黄橙色粘土質シルトと10YR6/1 褐灰色粘土質シルトの斑土(533SK)
- 114,10YR6/1 褐灰色粘土質シルト(236SK)
- 115,10YR6/1 褐灰色粘土質シルト(234SK)
- 116,2.5GY6/1 オリープ灰色粘土質シルト(229SK)
- 117,10Y6/1 灰色粘土質シルト(229SK)
- 118,5Y6/2 灰オリープ色粘土質シルト(324SK)

図 11 14A 区・B 区南壁土層断面図 2

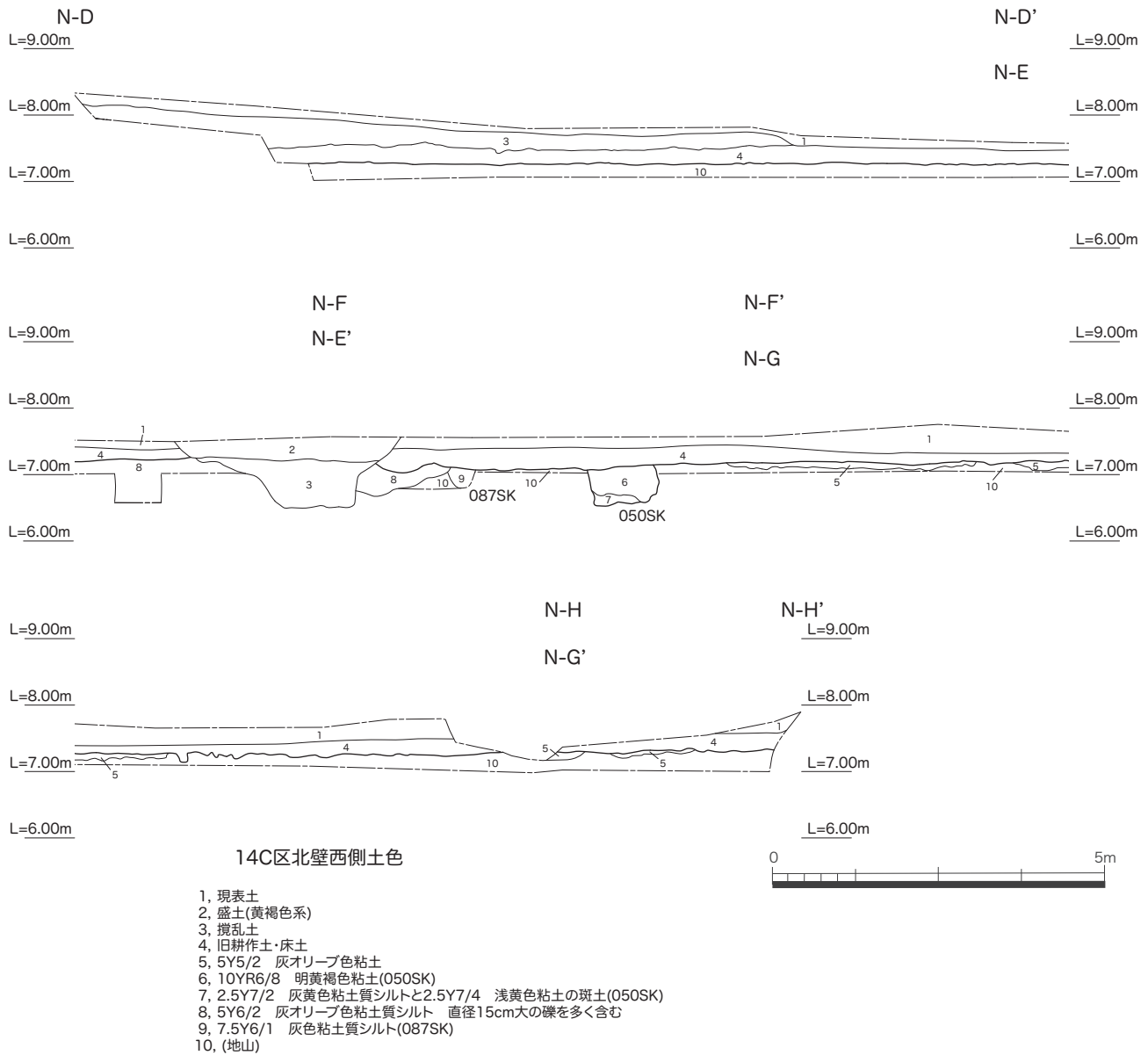
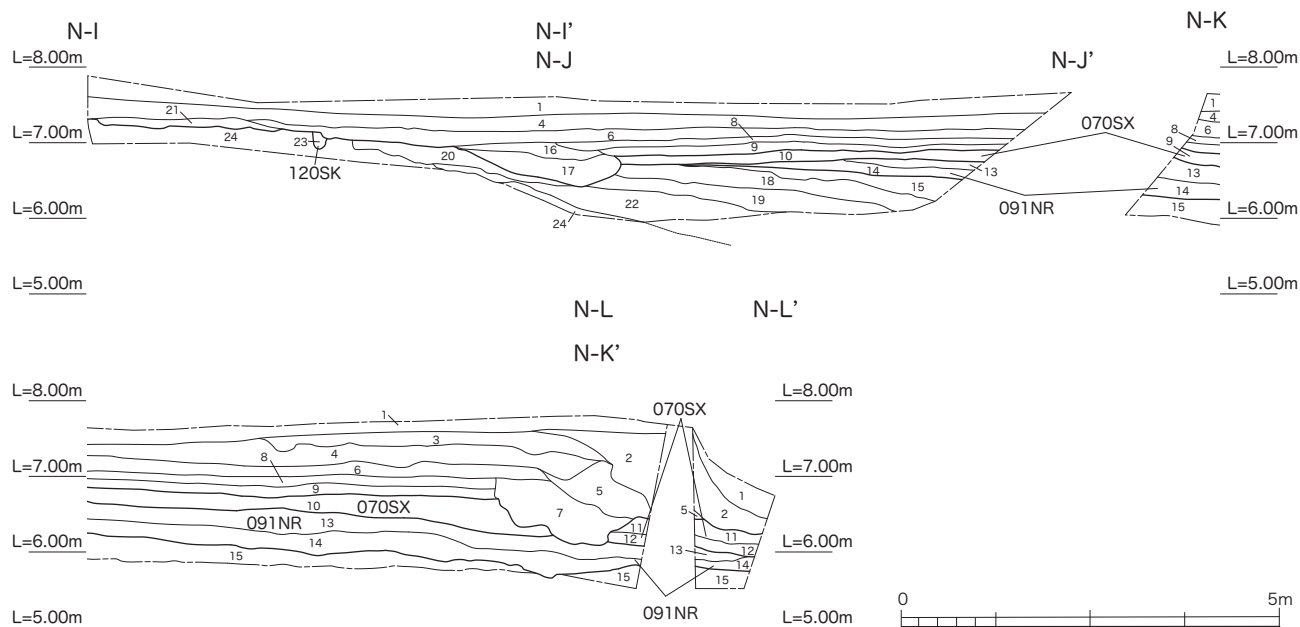


図 12 14C 区北壁西側土層断面図 (1 : 100)



14C区北壁東側土色

- | | |
|---|--|
| 1, 現表土 | 14, 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト(091NR) |
| 2, 斜面盛土(暗灰色系) | 15, 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト(灰釉陶器片・山茶碗片が出土) |
| 3, 盛土(黄褐色系) | 16, 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトと10YR5/6 黄褐色粘土質シルトの斑土 |
| 4, 旧耕作土・床土 | 17, 10YR6/8 明黄褐色中粒砂混じり粘土と10YR6/4 にふい黄橙色粘土質シルトの斑土 |
| 5, 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂～中粒砂と10YR6/4 にふい黄橙色粘土質シルトの斑土 | 18, 2.5Y7/1 灰白色粘土質シルト |
| 6, 2.5Y6/2 灰黄色 中粒砂混じり粘土質シルト | 19, 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂混じり粘土質シルト |
| 7, 10YR6/3 にふい黄橙色粘土質シルト | 20, 2.5Y7/4 浅黄色粘土 |
| 8, 5Y6/2 灰オリーブ色 | 21, 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト～粘土 |
| 9, 5Y6/1 灰色細粒砂混じり粘土質シルト | 22, 2.5Y6/3 にふい黄色粘土混じり極細粒砂 |
| 10, 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルト(070SX) | 23, 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト混じり極細粒砂(120SK) |
| 11, 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂(070SX) | 24, 2.5Y7/3 浅黄色粘土質シルト(地山) |
| 12, 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト(070SX) | |
| 13, 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト(091NR) | |

図 13 14C 区北壁東側土層断面図 (1 : 100)

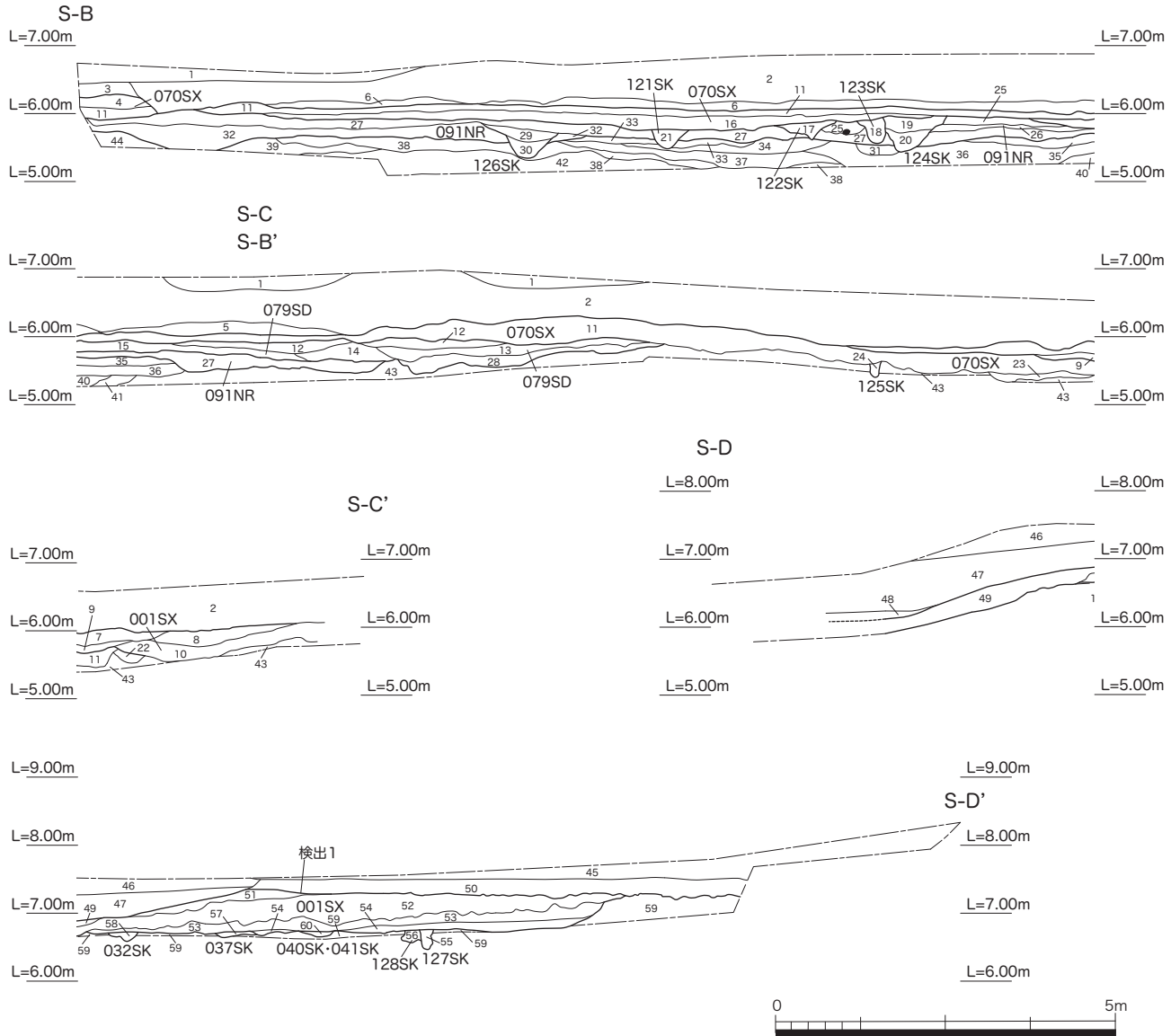


図 14 14C 区南壁土層断面図 (1:100)

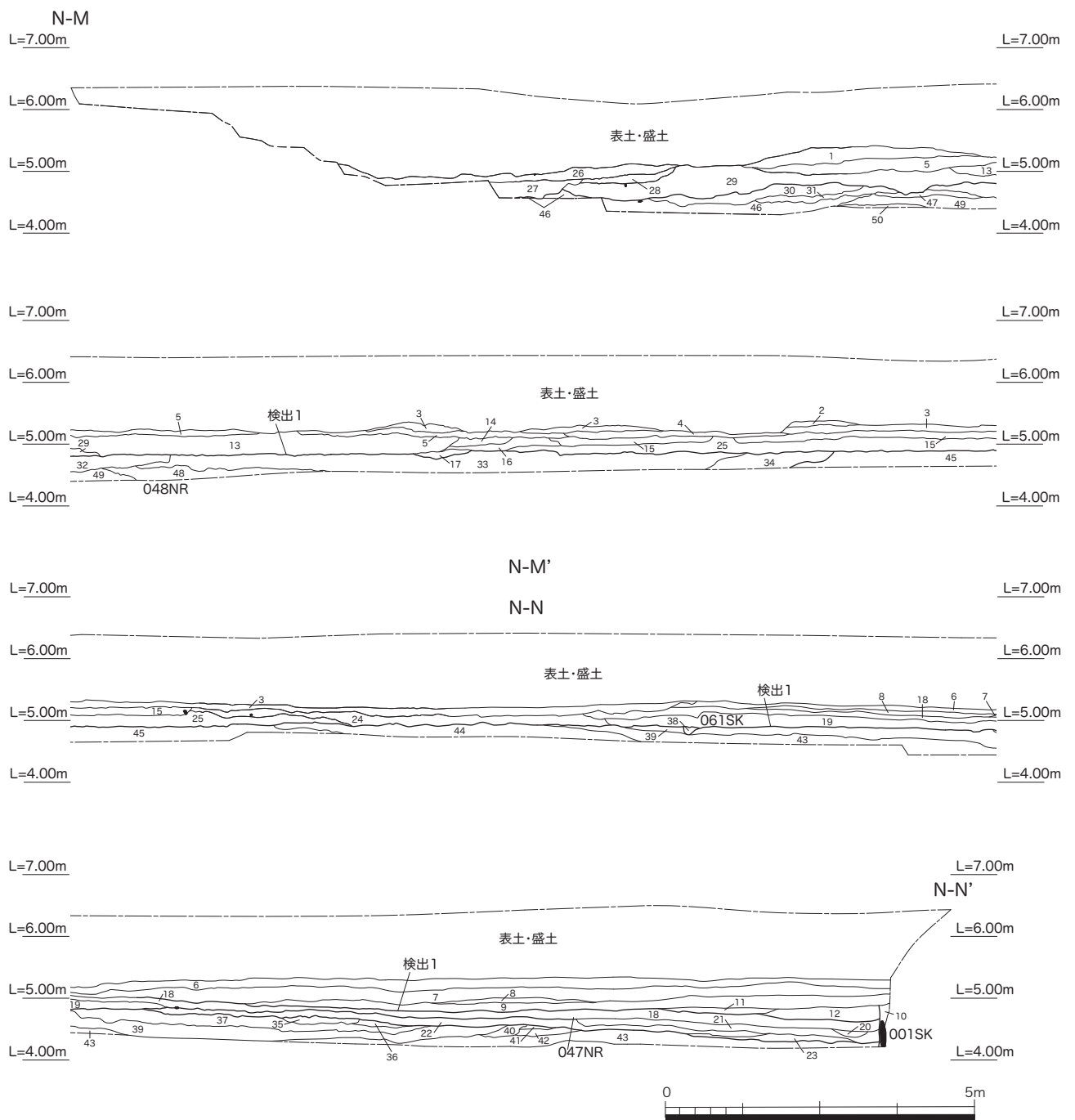
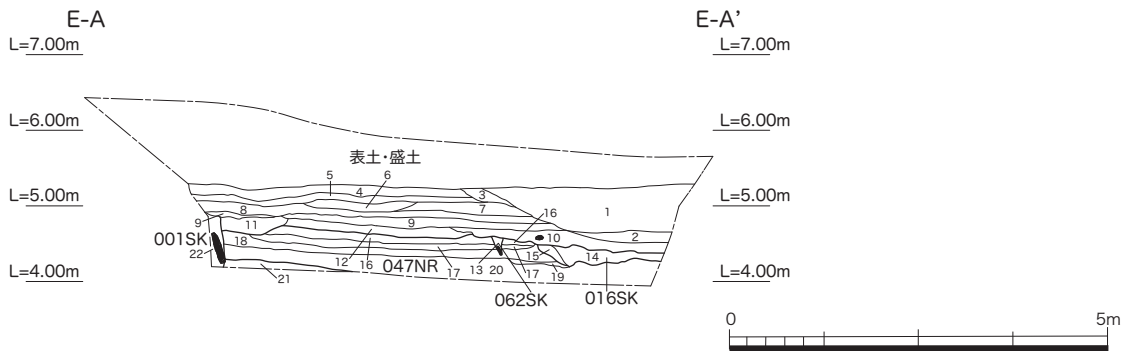


図 15 14D 区北壁土層断面図 1 (1 : 100)

14D区北壁土色

- | | |
|---|---|
| 1, 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト | 27, 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト |
| 2, 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト | 28, 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト |
| 3, 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト | 29, 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂 |
| 4, 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト | 30, 7.5YR4/1 褐灰色粘土質シルト(048NR) |
| 5, 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト | 31, 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(048NR) |
| 6, 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト(東壁4層) | 32, 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト(048NR) |
| 7, 7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト(東壁5層) | 33, 10Y5/1 灰色極細粒砂 鉄分含む(048NR) |
| 8, 5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト | 34, 7.5GY5/1 緑灰色シルト混じり細粒砂(048NR) |
| 9, 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト(東壁8層) | 35, 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂混じりシルト |
| 10, 7.5GY6/1 緑灰色粘土質シルト(001SK, 東壁22層) | 36, 2.5Y5/2 暗黄褐色粘土質シルト |
| 11, 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト | 37, 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト |
| 12, N5/ 灰色粘土質シルト(東壁11層) | 38, 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細粒砂(061SK) |
| 13, 10YR6/2 灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト
(水田耕土) | 39, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト |
| 14, 5GY5/1 オリーブ灰色極細粒砂(旧水田耕土) | 40, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土 |
| 15, 2.5Y4/1 黄灰色粘土(旧水田耕土) | 41, 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト |
| 16, 5GY5/1 オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂 | 42, 5Y6/1 灰色粘土質シルト |
| 17, 10YR6/1 褐灰色極細粒砂～中粒砂 | 43, 5Y6/1 灰色極細粒砂(東壁21層) |
| 18, 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト
(047NR, 東壁18層) | 44, 10Y6/2 オリーブ灰色極細粒砂 |
| 19, 10Y5/1 灰色粘土質シルト(047NR) | 45, 2.5GY7/1 明オリーブ灰色極細粒砂 |
| 20, 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト(047NR) | 46, 7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト(048NR) |
| 21, 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト(047NR, 東壁20層) | 47, 7.5YR4/2 灰褐色極細粒砂(048NR) |
| 22, 2.5Y4/1 黄灰色シルト(047NR) | 48, 7.5YR5/1 褐灰色細粒砂混じりの粘土質シルト
(048NR) |
| 23, 5Y5/1 灰色シルト混じり極細粒砂(047NR) | 49, 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト(ラミナあり)と
2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂～細粒砂(ラミナあり)の
斑土(048NR) |
| 24, 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂～細粒砂(047NR) | 50, 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト 植物遺体を多く
含む(048NR) |
| 25, 10YR6/1 褐灰色極細粒砂～中粒砂(047NR) | |
| 26, 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂 | |

図 16 14D 区北壁土層断面図 2



14D区東壁土色

- | | |
|----------------------------------|---|
| 1, 2.5YR5/3 黄褐色粘土質シルト 鉄分多い(南壁1層) | 12, 7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト |
| 2, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト(南壁2層) | 13, 2.5Y5/2 暗黄褐色粘土質シルト(062SK) |
| 3, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト | 14, 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト(016SK, 南壁15層) |
| 4, 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト 鉄分少量含む | 15, 10Y6/1 灰色粘土質シルト(016SK) |
| 5, 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト(北壁6層) | 16, 5GY6/1 オリーブ灰色粘土質シルト(047NR) |
| 6, 7.5GY5/1 緑灰色粘土質シルト(北壁7層) | 17, 2.5GY6/1 オリーブ灰色極細粒砂(047NR) |
| 7, 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト | 18, 2.5GY5/1 オリーブ灰色極細粒砂(047NR, 北壁18層) |
| 8, 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土質シルト | 19, 5GY6/1 オリーブ灰色極細粒砂(047NR) |
| 9, 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト(北壁9層) | 20, 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト(047NR, 北壁21層・南壁17層) |
| 10, 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト | 21, 5Y6/1 灰色極細粒砂(北壁43層) |
| 11, 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト(南壁9層) | 22, 7.5GY6/1 緑灰色粘土質シルト(001SK, 北壁10層) |
| N5/ 灰色粘土質シルト(北壁12層) | |

図 17 14D 区東壁土層断面図 (1 : 100)

おり、14B区東側は亞円礫～亞角礫の小礫を微量含む明黄褐色の粘土質シルトと粘土質の第四系更新統の地層となる。遺跡の東側にある14C区西側では明黄褐色～浅黄色粘土質シルトの第四系更新統の地層があり、14C区東側ではその上にぶい黄色粘土混じり極細粒砂、灰黄色極細粒砂混じり粘土質シルト、灰白色粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルトの各地層が順にみられ、灰黄褐色粘土質シルト層には古式土師器や灰釉陶器、南部系陶器が出土した。そして14C区東側では中世以後の自然堆積である091NRがこの上に確認できた。14D区東側では古墳時代前期以前に堆積したと考えられる流水性堆積物であるオリブ灰色極細粒砂層、にぶい黄色粘土質シルト、灰黄色粘土質シルトの地層が下から確認でき、灰黄色粘土質シルト層の上に中世以後の自然堆積である047NRが確認できた。

第2節 14A区の遺構

14A区では、古墳時代前期の土坑1基と平安時代末～鎌倉時代の柱穴列3条、溝5条と土坑13基以上、室町時代～戦国時代の溝2条と土坑1基、江戸時代後期以後の溝2条、土坑2基、自然流路2条などがみられる。(図19～図27、写真図版2・写真図版3)

古墳時代前期の遺構

14A区050SK：14A区北側の051SDと070SDの下に確認できた土坑で、径1.50m、深さ0.50mの大きさで確認できた。埋土は灰黄色極細粒砂と黄橙色シルトの斑土で、出土遺物は弥生時代中期後半の櫛条痕調整深鉢(E077)と古墳時代前期前半の瓢形壺(E078)がみられ、瓢形壺は土坑の底面より出土したことから、古墳時代前期前半の遺構の可能性がある。

平安時代末～鎌倉時代の遺構

14A区SA11：14A区南側で14B区にかかる位置にある柱穴列で、西より021SK、025SK、033SK、545SKの東西6.0mの3間分が検出できた。柱間は西より1.9m、1.9m、2.2mで、柱穴列の軸線はN-68°-Wである。柱穴は長径0.28m～0.45mの平面円形から楕円形のもので、深さ0.28m～0.61mのものがある。埋土は黄灰色・灰色・灰オリーブ色・黄橙色・明黄褐色のシルト～極細粒砂を主体とするもので、021SK、025SK、033SKでは柱痕跡や柱抜き取り痕跡が確認できた。出土遺物では、021SKから常滑5型式の南部系陶器の碗(E050)が、033SKからは常滑6a型式の南部系陶器の碗(E052)や常滑4型式の小皿(E053)、常滑5型式の片口鉢I類(E054)が出土した。北側に組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としているが、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴

が存在する可能性がある。出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

14A区SA12：14A区南側で14B区にかかる位置にある柱穴列で、SA11の南に隣接してある。西より024SK、031SK、098SK、546SKの東西6.5mの3間分が検出できた。柱間は西より2.2m、2.3m、2.0mで、柱穴列の軸線はN-65°-Wである。柱穴は長径0.21m～0.31mの平面円形のもので、深さ0.11m～0.63mのものがある。埋土は暗灰黄色・灰白色・灰色・灰オリーブ色・橙色の粘土質シルト～極細粒砂を主体とするもので、031SKと098SKでは柱痕跡や柱抜き取り痕跡が確認でき、031SKと098SKでは柱材と思われる木材が出土した。また031SKの柱材(W002)はヒノキで、AMS放射性炭素年代測定の結果では1029～1154calADの年代が得られた。098SKでは南部系陶器の常滑6a型式の碗(E126)と常滑4型式の小皿(E127)が出土した。北側に組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としているが、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物から13世紀後半の遺構と考えられる。

14A区SA13：14A区南側で14B区にかかる位置にある柱穴列で、SA12の南に隣接してある。西より019SK、022SK、027SKの東西4.1mの2間分が検出できた。柱間は西より1.9m、2.2mで、柱穴列の軸線はN-61°-Wである。柱穴は長径0.20m～0.46mの平面円形から楕円形のもので、深さ0.12m～0.44mのものがある。埋土は黄灰色・灰色・暗灰黄色の粘土質シルト～極細粒砂を主体とする。019SKでは柱材と思われる木材(W001)が出土した。また022SKからふいごの羽口(E051)が出土しており、周辺にて鍛冶が行われたものと思われる。北側に組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としているが、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物から12世紀から13世紀後半の遺構と考えられる。

14A区008SD：14A区北東部にある南北に伸びる溝である。幅0.40m～0.70mで、深さ0.12mをはかる。埋土は明黄褐色極細粒砂と褐灰色シルトの斑土に黄灰色粘土ブロックを含む。常滑3型式の南部系陶器の碗(E041)が出土していることから、12世紀の遺構の可能性はある。

14A区012SK：14A区北東部にある008SDの下に検出された長径2.3m前後の平面不整形、断面平底の土坑である。埋土は明黄褐色シルトで、出土遺物に中世の常滑産甕片があり、中世の遺構の可能性はある。

14A区015SK：14A区南側にある平面楕円形の土坑で、南半分は調査区外にのびる。埋土は灰色粘土を主体とするもので、小礫が含まれていた。出土遺物には

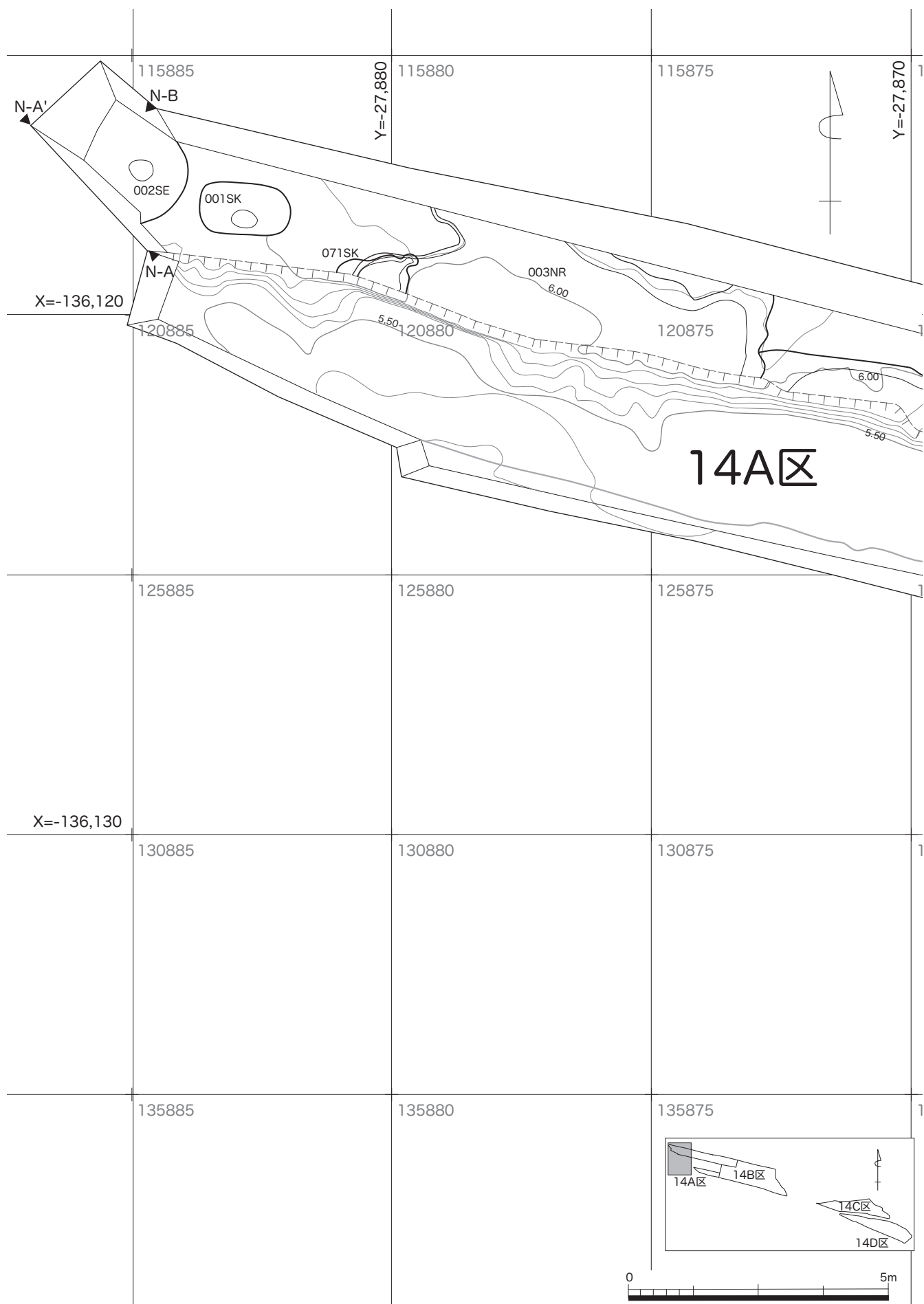


図 19 14A 区遺構平面図 1 (1 : 100)

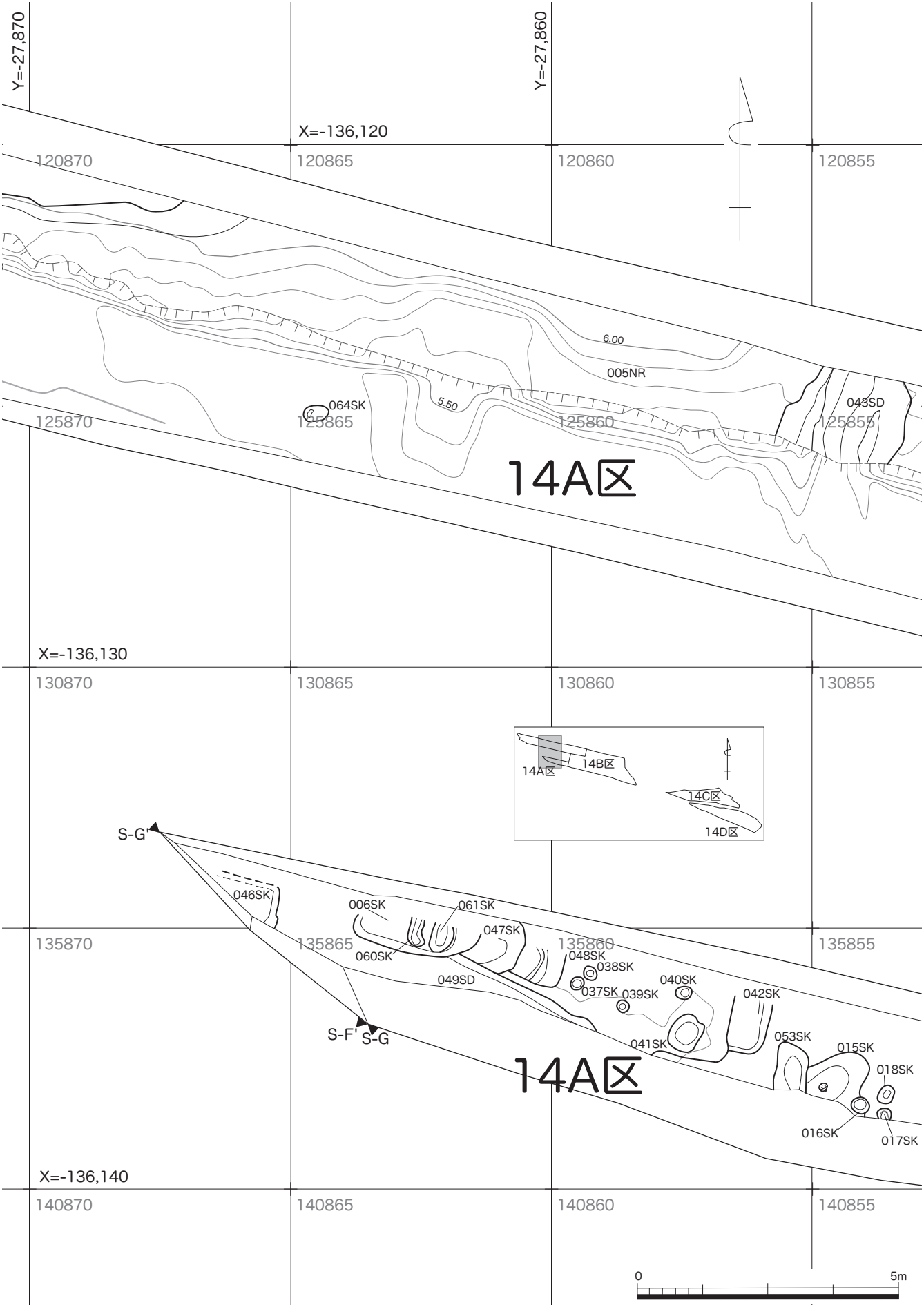


図 20 14A 区遺構平面図 2 (1 : 100)

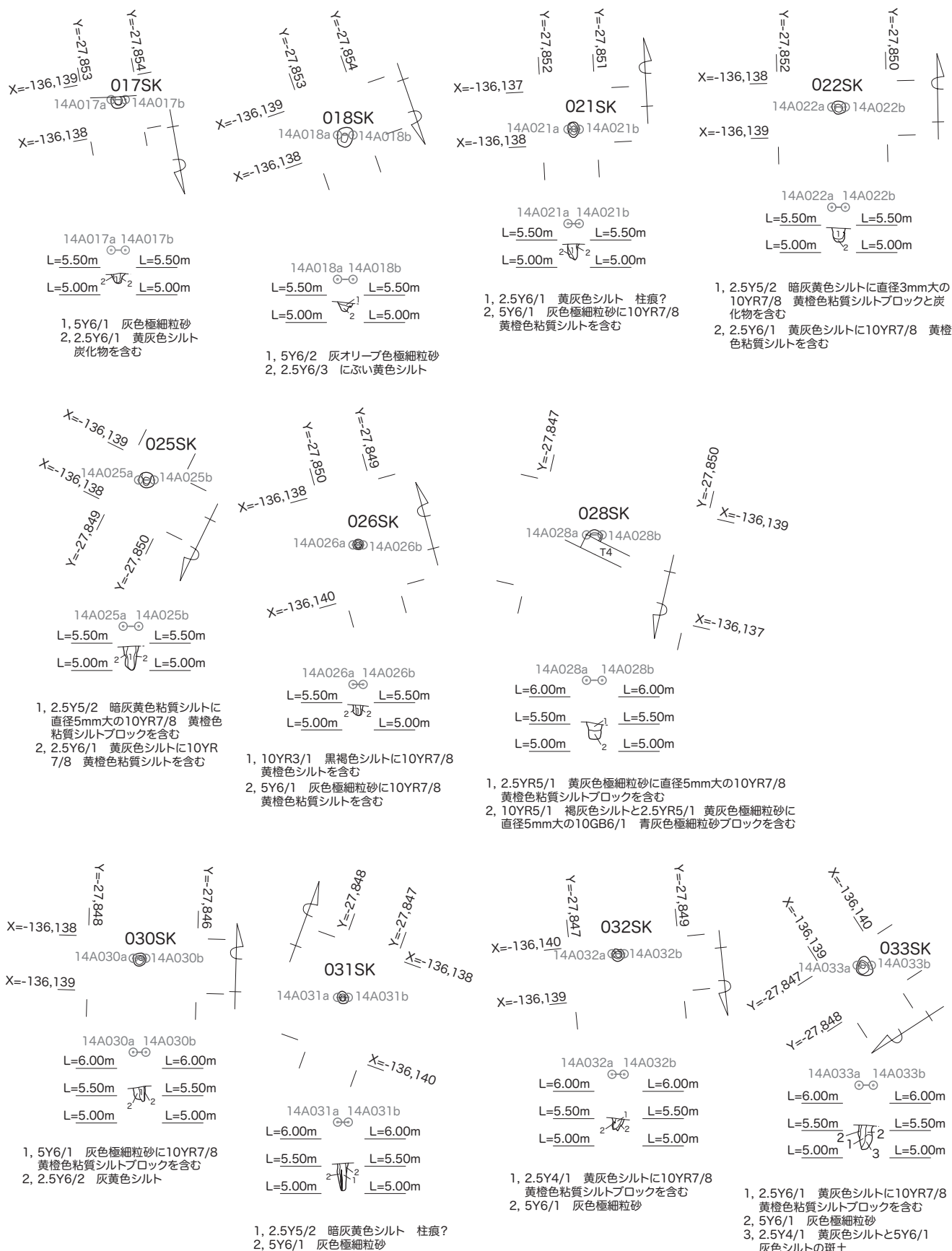


図 21 14A 区個別遺構図 1 (1 : 100)

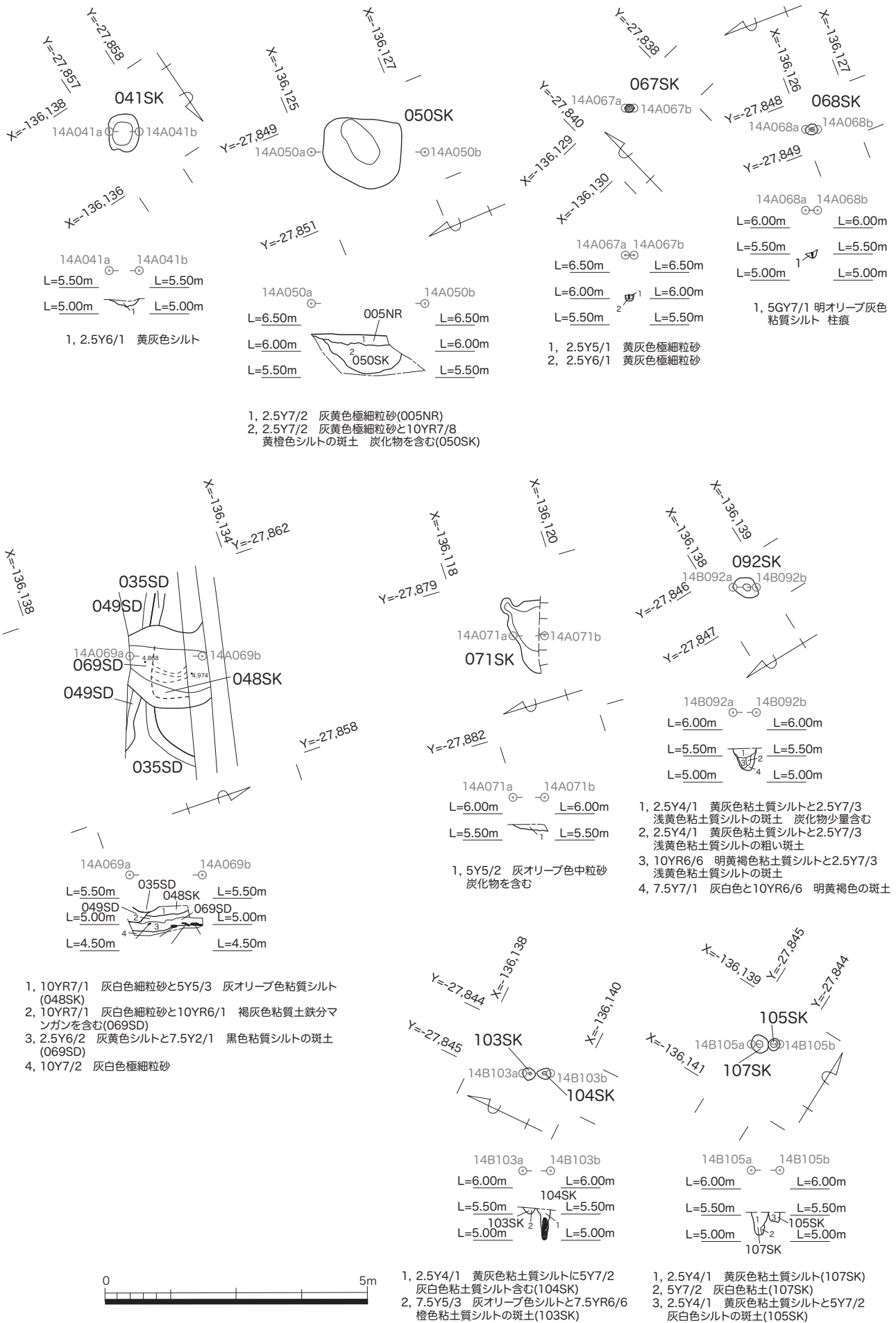


図 22 14A 区個別遺構図 2・14B 区個別遺構図 1 (1 : 100)

南部系陶器の碗 (E044・E045) や伊勢型鍋 (E046)、平瓦 (E047・E048) があり、13 世紀中頃～後半の遺構と考えたい。

14A 区 041SK : 14A 区南側にて 035SD の下に確認できた平面楕円形から隅丸長方形の土坑で、長径 0.70m、短径 0.55m、深さ 0.10m をはかる。埋土は黄灰色シルトで、南部系陶器片と中世土師器片が数点出土している。

14A 区 043SD : 14A 区北側にある南北の溝で、005NR の下にて検出できた。幅 2.10m、深さ 0.60m をはかり、埋土は明オリーブ灰色シルトブロックを含む灰色粘土質シルトで、内部にラミナ堆積がみられ、炭化物が多く含まれた。出土遺物は 12 世紀の南部系陶器の碗 (E061～E063) と丸瓦 (E064) があり、13 世紀前半～中頃の遺構の可能性はある。

14A 区 047SK・048SK : 14A 区南側に検出された土坑で、049SD や 060SK より古い遺構である。047SK が最も新しく、径 1.20m 程の平面円形丸底のもの、048SK が平面円形状の同規模のもので、069SD がこれらの土坑の下に確認できた。埋土は 047SK が灰白色シルト、048SK が灰白色細粒砂と灰オリーブ色粘質シルトの斑土であった。須恵器高杯 (E066)、常滑 3 型式・4 型式・瀬戸 8 型式の南部系陶器の碗 (E066～E072)、小皿 (E073)、甕 (E075)、伊勢型鍋 (E074) が出土している。069SD より新しく、13 世紀末頃～14 世紀前半の遺構の可能性はある。

14A 区 049SD : 14A 区南側で 035SD の下に確認できた溝で、西北西から東南東に伸びるものである。埋土は上層にラミナ堆積がみられるオリーブ灰色極細粒砂、中層から下層にラミナ堆積のみられる明オリーブ灰色粘土質シルトや灰色シルトがあった。出土遺物には古代の製塩土器があるのみであるが、047SK・048SK より新しいことから 13 世紀末頃～14 世紀前半にかけての遺構と考えられる。

14A 区 055SK・056SK : 14A 区北側の 051SD の下に確認できた土坑で、規模は不明である。055SK は 050SK の北東側にあり、中礫を含みラミナ堆積のみられる明黄褐色粗粒砂の埋土で、南部系陶器の碗 (E090) が出土した。056SK は 050SK の南東側にあり、灰黄色極細粒砂混じり粘土質シルトの埋土で、南部系陶器の鳶口壺 (E091) が出土した。出土遺物からは 055SK が 12 世紀末頃、056SK が 13 世紀後半の遺構と考えられる。

14A 区 069SD : 14A 区南側にある北北東から南西南に流れる溝で、048SK と 049SD の下にて幅 1.5m、深さ 0.30m、長さ 1.5m を確認した。埋土は上層がマンガンを含む褐灰色粘質土が混じる灰白色細粒砂で、下層が灰黄色シルトと黒色粘質シルトの斑土で、出土遺

物には、常滑 2 型式～常滑 6a 型式の南部系陶器の碗 (E092～E096)、小皿 (E097)、片口鉢 I 類 (E098)、広口壺 (E099)、伊勢型鍋 (E100)、丸瓦 (E101)、平瓦 (E102) などがみられ、13 世紀後半には埋没していたものと考えられる。

14A 区 070SD : 14A 区北側で 005NR と 051SD の下に検出できた北北東から南南西に流れる溝で、幅 2.2m、深さ 0.40m をはかる。埋土は明黄褐色シルトと褐灰色シルトの斑土で、070SD の東肩部に 050SK がある。出土遺物はないが、古墳時代前期の土師器が出土する 050SK より新しく、江戸時代後期陶磁器が出土する 005NR より古いもので、中世の時期のものと考えられる。

14A 区 071SK : 14A 区北西部にある土坑で、南側が道路のよる工事により削平されていた。003NR の下に検出でき、東西幅 1.90m 前後、深さ 0.10m であった。埋土は炭化物を含む灰オリーブ色中粒砂で、南部系陶器の甕 (E103) と碗 (E104) が出土しており、13 世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

14A 区 101SK : 14A 区の南東側にある平面楕円形の土坑で、長径 0.32m、短径 0.24m、深さ 0.12m をはかる。埋土は灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土で常滑 4 型式の南部系陶器の碗 (E106) が出土している。

室町時代～戦国時代の遺構

14A 区 018SK : 14A 区南側にある柱穴状の土坑で、長径 0.35m、深さ 0.16m をはかる。埋土は灰オリーブ色極細粒砂が上部に見られるもので、16 世紀の常滑産甕 (E049) が出土していることから戦国時代以後の遺構と考えられる。

14A 区 035SD・036SD : 14A 区南西部の上面にて検出された溝で、035SD が深さ 0.15m 前後、036SD が 0.10m 前後で、溝の底部分が確認できた (図 23)。035SD は西北西から鍵状に折れて、北北東に伸びるようであるが、折れる前は幅 0.70m で折れる部分は幅 2.20m と太くなる。036SD は幅 0.30m 前後で北西側が平面で確認できたのみである。埋土は 035SD が灰色細粒砂、036SD が洪水性堆積と思われる橙色粗粒砂と灰白色極細粒砂の斑土であった。035SD の出土遺物は古墳時代後期～鎌倉時代の須恵器・南部系陶器・中世土師器の鍋が出土していて鎌倉時代の遺構の可能性はあるが、036SD の出土遺物には、南部系陶器の碗 (E059) とともに大窯 2 窯式期の鉄釉椀皿 (E060) が出土しており、16 世紀の遺構と考えられる。

14A 区 053SK : 14A 区南東部にある平面楕円形の土坑で、長径 1.0m 以上、短径 0.6m、深さ 0.15m をはかる。埋土はオリーブ灰色粘土質シルトと灰白色中粒砂の斑土で、内耳鍋 (E089) が出土した。036SD が上部を

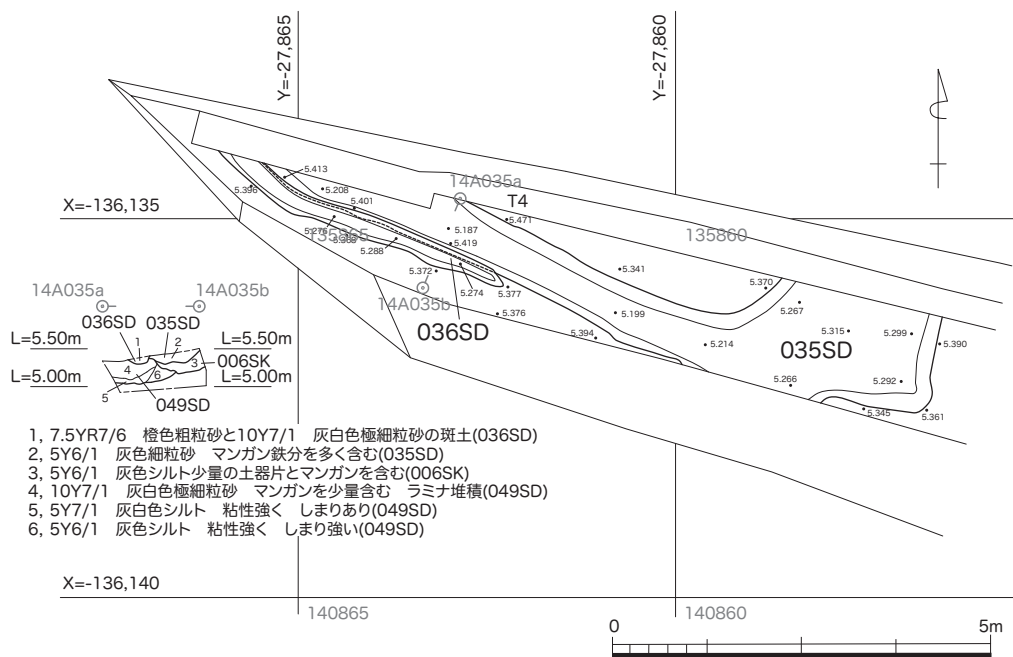


図 23 14A 区 035SD・036SD (1 : 100)

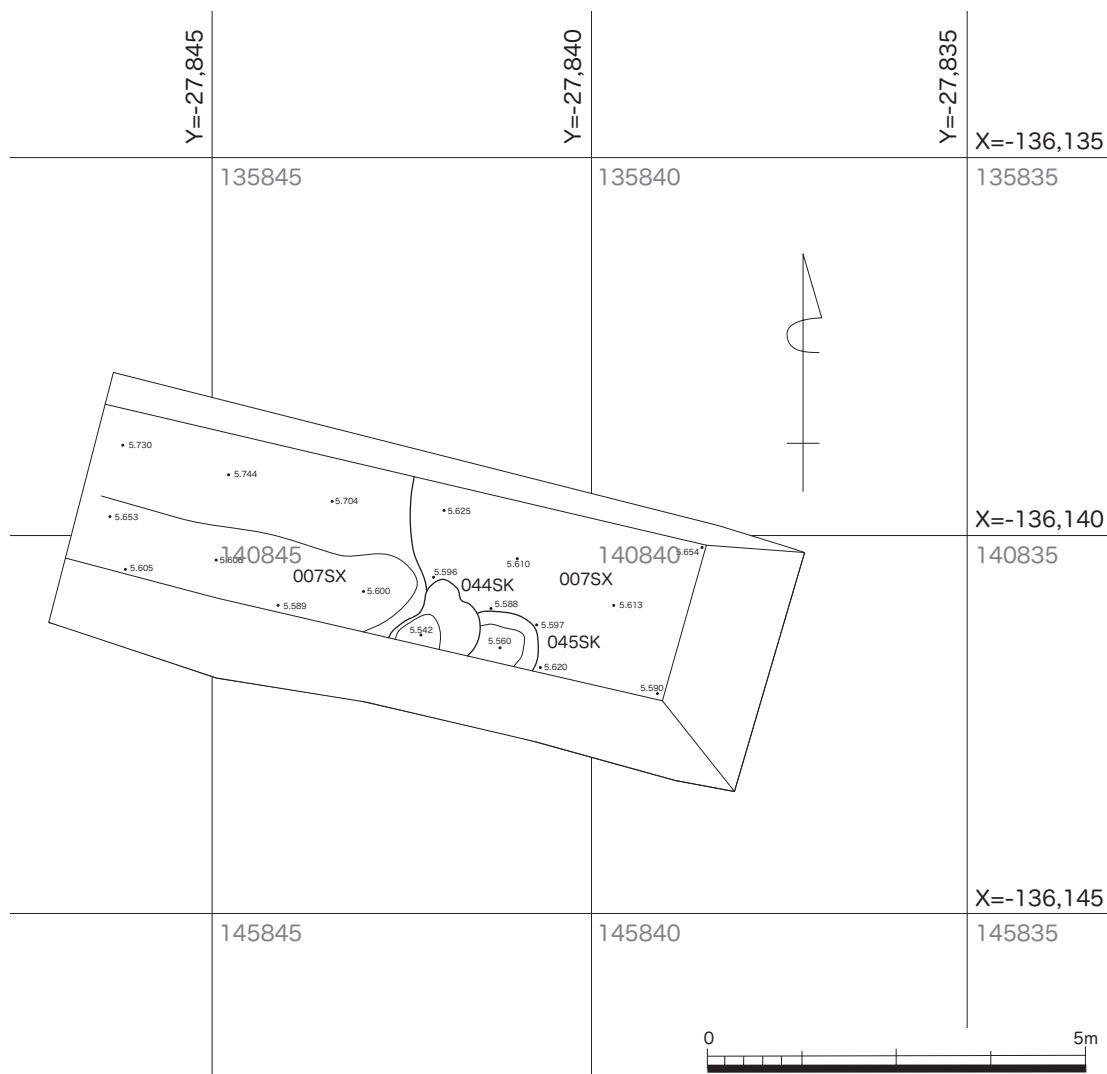
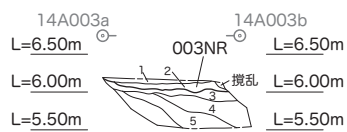
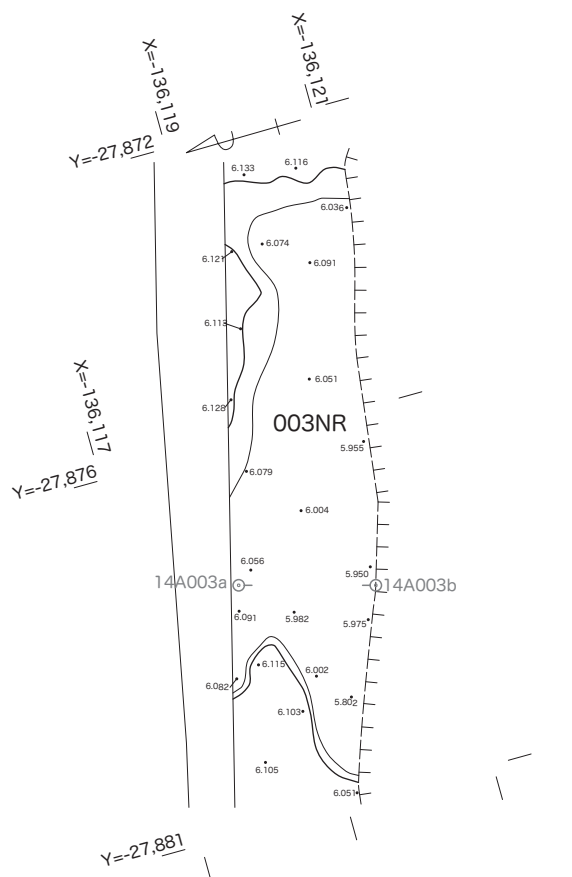
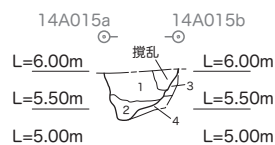
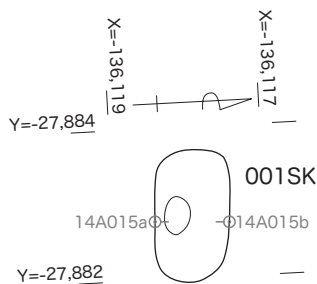


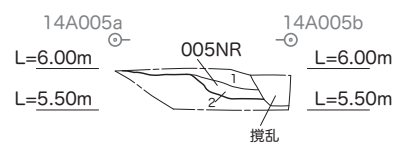
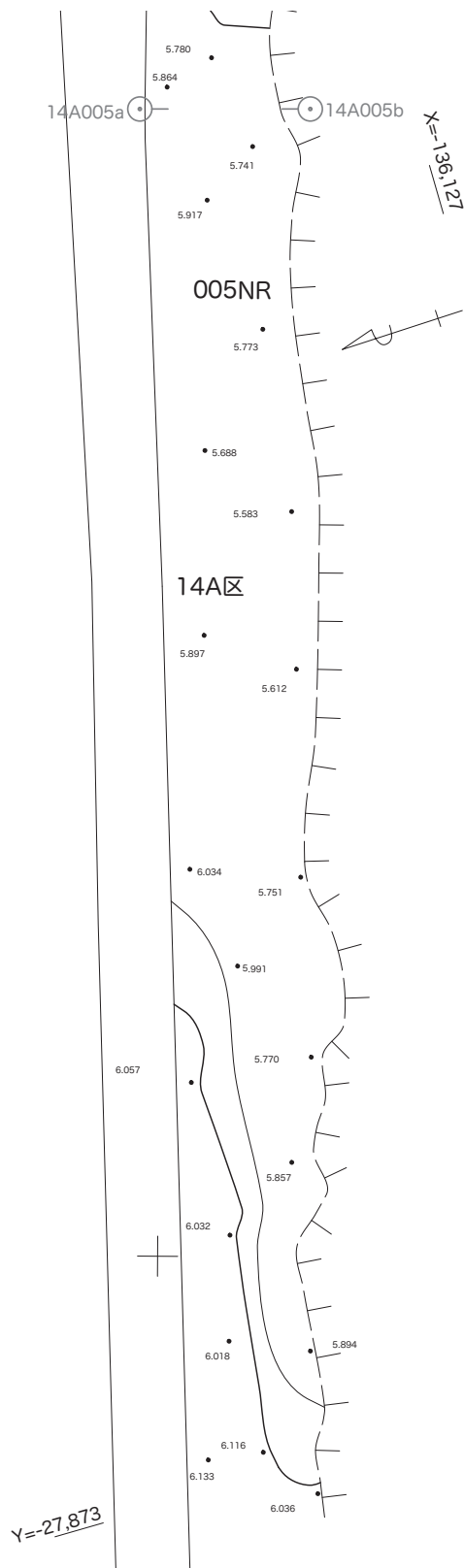
図 24 14A 区南東隅部上面遺構 (1 : 100)



- 1, 2.5Y6/2 灰黄色シルト(003NR)
- 2, 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 鉄分マンガンを含む(003NR)
- 3, 2.5Y7/1 灰白色シルト 鉄分マンガンを少量含む
- 4, 10YR7/6 明黄褐色粘質土と2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトの斑土
- 5, 2.5Y7/2 灰黄色シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトの斑土



- 1, 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルトと2.5Y6/3 にぶい黄色極細粒砂の斑土
- 2, 2.5Y7/1 灰白色シルト マンガンを少量含む
- 3, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
- 4, 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトと2.5Y7/6 明黄褐色粘土の斑土



- 1, 2.5Y7/1 灰白色シルト マンガンを少量含む
- 2, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト

図 25 14A 区 001SK・003NR・005NR (1 : 100)

切って重複しており、本来は同一の遺構の可能性はある。15世紀後半以後の遺構である。

江戸時代後期以後の遺構

14A区001SK：14A区の北西部にある平面楕円形の土坑で、長径1.76m、短径0.99m、深さ0.67mの断面丸底のものである。一部に新しい落ち込みが入っていたが、灰黄色粘質シルトとにぶい黄色極細粒砂の斑土の埋土であった。出土遺物は須恵器片と中世の常滑甕片が出土した。

14A区003NR：14A区北西部にある自然流路跡で、北から南に流れるものである。東西幅6.5m前後、深さ0.15m前後で、埋土は灰黄色シルト～極細粒砂である。出土遺物は中世以前のものだけであるが、江戸時代後期の自然流路005NRより新しい。

14A区004SD：14A区北東部にある南北に伸びる溝で、幅0.60m、深さ0.35mをはかる。中世以前ものが出土しているが、005NRより1層上の地層から掘り込まれており、江戸時代後期以後のものである。埋土は橙色極細粒砂と灰色シルトの斑土である。

14A区005NR：14A区北側にある自然流路跡で、北東から南西に流れる。東西幅は15m前後、深さは0.30m程を確認できた。出土遺物は、中世以前のものがほとんどであるが、古瀬戸陶器の灰釉縁釉子皿(E018)や江戸時代後期以後の陶器碗片が出土しており、江戸時代後期以後の遺構である。

14A区007SX：14A区南側から14B区南西側に確認できた落ち込み状遺構で、江戸時代以後の耕作土を除去した下に確認し、中世以前の遺構の上を覆う。炭化物や地山のブロックを含む黄灰色シルトで、深さが0.10m～0.25mである。出土遺物には古式土師器壺(E021)、南部系陶器の碗(E023～E029)、小皿(E030～E033)、鉢(E022)、壺(E035)、陶丸(E034)、青磁碗(E036～E038)、土錘(E039)、平瓦(E040)がある。

14A区051SD：14A区北側にて確認できた南北方向の溝で、幅2.00m、深さ0.50mである。埋土は上層が灰黄色中粒砂、下層がラミナ堆積のみられる灰白色極細粒砂で、出土遺物は中世以前の南部系陶器や常滑産甕が多く出土しているが、江戸時代後期の005NRより新しいものである。

第3節 14B区の遺構

14B区では、平安時代末～鎌倉時代と考えられる溝4条、掘立柱建物8棟、柱穴列9列、竪穴建物1棟、土坑10基以上、江戸時代の井戸1基、溝1条、近代以後の溝8条、土坑18基がある(図22・図26～図

38、写真図版4～写真図版6)。掘立柱建物と柱穴列の抽出に関して、発掘調査時には掘立柱建物1棟(SB01)と東西の柱穴列が4条以上存在するものと考えていたが、土坑の配置などから今回報告するSA01とSA02が並行する柱穴列として存在し(発掘調査時から想定していた北側の柱穴列2条)、その他の土坑は掘立柱建物の柱穴である可能性が高いものと考えた。

平安時代末～鎌倉時代の遺構

14B区SI01(415SK)：長径2.8m、短径1.7mの平面隅丸長方形の竪穴建物跡で、深さは0.07mをはかる。遺構検出をした際に床面全体に炭化物が広がっており、竪穴建物西側にて、床面上面がやや赤く比熱する部分6ヶ所みられた。竪穴建物の西壁に沿って造り付け竈と考えられる土坑435SKがある。435SKは長径0.92m、短径が0.62m、深さ0.23mの丸底の土坑で、上層に竈の覆い部分が崩落したと考えられる灰白色粘土質シルトとにぶい黄橙色シルトの斑土により埋まっていた。中層は褐灰色粘土と焼土と思われる黄橙色粘土質シルトの粗い斑土があり、やや被熱痕がみられる底面の上に炭化物層が0.10m程あった。出土遺物には折戸53号窯式の灰釉陶器碗(E214)がある。床面の炭化材の芯持ちの丸木炭化材2点と割れ炭化材1点の樹種はコナラ属アカガシ亜属で、芯持ち丸木炭化材2点のAMS放射性炭素年代測定の結果では、1037～1159calADと1039～1161calADの結果を得た。以上のことから、12世紀の遺構と考えられる。

14B区SB01：14B区北東部にある桁行3間、梁行1間の東西棟の掘立柱建物跡で、規模は、桁行6.2m、梁行4.2mの建物である。北側柱穴は西から276SK、275SK、550SK、南側柱穴は西から273SK、225SK、182SK、176SKで、北東隅柱穴は177SEと重複する。柱間は北側柱列が西より2.25m、2.25m、南側柱列が西より2.0m、2.2m、2.0mで、側柱の軸線はN-64°-Wである。柱穴は長径0.50m～0.75mの平面円形から楕円形で、深さは遺構検出面より0.15m～0.22m程である。柱穴を確認した断面からは、柱痕跡は確認できず、柱は抜き取られたものと考えられる。柱穴の埋土は、にぶい黄色中粒砂混じり粘土と灰白色極細粒砂の斑土のもの(176SK・182SK・225SK)と、にぶい黄色中粒砂混じり粘土質シルトのもの(273SK)、灰色極細粒砂のもの(275SK・276SK)、灰黄色シルトのもの(550SK)があった。また建物の内部にある178SKと226SKも埋土の様子や形態から、SB01と関連する柱穴の可能性もある。出土遺物は常滑4型式～常滑5型式の南部系陶器の碗が、182SKよりE153と550SKよりE237・E238が出土していることから、13世紀前半～中頃の建物と考えたい。

14B区SB02：14B区南東部にある桁行3間、梁行

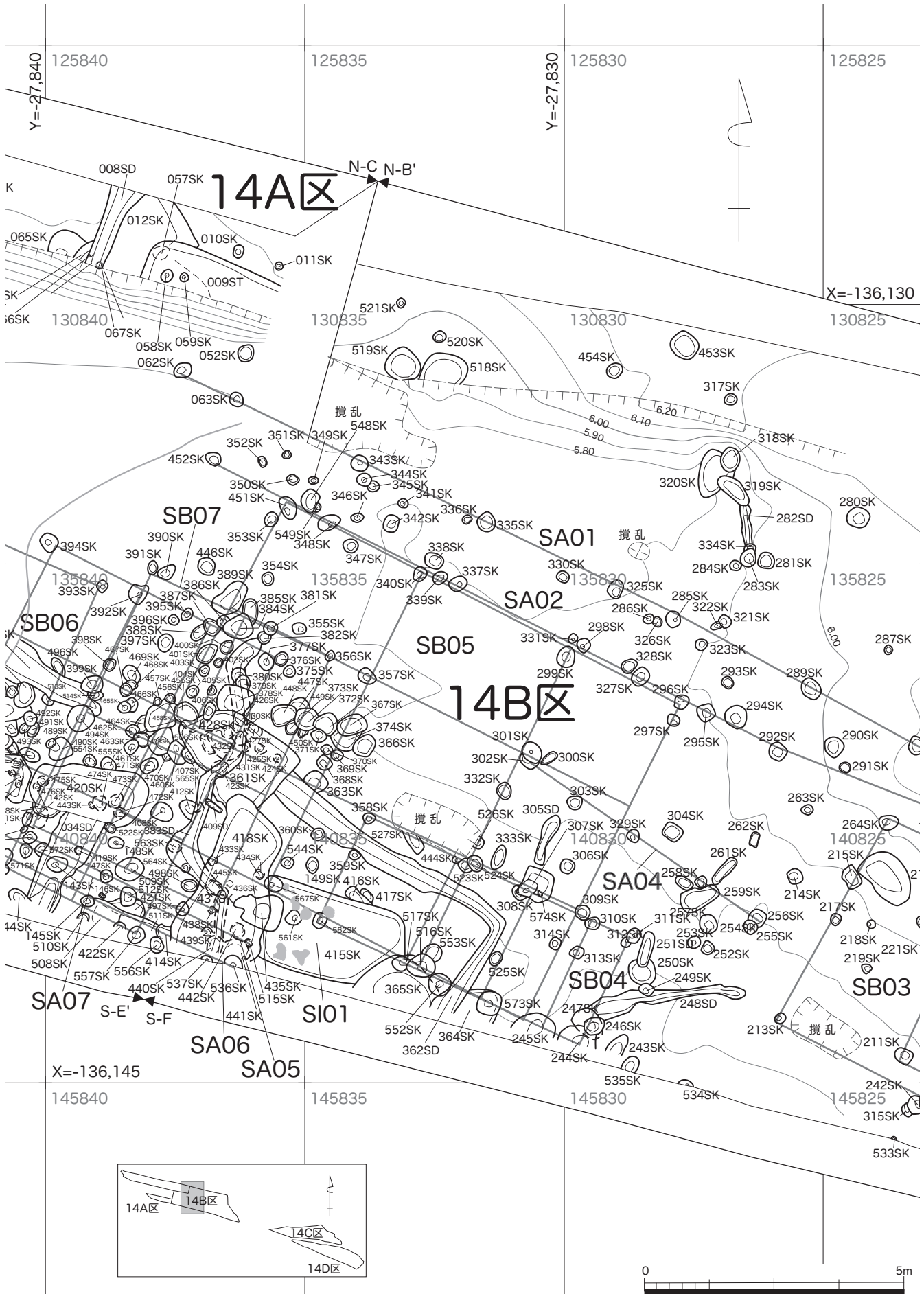


図 27 14A 区遺構平面図 4・14B 区遺構平面図 2 (1 : 100)

1 間の南北棟の掘立建物跡で、規模は桁行 7.0m、梁行 4.5m の建物である。西側柱穴は北から 271SK、267SK、223SK、210SK、東側柱穴は北から 184SK、195SK、199SK、240SK で、267SK と 195SK は SA02 の 547SK と 196SK より新しい。また南東隅柱の 240SK は SB03 の 238SK より古い。西側柱南側で 223SK と 210SK の西 0.8m に 222SK と 211SK の底部分が付く可能性がある。柱間は西側柱列が北より 2.5m、2.1m、2.4m、東側柱列が北より 2.2m、2.4m、2.4m で、側柱の軸線は N-25°-E である。柱穴は長径 0.26m ～ 0.55m の平面やや不整な円形から楕円形で、深さは遺構検出面より 0.15m ～ 0.34m 程である。柱穴の埋土は、灰白色粘土質シルトに黒色粘土を少し混じるもの (184SK)、灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土 (195SK)、にぶい黄色中粒砂と褐灰色シルトの斑土 (199SK)、灰白色シルト (210SK)、灰色極細粒砂 (223SK)、灰白色極細粒砂 (240SK、271SK)、灰色とオリーブ黒色極細粒砂と灰白色極細粒砂の斑土 (267SK) があつた。柱痕跡は 184SK で灰色粘土質シルトと灰色粘土の斑土、199SK でにぶい黄色中粒砂と灰色粘土質シルトの斑土、210SK で灰色粘土質シルトと灰色粘土の斑土として確認できた。また 184SK、199SK (W005)、210SK、223SK、271SK では、柱材と思われる木材が出土した。出土遺物は南部系陶器と中世土師器鍋片が少数出土しており、267SK より常滑 5 型式の南部系陶器の小皿 (E169) が確認されている。SA02 より新しいことから、13 世紀後半の建物と考えられる。

14B 区 SB03：14B 区南東部にある桁行 4 間、梁行 2 間の東西棟の掘立建物跡で、規模は桁行 10.0m、梁行 4.3m の建物である。北側柱穴は北から 264SK、268SK、193SK、198SK、165SK、南側柱穴は西から 213SK、241SK、212SK、238SK、324SK で、西側柱として 217SK がある。他の建物遺構との関係は、238SK は SB02 の 240SK より新しく、SA03 の 233SK より新しい。柱間は北側柱列が西より 3.4m、2.2m、2.1m、2.3m、南側柱列が西より 3.2m、2.5m、2.0m、2.3m、西側柱列は北から 2.15m、2.15m で、側柱の軸線は N-66°-W である。柱穴は長径 0.23m ～ 0.36m の平面円形から楕円形で、北側柱・南側柱の深さは遺構検出面より 0.33m ～ 0.58m 程と比較的深く、西側柱の 217SK は 0.12m と浅い。柱穴の埋土は、灰白色粘土質シルト (165SK)、にぶい黄色中粒砂混じり粘土質シルト (193SK)、黒褐色粘土質シルト (198SK)、灰色粘土質シルト (212SK)、灰色極細粒砂 (213SK)、灰色粘土質シルトと灰白色シルトの粗い斑土 (238SK)、にぶい黄色中粒砂混じり粘土質シルトと黒色粘土質シルトと灰白色シルトの斑土 (241SK)、灰色粘土質シル

トと灰白色シルトの粗い斑土 (264SK)、黒色粘土と灰色シルトの斑土 (268SK)、灰オリーブ色粘土質シルト (324SK) である。柱痕跡は 165SK がオリーブ灰色粘土質シルトと黒褐色粘土質シルトの斑土、193SK が灰白色シルトと黒色粘土とにぶい黄色中粒砂混じり粘土質シルトの粗い斑土、198SK がオリーブ灰色粘土質シルト、213SK がオリーブ黒色粘土質シルト、241SK が灰色粘土質シルトと灰白色極細粒砂の斑土として確認できた。また 213SK では、柱材と思われる木材が出土した。出土遺物は古式土師器と南部系陶器、中世土師器鍋、近世陶磁器 (238SK より) が少数出土しており、238SK より常滑 4 型式の南部系陶器の碗 (E156) と 13 世紀の伊勢型鍋 (E157)、241SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 2 点 (E159・E160) が出土している。SA02・SB02 より新しいことから、13 世紀後半以後の建物と考えられる。

14B 区 SB04：14B 区中央部南側にある桁行 4 間、梁行 1 間の東西棟の掘立建物跡で、規模は桁行 5.5m、梁行 2.2m の建物である。北側柱穴は北から 358SK、444SK、307SK、310SK、311SK、南側柱穴は西から 562SK、517SK、573SK、245SK、244SK がある。他の建物遺構との関係は、444SK は SB05 の 523SK より古く、517SK も SB05 の 516SK より古い。また 245SK は SB05 の南東隅柱穴と重複している。柱間は北側柱列が西より 1.8m、1.5m、1.4m、0.8m、南側柱列が西より 1.8m、1.8m、1.0m、0.9m で、側柱の軸線は N-64°-W である。柱穴は長径 0.23m ～ 0.70m の平面やや不整な円形から楕円形で、深さは 0.28m ～ 0.55m と比較的深い。柱穴の埋土は、灰白色極細粒砂 (244SK・311SK・517SK)、黄灰色シルト (245SK)、黄灰色粘土質シルトに灰白色シルト含む (307SK)、灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土 (310SK・358SK・444SK)、灰褐色粘土質シルト (562SK)、灰色粘土質シルト (573SK) である。柱痕跡は、307SK が灰色シルト、311SK が灰色粘土質シルトと灰色粘土の斑土として確認できた。また 245SK・310SK・311SK では、柱材と思われる木材が出土し、245SK 出土の木材はツブラジイのみかん割りの加工材、310SK 出土の木材はヒノキの加工木であった。出土遺物は古式土師器と南部系陶器、中世土師器皿・鍋が少数出土しており、この時期に関係するものとして 244SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E162) と常滑 2 型式の小皿 (E163)、245SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E164)、358SK より常滑 2 型式の南部系陶器の碗 (E184) が出土している。SB05 より古いことから、13 世紀前半～中頃の建物と考えられる。

14B 区 SB05：14B 区西側にある桁行 3 間、梁行 3 間の東西棟の総柱タイプの掘立建物跡で、規模は桁

行 8.5m、梁行 6.6m の建物である。北側柱穴列の西から 451SK、340SK、299SK、296SK、2 列目は西から 389SK、357SK、301SK、3 列目は西から 458SK、363SK、523SK (524SK)、309SK、南側柱穴列は西から 408SK、567SK、516SK、245SK がある。2 列目の東側柱穴は未確認で、南東隅の 245SK は SB04 の柱穴と重複している。他の建物遺構との関係は、523SK は SB04 の 444SK より新しく、516SK も SB04 の 517SK より新しい。東西の柱間は西より 2.95m、3.2m、2.35m、南北の柱間は北より 2.15m、2.35m、2.1m で、東西の側柱の軸線は N-64°-W である。柱穴は長径 0.26m ～ 0.87m の平面やや不整な円形から楕円形で、深さは 0.18m ～ 0.62m とやや違いがあるが、側柱と束柱との規模の違いによる傾向はみられない。柱穴の埋土は、黄灰色シルト (245SK)、灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土 (296SK・299SK・309SK・458SK・516SK・524SK・567SK)、黒色粘土質シルト (301SK)、黒色粘土質シルトと灰白色シルトの粗い斑土 (340SK)、黒色粘質土と灰白色粘土質シルトと灰色極細粒砂の粗い斑土 (357SK)、灰白色極細粒砂 (363SK・408SK)、灰色粘土質シルト (389SK)、灰色粘土質シルトとにぶい黄色の斑土 (451SK)、灰色粘土質シルト (523SK) である。柱痕跡は、340SK が黒色粘土質シルトと灰白色シルトの粗い斑土、451SK が灰色粘土質シルトとして確認できた。また 245SK と 523SK、524SK では柱材と思われる木材が出土し、245SK 出土の木材はツブラジイのみかん割りの加工材、523SK 出土の木材はツブラジイの加工材であった。出土遺物は須恵器、灰釉陶器、青磁碗、南部系陶器、瓦、中世土師器皿・鍋が少数出土しており、この時期に関係するものとして 245SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E164)、299SK より常滑 4 型式の南部系陶器の碗 (E173)、301SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E174)、357SK より常滑 4 型式の南部系陶器の碗 (E182) と常滑 4 型式の小皿 (E183)、363SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E188) と小皿 (E189)、458SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E227) が出土している。SB04 より新しいことから、13 世紀後半以後の建物と考えられる。

14B 区 SB06：14B 区南西側にある桁行 3 間、梁行 3 間の南北棟の総柱タイプの掘立建物跡で、規模は桁行 6.0m、梁行 4.7m の建物である。西側柱穴列の北から 394SK、131SK、2 列目は北から 392SK、399SK、475SK、135SK、3 列目は北から 387SK、458SK、473SK、東側柱穴列は北から 376SK、432SK、563SK、557SK がある。西側柱穴列の 2 列目と 3 列目の柱穴は近年の攪乱により未確認、3 列目の南側柱穴は未確認で、458SK の柱穴は SB05 と重複している。

他の建物遺構との関係は、130SK は SA06 の 131SK より、135SK は SA06 の 136SK より新しい。南北の柱間は北より 1.9m、2.2m、1.9m、東西の柱間は西より 1.8m、1.4m、1.5m で、南北の側柱の軸線は N-27°-E である。柱穴は長径 0.22m ～ 0.65m の平面やや不整な円形から楕円形で、深さは 0.06m ～ 0.46m とやや違いがあるが、側柱と束柱との規模の違いによる傾向はみられない。柱穴の埋土は、灰白色シルトと明黄褐色シルトの斑土 (131SK)、黒褐色粘土質シルトとにぶい黄色シルトの斑土 (135SK)、灰色粘土 (376SK・387SK)、灰白色シルト (392SK)、灰色粘土質シルト (394SK・399SK)、灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土 (432SK・458SK・473SK・475SK・557SK・563SK) である。柱痕跡は、131SK が黄灰色粘土質シルトと灰白色シルトの斑土、392SK が黒色粘土質シルトと灰白色シルトの斑土として確認できた。また 399SK では柱材と思われる木材が出土し、スダジイの追衤目の加工材であった。出土遺物は須恵器、灰釉陶器、南部系陶器、中世土師器鍋が少数出土しており、この時期に関係するものとして 135SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E137) と常滑 6a 型式の南部系陶器の小皿 (E138)、399SK より常滑 3 型式の南部系陶器の碗 (E213)、458SK より常滑 5 型式の南部系陶器の碗 (E227)、557SK より灰釉陶器の碗 (E239) が出土している。SA06 より新しいことから、13 世紀後半以後の建物と考えられる。

14B 区 SB07：14B 区南西側にある桁行 2 間、梁行 2 間の南北棟の総柱タイプの掘立建物跡で、規模は桁行 5.2m、梁行 3.8m の建物である。西側柱穴列の北から 391SK、494SK、568SK、2 列目は北から 384SK、407SK、509SK、東側柱穴列は北から 356SK、438SK がある。東側柱穴列の 2 列目の柱穴は未確認である。南北の柱間は北より 2.9m、2.3m、東西の柱間は西より 2.1m、1.7m で、南北の側柱の軸線は N-25°-E である。柱穴は長径 0.21m ～ 0.56m の平面やや不整な円形から楕円形で、深さは 0.07m ～ 0.45m とやや違いがあるが、側柱と束柱との規模の違いによる傾向はみられない。柱穴の埋土は、灰色粘土 (356SK・384SK・391SK)、灰白色極細粒砂 (407SK・568SK)、褐灰色粘土に黄橙色シルトを含む (438SK)、灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土 (494SK・509SK) である。柱痕跡は確認できていないが、356SK からは丸瓦片 1 点 (E180) と平瓦片 1 点 (E181) が、568SK からは丸瓦片 1 点 (E241)、南部系陶器甕片 2 点、被熱した砂岩角礫 1 点、凝灰質砂岩角礫 1 点、チャート亜角礫 2 点、同亜円礫 1 点が柱穴底部から出土し、柱材の根固め石と思われる。出土遺物は須恵器、青磁碗、南部系陶器、瓦、中世土師器鍋が少数出土しており、

この時期に関係するものとして384SKより常滑3型式の南部系陶器の碗(E208)と小皿(E209・E210)、青磁碗(E211)が出土している。出土した遺物からは、12世紀後半～末頃の建物と考えられる。

14B区SB08:14B区南西隅部にある掘立柱建物跡で、建物想定範囲の北西側を近年の攪乱により未確認であるため、規模は西側や南側などに広がる可能性を残す。調査範囲の中で南側柱穴列と東側柱穴列のみを検出でき、桁行5間、梁行3間の東西棟の掘立柱建物跡と考えた。規模は桁行7.2m、梁行6.0mである。南側柱穴列は西から028SK、092SK、097SK、110SK、129SK、133SKで、東側柱穴列は北から393SK、513SK、478SK、133SKである。南側柱穴列の柱間は西より1.6m、1.3m、1.4m、1.4m、1.5m、東側柱穴列の柱間は北より2.4m、1.4m、2.2mで、南側柱穴列の軸線はN-67°-Wである。柱穴は長径0.22m～0.49mの平面円形から楕円形で、深さは0.08m～0.53mとやや違いがある。柱穴の埋土は、黄橙色極細粒砂を含む黄灰色極細粒砂(028SK)、黄灰色粘土質シルトと浅黄色粘土質シルトの斑土(092SK)、灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土(097SK・513SK)、黄灰色粘土質シルトと明黄褐色シルトの斑土(110SK)、黄灰色粘土質シルトと橙色シルトの斑土(129SK)、黄灰色粘土質シルトと灰白色シルトの斑土(133SK)、灰白色極細粒砂(393SK)、オリーブ褐色シルトと黄灰色粘土の斑土(478SK)である。柱痕跡は110SKと133SKが黒褐色粘土質シルト、478SKが黄灰色粘土質シルトとして確認できた。また092SKでは柱材と思われる木材が出土した。出土遺物は古式土師器、須恵器、南部系陶器、中世土師器皿・鍋が少数出土しており、この時期に関係するものとして092SKより常滑3型式の南部系陶器の碗(E124)と片口鉢Ⅱ類(E125)が出土している。出土した遺物からは12世紀後半～末頃の遺構の可能性があるが、097SKはSA07の096SKより新しいことから13世紀前半～中頃の建物と考えられる。

14B区SA01・SA02:14B区の中央部を東西に延びる柱穴列で、軸線がN-65°-Wで並行している。SB02と重複し、SA02はSB03と近接している。この2条の柱穴列は確認された中央部を除いて、柱穴が2基1対で並び柱穴間隔が1.3m前後と狭く、北側と南側に組み合う柱穴がみられないことから、柵としての柱穴列と考えられる。SA01は西より062SK、063SK、343SK、335SK、325SK、285SK、289SK、288SK、316SK、269SK、187SK、186SK、188SK(189SK)、172SK、170SKの東西26.4mの13間分が検出できた。柱間は、西より1.2m、2.7m、2.7m、2.8m、1.3m、2.9m、2.3m、2.3m、0.8m、2.3m、2.4m、1.2m、1.5mである。SA02はSA01の一番西寄りの062SKに伴う

ものが近年の攪乱により検出できていないが、西より452SK、348SK、337SK、298SK、327SK、292SK、266SK、547SK、191SK(192SK)、196SK、171SK、166SKの東西24.3mの11間分検出できた。292SKと266SKの間で、SA01より柱穴が1基少ない。柱間は、2.7m、2.7m、2.8m、1.3m、2.9m、4.6m、0.8m、2.3m、2.4m、1.2m、0.8mで、一番東寄りの171SKと166SKの間が短い。柱穴列の東側は千人塚から南にのびる丘陵にあたる位置で止まっており、丘陵を東側の境界として充てて西側を南北に区画するものと考えられる。西側は削平を受けているが、SA01・SA02の西側延長線にある14A区に残りの良い部分では柱穴が検出されていないことから、この時期の溝である008SD付近まで延びていたものと考えられる。SA01の柱穴は、長径0.28m～0.54m、深さ0.09m～0.54mの平面円形から楕円形のもので、埋土は灰色、灰白色、灰オリーブ色、橙色、にぶい黄色粘土～中粒砂からなる斑土で、柱痕跡は187SK、316SK、325SK、343SKより確認でき、285SK、316SK、343SK(W009)では柱材と思われる木材が出土した。SA02の柱穴は、長径0.25m～0.45m、深さ0.07m～0.60mの円形～楕円形のもので、埋土は黒色・灰色・灰白色・灰オリーブ色・橙色粘土質シルト～細粒砂からなる斑土で柱痕跡は171SK、192SK、266SK、298SK、348SK、547SKより確認でき、192SK、266SK(W007)、298SK、337SK(W008)、547SKでは柱材と思われる木材が出土した。先に述べた266SK出土スダジイの木材(W007)のAMS放射性炭素測定年代では1151～1220calAD、337SK出土クリの木材の(W008)のAMS放射性炭素年代測定の結果では、1037～1156calADの結果を得た。出土遺物にはSA01の柱穴から須恵器、灰釉陶器、古代の土師器、南部系陶器、中世の土師器鍋片が少数、SA02の柱穴から南部系陶器、中世の土師器鍋片が少数出土しているのみであるが、SA01の335SKより出土する常滑3型式の南部系陶器の碗(E177)、SA02の547SKから常滑3型式～5型式の南部系陶器の碗(E235)、小皿(236)が出土しており、出土遺物からはSA01は12世紀後半、SA02は13世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

14B区SA03:14B区南東側にある柱穴列で、SB02とSB03の南側の位置で重複する。西より207SK、204SK、237SK、229SKの東西4.2mの3間分が検出できた。柱間は西より1.4m、1.4m、1.4mで、柱穴列の軸線はN-60°-Wである。柱穴は残っているもので長径0.45m～0.53mの平面円形～楕円形のもので、深さ0.07m～0.27mのものがある。埋土は灰色・灰オリーブ色・橙色の粘土質シルト～シルトを主体とするもので、柱痕跡は確認できなかったが、229SKでは上

層と下層に埋土が分かれるので、柱が抜き取られた痕跡と思われる。また 207SK は土坑の南西側が北東側より 0.08m 程深くなって、平面が不整形な楕円形となっており、掘り直しが行われている可能性がある。北側に組み合う柱穴列を確認できないので、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物には南部系陶器と中世の土師器が少数出土しているのみであるが、229SK は SB03 の南東隅柱である 324SK より古いことからこの時期の遺構と考えられる。

14B 区 SA04 : 14B 区中央部にある柱穴列で、SB05 の柱穴 301SK と重複する。西より 302SK、303SK、329SK、258SK、256SK の東西 5.4m の 4 間分が検出できた。柱間は西より 1.25m、1.25m、1.6m、1.3m で、柱穴列の軸線は N-57°-W である。柱穴は長径 0.21m ～ 0.36m 前後の平面円形～楕円形のもので、深さ 0.02m ～ 0.15m のものがある。埋土は灰白色・灰色の粘土・粘土質シルト・極細粒砂を主体とするもので、柱痕跡は確認できなかった。北側と南側に組み合う柱穴列を確認できない。出土遺物には時期不明の土器片が少数出土しているのみであるが、SB05 より古いことからこの時期の遺構と考えられる。

14B 区 SA05 : 14B 区南西側にある柱穴列で、SB06 の南側の位置で重複する。西より 570SK、147SK、497SK、515SK の東西 4.65m の 3 間分が検出できた。柱間は西より 1.6m、1.6m、1.45m で、柱穴列の軸線は N-64°-W である。柱穴は長径 0.25m 前後の平面円形のもので、深さ 0.19m ～ 0.30m のものがある。埋土は褐灰色・灰白色・灰色・灰オリーブ色・橙色の粘土～極細粒砂を主体とするもので、柱痕跡は確認できなかった。北側に組み合う柱穴列を確認できず、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物には中世土師器、南部系陶器が少数出土しており、出土遺物から 13 世紀の遺構と考えられる。

14B 区 SA06 : 14B 区南西側にある柱穴列で、SB06 と SB07 の南側の位置で重複する。西より 120SK、136SK、145SK、414SK、536SK の東西 6.8m の 4 間分が検出できた。柱間は西より 2.0m、1.7m、1.6m、1.5m で、柱穴列の軸線は N-63°-W である。柱穴は長径 0.25m ～ 0.35m の平面円形～楕円形のもので、深さ 0.17m ～ 0.30m のものがある。埋土はオリーブ黒色・褐灰色・黄橙色・灰白色・明黄褐色・黄灰色の粘土～シルトを主体とするもので、145SK には褐灰色粘土質シルトの柱痕跡が確認できた。出土遺物には古式土師器、須恵器、南部系陶器、中世の土師器が少数出土しており、この時代のものとしては、145SK から常滑 1a 型式～1b 型式の南部系陶器の広口瓶 (E143)、

538SK から瀬戸 7 型式の南部系陶器の碗 (E234) がある。SA06 は SB06 の南側柱列とも考えられる位置にあるが、SB06 の南東隅柱の位置にあまり組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としたが、414SK と 538SK をこの柱列のものと考え、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物から 13 世紀後半の遺構と考えられる。

14B 区 SA07 : 14B 区南西側にある柱穴列で、SB06 と SB07、SB08 の南側の位置で重複する。西より 138SK、143SK、512SK、439SK の東西 4.9m の 3 間分が検出できた。柱間は西より 1.7m、1.5m、1.7m で、柱穴列の軸線は N-64°-W である。柱穴は長径 0.17m ～ 0.36m の平面やや不整な円形～楕円形のもので、深さ 0.23m ～ 0.33m のものがある。埋土は灰白色・灰色・灰オリーブ色・橙色の粘土～極細粒砂を主体とするもので、138SK には灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土、143SK には明黄褐色粘土ブロックが少量入る黒褐色粘土質シルトの柱痕跡が確認できた。出土遺物には南部系陶器が少数出土しており、138SK では常滑 5 型式の南部系陶器の小皿 (E139) と常滑 1a 型式の南部系陶器の片口鉢 I 類 (E140) が、143SK では常滑 2 型式の南部系陶器の碗 (E141・E142) がある。北側に組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としているが、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物から 13 世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

14B 区 SA08 : 14B 区南西側にある柱穴列で、SB07 と SB08 の南柱穴列や SA06 と重複する。西より 096SK、109SK、130SK、137SK の東西 4.5m の 3 間分が検出できた。柱間は西より 1.7m、1.4m、1.4m で、柱穴列の軸線は N-73°-W である。柱穴は長径 0.20m ～ 0.29m の平面円形～楕円形のもので、深さ 0.28m ～ 0.55m のものがある。埋土は灰白色・黄灰色・黒褐色の粘土質シルト～極細粒砂を主体とするもので、137SK には黒褐色粘土質シルトの柱痕跡が確認でき、109SK では柱材と思われる木材 (W004) が出土した。出土遺物には南部系陶器が少数出土しており、109SK では常滑 4 型式の南部系陶器の碗 (E134) がある。北側に組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としているが、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物から 12 世紀後半～末頃の遺構と考えられる。

14B 区 SA09 : 14B 区南西側にある柱穴列で、SB07 の南で SA10 の北に隣接してある。西より 559SK、107SK、127SK の東西 4.1m の 2 間分が検出できた。柱間は西より 2.0m、2.1m で、柱穴列の軸線は N-65°-W である。柱穴は長径 0.25m ～ 0.40m の平面円形のもので、深さ 0.14m ～ 0.54m のものがある。埋土は

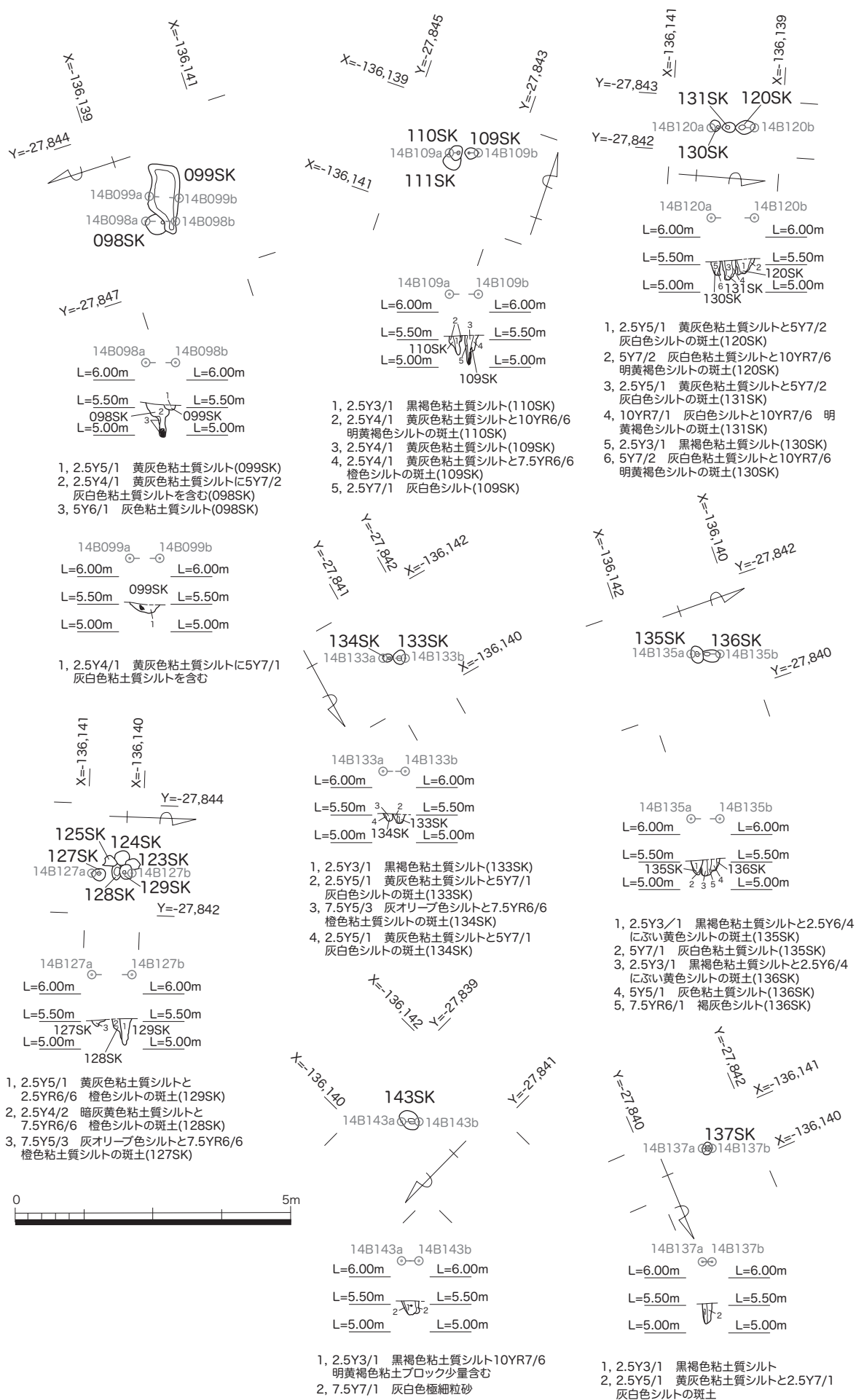


図 29 14B 区個別遺構図 2 (1 : 100)

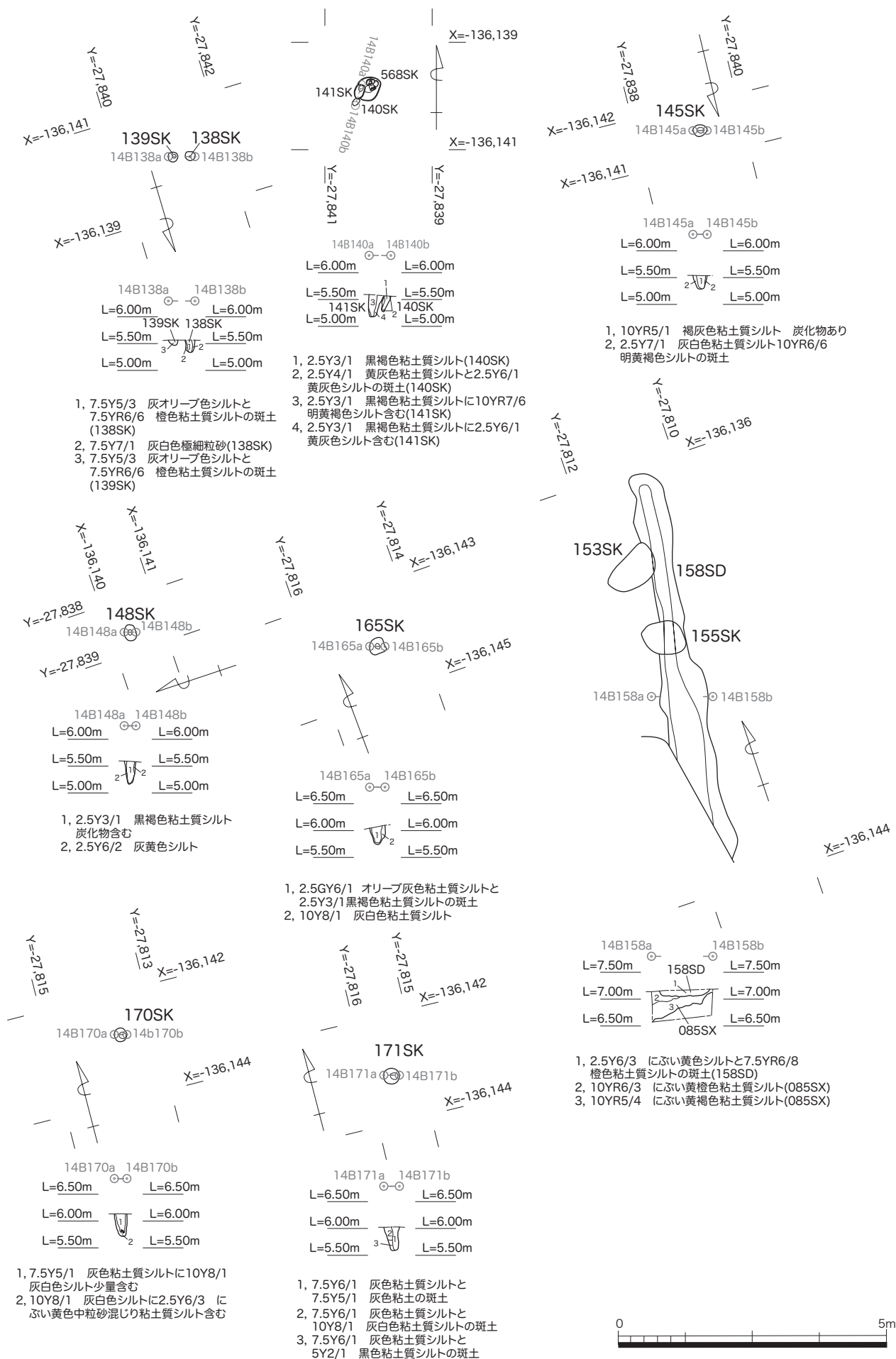


図 30 14B 区個別遺構図 3 (1 : 100)

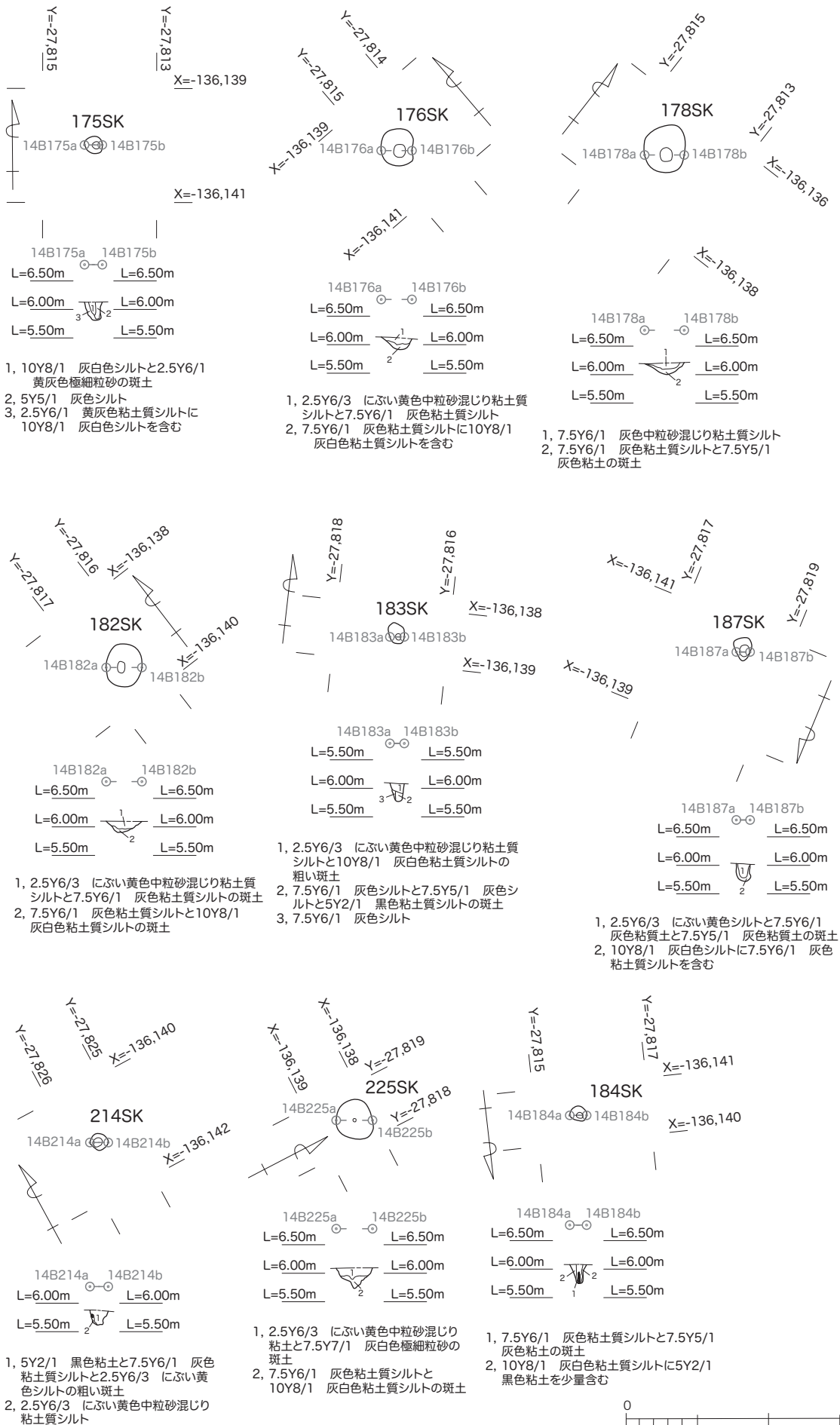


図 31 14B 区個別遺構図 4 (1 : 100)

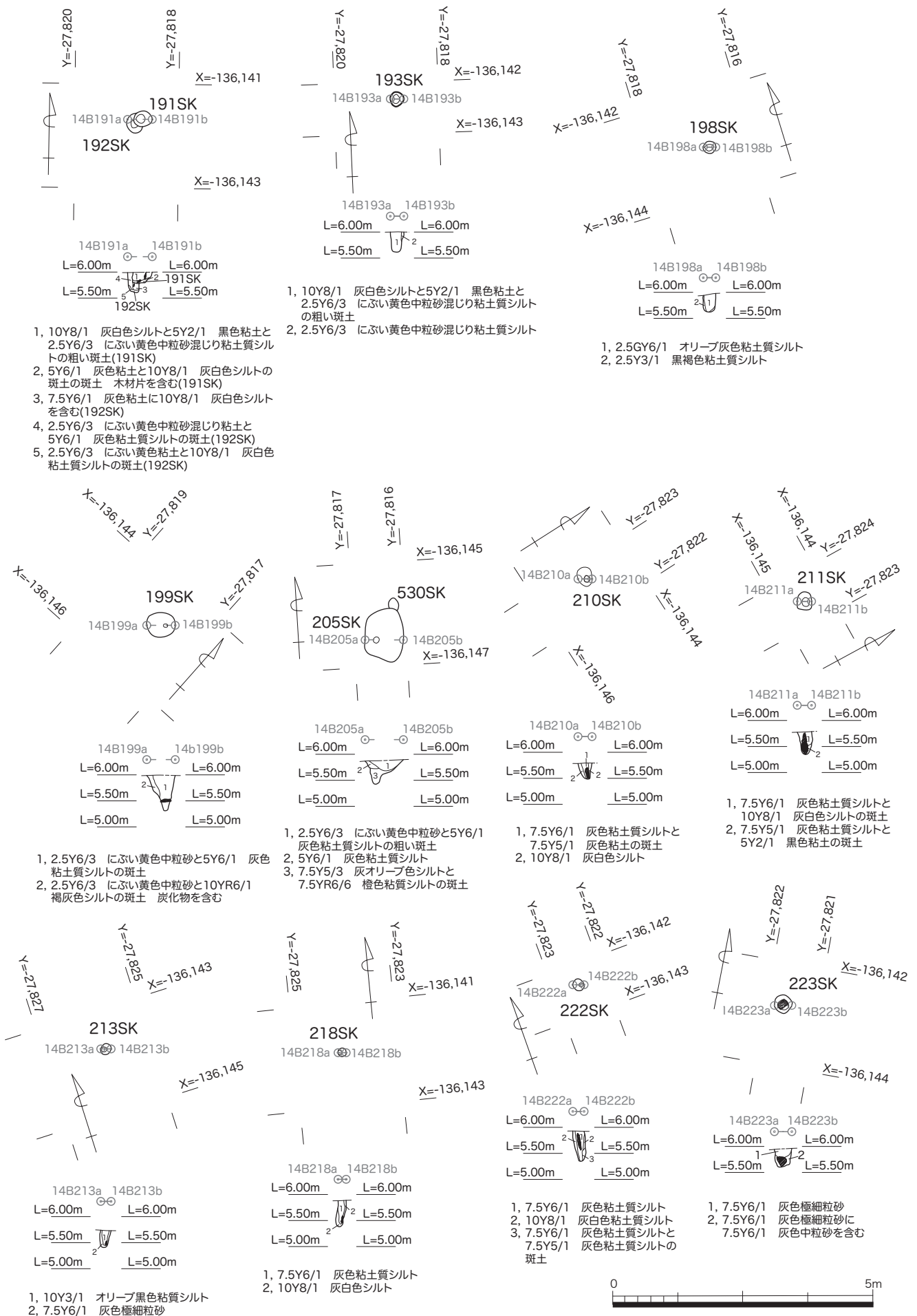


図 32 14B 区個別遺構図 5 (1 : 100)

灰白色・黄灰色・灰オリーブ色・橙色の粘土質シルト～極細粒砂を主体とするものである。127SKや559SKより古代の土師器や南部系陶器が出土している。北側に組み合う柱穴が確認できなかったので柱穴列としているが、掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性がある。出土遺物からこの時期の遺構と考えられる。

14B区 SA10：14B区南西側にある柱穴列で、SA09の南に隣接してある。西より560SK、100SK、112SK、126SK、132SKの東西4.5mの4間分が検出できた。柱間は西より1.5m、1.35m、0.95m、0.7mで、柱穴列の軸線はN-67°-Wである。柱穴は長径0.19m～0.26mの平面円形～楕円形のもので、深さ0.05m～0.10mのものがある。埋土は灰白色・灰色・灰オリーブ色・橙色の粘土～シルトを主体とする。北側に組み合う柱穴として101SKや103SK、116SKが考えられるが、132SKに伴う北側の柱穴が確認できなかったので、柱穴列としている。また掘立柱建物として調査区の南外に組み合う柱穴が存在する可能性もある。出土遺物はないが、560SKはSA09の柱穴である559SKより新しく、100SKはこの時期の遺物が出土する099SKより古いことから、この時期の遺構と考えておきたい。

14B区 034SD：14B区南西側で南壁にかかる位置で確認された溝で、420SKの南辺から伸びる。幅は0.80mで、長さ2.20mを検出した。埋土は灰オリーブ色シルトで、深さは0.03mと浅かった。

14B区 185SD：14B区東側でSB01の南側にある幅0.40m、深さ0.04mの浅い溝で、東西方向に長さ4.06mを検出できた。埋土は灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土で、187SKより古い。

14B区 203SK：14B区南東側で南壁にかかる位置で検出された径3.05mの不整形な土坑で、埋土は灰色極細粒砂である。深さは0.05mと浅く、土坑の内部には231SK～240SKの10基の柱穴状の土坑が重複していた。

14B区 205SK：14B区南東側で検出できた長径0.98m、短径0.79m、深さ0.46mの平面楕円形の土坑で、埋土はにぶい黄色中粒砂と灰色粘土質シルトの粗い斑土であった。土坑の中央付近に灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土がはいる深さ0.25m前後の落ち込みがあり、柱穴の可能性もある。

14B区 206SK：14B区南東側の南壁にかかる位置で検出できた径1.86m、深さ0.08mの平面楕円形の浅い土坑で、埋土は灰色極細粒砂である。北西肩部に212SKが重複する。

14B区 224SD：幅0.44m、深さ0.05mの浅い溝で、南北方向に約3.7m検出できた。埋土は灰白色極

細粒砂である。溝内に径0.25m前後の小土坑である268SKと269SKがみられるが、埋土の違いから溝に伴うものではないものと思われる。またこの溝の北西にある272SDは一連の溝の可能性もある。

14B区 228SK：14B区北東側の丘陵裾部に検出できた平面円形、断面丸底の土坑で、長径0.43m、短径0.39m、深さ0.08mをはかる。埋土は灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土で、土坑の底面に亞円～円礫の小礫が多数入っており、南部系陶器の碗(E154)と甕の底部(E155)が出土した。

14B区 248SD：14B区南側で検出できた幅0.40m、深さ0.08mの浅い溝で、東西方向に2.9m程検出できた。埋土は灰白色極細粒砂で、溝の西端で246SKと247SKと重複する。古式土師器の台付甕脚部(165)、南部系陶器の碗(E166)と小皿(E167)が出土した。

14B区 361SK：14B区南西側にある土坑で、南東辺から362SDが出ている。長径2.10m、短径1.50m、深さ0.09mをはかり、埋土は灰色粘土質シルトと橙色粘土の斑土である。この土坑は383SD・423SK～432SK・406SK・455SK・506SKと重複し、383SDより古い。

14B区 362SD：14B区南西側にある361SKから東南東に5m程伸びて、南南西に折れる溝で、幅0.30m～0.60m、深さ0.14mをはかる。埋土は灰オリーブ色シルトと橙色粘土質シルトの斑土で、南部系陶器の碗(E185・E186)と清郷型鍋(E187)が出土した。

14B区 364SK：14B区南壁にかかる位置に検出できた土坑で、362SDと365SKより古い。径1.36m以上、深さ0.15mをはかり、埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。土坑の北東隅で573SKと重複する。南部系陶器の碗(E190～E193)と小皿(E194・E195)が出土した。

14B区 365SK：14B区南壁にかかる位置に検出できた土坑で、364SKより新しい。径1.60m、深さ0.45mをはかり、埋土は上層が炭化物を含む褐灰色粘土質シルトとにぶい黄橙色粘土質シルトの斑土、下層が黒褐色粘土質シルトである。土坑の北東肩部で516SK・517SK・552SKと重複する。南部系陶器の碗(E196)が出土した。

14B区 383SD：14B区南西側にある南北方向の溝で、幅0.25m～0.55mで東西にやや蛇行する。深さは0.20mをはかる。361SK・378SK～380SK・412SK・418SK・423SK・426SK・430SK・432SK・438SK～440SK・563SK～565SKなどと重複し、361SKより新しく、418SKより古い。埋土はにぶい黄褐色細粒砂と黒褐色細粒砂の斑土で、出土遺物には、土師器甕(E205)、灰釉陶器の碗(E206)、南部系陶器の碗(E207)がある。

14B区 418SK：14B区南西側で南壁にかかる位置に



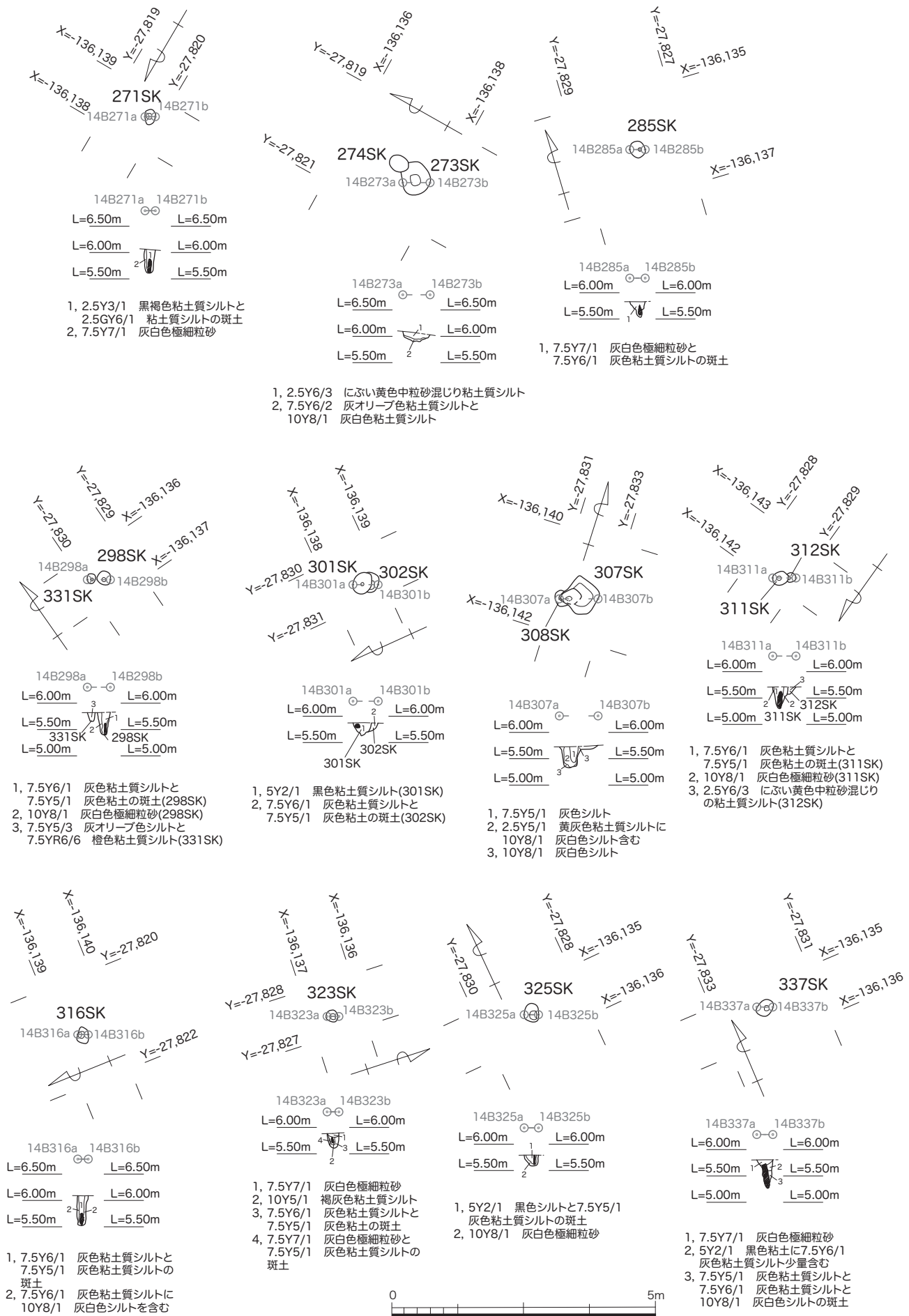


図 34 14B 区個別遺構図 7 (1 : 100)

第2章 遺 構

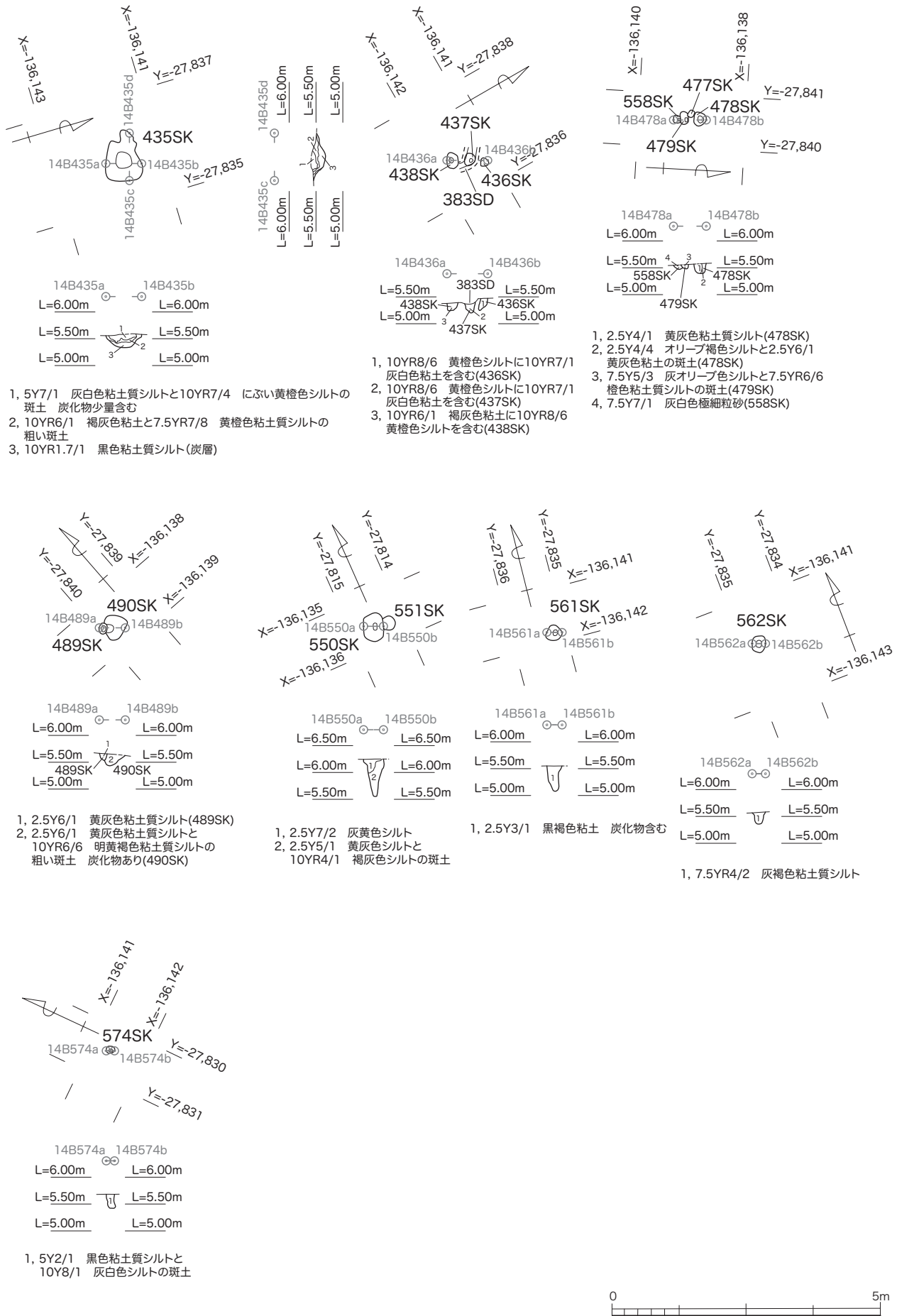


図 36 14B 区個別遺構図 9 (1 : 100)

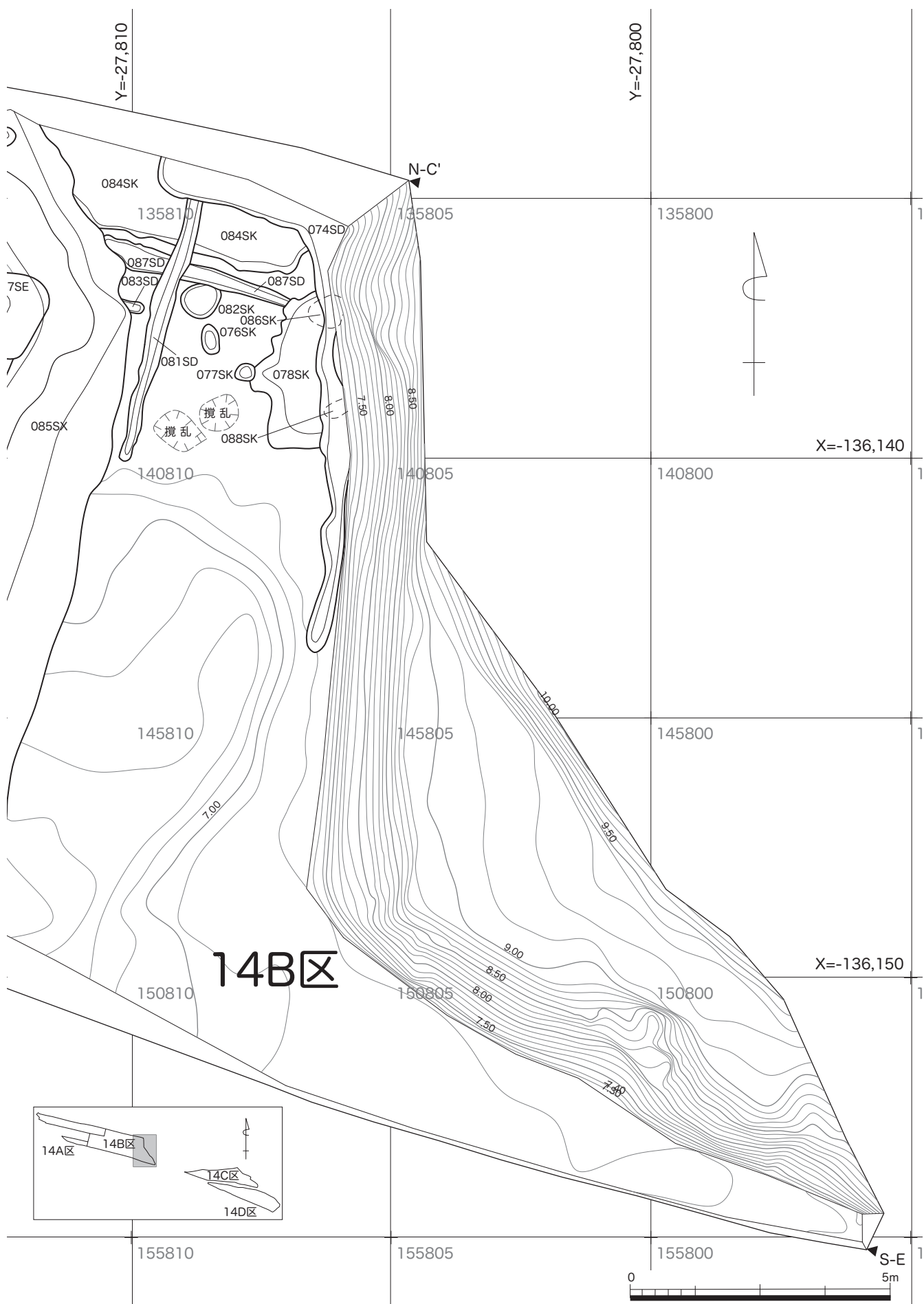


图 37 14B 区遺構平面図 4 (1 : 100)

検出された平面不整楕円形の土坑で、長径 3.20m 以上、短径 1.70m、深さ 0.11m をはかる。383SD・415SK・435SK～442SK、536SK・537SK などと重複し、堅穴建物の竈である 435SK や 383SD より新しい。埋土は明黄褐色中粒砂混じり粘土質シルトで、出土遺物には灰釉陶器の碗 (E216・E217) と南部系陶器の碗 (E218) がある。E218 の底部内面にみられる円形刻印は 383SD 出土の E207 の南部系陶器と類似し、E218 は 383SD と関連する可能性がある。

14B 区 420SK・480SK：14B 区南西側で確認できた土坑で、420SK の南辺から 034SD が伸びる。420SK の規模は長径 2.25m、短径 1.00m、深さ 0.04m、480SK は長径 1.05m、短径 0.80m、深さ 0.01m をはかり、埋土は 420SK が灰色極細粒砂、480SK が灰色粘土である。420SK が 443SK・472SK～476SK・477SK と、480SK が 477SK～479SK・481SK・482SK・558SK と重複する。二つの土坑は東西に隣接しており、本来は同一の遺構の可能性がある。

14B 区 495SD：14B 区南西隅部に検出できた平面不整楕円形の土坑で、長径 2.0m 以上、短径 0.60m、深さ 0.05m をはかる。埋土は灰白色極細粒砂で、出土遺物に南部系陶器の碗 (E232) がある。東南東にある 362SD と対応する溝になる可能性が高い。

江戸時代の遺構

14B 区 174SD：井戸の 177SE に伴う溝と考えられるもので、085SX の落ち込みに沿って南南西に流れる。検出できた遺構は長さ 5.5m 程で、幅 0.50m～1.00m、深さ 0.07m であった。177SE との関係は 177SE が 174SD より新しく、別の遺構の可能性もあるが、本来は掘削面が同じで 177SE に溜めた水を流す溝と考えられる。

14B 区 177SE：085SX より下層で黒褐色粘土や暗灰黄色粘土質シルト、にぶい黄色シルト、灰白色粘土質シルトなどの水田耕作土か湿地性堆積物と思われた地層の上から掘削されたもので、径 1.45m～1.65m の平面円形で、深さ 0.62m の断面掘り鉢形のものである。埋土は上層に灰黄色粘土質シルト、中層に黄灰色粘土質シルト、下層では炭化物層や黒褐色粘土が主体となる。下層からは南部系陶器の片口鉢Ⅱ類 (E152) や碗 (E147・E148)、小皿 (E146・E149・E151) が出土した。174SD が井戸の南から 085SX の落ち込みに沿って流れる。

近代以後の遺構

14B 区北東側の丘陵裾部に 14B 区西側に比べて一段高く形成された平坦部にある遺構群で、当初地山に形成された中世の遺構と考え調査したが、平坦部西側が 085SX として埋め立てた造成面であることが判明したことから、近代以後に丘陵裾部を削り出した際の造成

面と考えた。074SD は丘陵斜面からの流れ水の排水のためと考えられたが、その他の溝は、耕作に伴うものか、排水のためのものか、機能は不明である。土坑は丘陵の地山に近い黄橙色粘土の中で、にぶい黄橙色極細粒砂や灰黄色シルト、明黄褐色極細粒砂などの埋土のものを検出したもので、径 0.50m～1.30m の平面円形～楕円形の土坑を 18 基検出したが、近代以後の耕作などに関連するものである。出土遺物は古式土師器片から南部系陶器の碗と小皿、近代以後の磁器碗などの小片、ガラス瓶などまでが出土した。ここでは溝を中心に報告し、土坑では溝より古い落ち込み状の土坑を取り上げる。

14B 区 074SD：平坦部北東隅の丘陵裾部を鉤の手状に巡る幅 0.50m 前後、深さ 0.05m～0.15m の排水用の溝である。埋土は明黄褐色粘土質シルトと黄灰色粘土質シルトの斑土で、江戸時代後期以後の磁器で白色釉仏飯具 (E121) が出土している。

14B 区 075SD：平坦部西隅にある溝で、北北東から南南西に流れ、南側で西に折れる。080SD と 079SD より新しい。幅 0.50m 前後、深さ 0.08m 前後で、埋土は黄褐色極細粒砂である。

14B 区 079SD：平坦部北西側にある南南西から東南東に折れる溝で、幅 0.20m～0.30m、深さ 0.03m～0.08m である。埋土は灰黄色中粒砂と黄橙色粘土質シルトの斑土である。087SD に続く可能性がある。

14B 区 080SD：平坦部北側に西北西から東南東にのびる溝で、幅 0.25m、深さ 0.05m である。埋土は灰黄褐色粘質シルトである。079SD より新しいが、075SD と 090SD より古く、087SD に続く可能性がある。

14B 区 081SD：東西方向の溝 083SD と 087SD より新しい北北東より南南西にのびる溝で、幅 0.45m、深さ 0.05m 前後である。埋土は黄褐色極細粒砂で、古墳時代前期後半の古式土師器の高杯の脚部 (E122) が出土した。

14B 区 083SD：平坦部に 2.5m 程検出できた 079SD・080SD・087SD の南に並行する溝で、幅 0.25m、深さ 0.03m である。埋土は灰黄色中粒砂と黄橙色粘土質シルトの斑土である。

14B 区 087SD：平坦部北側にある西北西から東南東にのびる溝で、途切れてはいるが 079SD と 080SD と続く可能性がある。幅 0.25m～0.50m、深さ 0.05m である。丘陵裾部にある 078SK の落ち込みに続く可能性がある。

14B 区 090SD：平坦部西隅にある溝で、北北東から南南西に 5m 程検出できた。075SD・079SD・080SD・084SK・161SD より新しく、幅 0.50m～0.70m、深さ 0.18m で、埋土は黄灰色シルトである。

14B 区 158SD：平坦部北側に北北東から南南西にの

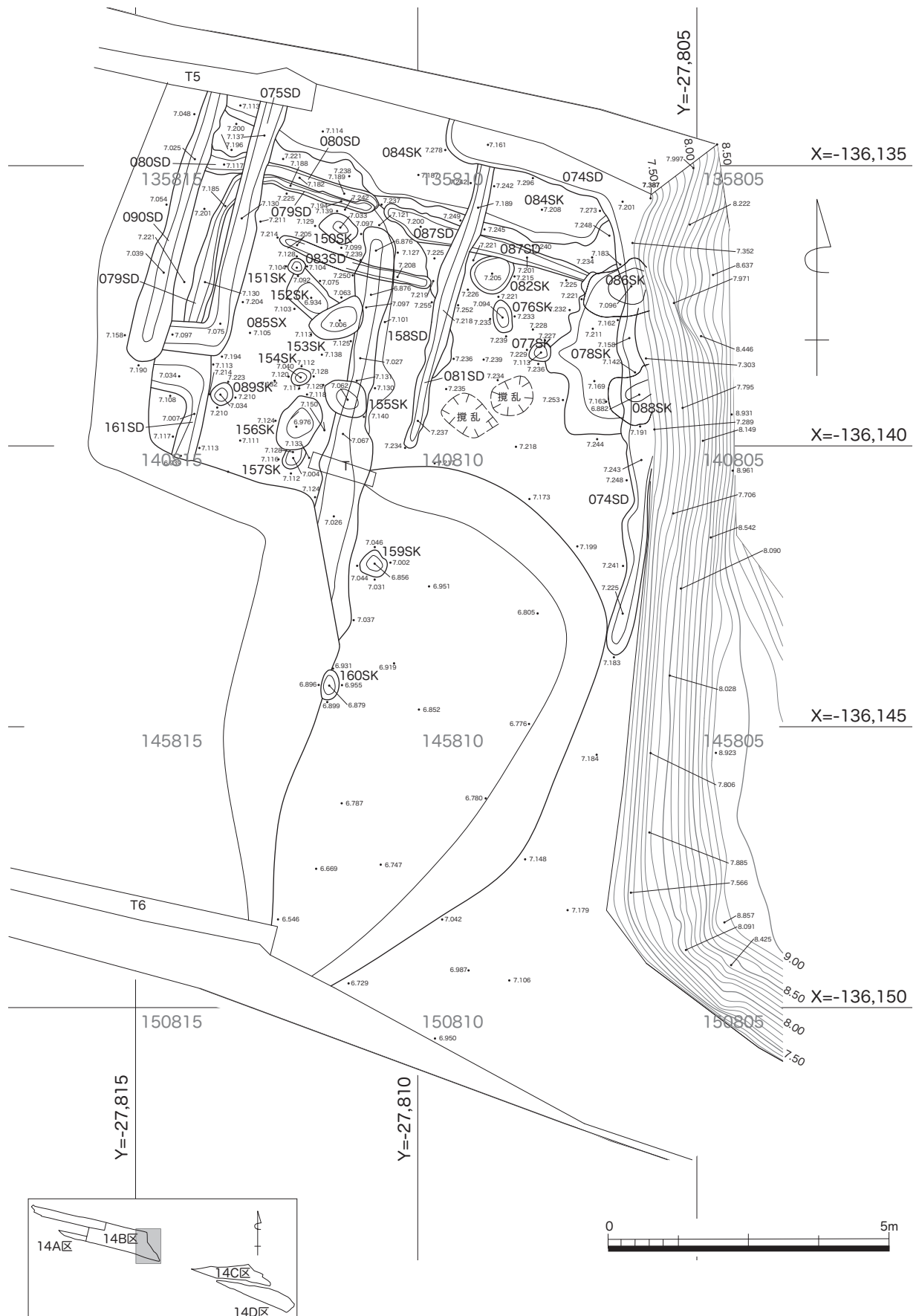


図 38 14B 区北東隅部上面遺構 (1 : 100)

びる溝で、調査区北側から5mほど離れて検出できた。幅0.50m～0.80m、深さ0.08mである。

14B区 161SD：平坦部西側隅に検出できた西北西から南南西に折れる溝で、幅0.50m～0.80m、深さ0.15mをはかる。埋土は黄褐色極細粒砂である。

14B区 078SK：平坦部東側の丘陵裾部にある落ち込み状土坑で、074SD・086SK・088SKより古い。南北3.0m、東西1.30m程の東側に深くなるもので、埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

14B区 084SK：平坦部北側で、調査区の北側外に広がる落ち込み状土坑で、耕作と関連するものと思われた。074SD・075SD・081SD・090SDより古く、東西7.0m、南北1.6mで北側がややくぼむ。埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。

14B区 085SX：平坦部の北西側で081SDより西側を埋め立てた遺構である。井戸の177SEとの断面では、158SDの下層で177SEを覆う部分である。埋土は均一ではないが、上部に明黄褐色、暗灰黄色、黄灰色、褐灰色、灰色の粘土質シルトが主体の斑土で下部に黒褐色シルトやにぶい黄色シルトの地層がみられた。出土遺物は古式土師器、南部系陶器、常滑産甕があるが、江戸時代の井戸と考えられる177SEを埋めるものなので、江戸時代後期以後の遺構と思われる。

第4節 14C区の遺構

14C区では、平安時代末～鎌倉時代と考えられる柱穴列3条、溝1条、土坑30基以上、江戸時代の自然流路1条、近代以後の整地層1基などがある（図39～図46、写真図版7）。土坑については、出土遺物の判明する主要なものを取り上げて報告する。

平安時代末～鎌倉時代の遺構

14C区 SA14：14C区西側の001SXの下に確認できた土坑で、003SK・007SK・117SKより新しいものを一つの柱穴列として、北から002SK、004SK、005SKを抽出した。規模は002SKが長径0.46m、短径0.25m、深さ0.22m、004SKが長径0.35m、短径0.31m、深さ0.19m、005SKが長径0.30m、短径0.21m、深さ0.17mをはかる。3基の土坑は1.0m～1.2mの間隔で並び、丘陵側にある002SKは掘削面が高く、それに合わせて底面の標高も少し高く、谷側になる004SKと005SKに少しずつ低くなる。埋土は、002SKがにぶい黄橙色粘土質シルトとにぶい黄褐色粘土質シルトの斑土、004SKが炭化物を含む黄褐色粘土質シルトとにぶい橙色極細粒砂の斑土、005SKが灰褐色粘土質シルトで、柱痕跡は確認できなかった。出土遺物はない。

14C区 SA15：14C区西側の001SXの下に確認できた柱穴列で、SA14とSA16と重複する。西より

025SK、030SK、118SK、006SKの東西4.2mの3間分が検出できた。柱間は西より1.6m、1.4m、1.2mで、柱穴列の軸線はN-82°-Wである。柱穴は残っているもので長径0.27m～0.60mの平面円形～楕円形のもので、深さ0.04m～0.16mのものがある。埋土は灰オリーブ色粘土（006SK）、褐色粘土質シルトとにぶい黄色粘土の斑土（025SK）、黄褐色粗粒砂と灰黄褐色粘土質シルトの斑土（030SK）、黄褐色粘土質シルト（118SK）にわかれる。柱痕跡は確認できなかった。北側や南側に組み合う柱穴列を確認できなかったが、SA16とは118SKで直行し、掘立柱建物になる可能性がある。出土遺物には006SKより南部系陶器が出土しており、この時期の遺構と考えられる。

14C区 SA16：14C区西側の001SXの下に確認できた柱穴列で、SA14とSA15と重複する。北より013SK、118SK、119SKの南北3.0mの2間分が検出できた。柱間は1.5mのほぼ等間隔で、柱穴列の軸線はN-8°-Eである。柱穴は残っているもので長径0.31m～0.49mの平面円形～楕円形のもので、深さ0.10m～0.23mのものがある。埋土は灰黄色シルト（013SK）、黄褐色粘土質シルト（118SK）、黄灰色粘土（119SK）にわかれる。柱痕跡は確認できなかった。西側や東側に組み合う柱穴列を確認できなかったが、SA15とは118SKで直行し、掘立柱建物になる可能性がある。出土遺物には013SKより南部系陶器が少数出土しており、この時期の遺構と考えられる。

14C区 003SK：14C区西側の001SXの下に確認できた土坑で、004SK・005SK・007SKより古く、117SKより新しい。平面形は隅丸台形、断面皿状のもので、規模は長径1.50m、短径1.15m、深さ0.29mをはかる。埋土は、灰黄褐色シルトとにぶい黄橙色粘土の粗い斑土、古式土師器片が少し出土した。

14C区 007SK：14C区西側の001SXの下に確認できた土坑で、002SK・004SK・005SKより古く、117SKより新しい。平面形はやや細い楕円形、断面丸底のもので、規模は長径1.40m、短径0.78m、深さ0.17mをはかる。埋土は、にぶい黄橙色シルトとにぶい黄橙色粘土の粗い斑土で、出土遺物はなかった。

14C区 020SK：14C区西側の001SXの北肩部に位置する。長径0.70m、短径0.37m、深さ0.09mの平面楕円形、断面丸底の土坑である。埋土は灰黄色粘土質シルトで、出土遺物には南部系陶器の碗（E295）がある。

14C区 021SK・022SK・024SK・026SK：14C区西側で001SXの下に検出できた平面円形の小型土坑で、長径0.40m前後、短径0.30m前後、深さ0.02m～0.19mである。埋土は021SKが褐灰色粘土質シルトと灰黄褐色シルトの斑土、022SKがにぶい赤褐色粗粒砂と灰黄褐色粘土の斑土、024SKが黄褐色粘土

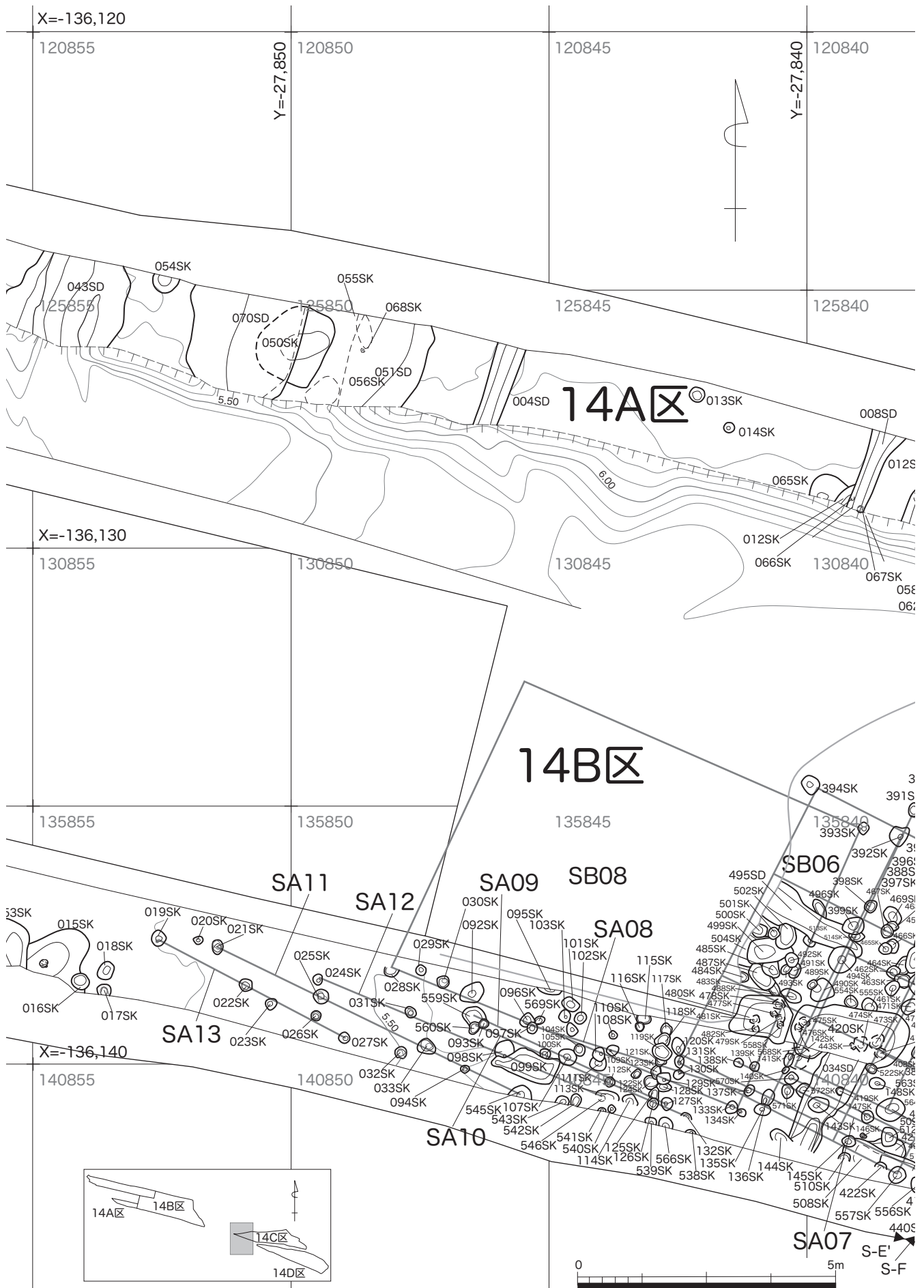


図 39 14C 区遺構平面図 1 (1 : 100)

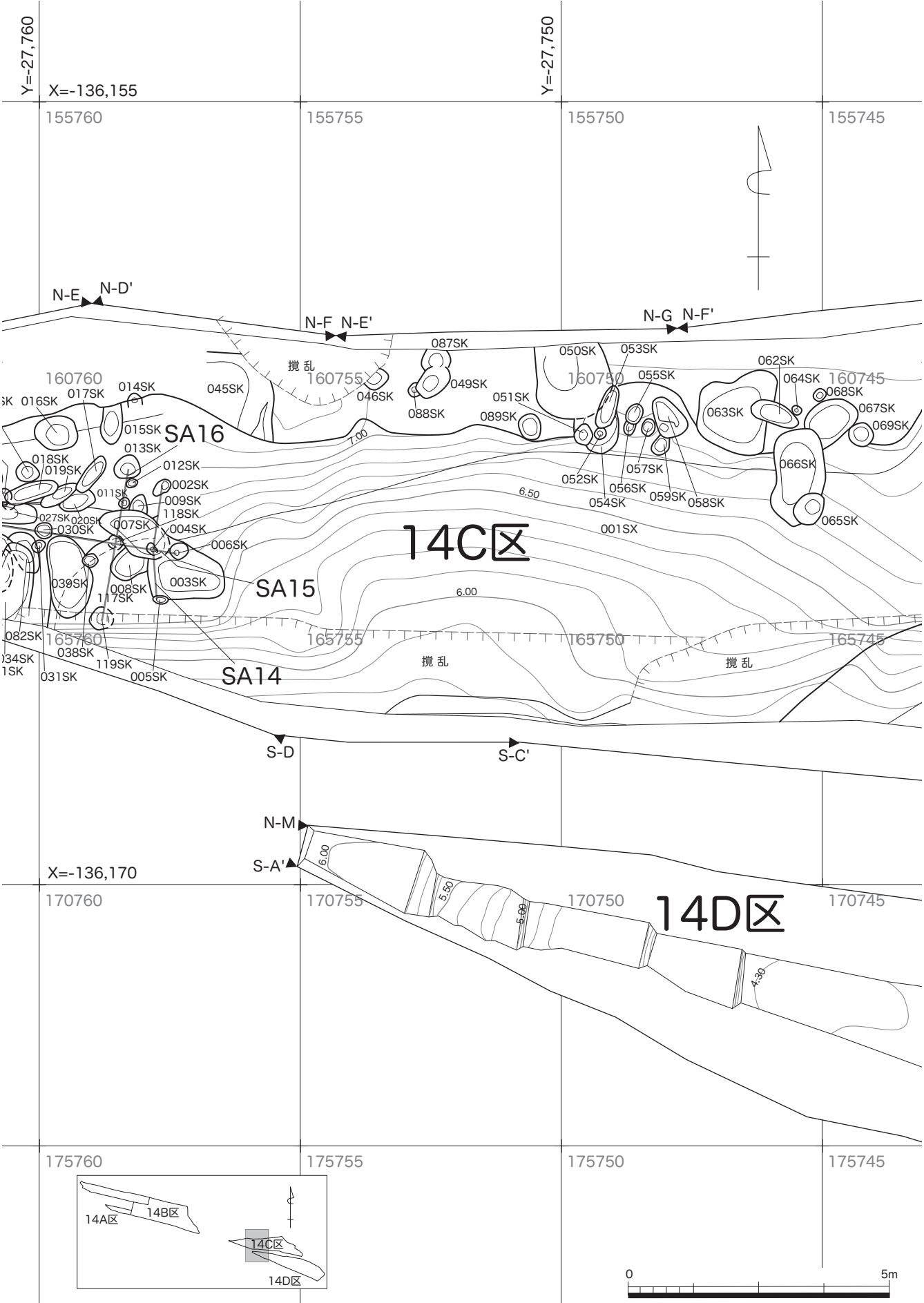
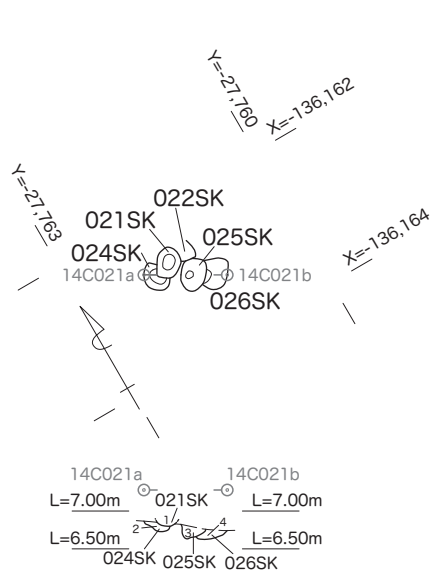
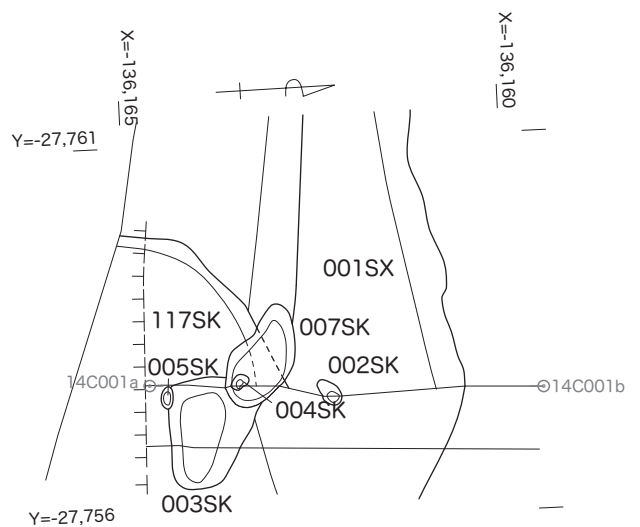


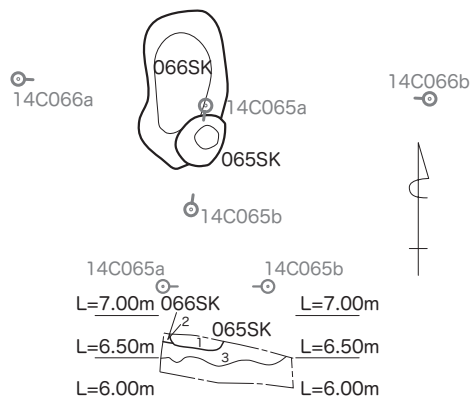
図 40 14C 区遺構平面図 2・14D 区遺構平面図 1 (1 : 100)



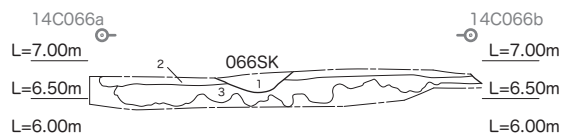
- 1, 10YR4/1 褐灰色粘土質シルトと
10YR5/2 灰黄褐色シルトの斑土(021SK)
- 2, 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトと
2.5Y6/3 にぶい黄色粘土の斑土(024SK)
- 3, 7.5YR4/4 褐色粘土質シルトと
2.5Y6/3 にぶい黄色粘土の斑土(025SK)
- 4, 7.5YR4/4 褐色粘土質シルトと
2.5Y6/3 にぶい黄色粘土の斑土(026SK)



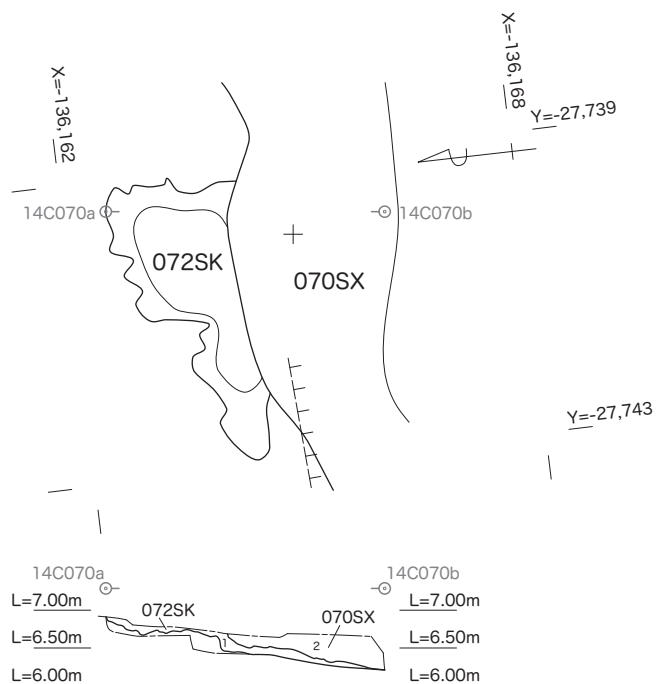
- 1, 2.5Y7/6 明黄褐色極細粒砂(001SX)
- 2, 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト(001SX)
- 3, 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(001SX)
- 4, 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土質シルトと2.5Y7/3 浅黄色粘土の斑土(001SX)
- 5, 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土質シルト10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの斑土(002SK)
- 6, 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトと7.5YR6/4 にぶい橙色極細粒砂の斑土 炭化物含む(004SK)
- 7, 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(005SK)
- 8, 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトと10YR7/3 にぶい黄褐色粘土の粗斑土(007SK)
- 9, 10YR6/2 灰黄褐色シルトと10YR7/4 にぶい黄褐色粘土の粗斑土(003SK)
- 10, 2.5Y6/2 灰黄色中粒砂と7.5Y7/1 灰白色粘土の斑土(117SK)
- 11, 2.5Y7/2 灰黄色粘土(地山)



- 1, 10YR5/1 褐灰色シルト(065SK)
- 2, 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂



- 1, 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂(066SK)
- 2, 10YR5/8 黄褐色粘土
- 3, 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトと5Y8/2 灰白色粘土と
10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトの斑土



- 1, 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土(072SK)
- 2, 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト(070SX)



図 41 14C 区個別遺構図 1 (1 : 100)

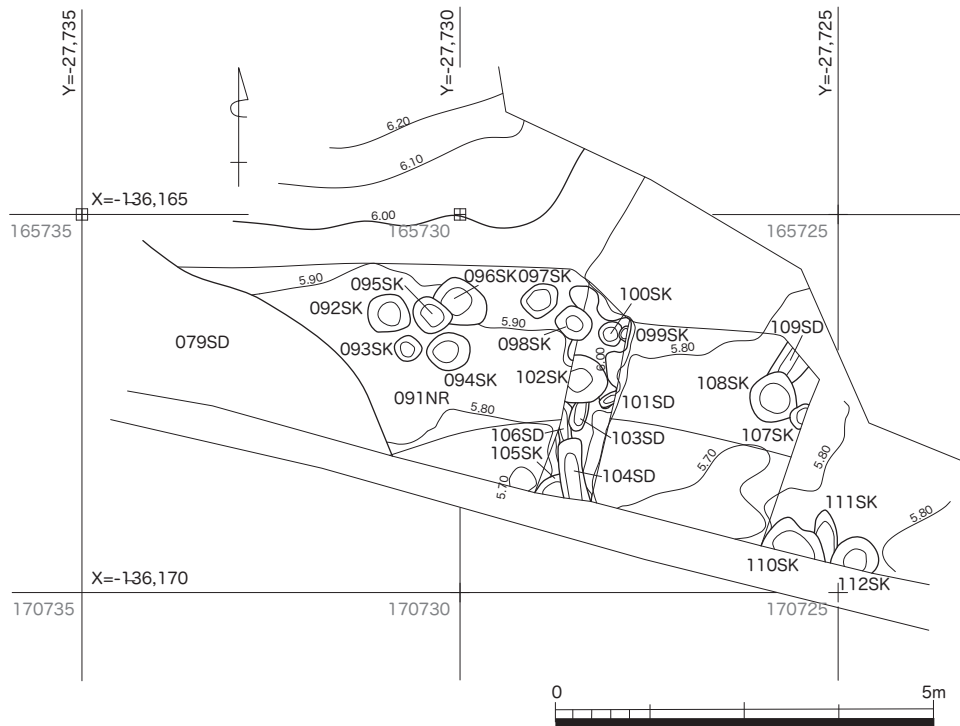


図 42 14C 区 091NR 上面検出の土坑 (1 : 100)

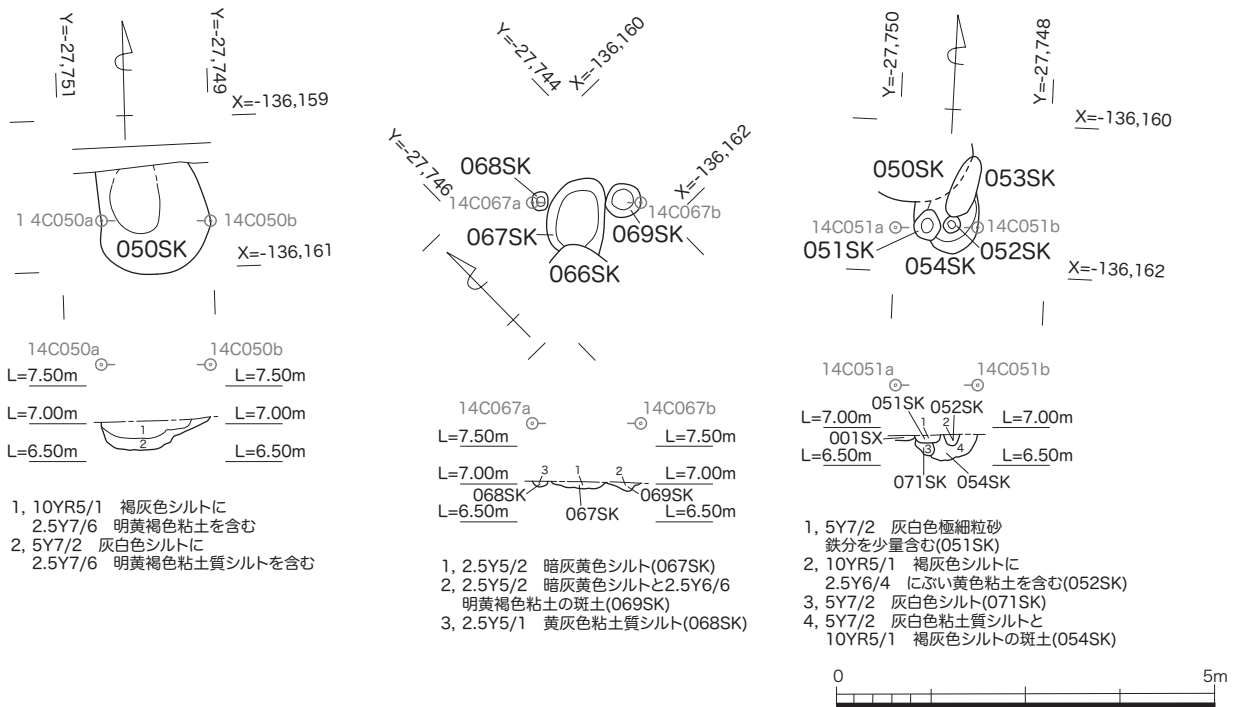


図 43 14C 区個別遺構図 2 (1 : 100)

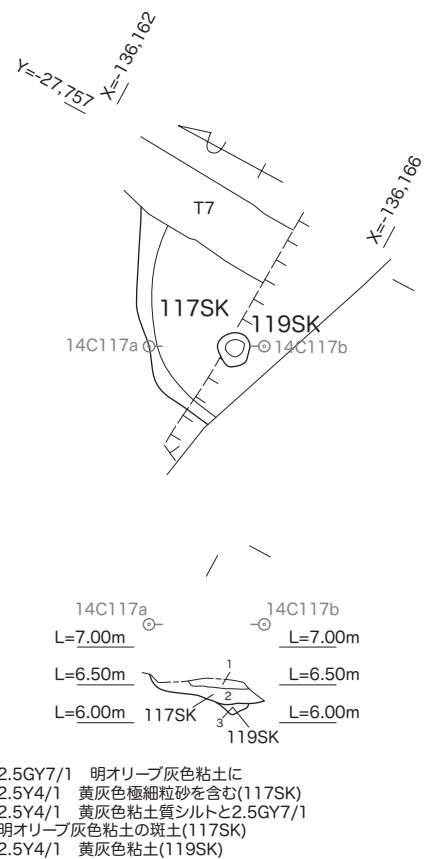
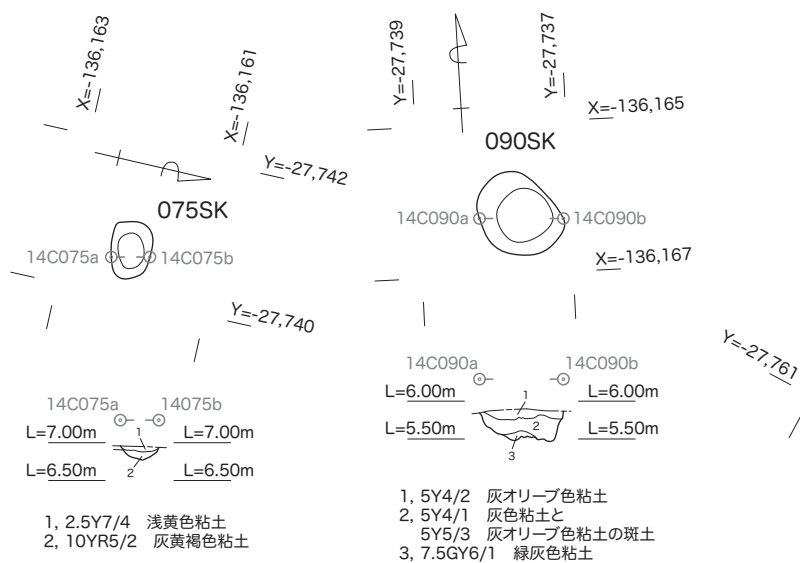
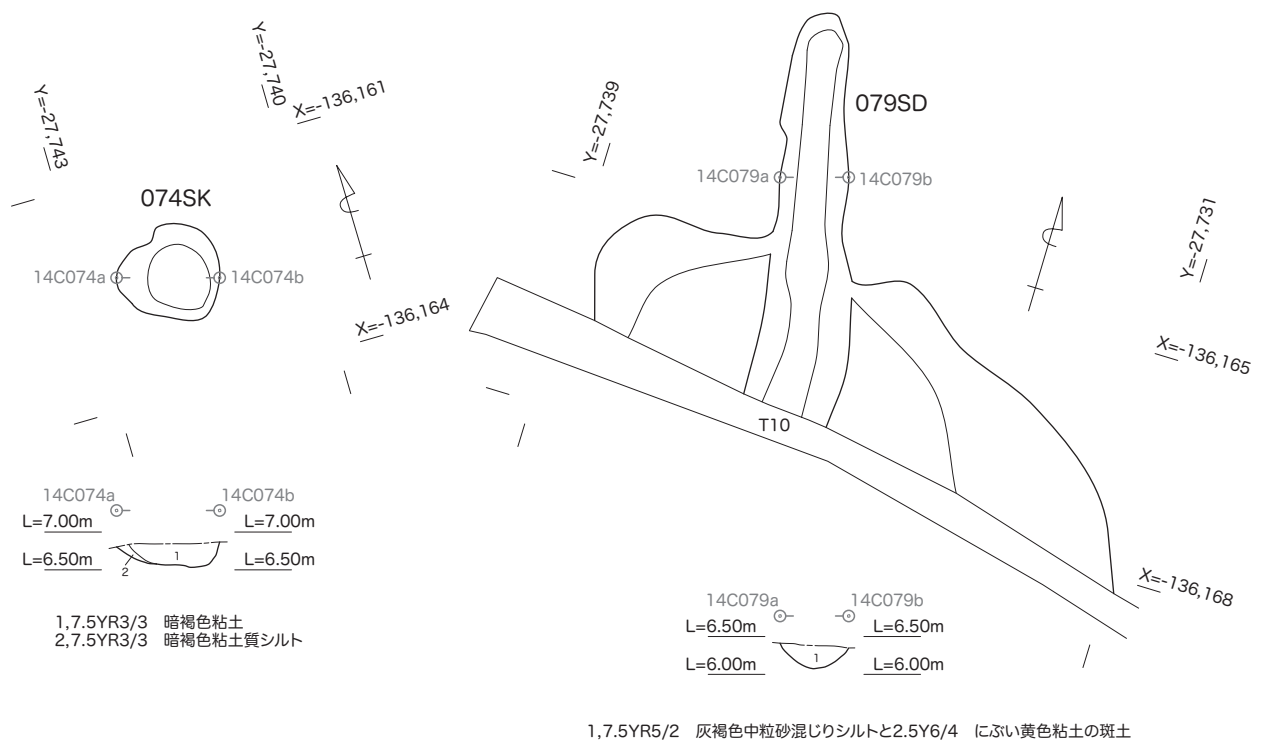


図 44 14C 区個別遺構図 3 (1 : 100)

質シルトとにぶい黄色粘土の斑土、026SKが褐色粘土質シルトとにぶい黄色粘土の斑土で、出土遺物には021SK・024SK・026SKより南部系陶器の甕などが出土した。これらはSA15の025SKとも重複する位置にあり、数時期の遺構変遷が認められる。全体に遺構の深さが浅いことから、001SXに伴い、遺構の上部が削平されている可能性が高い。

14C区 027SK：14C区西側の001SXの下に検出できた平面長い楕円形の土坑で、長径1.17m、短径0.41m、深さ0.22mで、埋土は灰黄褐色中粒砂と明黄褐色粘土の斑土である。出土遺物には南部系陶器の碗(E296)がある。

14C区 028SK：14C区の西側の001SXの北に確認された平面円形の土坑で、長径0.45m、短径0.37m、深さ0.08mをはかる。埋土は灰白色粘土質シルトと灰黄褐色シルトの斑土で、出土遺物には南部系陶器の碗(E297)がある。

14C区 034SK：14C区西側の001SXの下に検出できた平面楕円形の土坑で、長径1.49m以上、短径0.87m、深さ0.05mをはかる。032SKより古く、035SK・080SK～082SKより新しい。折戸53号窯式の灰釉陶器の碗(E298)があり、10世紀後半の遺構の可能性が高い。

14C区 039SK：14C区西側の001SXの下にて検出できた平面楕円形の土坑で、長径1.58m、短径0.79m、深さ0.03mをはかる。遺構の上部は001SXにより削平されている可能性が高い。埋土は灰黄色シルトで、出土遺物には灰釉陶器の碗(E300)、南部系陶器の甕(E299)がある。

14C区 045SK：14C区西側で、南側を001SXに切られて検出できた隅丸方形の土坑で、長径1.65m以上、深さ0.34mの大型の土坑で、埋土は明黄褐色粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

14C区 079SD：14C区東側で001SX・070SXの下に検出できた自然流路で、北側の丘陵から流路が派生する部分では幅0.80m前後の溝状を呈しており、南側で未広がりになる。090SKより古く091NRより新しい、出土遺物には古式土師器の台付甕(E301)と南部系陶器の碗(E302)・甕などがある。埋土は上層が灰褐色粘土質シルト、中層が褐灰色粘土質シルト、下層がにぶい黄色粘土から灰オリーブ色粘土が堆積していた。

14C区 090SK：14C区東側の070SXの下で079SDの上面にて検出できた平面円形の土坑で、長径1.22m、短径1.00m、深さ0.39mをはかる。埋土は上層が灰オリーブ色粘土、中層が灰色粘土と灰オリーブ色粘土の斑土、下層が緑灰色粘土で、出土遺物には南部系陶器の碗(E303)がある。

14C区 091NR：14C区東側で070SXの下に確認し

た自然流路で、079SDより古い。北側の丘陵から湧水が現在もあり、灰黄褐色粘土質シルトとにぶい黄褐色粘土質シルトの互層に堆積していた。古式土師器の台付甕(E304)と高杯(E305)の出土が目立ったが、14C区東隅部の北壁沿いで灰釉陶器や南部系陶器の小片が出土した。091NRの下からも古式土師器が出土することから、丘陵地山面にある古墳時代前期以後の自然流路の一部と考えた方がよいものと思われる。14C区東側では、南にある農業用水路の安全確保のために、遺構の底面である地山面を確認できていない。また、091NRの調査にあたり、091NR上面から掘り込みのある平面円形～楕円形の土坑20基程(094SK～100SK・102SK・107SK・108SK・110SK～112SK・121SK～124SK・126SK)や小溝4条(101SD・103SD～106SD・109SD)が検出できた(図42)。埋土は黄灰色・暗灰黄色・褐灰色の粘土質シルトを主体とし、規模は長径0.30m～0.70m前後である。出土遺物には095SKより南部系陶器の甕、100SKより灰釉陶器の碗(E306)、102SKより古式土師器の壺(E307)、104SKより古式土師器、110SKより古式土師器と南部系陶器の甕、111SKより古式土師器、灰釉陶器の碗(E308)、南部系陶器が出土しており、調査当初に091NRから出土した灰釉陶器や南部系陶器の破片は、このような091NRの上面に形成された遺構に伴うものであった可能性が高い。以上のことから、091NRは古墳時代前期以後で中世以前の自然流路と考えられる。

14C区 116SK：14C区西側で、001SXの北肩部にかかる位置で検出できた平面円形の土坑で、規模は長径0.23m、短径0.19m、深さ0.30mの柱穴状の形態である。埋土は褐灰色粘土質シルトで、南部系陶器の小皿(E309)が出土した。

14C区 117SK：14C区西側で001SXの下に検出できた土坑で、003SK～005SK・007SKより古い。平面形は円形、断面皿形で、南側を新しい落ち込みにより削平されている。規模は径2.1m以上で、深さ0.39mをはかる。埋土は灰黄色中粒砂と灰白色粘土の斑土で、古式土師器、南部系陶器、伊勢型鍋の破片が少数出土した。

14C区 119SK：14C区西側で117SKの下にて検出できた平面円形の土坑、長径0.45m、短径0.43m、深さ0.12mをはかる。埋土は黄灰色粘土で、出土遺物はなかった。この土坑の存在から、001SXの下で確認された柱穴状土坑には、複数の時期が存在することがわかる。

鎌倉時代～江戸時代の遺構

14C区 065SK・066SK：14C区中央部北側で、001SXの下にて検出できた土坑で、065SKが平面円形、

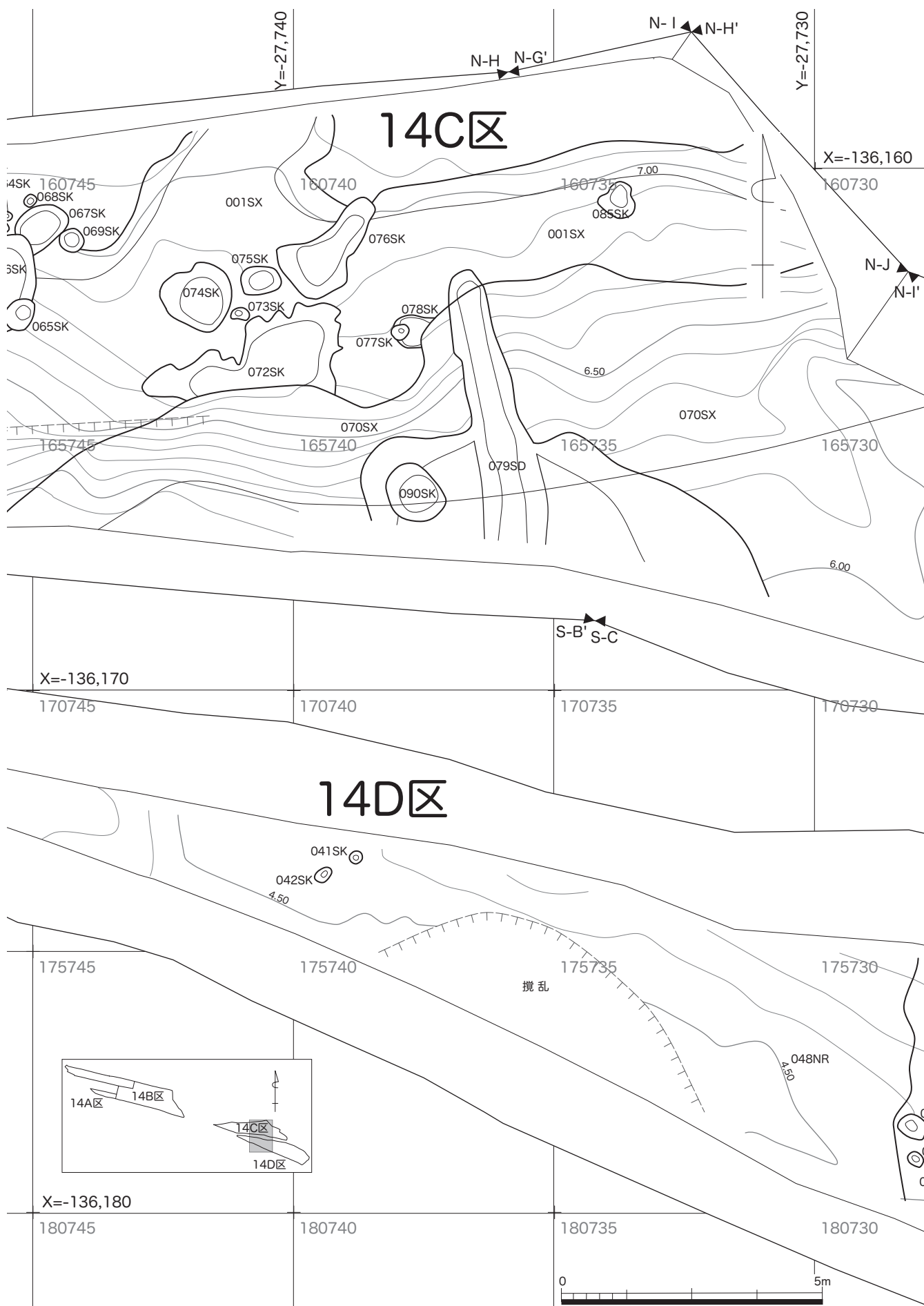


图 45 14C 区遺構平面図 3・14D 区遺構平面図 2 (1 : 100)

066SK が平面楕円形で、どちらも断面丸底のものである。規模は 065SK が長径 0.67m、短径 0.51m、深さ 0.11m、066SK が長径 1.90m、短径 0.95m、深さ 0.27m で、埋土は 065SK が褐灰色シルト、066SK が灰黄褐色極細粒砂であった。この土坑の下には黄褐色粘土、明黄褐色粘土と黒褐色粘土質シルト、灰白色粘土の斑土の落ち込みがみられ（図 41）、この落ち込み部分は南にある 070SX の下層にあたる可能性がある。066SK より南部系陶器と北部系陶器、常滑産甕が出土しており、14C 区西側の遺構群より新しい時期のものと考えられる。

14C 区 070SX：14C 区南東側で、001SX の下にて確認された自然流路の可能性のある遺構で、埋土は一律ではないが、上層が黄灰色粘土質シルト、下層が暗灰黄色粘土質シルトや灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物に南部系陶器と北部系陶器、常滑産甕が出土しており、14C 区西側の遺構や 091NR の上面にて検出された遺構より新しい時期のものと考えられる。

14C 区 072SK：14C 区中央部で 001SX の下にて検出できた不定形な遺構で、東西 3.8m、南北 1.6m の範囲が検出できており、南側は 070SX の下に重複していたので、070SX の下層にあたる可能性が高い。埋土はにぶい黄色粘土であり、14C 区北壁にみられる灰オリーブ色粘土と対応する地層の可能性が高い。灰釉陶器片 2 点と常滑産甕片 1 点が出土している。

14C 区 074SK：14C 区東側で、001SX の下にて検出できた平面円形、断面丸底の土坑で、長径 1.34m、短径 1.27m、深さ 0.27m をはかる。埋土は暗褐色粘土で、常滑産甕片 1 点が出土している。周辺にある 073SK や 075SK、076SK は埋土は異なるが、072SK を含めて 070SX から続く落ち込み状の土坑と考えられる。

近代以後の遺構

14C 区 001SX：14C 区北西側の旧水田耕作土下にて確認できた整地層と思われる遺構で、出土遺物には須恵器の甕（E291）、灰釉陶器の碗（E281）、南部系陶器の碗（E282）、小皿（E283・E284）、三筋壺（E285）、片口・片口鉢（E286～E290）、碗の重ね焼き失敗品（E292）、常滑産甕（E293・E294）などがある。丘陵側の東西 38.5m 以上にわたって広がり、遺構の下面は中世以前の遺構や地山の削平を伴う可能性がある。埋土全てが一律ではないが、上層が明黄褐色極細粒砂、中層がにぶい黄褐色シルト、下層がにぶい黄色シルトと赤みのある地層から地山に近い黄色みのある地層に変化していた。中世の遺物を多く含み、現代の地形と直接関わるものであることから、江戸時代後期～近代以後の遺構と考えられる。

14C 区 050SK：14C 区中央部の北壁にかかる位置で検出できた楕円形の土坑で、長径 1.70m 以上、深さ

0.39m をはかる。埋土は上層が明黄褐色粘土、下層が灰黄色粘土質シルトと浅黄色粘土の斑土で、出土遺物はなかった。

第5節 14D 区の遺構

14D 区では、古墳時代前期の掘立柱建物 1 棟、平安時代末～鎌倉時代と考えられる自然流路 2 条、土坑 1 基などがある（図 40・図 45～図 49、写真図版 8）。

古墳時代前期の遺構

14D 区 SB09：14D 区中央部にある桁行 2 間、梁行 1 間の東西棟の側柱建物跡で、規模は、桁行 4.2m、梁行 3.8m の小型の建物である。北側柱穴は西から 052SK、051SK、026SK、南側柱穴は西から 046SK、045SK、044SK で、南側柱穴は調査区南壁にかかって検出されたものである。柱穴は長径 0.18m～0.26m の平面円形から楕円形で、深さは遺構検出面より 0.17m～0.60m 程で、北側柱穴の 026SK と 051SK には柱材が遺存しており、052SK には柱材の痕跡を確認できた。柱穴の埋土は灰色粘土質シルトのもの（026SK）、炭化物を含む灰色極細粒砂と灰色粘土質シルトの斑土のもの（051SK）、灰オリーブ色粘土質シルトに褐灰色極細粒砂と灰色粘土質シルトの斑土の柱痕跡があるもの（052SK）、黒褐色粘土質シルトとにぶい黄色細粒砂混じり粘土の斑土のもの（044SK～046SK）があった。出土遺物は 026SK より土師質の土器片が出土しているが、026SK の出土木材の AMS 放射性炭素年代測定の結果は 137～259calAD であったことから、SB09 は古墳時代前期の松河戸 2 式の古式土師器に伴うものと考えられる。また、SB09 の北に古式土師器片が出土する 028SK と 031SK がある。028SK は平面不整楕円形で、長径 0.66m、短径 0.44m、深さ 0.12m のもので、埋土は灰色粘土である。031SK は平面円形で、長径 0.30m、短径 0.24m、深さ 0.06m のもので、埋土は灰白色粗粒砂である。この 2 基の土坑は、平安時代末から江戸時代後期以後の遺構の可能性もあるが、SB09 に伴う可能性もある。

平安時代末～鎌倉時代の遺構

14D 区 024SK：14D 区中央部に検出できた平面不整楕円形の土坑で、長径 0.72m、短径 0.45m、深さ 0.13m をはかる。埋土は上層が灰色粘土質シルト、下層が灰色粘土であった、柱痕跡などは確認できなかった。南部系陶器の小碗（E325）が出土したが、より上層の江戸時代以後の遺構の可能性が高い。

14D 区 047NR：14D 区東側にて検出した自然流路で、江戸時代後期以後の旧水田耕作土と思われる地層を検出 1 にて掘削した下にある。流路は北から南東に下がる傾斜をしており、南壁の断面によると、検出した東

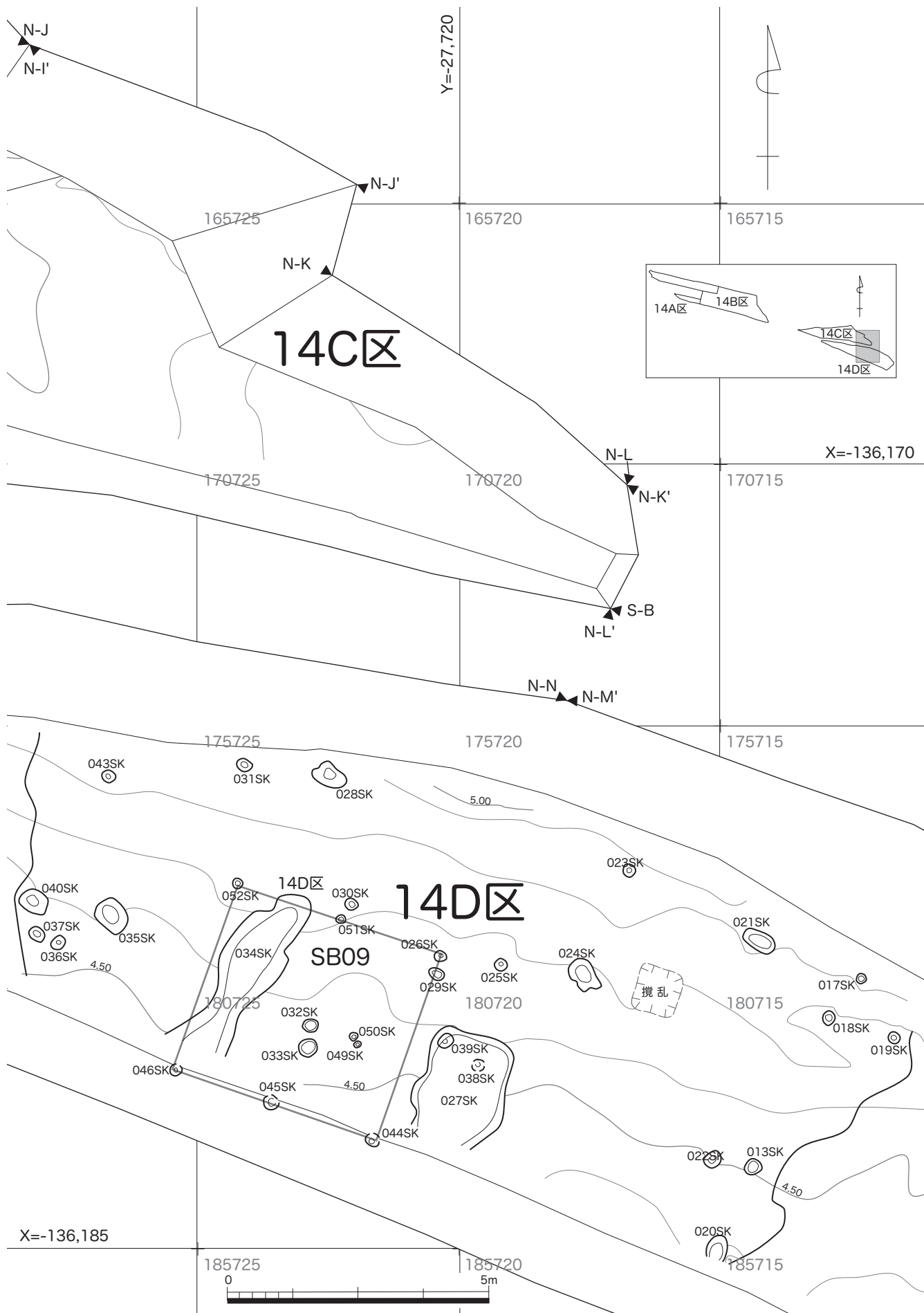


図 46 14C 区遺構平面図 4・14D 区遺構平面図 3 (1 : 100)

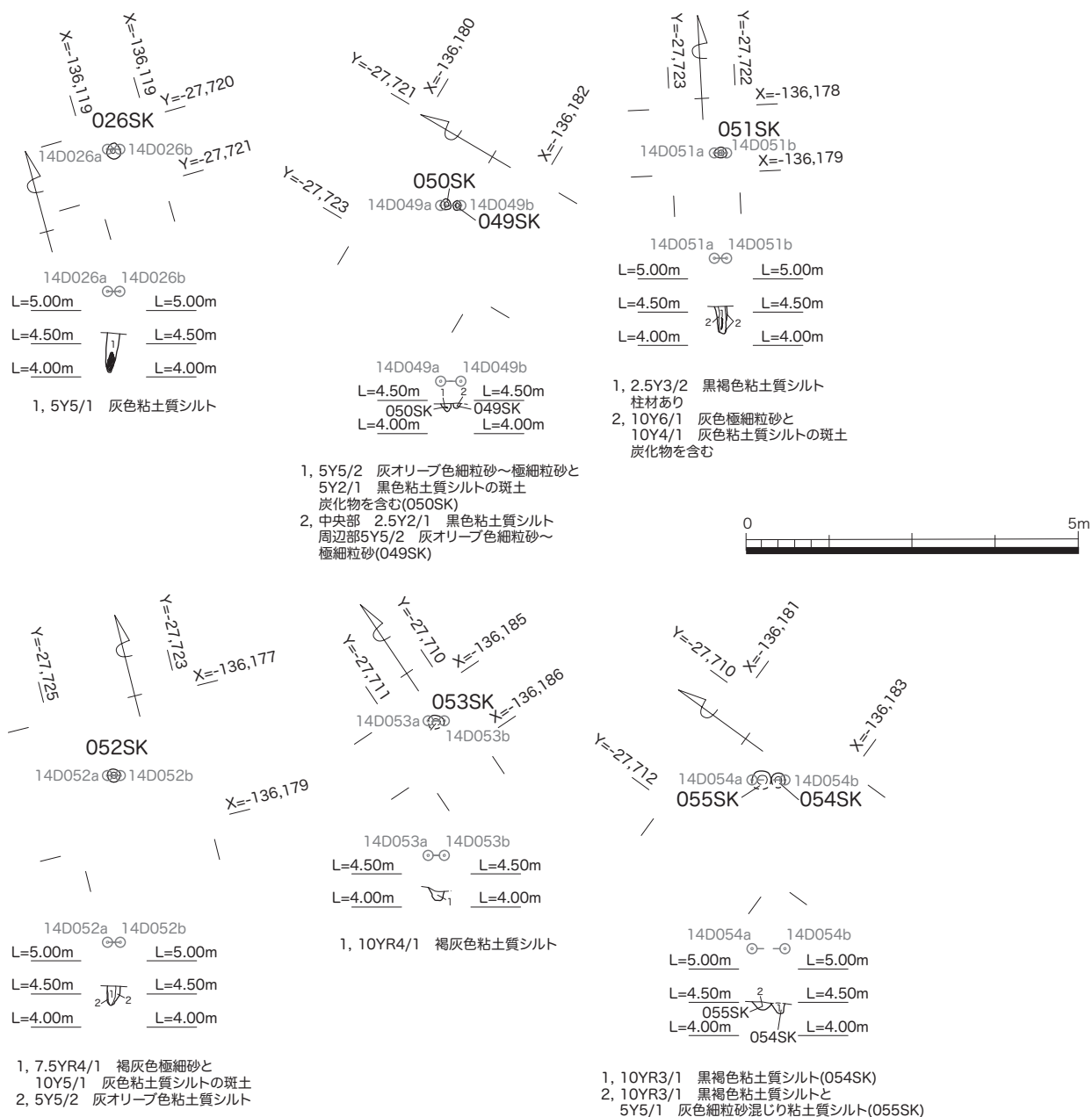


図 47 14D 区個別遺構図 (1 : 100)

西 10.5m の範囲より西に広がる。埋土は上層が灰色粘土質シルトや黄灰色粘土質シルトで、下層がオリブ灰色極細粒砂であった。出土遺物の大部分は古式土師器 (E326・E327) であるが、少数の灰釉陶器片や南部系陶器の小皿 (E328) が出土したことから、平安時代末～鎌倉時代初頭頃には埋没している可能性が高い。

14D 区 048NR : 14D 区西側にて検出した自然流路で、江戸時代後期以後の旧水田耕作土 (検出 1) の下で 047NR より古く、東西 18.0m を確認できた。流路は北から南西方向に落ち込んでおり、埋土は東から西に堆積していた。上層は褐灰色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルトで、下層は灰色極細粒砂や褐灰色細粒砂混じり粘土質シルト、緑灰色シルト混じり細粒砂であった。流路を覆う地層では灰釉陶器や南部系陶器が出土したが、この流路からは古式土師器のみが出土した。

江戸時代の遺構

047NR 上面にて検出された土坑 : 001SK ～ 009SK・011SK・012SK・014SD・015SK・016SK がある。これらの土坑からは古式土師器や須恵器が出土するもの (005SK・007SK・016SK) と、南部系陶器が出土するもの (003SK・004SK・011SK・014SD) がある。また 14D 区南東隅の 047NR の上から掘り込みのある 011SK・016SK では、スギの木材が出土した。この木材の AMS 放射性炭素年代測定の結果では、766 ～ 885calAD の結果が得られた。

14D 区 027SK : 14D 区中央部南壁にかかる位置で検出できた浅い土坑で、平面隅丸長方形のものである。長径 2.08m 以上、短径 1.82m、深さ 0.08 で、埋土は灰色極細粒砂で、上層からの影響を受けたと思われる鉄分がみられた。古式土師器片とともに南部系陶器片

が出土しており、中世から江戸時代後期以後の遺構と考えられる。また土坑内に灰色粘土質シルトの埋土である 038SK と灰色極細粒砂の埋土である 039SK を検出した。038SK は長径 0.23m、短径 0.22m、深さ 0.27m、039SK が長径 0.31m、短径 0.25m、深さ 0.13m をはかり、比較的深いことから、古い時期の土坑になる可能性もある。

14D 区 034SK：14D 区中央部南壁にかかる位置で検出できた浅い溝状の土坑で、平面長楕円形のものである。長径 3.52m 以上、短径 1.18m、深さ 0.05m で、埋土は灰色細粒砂混じり粘土質シルトで、上層からの影響を受けたと思われる鉄分がみられた。南部系陶器片が出土しており、中世から江戸時代後期以後の遺構と考えられる。

14D 区 035SK：14D 区中央部にて検出できた平面楕円形の土坑で、長径 0.71m 以上、短径 0.59m、深さ 0.11m で、埋土は灰色粘土質シルトである。古式土師器片と南部系陶器片が出土しており、中世から江戸時代後期以後の遺構と考えられる。

14D 区 043SK：14D 区中央部にて検出できた平面円

形の小土坑で、長径 0.27m 以上、短径 0.23m、深さ 0.05m で、埋土は灰色粘土質シルトである。南部系陶器片が出土しており、中世から江戸時代後期以後の遺構と考えられる。

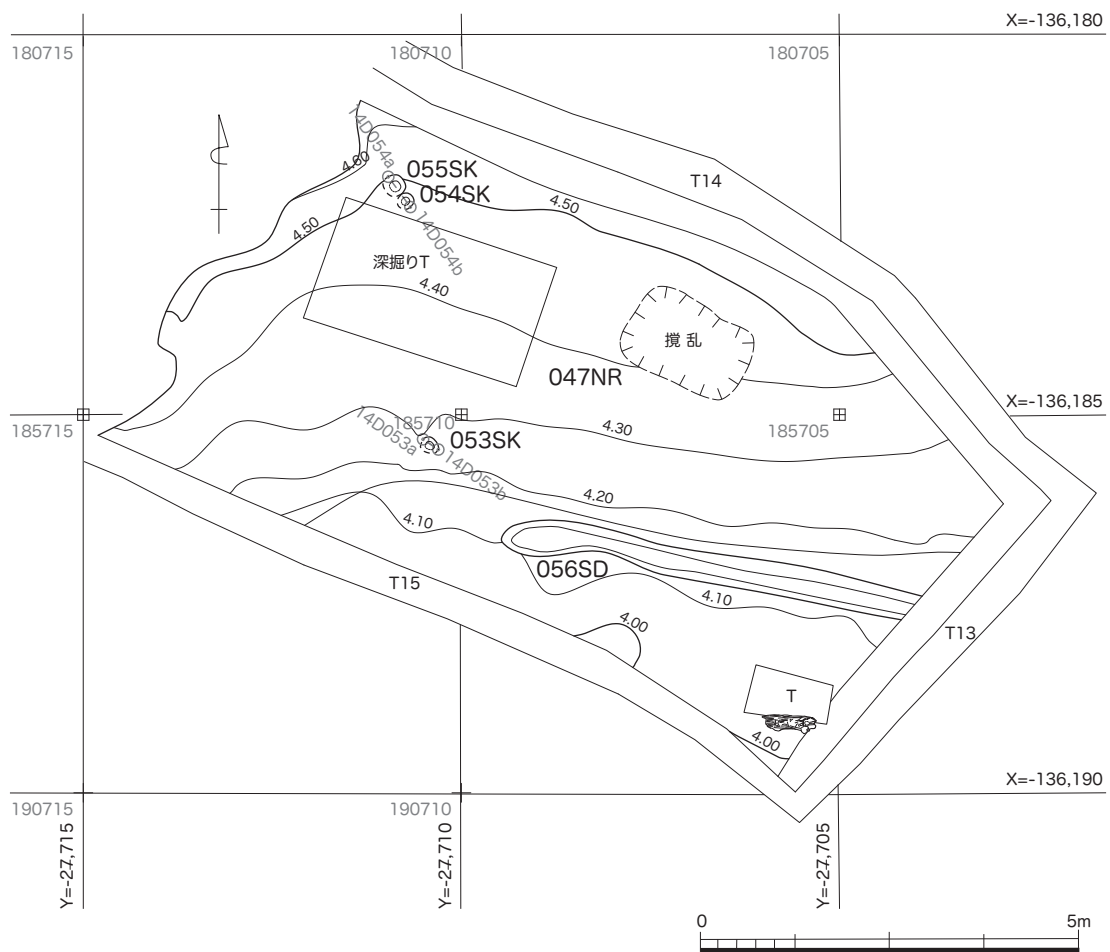


図 48 14D 区 047NR (1 : 100)

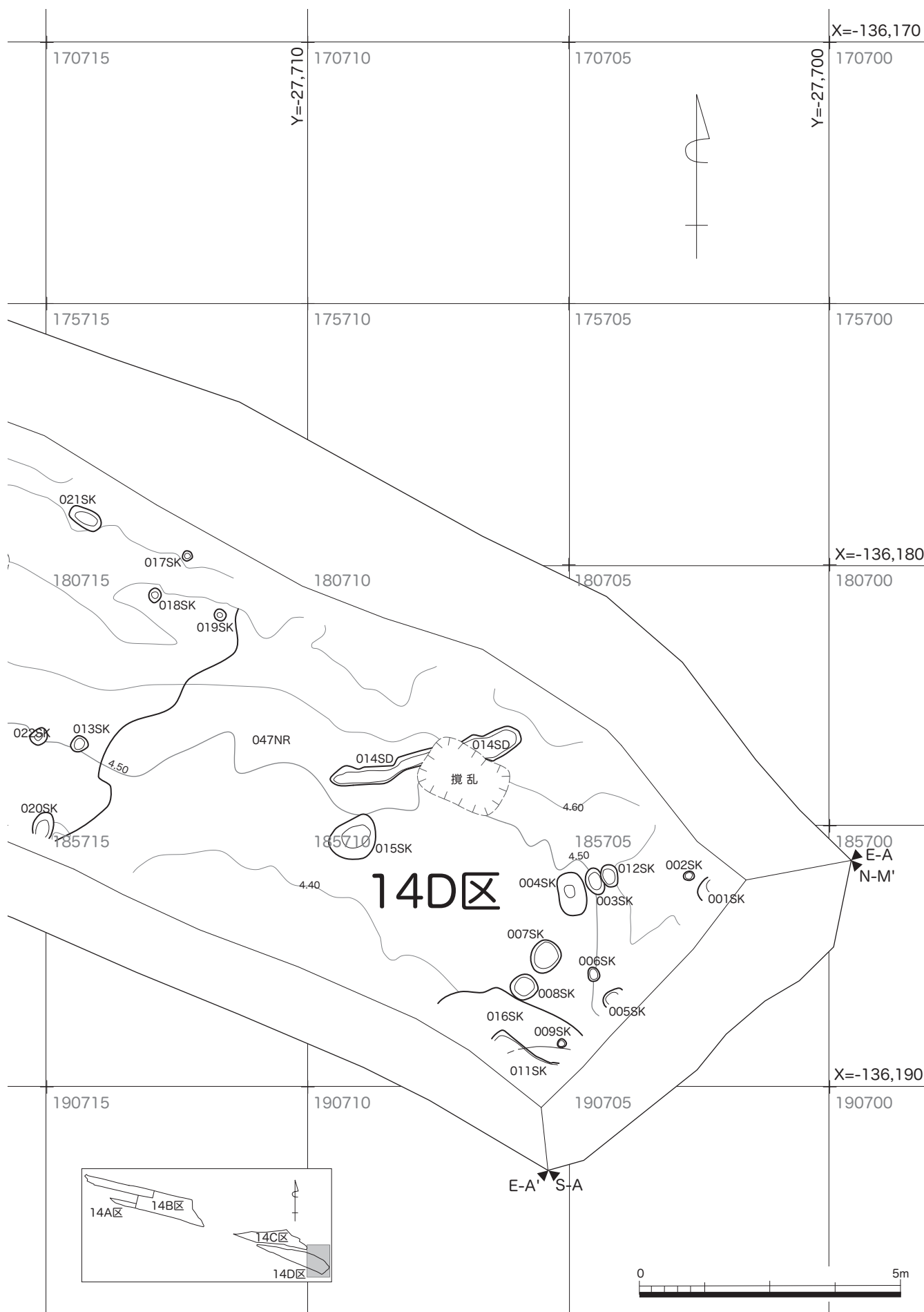


図 49 14D 区遺構平面図 4 (1 : 100)

第3章 出土遺物

第1節 遺物整理の方法と分類

今回の発掘調査では、コンテナに29箱の出土遺物があり、平安時代末から鎌倉時代にかけてのものを中心に弥生時代から近代にかけてのものがある。出土遺物は、土器・陶磁器、石製品、鉄製品、木製品があり、これらの分類の後、不完全ではあるが発掘調査でみつかった遺構の時期や性格を考えるために、土器・陶磁器では、弥生土器、古式土師器（古墳時代前期のもの）、須恵器（古墳時代中期～平安時代の陶器）、古代土師器（古墳時代中期～平安時代のもの）、灰釉陶器（灰釉が施された陶器）、南部系陶器（瀬戸地域、猿投地域、知多地域、渥美地域などで焼成された焼き締め陶器）、北部系陶器（美濃地域で焼成された焼き締め陶器）、中世土師器皿類、中世土師器鍋類、古瀬戸陶器（鎌倉時代～室町時代に瀬戸地域で焼成された施釉陶器）、大窯陶器（戦国時代に瀬戸地域で焼成された施釉陶器）、常滑産甕（知多地域で焼成された甕で、報告書の記述の中では南部系陶器に含んでいる）、青磁、白磁、近世陶磁器、近代・現代陶磁器、いぶし瓦に分類し、それらの出土破片点数を各遺構・出土層位毎にカウントした（添付CDに掲載してある表「権六遺跡遺物出土状況」を参照）。

その結果、時期の判明するものは、弥生土器2点、古式土師器1,204点、須恵器282点、古代土師器33点、製塩土器2点、灰釉陶器107点、南部系陶器3,572点、北部系陶器5点、青磁19点、白磁2点、中世土師器皿類110点、中世土師器鍋類512点、古瀬戸陶器4点、大窯陶器8点、常滑産甕887点、近世陶磁器68点、いぶし瓦10点などが確認できた。出土遺物の構成では平安時代末～鎌倉時代の南部系陶器が全体の52.3%と半分を占め、常滑産甕13.0%、中世土師器鍋類7.5%、中世土師器皿類1.6%と併せて、その時代が当遺跡の中心であることを示す。灰釉陶器1.5%もこの中心の時期と関連する可能性が高い。また古墳時代前期後半の古式土師器が16.7%、古墳時代後期～白鳳時代の須恵器が4.1%と比較的多数出土している。これらのほとんどは流路や整地層の遺構・地点などから出土しているが、明確な遺構が少なく、古墳時代の遺構が調査地を含めた丘陵側に存在したことを反映している。

次節以後に遺構・出土地点毎に出土遺物の記載をするが、法量と残存率、色調、胎土の状況、個別の型式などは、添付CDに掲載してある表「権六遺跡登録遺物一覧」を参照して下さい。

尚、本報告の出土遺物について、古墳時代～平安時代

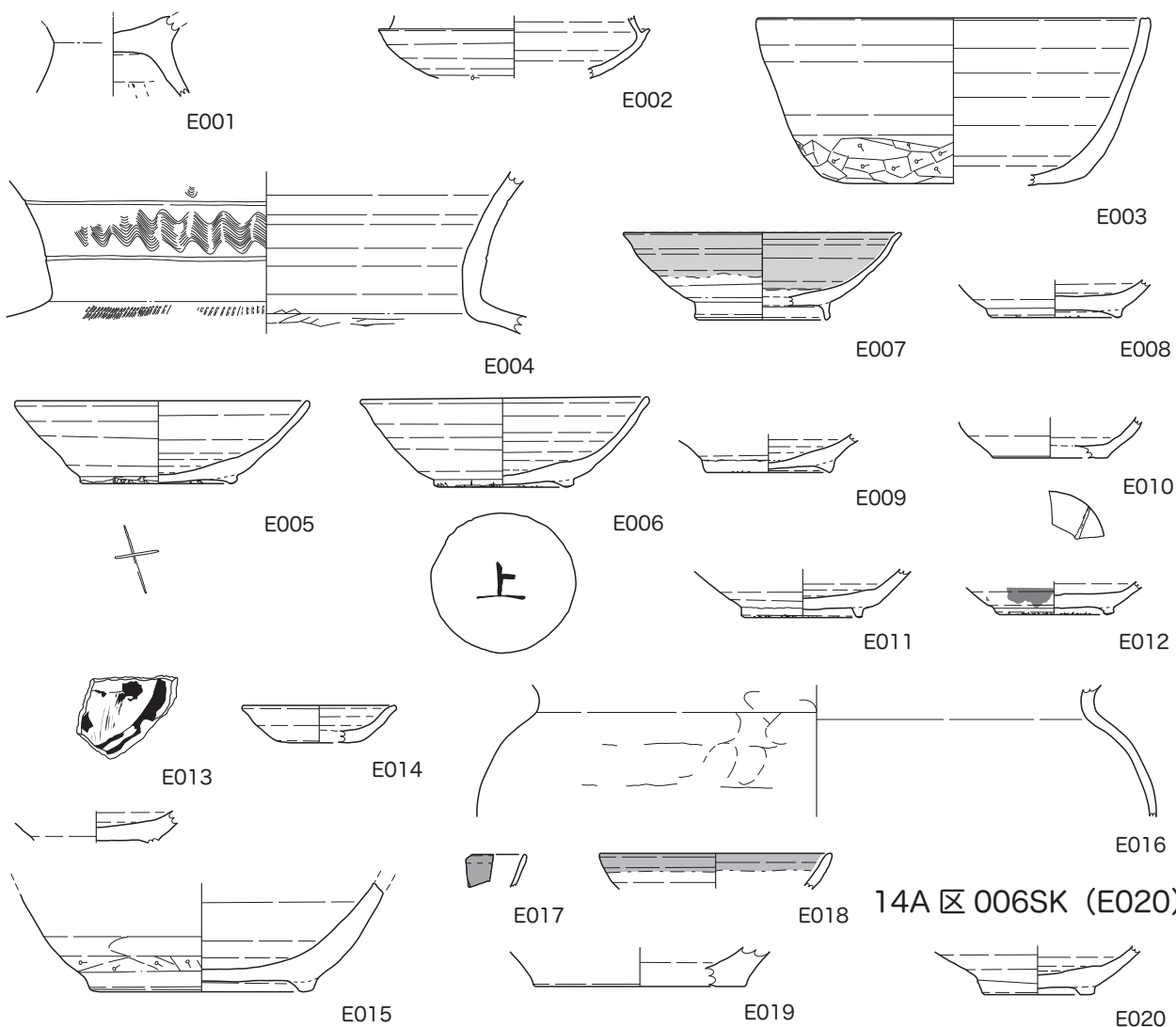
の須恵器と灰釉陶器、土師器については、城ヶ谷和広2010「第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史』資料編4 考古4 飛鳥～平安、第1章 総論、愛知県を、平安時代末～戦国時代の南部系陶器については、主に中野晴久2012「第3節 常滑窯」『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世・常滑系、第1章 総論、愛知県を、中世以後の施釉陶器については、藤澤良祐2007「第1章 総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世・瀬戸系、愛知県を参考にした。

第2節 14A区出土の土器・陶磁器 (図50～図53、写真図版9・10・15)

14A区005NR(E001～E019):E001は古式土師器の台付甕の脚部、E002は須恵器の杯身で、口縁部がやや内傾する東山44号窯式のものである。E003は渥美1a～1b型式の口縁部が斜め外に立ち上がる鉢で、ロクロナデ調整後底部にヘラケズリ調整がみられる。E004は須恵器の甕で、頸部に櫛描き波状文が入る。E007は内・外面に灰釉陶器の碗で、体部下半がやや丸みを帯びて立ち上がるもので、内・外面に灰釉が施された黒笹90号窯式のものである。E005・E006・E008～E010・E012～E015は南部系陶器で、常滑2型式～常滑5型式のもの、E005・E006・E008～E010・E012・E013は碗で、E005の外底面に「十」の字状の線刻がみられ、E006の外底面には「上」の墨書がある。E013の内面には炭が付着している。E014は小皿、E015は片口鉢の底部である。E011は瀬戸8型式の高台の付かない碗である。E016は伊勢型鍋の頸部から体部上半の部分である。E017は青磁の碗の口縁部片、E018は灰釉縁釉小皿で、古瀬戸期～大窯期のもの、E019は常滑産甕の底部で、江戸時代に下る可能性がある。

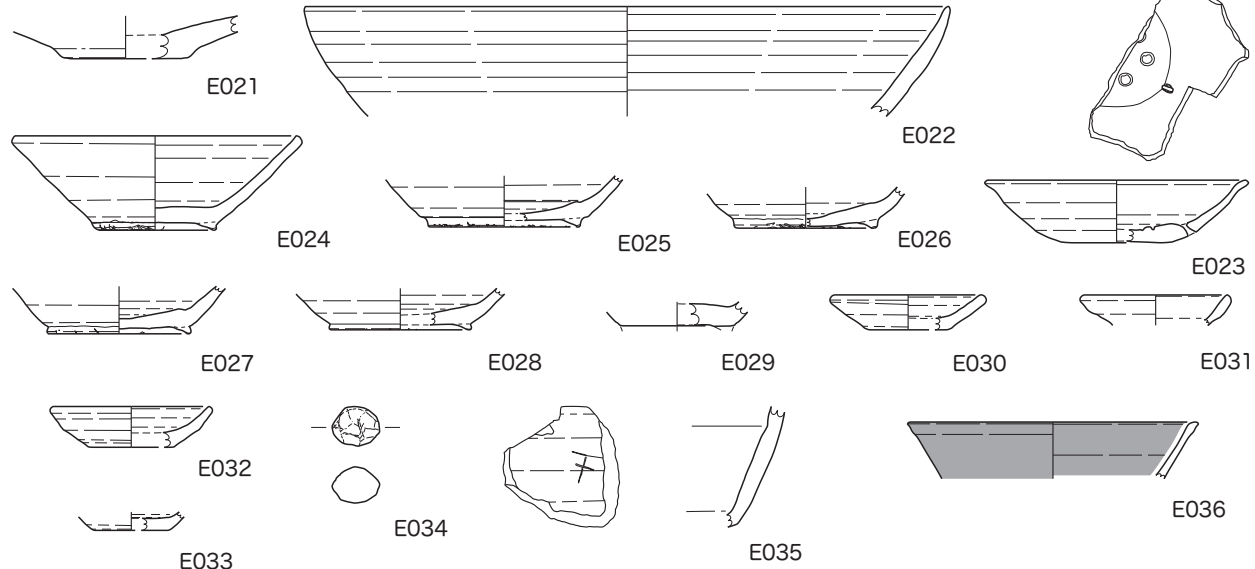
14A区007SX(E021～E040):E021は古式土師器の壺の底部、E022～E035は南部系陶器で、大凡常滑3型式～常滑6a型式に分類されるものである。E022は口縁部径34cmで、外面をロクロナデで調整する片口鉢Ⅱ類とされるもの。E024～E028は内・外面をロクロナデ調整で付け高台の碗で、E023は焼成前に底部に穿孔があり、円形刺突文が内面底部にみられる。E029は瀬戸7型式の高台の剥離した碗である。E030～E033は高台の付かない小皿で、E032は径2.1cm～2.5cmの陶丸、E035は壺の体部片である。E036～E038は青磁の碗で、E037の内面には稜花紋

14A 区 005NR (E001 ~ E019)



14A 区 006SK (E020)

14A 区 007SX (E021 ~ E040)



■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

図 50 14A 区出土土器・陶磁器 1 (1 : 4)



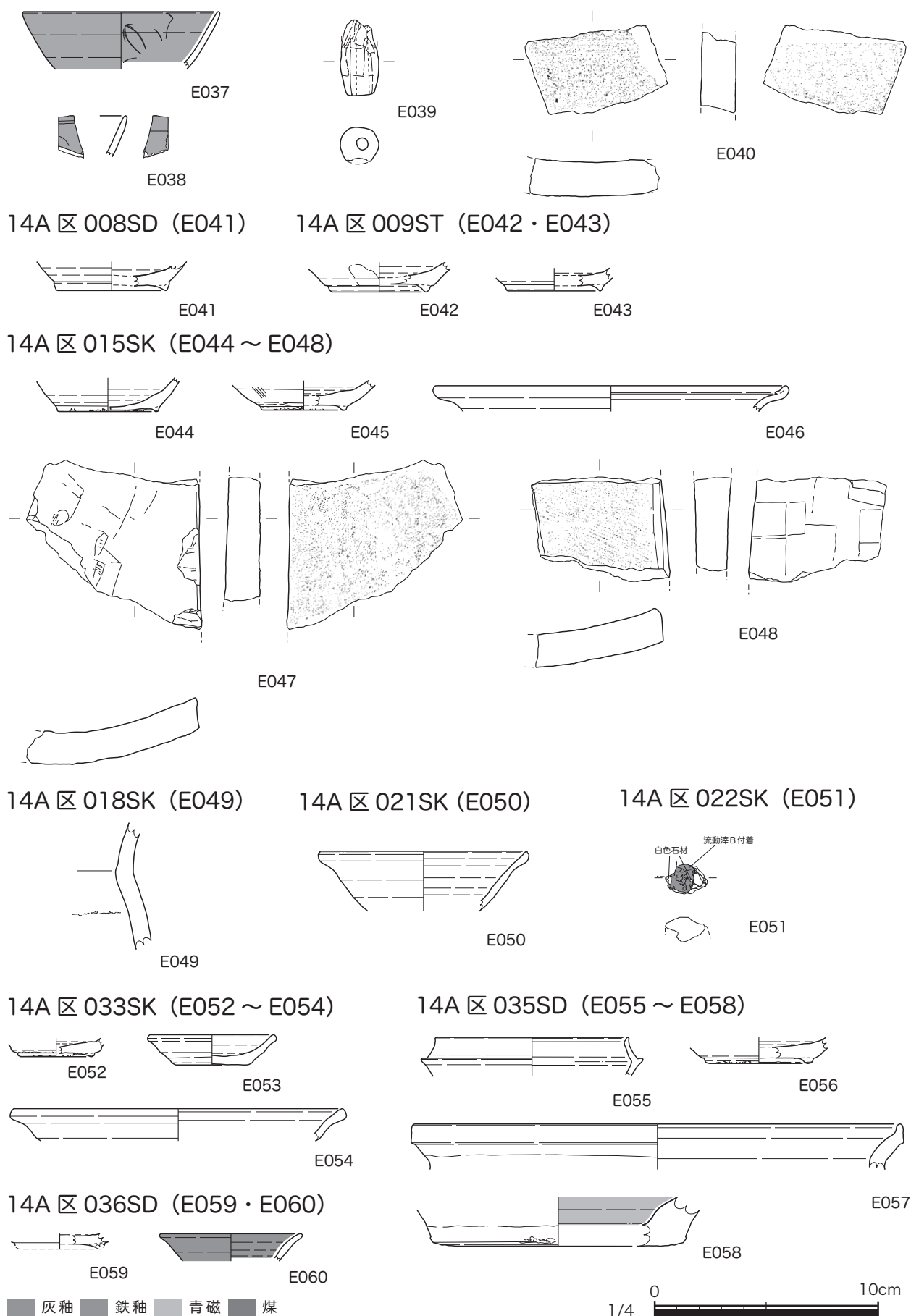


図 51 14A区出土土器・陶磁器 2 (1 : 4)

がみられる。E039は土鍾で、長さ5.55cm、外径2.25cm～2.8cm、孔径0.8cmをはかる。E040は平瓦の一部で、凹面に布目痕、凸面に糸切り痕がみられる。

14A区008SD (E041)：南部系陶器の碗で、常滑3型式のものである。

14A区009ST (E042・E043)：南部系陶器の碗で、E042が常滑3型式、E043が常滑5型式のものである。

14A区015SK (E044～E048)：E044・E045は南部系陶器の碗で、E044が常滑3型式、E045が常滑5型式のものである。E046は口縁端部を内面に折り曲げて肥厚する伊勢型鍋で、口縁部径25.6cm。E047・E048は平瓦で、E047は凸面に、E048は凹面に糸切り痕がみられ、反対の面はナデ調整か明確な痕跡がみられない。015SKからは、常滑9型式の常滑産甕の破片も出土しているが、上部を036SDが重複して掘削しており、混入している可能性が高いと考え、12世紀末～13世紀前半の遺構と考えられる。

14A区018SK (E049)：常滑産甕の頸部片で、常滑11型式～12型式のものと思われる。

14A区021SK (E050)：南部系陶器の碗で、常滑5型式のものである。

14A区022SK (E051)：甕の羽口の先端部で、外面に流動滓や白色石材が付着している。

14A区033SK (E052～E054)：全て南部系陶器で、E052は常滑6a型式の碗の底部、E053は常滑4型式の小皿、E054は常滑5型式の片口鉢I類で、口縁部径24.0cmをはかる。

14A区035SD (E055～E058)：E055は須恵器の杯身で、口縁部がやや内傾し、口縁端部内面に面をもつもので、6世紀後半のものと思われる。E056～E058は南部系陶器で、E056は常滑3型式の碗、E057は常滑4型式の甕の口縁部で口縁端部が外面に面をもって小さい受け口になるもの、E058は甕の底部で、13世紀～14世紀のものと思われる。

14A区036SD (E059・E060)：E059は常滑6a型式の南部系陶器の碗の底部、E060は大窯2窯式期の鉄釉稜皿で、口縁部径10.0cmをはかる。

14A区043SD (E061～E064)：E061～E063は南部系陶器で、E061は高台が小さくつぶれているが、口縁部径15.7cmの器高7.0cmをはかり、常滑5型式のもの、E062は常滑3型式の小皿の底部、E063は常滑2型式の碗の底部である。E064は丸瓦の先端部、自然釉が付着する。

14A区044SK (E065)：南部系陶器の小皿で、常滑3型式のもの、内縁部径7.8cm、底部径4.5cm、器高2.4cmである。

14A区047SK (E066)：須恵器の高杯の身の口縁部で、体部と口縁部の境に沈線が1条めぐり、7世紀前半頃

のものか。

14A区048SK (E067～E075)：E067～E073・E075は南部系陶器で、12世紀から13世紀のものがみられる。E067～E072は碗で、E068は高台のない瀬戸8型式のもの、その他は常滑3型式～4型式のものである。E073は常滑3型式の小皿で、口縁部径8.4cm、底部径4.8cm、器高2.0cmである。E075は甕の体部下半部である。E074は伊勢型鍋の口縁部で、口縁部径21.4cm、外面に煤が付着する。

14A区049SD (E076)：製塩土器の脚部で、棒状のものである。

14A区050SK (E077・E078)：E077は櫛条痕調整の深鉢の口縁部片で、口縁端部に刻みがみられる、E078はやや膨らみある脚部が付く瓢形壺、体部下半に横方向のケズリ痕、他はタテミガキ調整される。古墳時代前期前半のものである。

14A区051SD (E079～E088)：E079～E087は南部系陶器の碗で、常滑3型式～5型式のものがみられる。この溝から伊勢型鍋の破片が少数と軟質の常滑産甕の体部片が数点出土した。12世紀後半～13世紀前半の時期のものと思われる。E088は弧状に曲がる棒状の土製品である。用途は不明である。

14A区053SK (E089)：内耳鍋で、丸みをもった体部から内湾して口縁部にいたる。口縁端部は内傾して面をもつ。口縁部径27.0cmである。

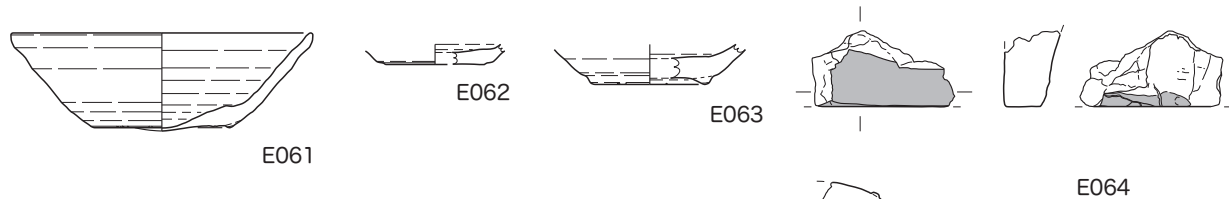
14A区055SK (E090)：南部系陶器の碗で常滑3型式のもの、高台が断面三角形のもので、底部からやや丸みをもって体部が立ち上がる。

14A区056SK (E091)：南部系陶器の鳶口壺で、鳶口となる口縁部を欠く。常滑6a型式のもので、体部上半から自然釉が多く付着し、粘土塊が片部に付着する。頸部径5.3cm、体部径13.8cm、底部径10.6cmである。

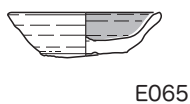
14A区069SD (E092～E102)：E092～E099は南部系陶器で、常滑2型式～6a型式のものがみられる。E092～E096は碗で、比較的しっかりした高台が付くが、E092・E094・E096は比較的整った断面三角形のもの、E093・E095はやや高台がつぶれて変形した形態である。E097は常滑4型式の小皿で、やや底部が下に突出する形状で、器高が1.9cmとやや低い。E098は口縁部径29.6cmの片口鉢I類、E099は広口壺の底部である。E100は伊勢型鍋の口縁部片、E101は丸瓦で凹面に布目痕、凸面に糸切り痕がみられる、E102は平瓦で凹面に布目痕がわずかに残る。

14B区071SK (E103・E104)：E103は南部系陶器の甕で、やや内傾気味に立ち上がる頸部から口縁部が外反しておわるもので、口縁端部は端部を上方に摘み上げて受け口状になる。常滑4型式の中でも古い特徴を持つ。E104は常滑5型式の碗の底部である。

14A 区 043SD (E061 ~ E064)



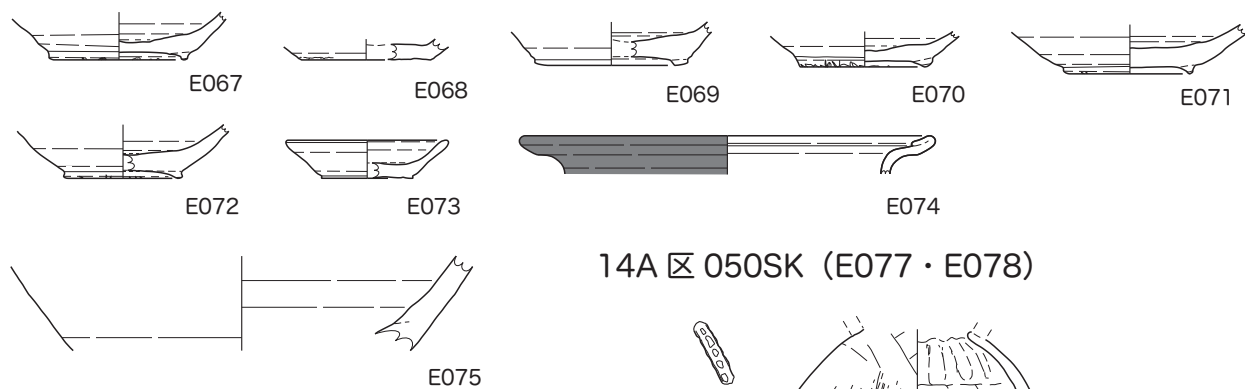
14A 区 044SK (E065)



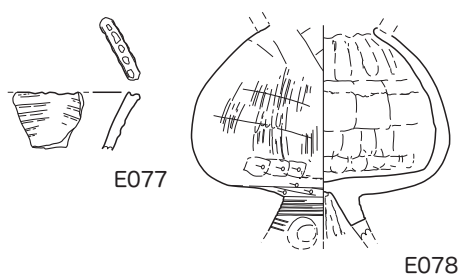
14A 区 047SK (E066)



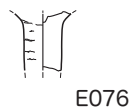
14A 区 048SK (E067 ~ E075)



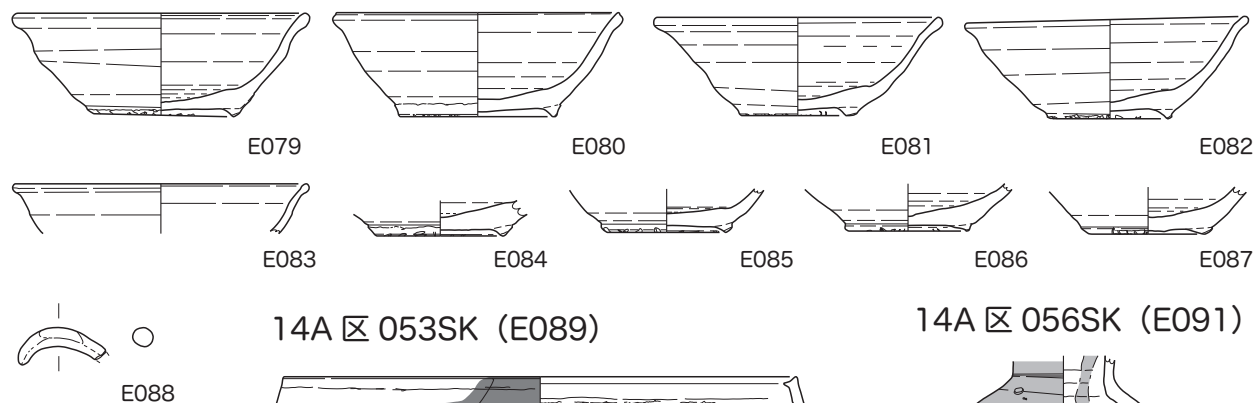
14A 区 050SK (E077 · E078)



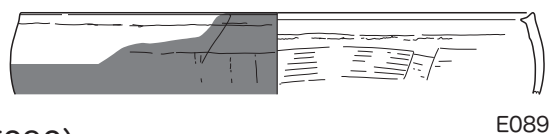
14A 区 049SD (E076)



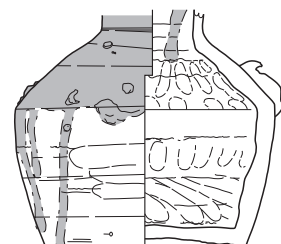
14A 区 051SD (E079 ~ E088)



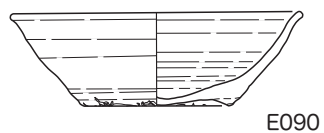
14A 区 053SK (E089)



14A 区 056SK (E091)



14A 区 055SK (E090)

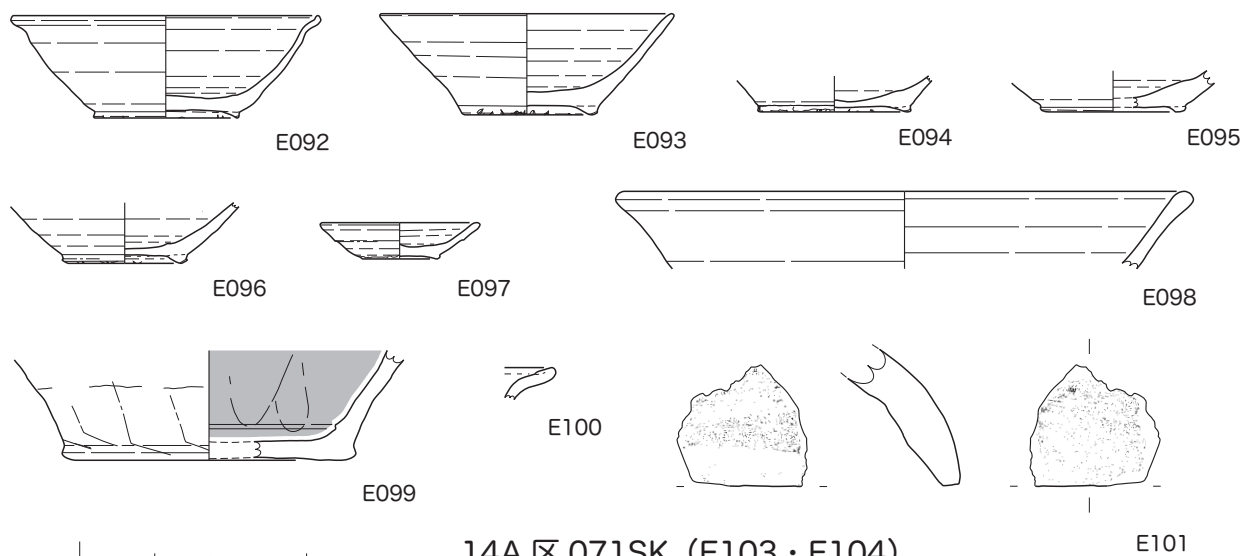


■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

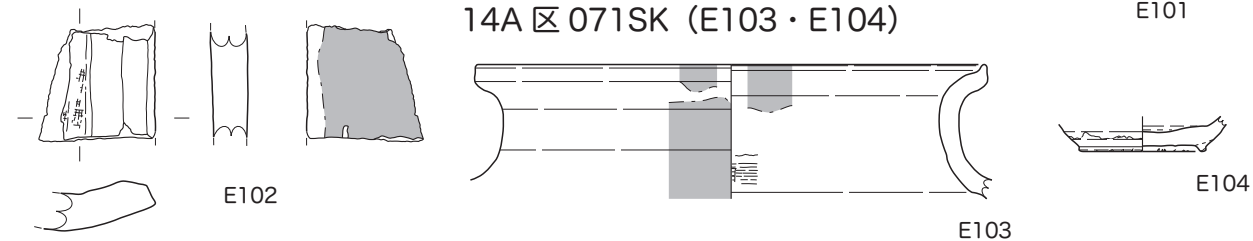
0 10cm
1/4

図 52 14A 区出土土器・陶磁器 3 (1 : 4)

14A 区 069SD (E092 ~ E102)



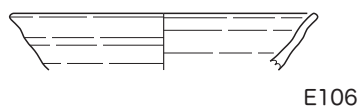
14A 区 071SK (E103・E104)



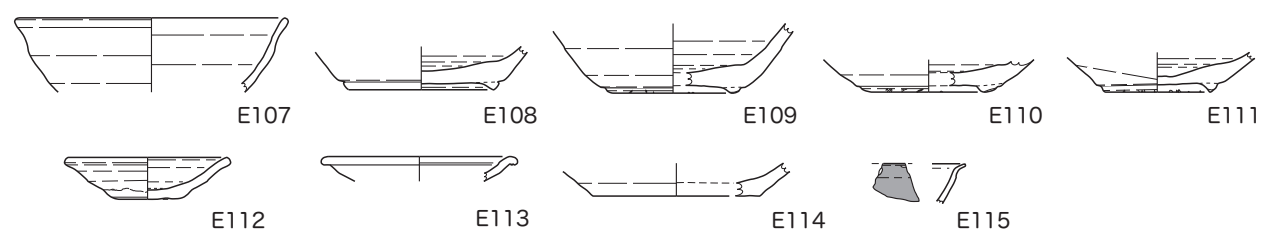
14A 区 072SK (E105)



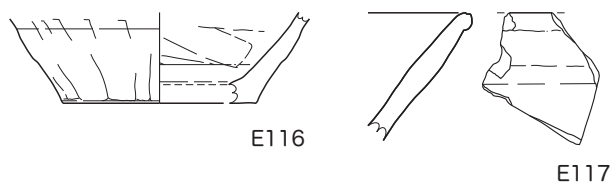
14A 区 101SK (E106)



14A 区検出 1 (E107 ~ E115)



14A 区検出 2 (E116・E117)



14A 区トレンチ 6 (E118・E119)



14A 区南壁面精査 (E120)



図 53 14A 区出土土器・陶磁器 4 (1 : 4)

14A 区 072SK (E105) : 南部系陶器の碗の底部で、高台がわずかに付く、常滑 6a 型式である。

14A 区 101SK (E106) : 南部系陶器の碗の口縁部で、口縁部径 15.9cm をはかる。常滑 4 型式である。

14A 区 検出 1 (E107 ~ E115) : E107 ~ E113 は南部系陶器で、常滑 2 型式 ~ 常滑 5 型式のものである。E107 ~ E111 は碗で E107 が口縁部、E108 ~ E111 が底部である。E112 は底部から口縁部が大きくひらいておわる小皿で、口縁部径 8.4cm、底部径 3.8cm、器高 2.2cm である。E113 は灰釉陶器の可能性もある皿で、口縁部端部が外折しておわる。E114 は中世の土師器皿で、底部径 8.8cm をはかる。E115 は青磁の碗の口縁部である。

14A 区 検出 2 (E116・E117) : E116 は須恵器の壺と思われる底部、E117 は南部系陶器の片口鉢 I 類の口縁部である。

14A 区 トレンチ 6 (E118・E119) : E118 は灰釉陶器の碗の底部で、「ハ」の字にひらく断面三角形の高台が付く。E119 は青磁の碗で、やや細い断面三角形の高台が付く。外面に青磁釉がみられる。

14A 区 南壁面精査 (E120) : 須恵器の口縁部が大きくひらく甕の頸部片で、櫛描波状文が 3 帯みられる。6 世紀 ~ 7 世紀のものである。

第 3 節 14B 区出土の土器・陶磁器 (図 54 ~ 図 60、写真図版 10 ~ 13・15)

14B 区 074SD (E121) : 江戸時代後期以後の磁器で、外面に白色釉がかかる仏飯具か。

14B 区 081SD (E122) : 古墳時代前期後半の古式土師器の高杯の脚部である。杯部の底を充填している。

14B 区 092SK (E123 ~ E125) : 須恵器の杯身の底部で、外面に線刻がみられる。E124・E125 は南部系陶器で常滑 3 型式のものである。E124 は碗の底部で、底部がやや厚いものである。E125 は口縁部が外斜め上方にほぼまっすぐにのびておわる片口鉢 II 類である。

14B 区 098SK (E126・E127) : 南部系陶器で、E126 が常滑 6a 型式の碗の口縁部、E127 が常滑 4 型式の小皿である。

14B 区 099SK (E128 ~ E132) : E128・E129 は折戸 53 号窯式と思われる灰釉陶器で、E128 は碗、E129 は高い高台が付く深碗の形態のものと思われる。E130 ~ E132 は南部系陶器の碗で、E130 が口縁部径 14.0cm とやや小型の常滑 6a 型式のもの、E131 が底部径 7.4cm をはかる常滑 3 型式のもの、E132 が底部径 6.6cm の常滑 5 型式のものである。

14B 区 103SK (E133) : 南部系陶器の碗で、口縁部径 16.6cm、常滑 6a 型式のものと思われる。

14B 区 109SK (E134) : 南部系陶器の碗で、外面口縁部と内面に灰釉がみられる。常滑 4 型式のもので、口縁部径 14.6cm、底部径 6.4cm、器高 5.2cm をはかる。

14B 区 119SK (E135) : 大型の丸瓦で、凹面に布目やハケ状の調整痕がみられ、外面には自然釉が付着する。

14B 区 120SK (E136) : 須恵器の杯身で、口縁部径 12.6cm をはかる、6 世紀後半のものと思われる。

14B 区 135SK (E137・E138) : 南部系陶器のもので、E137 が常滑 5 型式の碗の底部、E138 が常滑 6a 型式の小皿である。

14B 区 138SK (E139・E140) : 南部系陶器のもので、E139 が常滑 5 型式の小皿の底部、E140 が常滑 3 型式の片口鉢 II 類である。E140 の内面には自然釉がみられる。

14B 区 143SK (E141・E142) : 南部系陶器の常滑 2 型式のもので、E141 が口縁部径 17.2cm をはかる碗、E142 が底部径 6.0cm の碗の底部である。

14B 区 145SK (E143) : 南部系陶器の広口壺の口縁部と思われるもので、常滑 1a 型式 ~ 1b 型式のものと思われる。口縁部径 18.8cm である。

14B 区 153SK (E144) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑 3 型式のものである。

14B 区 156SK (E145) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑 2 型式のものである。

14B 区 177SE (E146 ~ E152) : 出土遺物は常滑 4 型式 ~ 6a 型式の南部系陶器がみられたが、遺構の掘り込み面は江戸時代以後の層位からの掘り込みのもので、江戸時代に使用された後に廃棄されたものである可能性がある。E146・E149・E151 は完形の皿で、E146・E151 の外面底部には「一」の墨書が、E149 の外面底部にも点状の墨書がみられる。E147 の碗も完形のものであった。E152 は片口をもち、体部下半をヨコケズリ調整する片口鉢 II 類のものである。E148 は碗の底部、E150 は小皿の口縁部である。

14B 区 182SK (E153) : 南部系陶器の碗で、内面に自然釉がみられる、常滑 5 型式のものである。

14B 区 228SK (E154・E155) : 南部系陶器のもので、E154 は常滑 2 型式の碗の底部、E155 は甕の底部で、13 世紀のものか。

14B 区 238SK (E156・E157) : E156 は南部系陶器の碗で、高台は剥離しているが、常滑 4 型式のものである。E157 は伊勢型鍋の口縁部である。

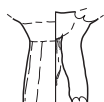
14B 区 239SK (E158) : 須恵器の杯身で、口縁部と底部が不明であるが、東山 44 号様式のものである。

14B 区 241SK (E159・E160) : 南部系陶器の碗で、常滑 5 型式のものである。どちらも体部下半にやや丸みをもって口縁部がひらく。

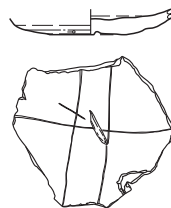
14B区 074SD (E121) 14B区 081SD (E122) 14B区 092SK (E123 ~ E125)



E121



E122



E123

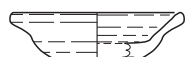


E124

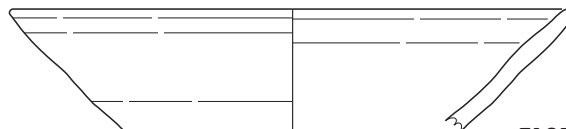
14B区 098SK (E126 · E127)



E126



E127



E125

14B区 099SK (E128 ~ E132)



E128



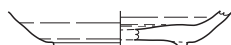
E129



E130

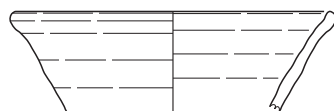


E131



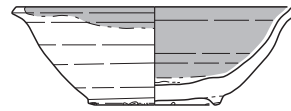
E132

14B区 103SK (E133)



E133

14B区 109SK (E134)



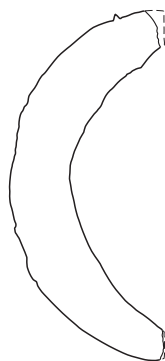
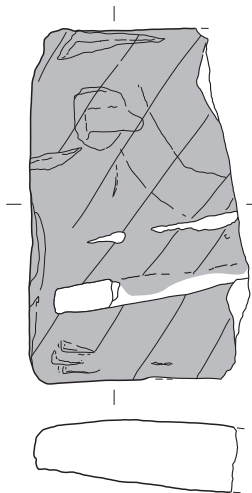
E134

14B区 120SK (E136)



E136

14B区 119SK (E135)



E135



14B区 135SK (E137 · E138)



E137



E138

14B区 143SK (E141 · E142)



E141

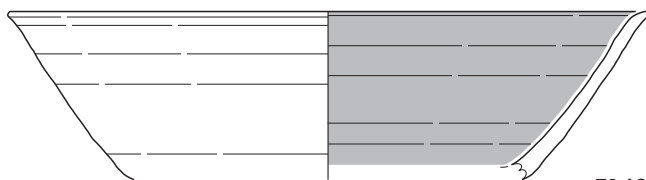


E142

14B区 138SK (E139 · E140)



E139



E140

14B区 145SK (E143)



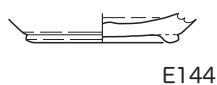
E143

灰釉 鉄釉 青磁 煤



図 54 14B区出土土器・陶磁器 1 (1 : 4)

14B 区 153SK (E144)

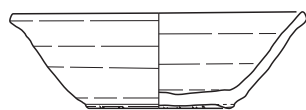


E144

14B 区 177SE (E146 ~ E152)



E146

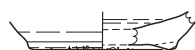


E147



E149

14B 区 156SK (E145)



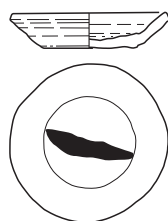
E145



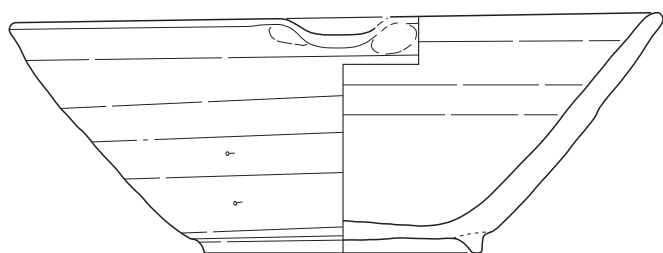
E148



E150

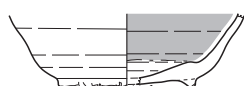


E151



E152

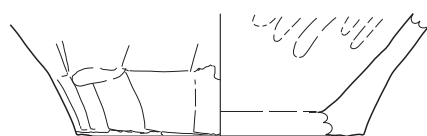
14B 区 182SK (E153)



E153

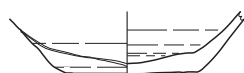


E154



E155

14B 区 238SK (E156 · E157)



E156



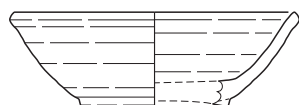
E157

14B 区 239SK (E158)

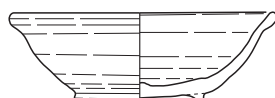


E158

14B 区 241SK (E159 · E160)

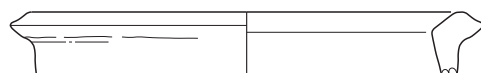


E159



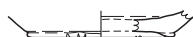
E160

14B 区 244SK (E161 ~ E163)



E161

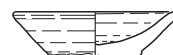
14B 区 245SK (E164)



E164

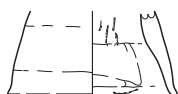


E162

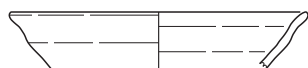


E163

14B 区 248SD (E165 ~ E167)



E165



E166



E167

14B 区 267SK (E169)



E169

14B 区 261SK (E168)



E168

14B 区 290SK (E170)



E170

■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

図 55 14B 区出土土器・陶磁器 2 (1 : 4)



14B区244SK (E161～E163) : E161は清郷型鍋の口縁部で、口縁部が短く外反しておわるもの、E162は南部系陶器の碗で口縁部径17.6cmをはかる大型のもの、常滑5型式のものである。E163は南部系陶器の小皿で、底部がやや突出する形状がみられる、常滑2型式の古い特徴を持つ。

14B区245SK (E164) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑5型式のものである。

14B区248SD (E165～E167) : E165は古式土師器の台付甕の脚部、E166が南部系陶器の碗で常滑2型式のもの、E167が南部系陶器の小皿の底部で常滑4型式～5型式のものである。

14B区261SK (E168) : 南部系陶器の碗の口縁部で、常滑4型式のものである。

14B区267SK (E169) : 南部系陶器の小皿で、常滑5型式のものである。

14B区290SK (E170) : 伊勢型鍋の口縁部で、外面に煤が付着する。13世紀のものと考えられる。

14B区291SK (E171) : 南部系陶器の小皿の口縁部片で、常滑5型式～6a型式のものである。

14B区295SK (E172) : 南部系陶器の碗で、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が比較的丁寧なクロナデにより外反しておわる。常滑3型式のものである。

14B区299SK (E173) : 南部系陶器の碗の底部片で、常滑4型式のものである。

14B区301SK (E174) : 南部系陶器の小皿で、口縁部が直線的に開いておわるもので、外面底部に墨書がみられる。

14B区335SK (E175～E177) : E175は須恵器の甕の口縁部で、口縁端部を上方に小さく摘み上げるもの、E176は灰釉陶器の碗と思われる底部片で、東山72号窯式のもの、E177は南部系陶器の碗の口縁部で、常滑3型式のものである。

14B区353SK (E178・E179) : 南部系陶器で、E178は常滑4型式のやや底部が大きい小皿、E179は常滑5型式の碗の底部である。

14B区356SK (E180・E181) : 灰色に焼き締められた瓦で、E180が凹面に布目をもつ丸瓦、E181が凹面に粘土板を切った糸切り痕がみられる平瓦である。どちらも凸面側の調整などは不明瞭である。

14B区357SK (E182・E183) : 南部系陶器でE182が常滑4型式の碗の口縁部、E183が常滑4型式の小皿である。

14B区358SK (E184) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑2型式のものである。

14B区362SD (E185～E187) : E185・E186は南部系陶器の碗で、常滑5型式のもの、E187は清郷型

鍋の口縁部で、肥厚する口縁部の口縁端部がほぼ横に外反し、上端部がヨコナデによる面をもつものである。

14B区363SK (E188・E189) : 南部系陶器で、E188が常滑5型式の碗、E189が常滑5型式の小皿である。

14B区364SK (E190～E195) : E190～E193は南部系陶器の碗で、E190が常滑5型式、E191・E192が常滑4型式、E193が常滑3型式のものである。E194・E195は小皿で、どちらも常滑3型式のものである。E194は内面に黒褐色の有機物が付着する。

14B区365SK (E196) : 南部系陶器の碗の口縁部で、常滑5型式のものである。

14B区366SK (E197) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑3型式のものである。

14B区373SK (E198) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑3型式のものである。

14B区377SK (E199～E201) : E199は南部系陶器の碗で常滑3型式のもの、E200は南部系陶器の小皿で、常滑5型式のものである。E201は伊勢型鍋の口縁部で、口縁端部を内面側に折り返して肥厚させるものである。

14B区380SK (E202) : 南部系陶器の小皿で、常滑5型式のものである。

14B区381SK (E203) : 南部系陶器の碗で、常滑3型式のものである。

14B区382SK (E204) : 青磁の碗の口縁部片である。

14B区383SD (E205～E207) : E205は土師器の甕で、頸部より緩く外反する口縁部は口縁端部が丸くおわる。E206は灰釉陶器の碗の底部片で東山72号窯式のもの、E207は南部系陶器の碗の底部で、常滑6a型式のものである。内面に円形の刻印が6ヶ所以上みられる。

14B区384SK (E208～E211) : E208は常滑3型式の碗片、E209・E210は常滑3型式の小皿、E211は青磁の碗で、内・外面にハケ目状になる文様が線刻されている。

14B区398SK (E212) : 南部系陶器の小皿で、常滑3型式のものである。

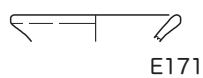
14B区399SK (E213) : E213は南部系陶器の碗で、常滑3型式のものである。

14B区415SK (E214) : 灰釉陶器の碗で、内・外面に灰釉がみられる。折戸53号窯式のものである。

14B区417SK (E215) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑2型式のものである。

14B区418SK (E216～E218) : E216・E217は灰釉陶器の碗で、E216は東山72号窯式のもの、E218は南部系陶器の碗の底部片で、底部内面に円形の刻印が7個みられる。

14B区 291SK (E171)



E171

14B区 295SK(E172)



E172

14B区 299SK(E173)



E173

14B区 301SK(E174)



E174

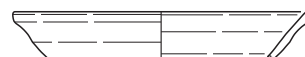
14B区 335SK (E175 ~ E177)



E175



E176



E177

14B区 353SK (E178 · E179)

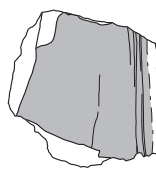
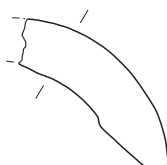


E178



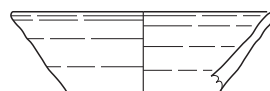
E179

14B区 356SK (E180 · E181)

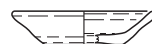


E180

14B区 357SK (E182 · E183)



E182

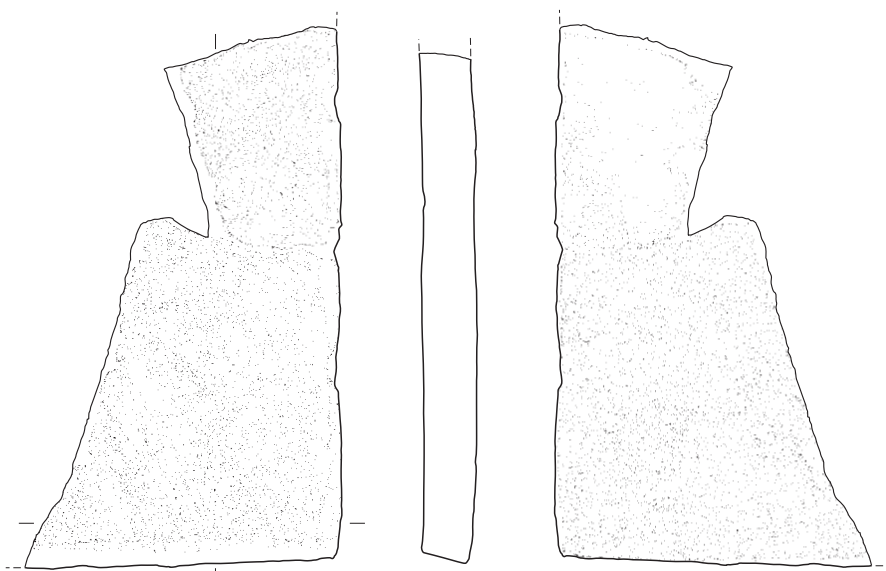


E183

14B区 358SK (E184)



E184



E181



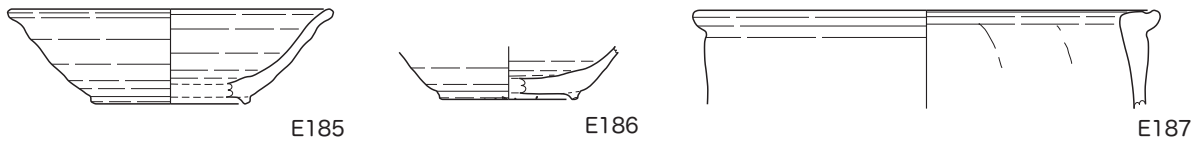
灰釉 鉄釉 青磁 煤

0 10cm

1/4

図 56 14B区出土土器・陶磁器 3 (1 : 4)

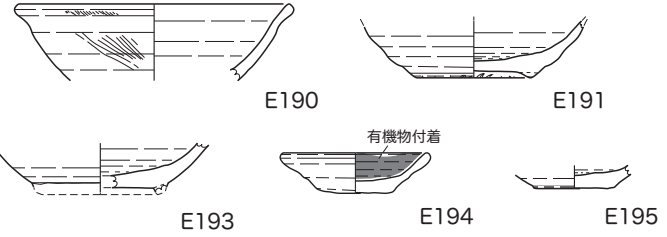
14B区 362SD (E185 ~ E187)



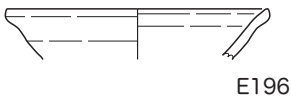
14B区 363SK (E188 · E189)



14B区 364SK (E190 ~ E195)



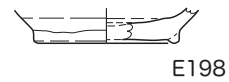
14B区 365SK (E196)



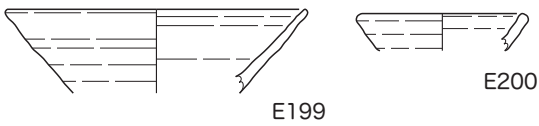
14B区 366SK (E197)



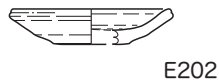
14B区 373SK (E198)



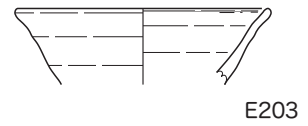
14B区 377SK (E199 ~ E201)



14B区 380SK (E202)



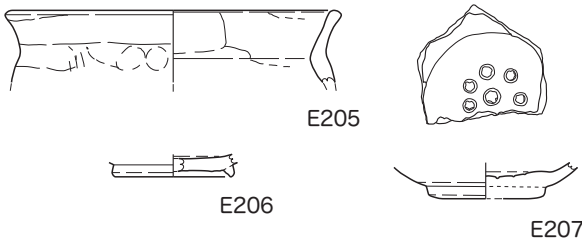
14B区 381SK (E203)



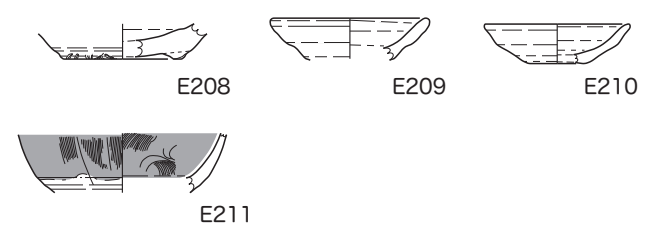
14B区 382SK (E204)



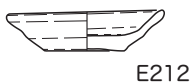
14B区 383SD (E205 ~ E207)



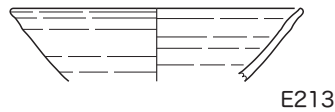
14B区 384SK (E208 ~ E211)



14B区 398SK (E212)



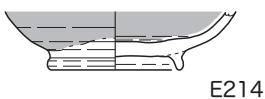
14B区 399SK (E213)



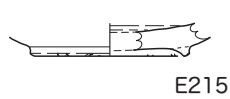
14B区 418SK (E216 ~ E218)



14B区 415SK (E214)



14B区 417SK (E215)



■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

0 10cm
1/4

図 57 14B区出土土器・陶磁器 4 (1 : 4)

14B 区 420SK (E219・E220) : E219 は南部系陶器の小皿で、底部から口縁部が比較的まっすぐに開くもので常滑 3 型式のもの、E220 は南部系陶器の壺の体部下半で、常滑 3 ～ 4 型式のものである。

14B 区 427SK (E222) : 南部系陶器の壺で、体部から屈曲して頸部がほぼ真上に立ち上がり、口縁部が横外側に折り曲げておわるもので、口縁端部に強いヨコナデ調整がめぐる。常滑 4 型式のものである。

14B 区 423SK (E221) : 灰釉陶器の皿の底部で、東山 72 号窯式である。

14B 区 428SK (E223・E224) : E223 は南部系陶器の碗で常滑 5 型式のもの、E224 は南部系陶器の小碗で、内・外面に灰釉が付着する、小さい高台が付いている、常滑 4 型式である。

14B 区 441SK (E225・E226) : E225 は灰釉陶器の碗の底部で、折戸 53 号窯式のものである。E226 は南部系陶器の碗で、口縁部径が大きく口縁部が強く外反しておわる、常滑 1b 型式のものである。

14B 区 458SK (E227) : 南部系陶器の碗の底部で、常滑 5 型式のものである。

14B 区 480SK (E228・E229) : E228 は南部系陶器の碗の底部で、常滑 4 型式のもの、E229 は青磁の小鉢と思われるものである。

14B 区 487SK (E230・E231) : E230 は南部系陶器の碗の底部で、高台が比較的整った断面三角形の高台が付く、常滑 2 型式のものである。E231 は南部系陶器の小皿で、常滑 4 型式のものである。

14B 区 495SD (E232) : 南部系陶器の碗で、常滑 5 型式のものである。

14B 区 531SK (E233) : 南部系陶器の小皿で、器高が低い形態のものである。常滑 5 型式のものである。

14B 区 538SK (E234) : 南部系陶器の碗で、色調がやや明るい灰白色のもので、瀬戸 7 型式のものである。

14B 区 547SK (E235・E236) : E235 は南部系陶器の碗で常滑 3 型式のもの、E236 は南部系陶器の小皿で常滑 5 型式のものである。

14B 区 550SK (E237・E238) : 南部系陶器の碗で常滑 4 型式のものである、E237 は口縁部内・外面に灰釉が付着する、E238 は外面に煤が付着している。

14B 区 557SK (E239) : 灰釉陶器の碗で、内面に灰釉がみられる。

14B 区 562SK (E240) : 古式土師器の高杯の脚部で、松河戸式のものである。

14B 区 568SK (E241) : 比較的大きい丸瓦で、凹面に粘土板の糸切り痕がみられるもの、凸面はナデ調整か調整痕は不明瞭である。

14B 区 検出 1 (E242 ～ E245) : E242 は内・外面白色釉の近世磁器の紅皿で、外面にタテ方向の筋目がみ

られる。E243 は凸面に粘土板の糸切り痕がみられる丸瓦片で、凹面はナデ調整か、調整痕は不明瞭である。E244 は丸瓦片と思われるもので凸面・凹面とも調整痕は不明瞭、E245 は平瓦で、凸面・凹面ともナデ調整か、調整痕は不明瞭である。

14B 区 検出 2 (E246 ～ E270) : E246 ～ E249 は古式土師器で、E246 は有段口縁の壺、E247 は弧形の壺と思われるもので底部が突出する、E248 は口縁部が強く外反しておわる甕、E249 は台付甕の脚部である。E250 は須恵器の甑の口縁部片、E251・E252 は灰釉陶器で E251 は東山 72 号窯式の碗、E252 は黒笹 90 号窯式の皿である。E253 ～ E263・E269・E270 は南部系陶器である。E253 ～ E258 は碗で、E258 は常滑 2 型式、E254 は常滑 3 型式、E257 は常滑 4 型式、E253・E255・E256 は常滑 5 型式のものである。E255・E256 は外面底部に墨書がみられ、E255 は外面に煤が付着する。E259・E260 は小皿で E259 が常滑 3 型式、E260 が常滑 4 型式のものである。E261 は常滑 6a 型式の口縁部が内湾する片口碗、E262・E263 は常滑 3 型式の片口鉢Ⅱ類、E269・E270 は甕の体部片で印刻紋がみられる。E264 は口縁端部を折り曲げておわる伊勢型鍋である。E265 は内面に線刻紋がみられる青磁の碗である。E266 ～ E268 は丸瓦片で、E266 の凹面には布目痕がみられる、E267 は調整痕が不明瞭であるが、凹面に自然釉が付着している。E268 も凸面・凹面ともにナデ調整か、調整痕が不明瞭な丸瓦片である。

14B 区 壁面精査 (南) (E271 ～ E273) : E271 は灰釉陶器の碗の底部で東山 72 号窯式のもの、E272 は青磁の碗の体部片、E273 は南部系陶器の端面が研磨された砥土器である。

14B 区 北壁断面 (E274) : 南部系陶器の広口壺の底部から体部下半部で、内・外面とも横方向のナデ調整痕がみられる。

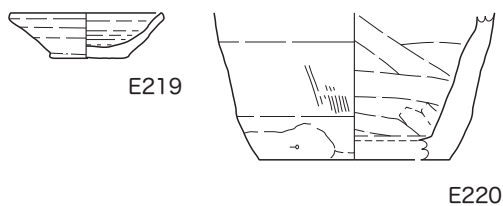
14B 区 トレンチ 6 (E275・E276) : E275 は南部系陶器の碗の口縁部で常滑 3 型式のもの、E276 は南部系陶器の小皿で常滑 5 型式の器高が低いものである。

14B 区 トレンチ (北東) (E277) : 南部系陶器の広口壺で、内傾する頸部から口縁部が短く外反して、口縁端部をつまみ上げる形のヨコナデがめぐるものである。常滑 4 型式のものである。

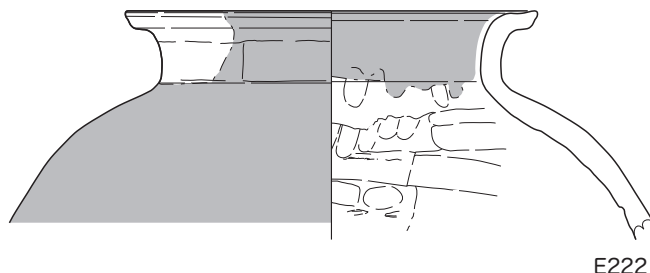
14B 区 機械掘削 (E278 ～ E280) : E278 は外面に自然釉がみられる須恵器の杯蓋、E279 は南部系陶器の盤で常滑 5 型式～ 6a 型式のもの、E280 は平瓦で凸面・凹面ともナデ調整か。

第 4 節 14C 区出土の土器・陶磁器 (図 60 ～ 図 62、写真図版 13 ～ 15)

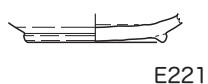
14B 区 420SK (E219・E220)



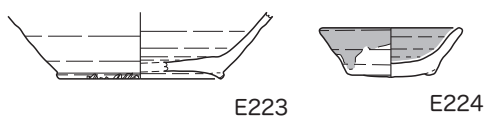
14B 区 427SK (E222)



14B 区 423SK (E221)



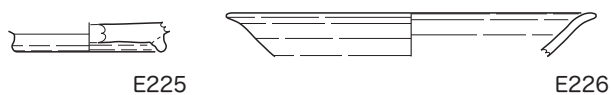
14B 区 428SK (E223・E224)



14B 区 458SK (E227)



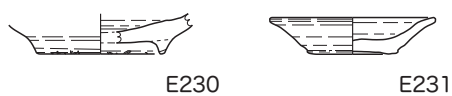
14B 区 441SK (E225・E226)



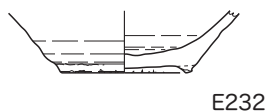
14B 区 480SK (E228・E229)



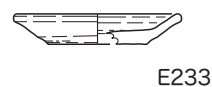
14B 区 487SK (E230・E231)



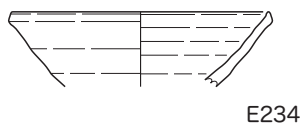
14B 区 495SK (E232)



14B 区 531SK (E233)



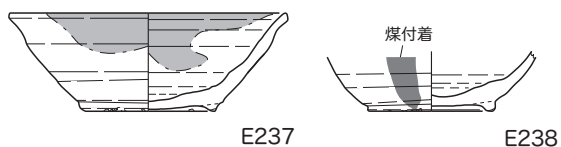
14B 区 538SK (E234)



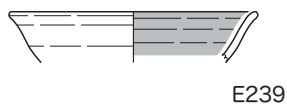
14B 区 547SK (E235・E236)



14B 区 550SK (E237・E238)



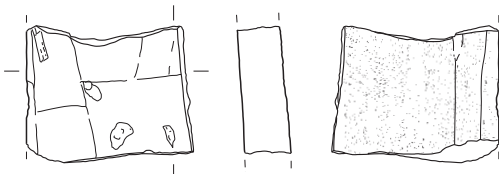
14B 区 557SK (E239)



14B 区 562SK (E240)



14B 区 568SK (E241)



14B 区検出 1 (E242～E245)



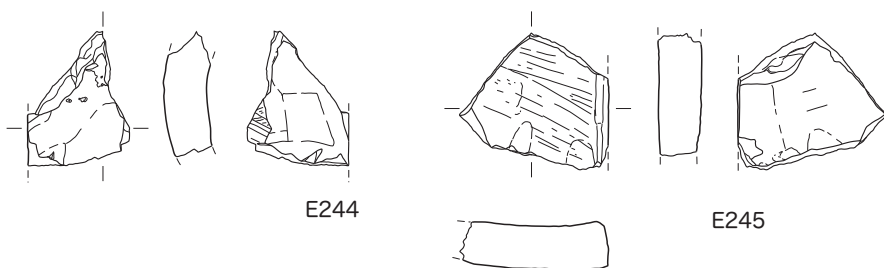
E243

E241

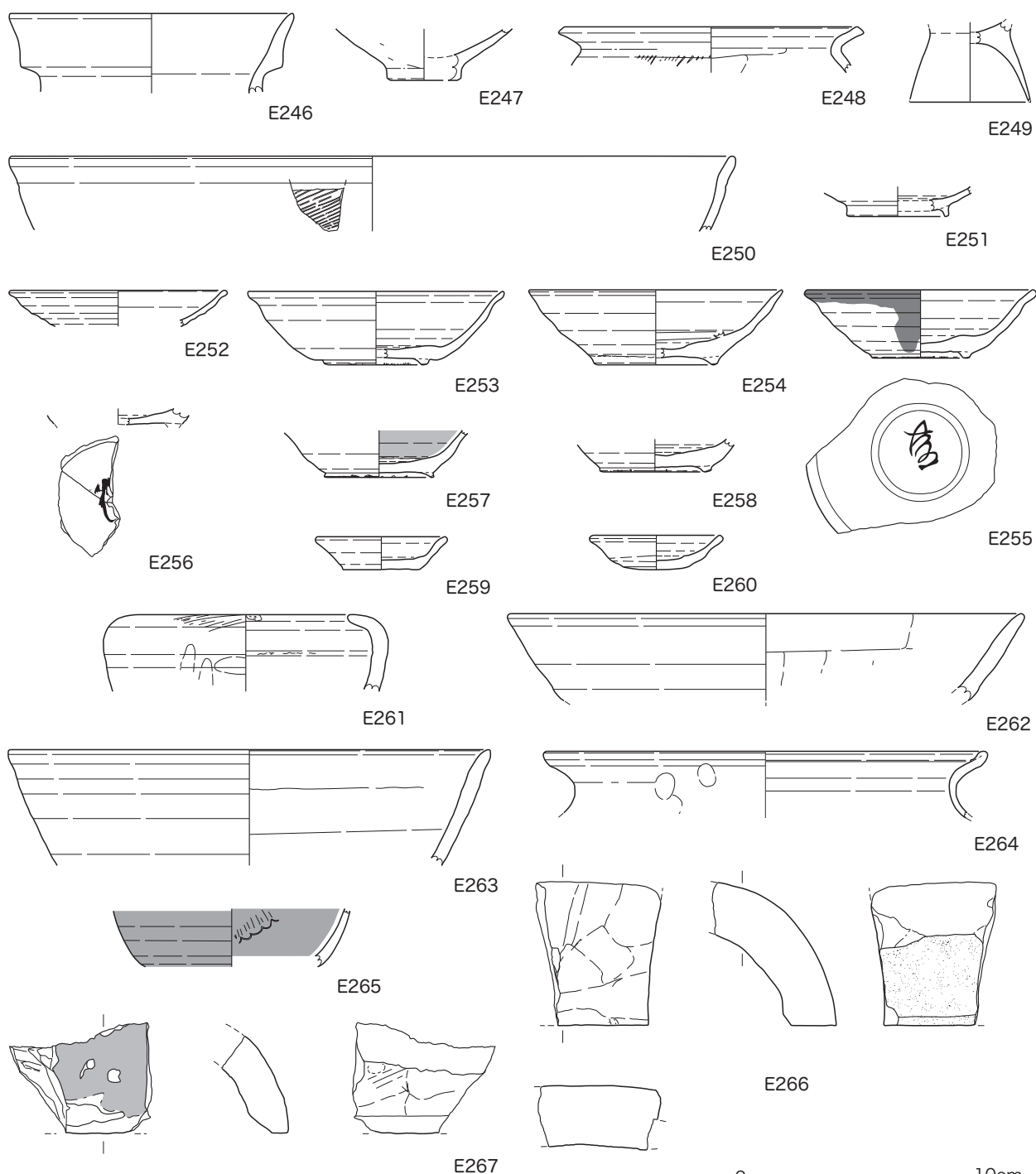
灰釉 鉄釉 青磁 煤

0 10cm

図 58 14B 区出土土器・陶磁器 5 (1 : 4)



14B 区検出 2 (E246 ~ E270)



■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

図 59 14B 区出土土器・陶磁器 6 (1 : 4)

0 10cm
1/4

14C区001SX (E281～E294) : E281は灰釉陶器の碗の底部で高台の断面形が内湾する形となる折戸53号窯式のもの、E282～E290・E292～E294は南部系陶器で、E282が常滑5型式の碗の底部、E283が常滑6a型式の小皿、E284が常滑5型式の小皿、E285が常滑4型式の三筋壺の体部、E286が常滑4型式の片口鉢Ⅰ類、E287が常滑5型式～6a型式の片口、E288が常滑4型式の片口鉢Ⅰ類、E289・E290が常滑6b型式の片口鉢Ⅱ類のものである。E292は常滑6a型式の碗の重ね焼き失敗品で、E293は色調が橙色をした焼成が不良な甕の体部下半部で13世紀のもの、E294は口縁部と体部下半が繋がらないが、E293と同じく色調が橙色で焼成が不良な甕で、やや内傾する頸部から口縁部が短く外反し、口縁端部が小さく上下に摘まみ出されるもので常滑5型式の新しい特徴を持つものである。E291は須恵器の甕の口縁部である。

14C区020SK (E295) : 南部系陶器の碗で、常滑5型式のものである。

14C区027SK (E296) : 高台はややつぶれて小さいが、体部が丸みをもつもので、常滑5型式のものである。

14C区028SK (E297) : 高台が比較的断面三角形で体部が丸みをもつもので、常滑4型式のものである。

14C区034SK (E298) : 灰釉陶器の碗の底部で、折戸53号窯式のものである。

14C区039SK (E299・E300) : E299は南部系陶器の甕で、ロクロナデにより口縁端部が上下にやや摘みだされ、外側に面をもつもので、常滑4型式の新しい特徴を持つ。E300は灰釉陶器の碗の底部で、黒笹90号窯式のものである。

14C区079SD (E301・E302) : E301は古式土師器の台付甕の脚部、E302は南部系陶器の碗で、体部が丸みをもつ常滑4型式のもので、内面に自然釉が付着し、口縁部に輪花が一ヶ所みられる。

14C区090SK (E303) : 南部系陶器の碗で、比較的大型の断面三角形の高台が付き、体部も丸みを持つ特徴から常滑2型式のものである。

14C区091NR (E304・E305) : 古式土師器で、E304が比較的大型の台付甕の脚部、E305が高杯の脚部から杯部である。松河戸2式のものである。

14C区100SK (E306) : 灰釉陶器の碗で、器壁が薄く作られている、黒笹90号窯式のものである。

14C区102SK (E307) : 古式土師器の壺の底部で、外面底部に木葉痕がみられる。

14C区111SK (E308) : 灰釉陶器の碗で、高台がやや高く立ち上がるもので、折戸53号窯式のものである。

14C区116SK (E309) : 南部系陶器の小皿で、底部から口縁部がやや外反しておわるもので、常滑6a型式のものである。

14C区検出1 (E310～E316) : E313は弥生後期の高杯の脚部で円形の透かしがみられるもの、E310～E312・E314は古式土師器で、E310が瓢形の壺の体部、E311・E312が広口の口縁部になる壺の底部、E314が甕の羽口の可能性のある高杯の脚部片である。E315は灰釉陶器の碗で黒笹90号窯式のもの、E316は南部系陶器の碗で、常滑5型式のもの、底部外面に墨書「九」がみられる。

14C区深掘り・トレンチ (E317～E320) : E317は脚部の細い弥生後期の高杯の脚部、E318は古式土師器の外面にハケ調整がみられる甕で、体部から頸部が緩やかにくびれて口縁部が開く、E319・E320は台付甕の脚部である。

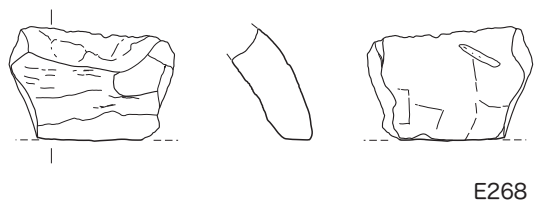
14C区機械掘削 (E321～E324) : E321・E322は灰釉陶器の碗で、折戸53号窯式のもの、E323・E324は南部系陶器で、E323は常滑3型式の碗、E324は常滑6a型式のやや小型で器高が低くなった小皿である。

第5節 14D区出土の土器・陶磁器 (図62～図64、写真図版14・15)

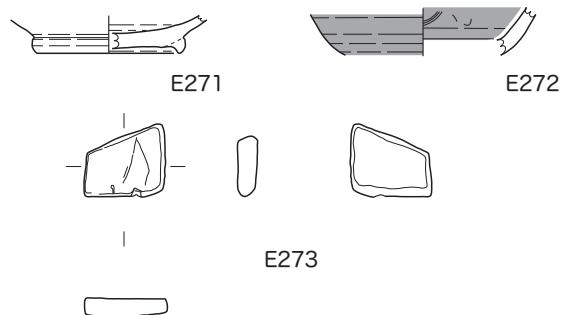
14D区024SK (E325) : 南部系陶器の小碗で、内・外面に灰釉がみられ、皿に近い形態の常滑2型式のものである。

14D区047NR (E326～E328) : E326・E327は古式土師器で、E326は壺の底部片、E327は台付甕の脚部片である。E328は南部系陶器の小皿で、底部がやや下に削り出された形態で、常滑3型式のものである。

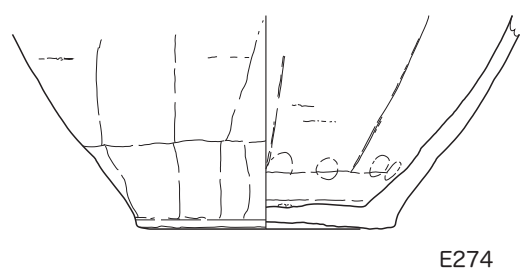
14D区検出1 (E329～E388) : E329～E337は古式土師器で、E329は口縁部が体部から屈曲してやや外側にひらいておわる壺、E330は二重口縁壺の口縁部片、E331は小型の壺の体部下半～底部、E332は丸みをもつ杯部をもつ高杯の脚部、E333は小型の高杯で脚部がスカート状にひらくもの、E334・E335は脚部が中程で屈折する高杯の脚部、E336は「く」の字に口縁部が外反してひらく甕の口縁部、E337は台付甕の体部底から脚部である。E338～E344は須恵器で、東山11号窯式を中心とする時期のものである。E338は杯蓋の天井部で東山10号窯式にかかる特徴を持つ、E339も杯蓋、E340は摘みある高杯の杯蓋、E341は短脚一段透かしの高杯の脚部、E342は体部上半に直線沈線文と櫛描波状文のみられる短頸壺、E343は沈線文と櫛描波状文がみられる甕が器台の口縁部片、E344は口縁端部が外側に折れる甕の口縁部で、東山11号窯式より古い特徴を持つ。E345は緑釉陶器の碗の口縁部片で黒笹90号窯式～折戸53号窯式のものである。E346～E353は灰釉陶器で、E353は黒笹14号窯式の碗、E346・E348・E350・E351が折戸53号窯式の碗、



14B 区壁面精査 (南) (E271 ~ E273)



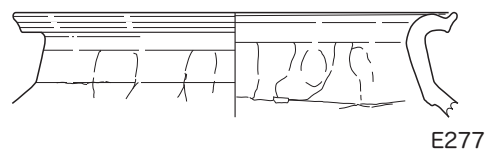
14B 区北壁断面 (E274)



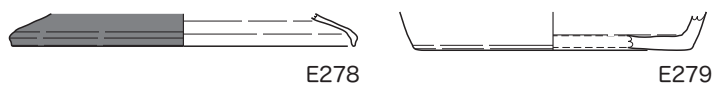
14B 区トレンチ 6 (E275・E276)



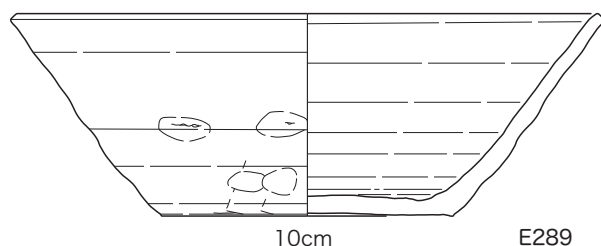
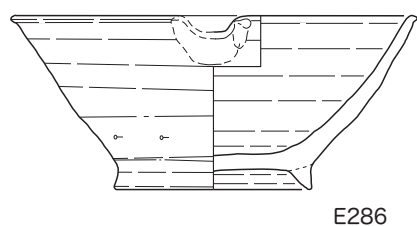
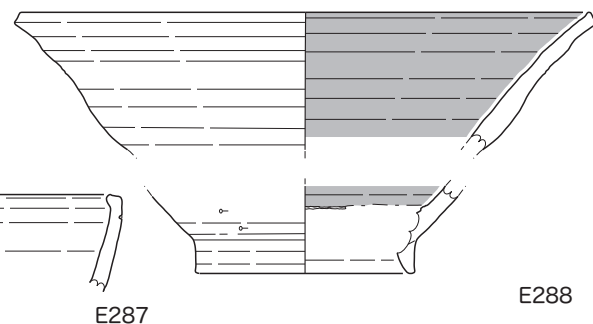
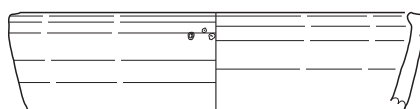
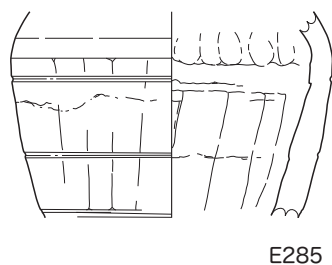
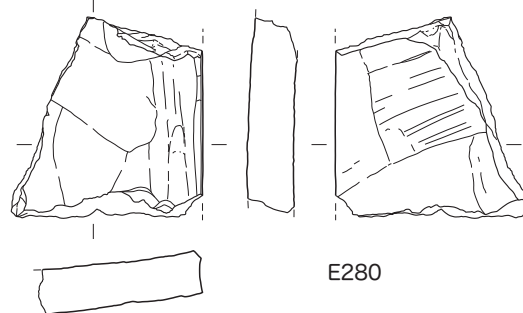
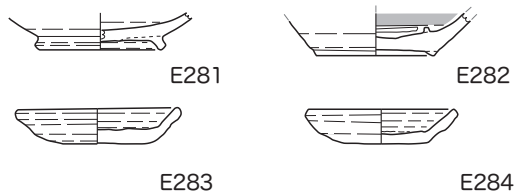
14B 区トレンチ (北東) (E277)



14B 区機械掘削 (E278 ~ E280)



14C 区 001SX (E281 ~ E294)



■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

0 10cm 1/4

図 60 14B 区出土土器・陶磁器 7、14C 区出土土器・陶磁器 1 (1 : 4)

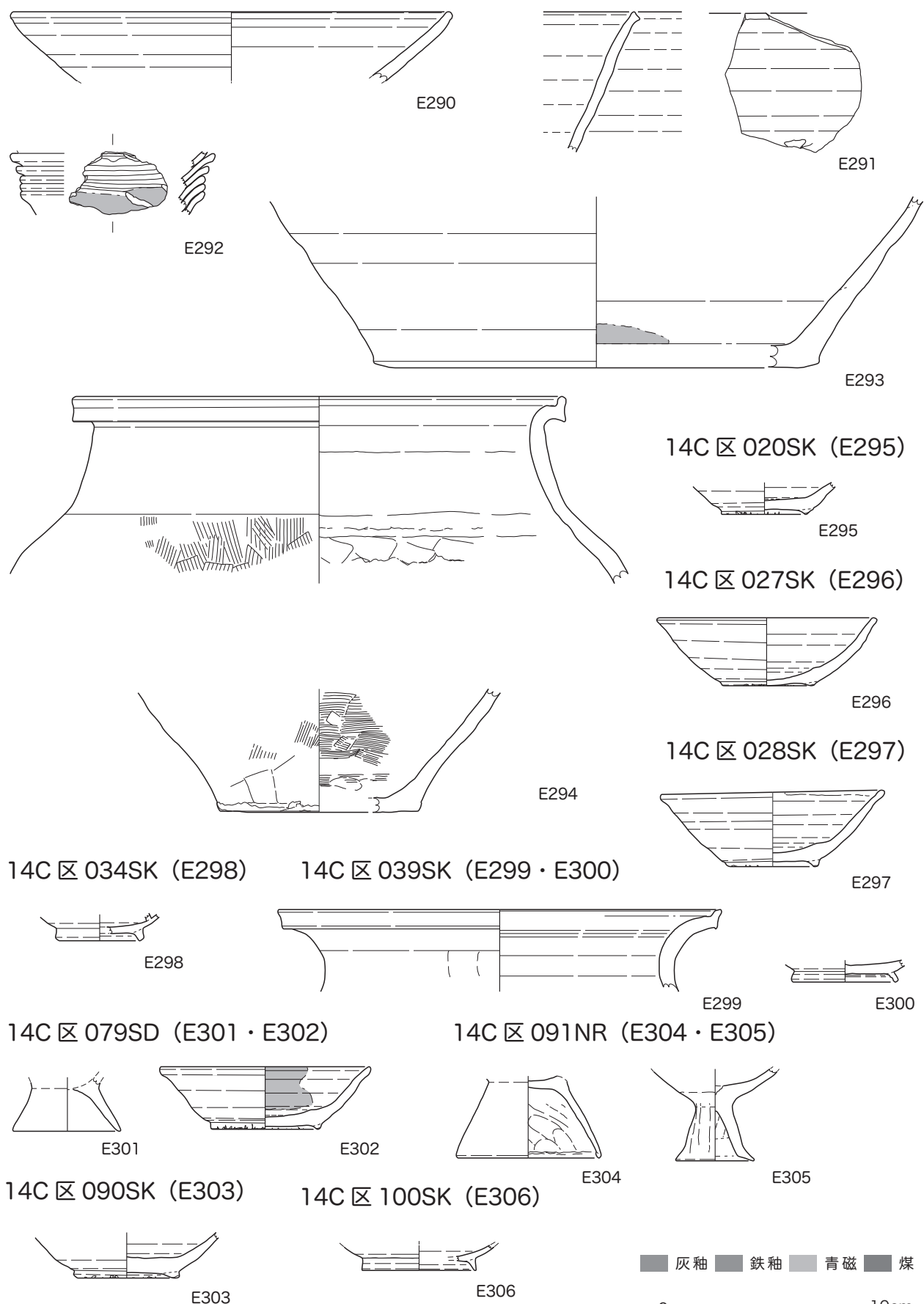


図 61 14C 区出土土器・陶磁器 2 (1 : 4)

14C 区 102SK (E307)



E307

14C 区 111SK (E308)



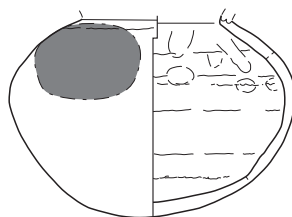
E308

14C 区 116SK (E309)



E309

14C 区検出 1 (E310 ~ E316)



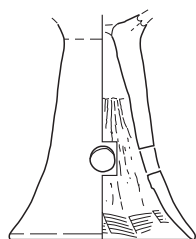
E310



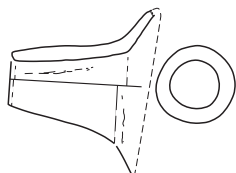
E311



E312



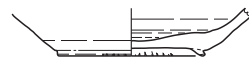
E313



E314



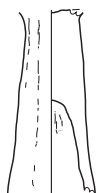
E315



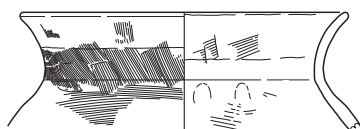
E316



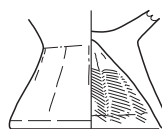
14C 区深掘り・トレンチ (E317 ~ E320)



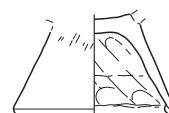
E317



E318



E319



E320

14C 区機械掘削 (E321 ~ E324)



E321



E322



E323



E324

14D 区 024SK (E325)



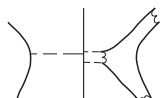
E325

14D 区検出 1 (E329 ~ E388)

14D 区 047NR (E326 ~ E328)



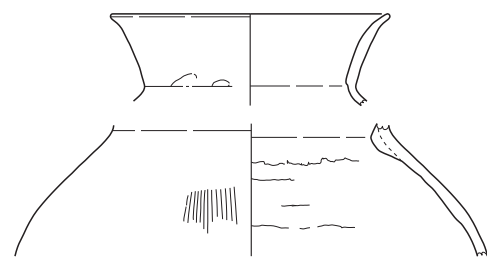
E326



E327



E328



E329

■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

図 62 14C 区出土土器・陶磁器 3、14D 区出土土器・陶磁器 1 (1 : 4)

0 1/4 10cm

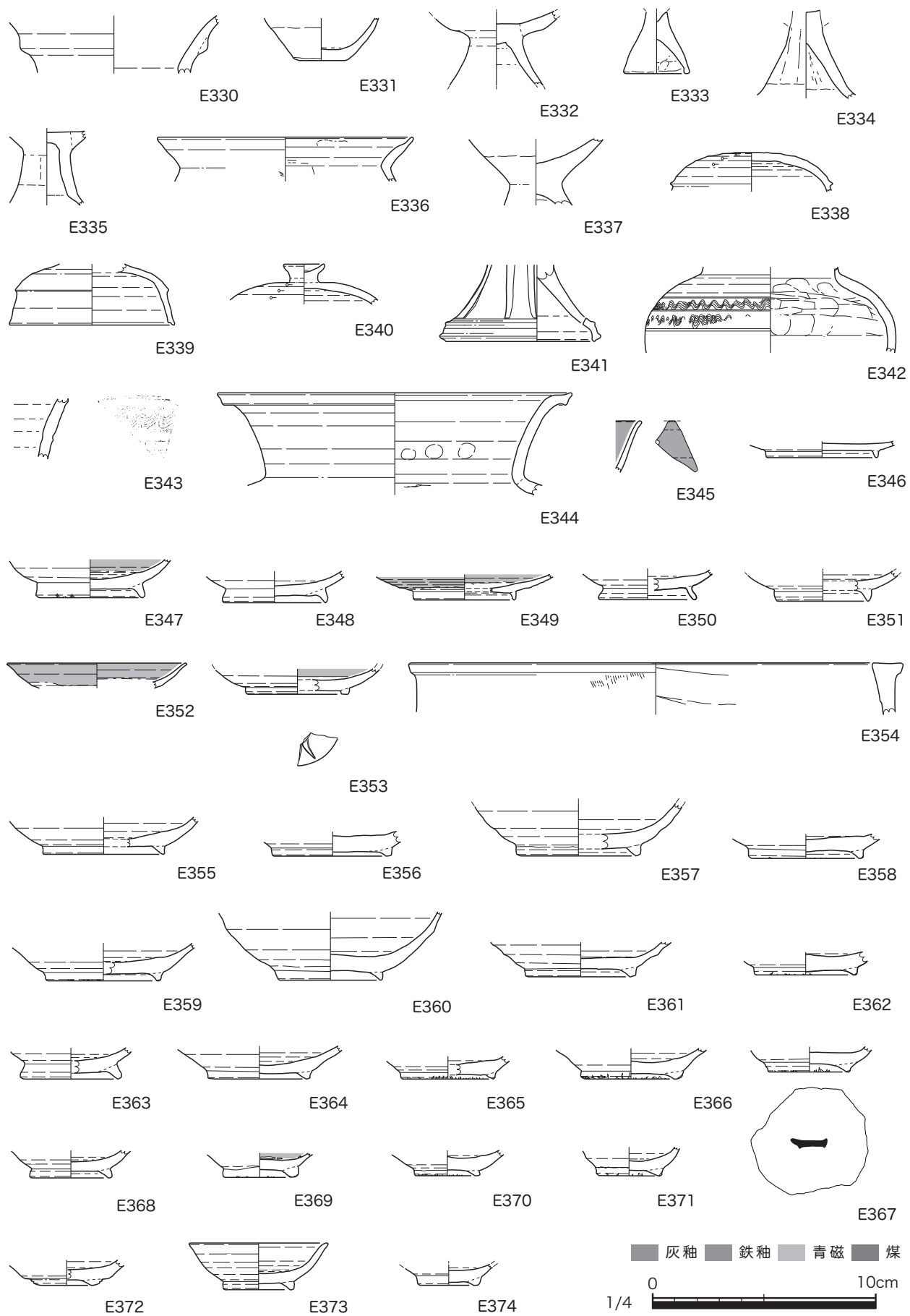
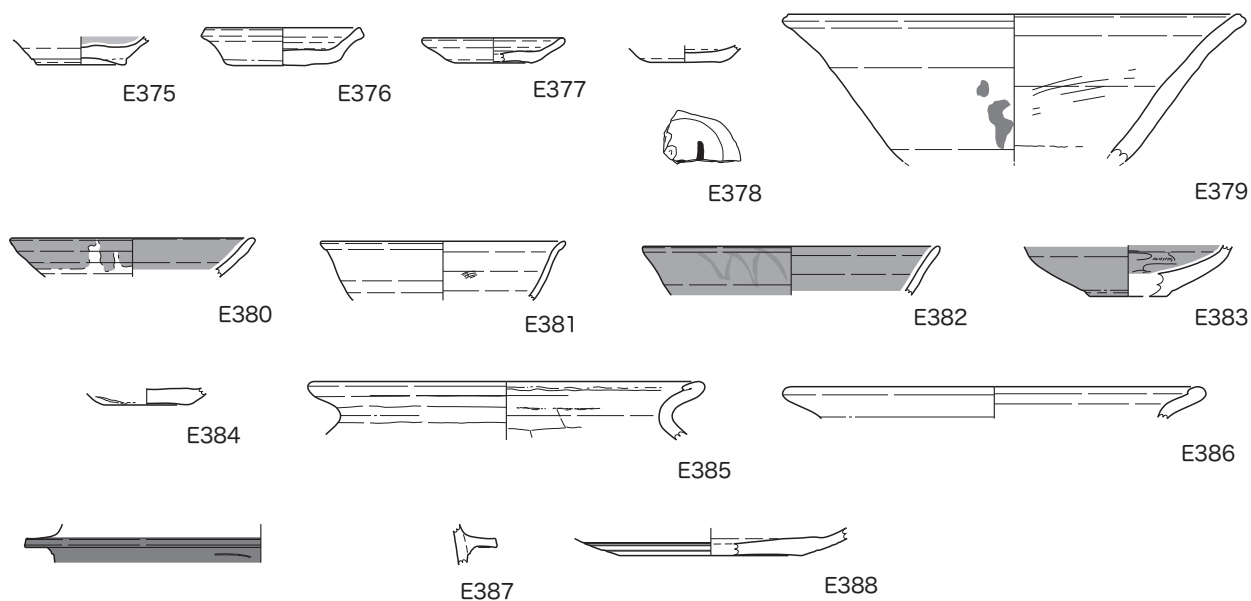
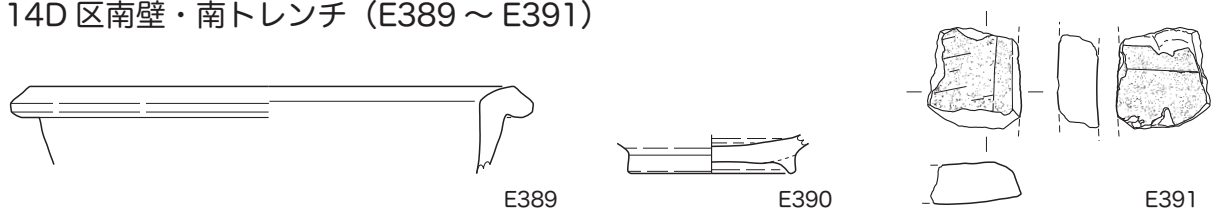


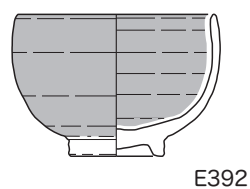
図 63 14D 区出土土器・陶磁器 2 (1 : 4)



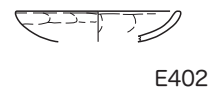
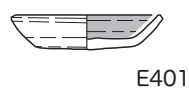
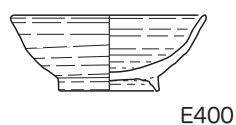
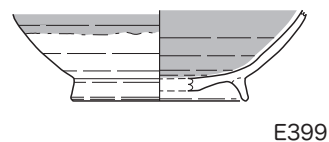
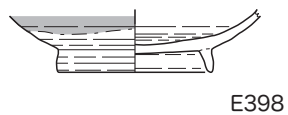
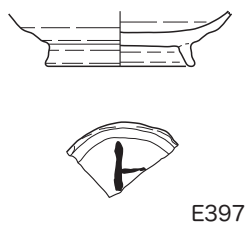
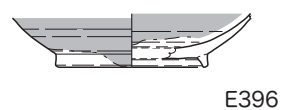
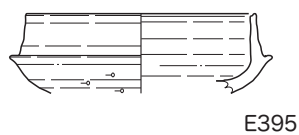
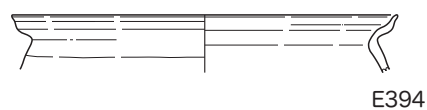
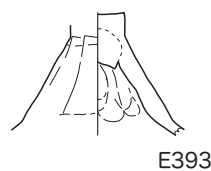
14D 区南壁・南トレンチ (E389 ~ E391)



14D 区北壁トレンチ (E392)



14D 区機械掘削 (E393 ~ E402)



■ 灰釉 ■ 鉄釉 ■ 青磁 ■ 煤

図 64 14D 区出土土器・陶磁器 3 (1 : 4)

0 10cm
1/4

E349・E352が同窯式の皿、E347が百代寺窯式の碗である。E354は古代の清郷型鍋で、肥厚する口縁部の口縁部上端に面をもつヨコナデ調整がみられるものである。E355～E378は南部系陶器で、E355～E367は碗、E368～E375は小碗、E376～E378は小皿である。この中の型式の内訳は、常滑1a型式はE355・E368・E373、常滑1b型式はE357、常滑2型式はE356・E358・E359・E361・E362・E364・E369～E372・E374・E375、常滑3型式はE366・E378、常滑4型式はE365、常滑5型式はE367・E376、常滑6a型式はE377、渥美1b型式はE360・E363である。E367の外底面に墨書「一」がみられる。E380～E383は青磁の碗で、E382は外面に鎬蓮弁紋がみられる。E379は中世土師器の鉢、E384は中世の底部糸切りの小皿、E385は伊勢型鍋の口縁部、E386は口縁部がやや内面側に肥厚する鍋である。E387は羽釜形鍋の鏝の部分、E388は古瀬戸陶器の盤類である。

14D区南壁・南トレンチ(E389～E391)：E389は古代の清郷型鍋で肥厚する口縁部が内側にやや上端の面をもって外に折れておわる。E390は南部系陶器の碗で常滑1a型式のもの、E391は凸面に粘土板の糸切り痕がみられる平瓦片である。

14D区北壁トレンチ(E392)：内・外面に灰釉がかかる陶器碗で、近代にかかる時期のものか。

14D区機械掘削(E393～E402)：E393・E394は古式土師器で、E393が古墳時代前期前半の高杯脚部、E394も古墳時代前期のS字状口縁台付甕の口縁部である。E395は須恵器の杯身で、東山11号窯式のもの、E396～E399は灰釉陶器で、E396が折戸53号窯式の碗、E397・E399が同窯式の深碗、E398が美濃産大原窯式の深碗で、E397の外底面に墨書「上」がみられる。E400・E401は南部系陶器で、E400が尾張3型式の比較的緻密な胎土の小碗、E401が常滑6a型式の小皿である。E402は手捏ねの土師器の小皿である。

第6節 石製品 (図65、写真図版15)

石製品は全部で11点出土した。S001・S002は14A区005NRから出土したもので、下呂石の剥片で弥生時代中期以前のものである。S003・S004・S007は凝灰岩製の砥石で、砥面が凹む形態で、S007には顕著な線状の研ぎ溝がみられる。S005は敲击石・砥石で、膨らみのある面や側面に敲打痕がみられ、膨らみのある面には線状で細い研ぎ溝のようなものもみられる。S006は厚さ6.9cmの亜角礫の台石で被熱痕がみられる。S008～S011は滑石製の鍋と思われるもので、S008やS009のように浅い皿状になるもの、S010・

S011のように鉢状になるものがある。また4点とも線状の細い溝がみられ、砥石などに転用された可能性がある。

第7節 木製品

(図66～図68、写真図版15・16)

14A区の柱穴と思われる土坑7ヶ所、14B区の柱穴と思われる土坑34ヶ所と14C区の土坑1ヶ所、14D区の柱穴と思われる土坑2ヶ所より柱と柱を支えた根板が出土した。その中で、加工面が残る柱8点(W001～W004・W007～W010)、根板2点(W005・W006)の図化を行った。柱は芯持ち丸太材(W001～W004・W009・W010)と分割材(W007・W008)があり、芯持ち丸太材は径9.6cm～12.8cm、みかん割材は径6.8cm～14.4cmのものがみられた。柱の側面は多面体の形に削られている。根板はW005が長さ25cm、幅14cm、厚み6.8cmに柱材の長軸を裁断し、断ち割った面を上柱をのせていたもので、柱の側面が3面残る。W006はみかん割材の柱を分割したもので、加工痕が残る面が3面みられる、幅10cm、厚み4.2cm残る。

添付DVD掲載の小林克也「権六遺跡出土木材の樹種同定」の結果によれば、実測図化したもので芯持ち丸太材が用いられている6点では、W001がマツ属複雑維管束亜属、W002～W004・W009・W010がヒノキであり、みかん割材のW007はスダジイとW008はクリであった。また本分析の考察において、マツ属複雑維管束亜属とスギ、ヒノキは木理通直で真っ直ぐ生育して加工性が良く、クリとスダジイは重厚な樹種であるが、軸方向への割裂性が良い樹種であることから、本遺跡から出土した他の分析資料12点もあわせて、樹種を考慮した選択と加工がなされていると指摘されている。

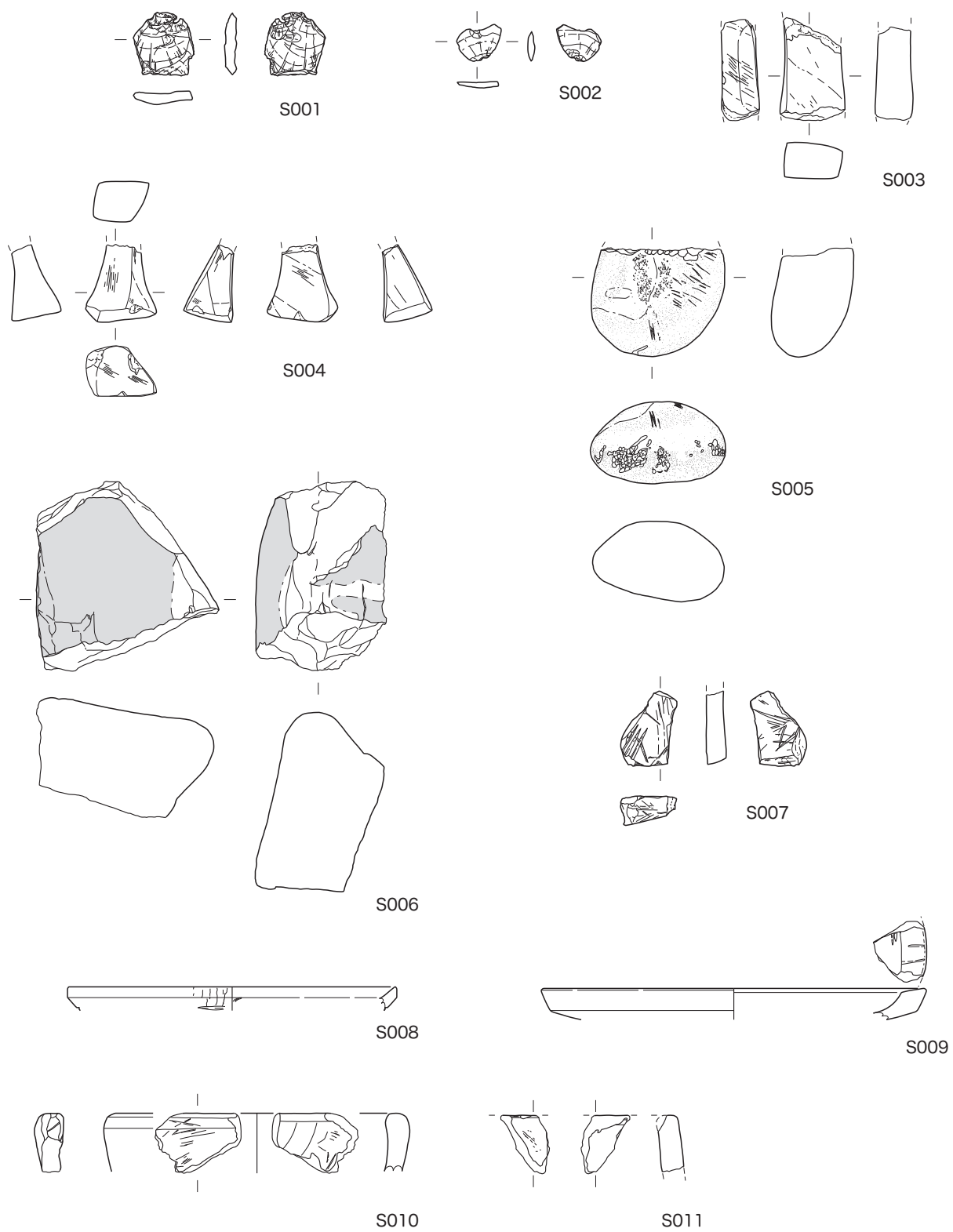


图 65 石製品 (1 : 4)

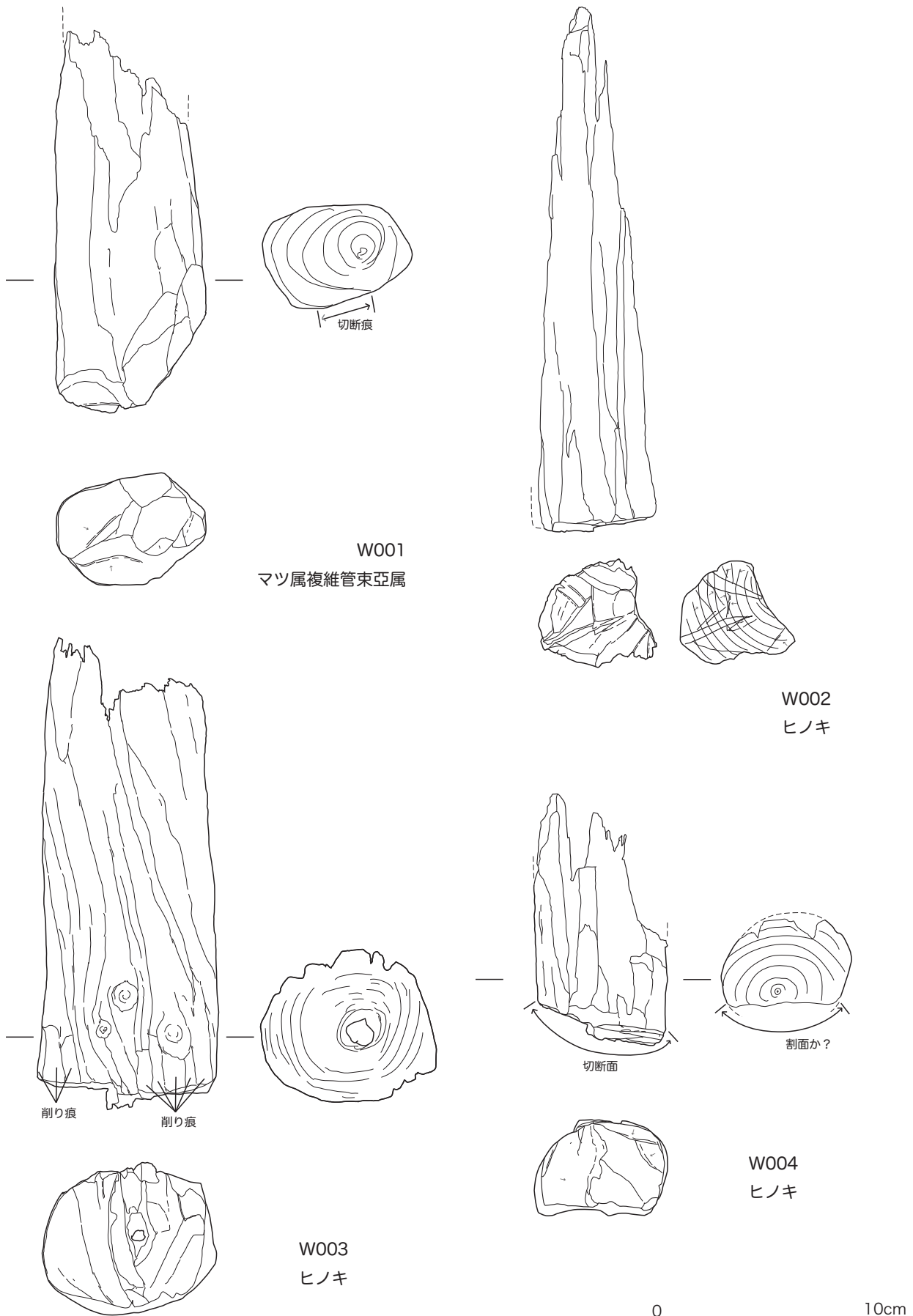


図 66 木製品 1 (1 : 4) 1/4 0 10cm

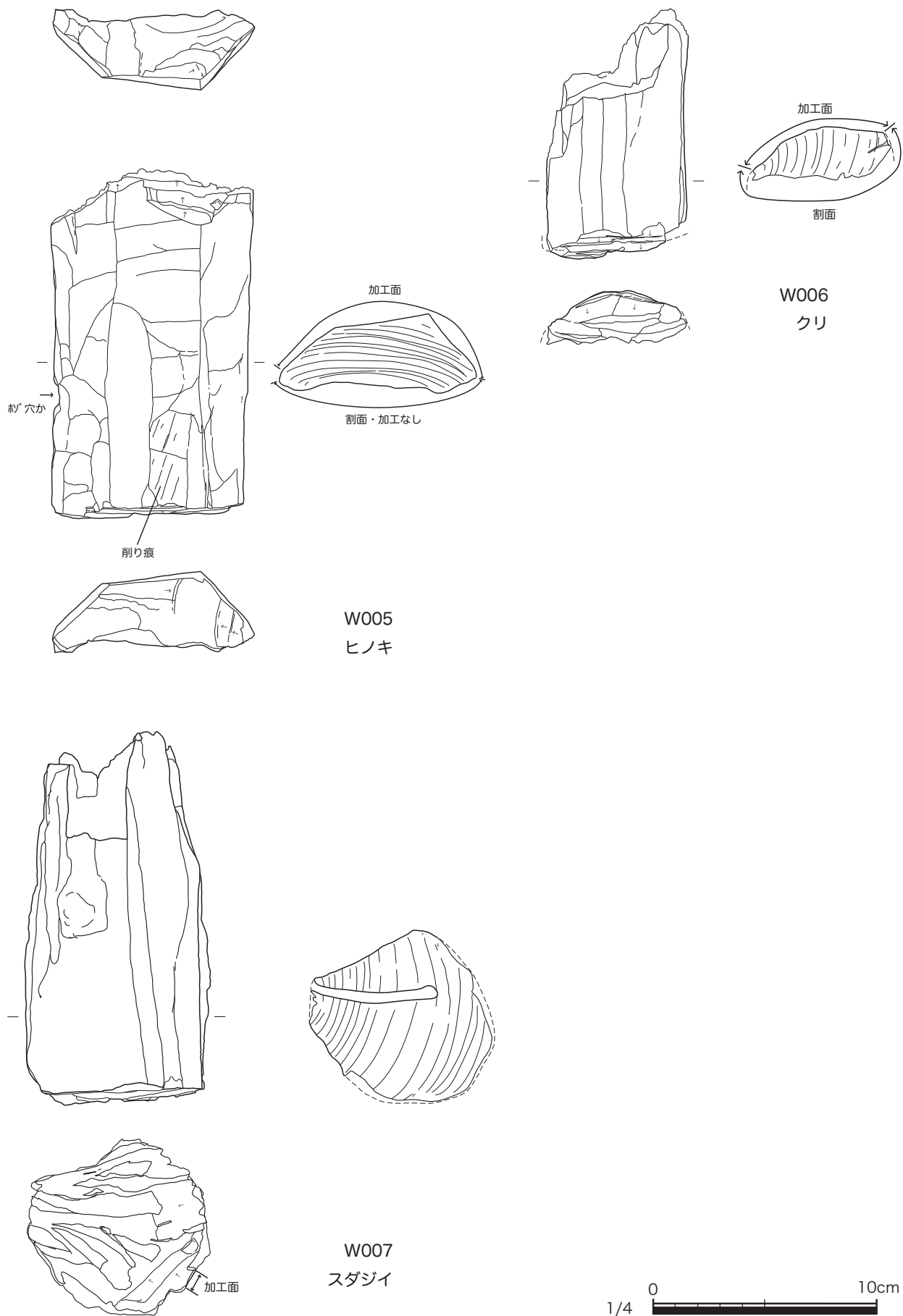
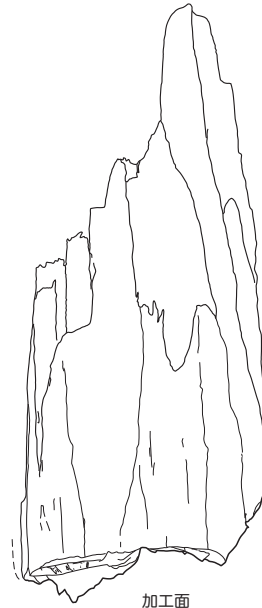
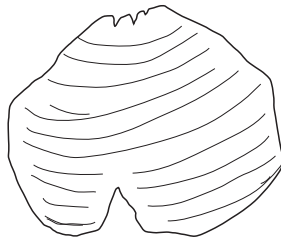
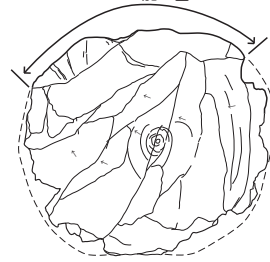


図 67 木製品 2 (1 : 4)

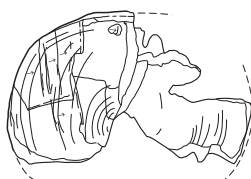
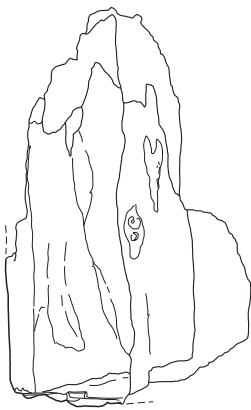
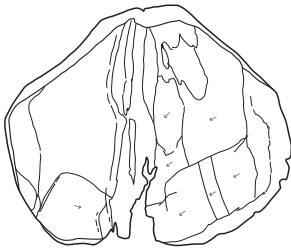


加工面



W008
クリ

W009
ヒノキ



W010
ヒノキ

図 68 木製品 3 (1 : 4)

0 10cm
1/4

第4章 権六遺跡における 地下層序と古地理・古環境

鬼頭 剛

第1節 はじめに

知多半島の南西端、知多郡美浜町野間の権六遺跡において試錐調査を実施し、その層序解析、火山灰分析および放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する。また、遺跡周辺における地形解析の結果を基に古地理・古環境について述べる。

第2節 試料および分析方法

14A 区の南端の1地点で地表から試錐調査を実施した(図69)。採取したコアは科学分析室に運び、地層の観察および火山灰分析と放射性炭素年代測定用の試料を採取した。分析方法の詳細を以下に記す。

試錐調査は2015年(平成27年)2月、株式会社アーキジオに依頼し、油圧式ロータリー型試錐機を使用した。コアパックスリーブ内蔵型サンプラー(φ66mm)によるオールコアで実施した。

火山灰分析の試料は古澤(2003)の方法を基本に前処理を行なった。はじめにナイロン製#255メッシュシート(糸径43μm、オープニングワイド57μm)を用い、流水中で洗浄した。残渣を#125メッシュシー

ト(糸径70μm、オープニングワイド133μm)を用い水中で篩い分けした。これにより極細粒砂サイズ(1/8~1/16)に粒度調整した試料を超音波洗浄器を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。薄片作成は、鉍物観察用スライドガラスの上に硬化後屈折率が1.545程度となる光硬化樹脂をのせ、この樹脂に洗浄・篩い分けを行なった試料を攪拌・封入させ、カバーガラスで覆い粒子組成観察用薄片を作成した。樹脂の屈折率を1.545とする目的は石英や長石類の識別にある。前処理・プレパラート封入した粒子を偏光顕微鏡(100倍)を用いて観察し、テフラ純層の場合300粒子(1000粒子の平均値)を古澤(2003)の区別手法にしたがって区分した。また、テフラ固有で含有率の低い粒子の産出層準を特定するため3000粒子(10000粒子の平均値)の粒子組成分析も行なった。屈折率の測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置”MAIOT”を使用した。測定精度は火山ガラスで±0.0001、斜方輝石および角閃石で±0.0002程度である(古澤, 1995)。火山ガラスの主成分分析についてSEMはHITACHI製SU1510を使用し、エネルギー分散型X線マイクロアナライザー(EDX)はHORIBA製EMAX ENERGY EX-270を用いた。分析は古澤地質株式会社に依頼した。

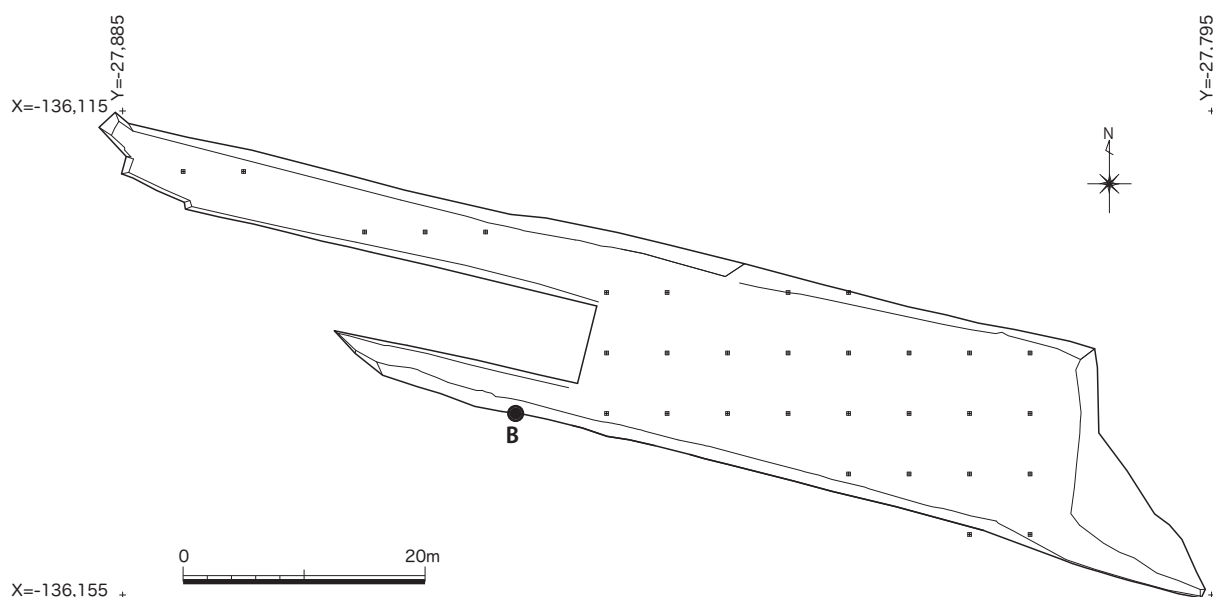


図69 権六遺跡における試錐調査地点
黒丸が調査地点(標高6.45m)を示す

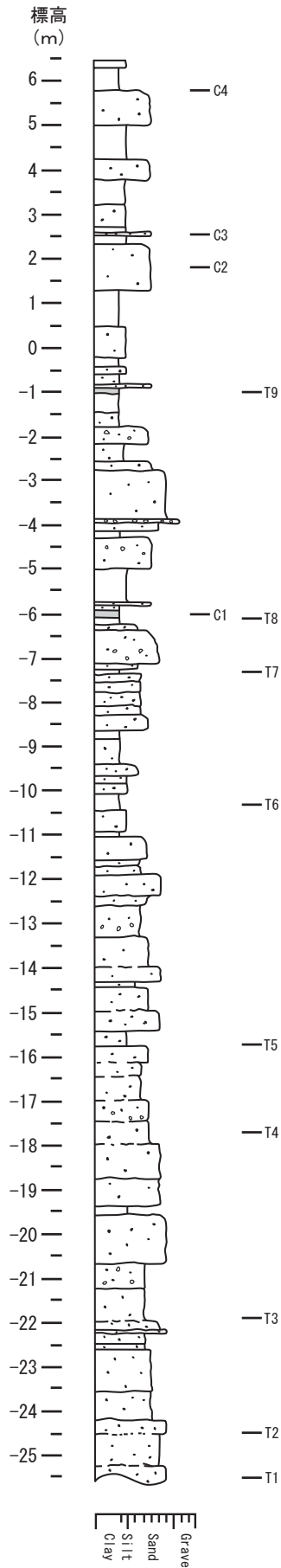


図70 試錐調査地点の層序と分析試料採取層準
Cは放射性炭素年代測定試料、Tは火山灰分析試料の
採取層準を、数字は試料番号を示す

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL13）を使用した。なお、2 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された放射性炭素年代誤差に相当する 95.4% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地点を含めた広域的な周辺地形を解析するため、1/3000 スケールで等高線図を作成した。等高線図の作成にあたり愛知県知多郡美浜町役場発行の「都市計画図（1/3000）」にプロットされた標高値を基にした。なお、都市計画図は現況版に比べて人工的な土地の改変面積の少ない 1969 年（昭和 44 年）版を用いた。現況版との違いは、現在、解析範囲を南北方向に通る名古屋鉄道知多新線がまだ開通していないことが挙げられる。なお解析にあたって、河川堤防や高速道路、工場や学校のような、人工的に建設・造成されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。描画後に現地踏査を実施して実際の地形と等高線から読み取れる地形の起伏との整合性を確かめ、さらに航空写真を基に検討を加えた。

第3節 分析結果

試錐層序

14A 区南端の 1 地点で地表から試錐調査を実施した（図 69）。各地点の層序の特徴をまとめて以下に述べる。

深度 32m のコア資料を得た（図 70）。下位層より順に、標高 -25.53m ～ -24.19m までは極粗粒砂～粗粒砂層が卓越し、標高 -25.53m ～ -25.23m はシルト混じりの極粗粒砂層、標高 -25.23m ～ -24.55m にはシルト混じりの粗粒砂層、標高 -24.55m ～ -24.19m はシルト質極粗粒砂層である。各地層はすべて灰白色（新版標準土色帖によるカラーチャートで 2.5Y8/2：以下の文章ではカラーチャートの記号のみを記す）を呈し、層理面は不明瞭である。淘汰は良好であるものの堆積構造は認められない。半固結状態である。最下位層（標高 -25.53m ～ -25.23m）の下底（標高 -25.53m）より火山灰分析試料（T1）を、標高 -24.55m ～ -24.19m

のシルト質極粗粒砂層の下部（標高 -24.49m）より火山灰分析試料（T2）を採取した。標高 -24.19m から標高 -20.63m までは下位層に比べて若干の堆積物の粒径の減少と含まれるシルト成分の増加がみられる。標高 -24.19m ～標高 -23.55m は灰白色（2.5Y8/2）を呈するシルト質中粒砂層であり、砂成分が卓越する。淘汰は良好であるものの堆積構造は認められない。本層も半固結状態である。本層よりも上位の層は地層が全体に黄色を帯びようになる。標高 -24.15m の層準から火山灰分析試料（T3）を採取した。標高 -23.55m ～標高 -22.60m は浅黄色（2.5Y7/3）の中粒砂層である。淘汰は良好で基質にシルトなど細粒成分を含まない。標高 23.51m の層準で火山灰分析試料（T4）を採取した。本層を含めて地表までの各地層の固結度はすべて未固結となる。標高 -22.60m ～標高 -22.45m はにぶい黄褐色（10YR5/4）のシルト質細粒砂層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。シルト成分が卓越する。標高 -22.45m ～標高 -22.19m はにぶい黄色（2.5Y6/4）の極粗粒砂サイズの砂粒子の混じるシルト質細粒砂層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高 -22.19m ～標高 -22.13m はにぶい黄色（2.5Y6/4）のごく薄い層厚の極粗粒砂層からなる。標高 -22.13m ～標高 -21.95m はにぶい黄色（2.5Y6/4）のシルト質粗粒砂層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高 -21.95m ～標高 -21.21m もにぶい黄色（2.5Y6/4）を呈し、シルト質細粒砂層からなる。標高 -21.21m ～標高 -20.63m も下位層と同じ色調であり、シルト質細粒砂層からなる。塊状で堆積構造がみられない特徴は下位層と類似するが、角礫を主体とする中礫層が地層中に分散する傾向がみられる。標高 -20.63m から標高 -17.93m までは下位層に比べて堆積粒子の粒径が若干大きくなり、浅黄色（2.5Y8/4）や淡黄色（2.5Y8/3）を呈するシルト質粗粒砂層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられず、シルト成分を含む。標高 -19.50m ～標高 -19.33m には黄色（2.5Y8/6）のシルト層を挟む。標高 -17.93m から標高 -10.97m まではシルト質中粒砂層やシルト質細粒砂層が互層する。含まれるシルト成分の量が下位層に比べて多くなることが特徴である。標高 -15.75m ～標高 -15.39m に浅黄色（5Y7/3）の砂質シルト層が挟まれる。標高 -17.93m ～標高 -17.41m のシルト質中粒砂層の標高 -17.65m の層準から火山灰分析試料（T4）を、標高 -15.75m ～標高 -15.39m の砂質シルト層の標高 -15.71m の層準から火山灰分析試料（T5）を採取した。標高 -10.97m から標高 -8.65m にかけてオリーブ黄色（5Y6/3）や明黄褐色（2.5Y7/6）を呈する粘土層や砂質シルト層、あるいは砂粒子を含むシルト質細粒砂層の互層が卓越する。標高 -10.41m ～標高 -10.03m のオリーブ黄色（5Y6/3）

を呈する粘土層の標高 -10.35m の層準から火山灰分析試料（T6）を採取した。標高 -8.65m から標高 -1.81m まではシルト質の極細粒砂や細粒砂層、あるいはシルト質の粗粒砂層といった粗粒な堆積粒子と、細粒なシルト質粘土層や砂質シルト層とが互層するようになる。標高 -7.35m ～標高 -7.25m の灰オリーブ色（5Y6/2）のシルト質粘土層の標高 -7.31m の層準から火山灰分析試料（T7）を、標高 -6.21m ～標高 -6.07m の黄灰色（2.5Y5/1）シルト質粘土層の標高 -6.15m の層準から火山灰分析試料（T8）、その上を覆う標高 -6.07m ～標高 -5.91m の黒色（10YR1.7/1）の粘土層の標高 -6.01m から放射性炭素年代測定試料（C1）を採取した。標高 -1.81m から標高 1.27m まではシルトや粘土の細粒な堆積粒子が卓越する層相となり、標高 -0.89m ～標高 -0.85m にごく薄く細礫の混じるシルト質中粒砂層が挟まれるのみである。このシルト質中粒砂層の下位にある標高 -1.05m ～標高 -0.89m の黒褐色（10YR3/1）を呈する粘土層の標高 -1.01m から火山灰分析試料（T9）を採取した。標高 -1.81m から地表（標高 6.45m）までにはシルト質中粒砂層と粘土層やシルト層との互層となる。標高 1.27m ～標高 2.33m の黄褐色（2.5Y5/3）のシルト質中粒砂層の標高 1.81m の層準から放射性炭素年代測定試料（C2）を、標高 2.53m ～標高 2.57m の灰黄色（2.5Y6/2）のシルト質中粒砂層の標高 2.54m の層準から放射性炭素年代測定試料（C3）、標高 5.76m ～標高 6.28m の黄褐色（2.5Y5/2）のシルト質粘土層の標高 5.78m の層準から放射性炭素年代測定試料（C4）を採取した。

火山灰分析

試錐資料から 9 点（T1 ～ T9）を採取し分析に供した。標高 -21.85m（深度 28.30m）から採取した試料 T3 と標高 -7.31m（深度 13.76m）の試料 T7 からは火山ガラスがまったく検出されなかったが、その他の試料からはごく微量ながら火山ガラスが認められた（表 2）。火山ガラスがみられる試料からはバブルウォールタイプ（Bw）からパミスタイプ（Pm）の火山ガラスが含まれる。火山ガラスの主成分化学組成からは、標高 -1.01m（深度 7.46m）の試料 T9 に含まれる火山ガラスの化学組成がほぼ始良 Tn 火山灰（AT）起源であることがわかった。鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）起源の火山ガラスは含まれていない。また、試料 T9 よりも下位層に含まれる火山ガラスには AT と主成分が一致するものは含まれていなかった。いっぽう、試料 T9 以外にも火山ガラスが含まれており、例えば標高 -17.65m（深度 24.10m）の試料 T4 や標高 -10.35m（深度 16.80m）の試料 T6 にも火山ガラスがみられ、試料 T4 からはパミスタイプが、試料 T6 ではバブルウォー

表2 試錐調査試料における火山灰の粒子組成分析結果

試料 番号	標高 (m)	火山ガラスの形態別含有量 (/3000)			重鉱物の含有量 (/3000)			β 石英 (/3000)	備考	火山ガラス の屈折率	テフラ名
		Bw	Pm	O	Opx	Gho	Cum				
T9	-1.01	0.6	0.0	0.4	0.1	0.6	0.0	0.2			AT混在
T8	-6.15	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0			
T7	-7.31	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0			
T6	-10.35	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0			未対比テフラ起源ガラス含む
T5	-15.71	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0			
T4	-17.65	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	(試料微量)		未対比テフラ起源ガラス含む
T3	-21.85	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	(試料微量)		
T2	-24.49	0.1	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0			
T1	-25.53	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	(試料微量)		

Bw : バブルウォールタイプ
Pm : パミスタイプ
O : 低発泡タイプ

Opx : 斜方輝石
Gho : 緑色普通角閃石
Cum : カミングトン閃石

表3 試錐調査試料における放射性炭素年代測定結果

地点	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code Nb. (method)
C 1	14A	-6.01	粘土層	土壌	43930 $\pm$ 290	-31.22 $\pm$ 0.25	46033 - 44377 BC (95.4 %)	47982 - 46326 (95.4 %)	PLD - 31802 (AMS)
C 2	14A	1.81	シルト 質中粒砂層	土壌	6235 $\pm$ 25	-26.22 $\pm$ 0.24	5301 - 5204 BC (70.3 %) 5167 - 5076 BC (25.1 %)	7250 - 7153 (70.3 %) 7116 - 7025 (25.1 %)	PLD - 31801 (AMS)
C 3	14A	2.54	シルト 質中粒砂層	生の草本類	35 $\pm$ 20	-15.24 $\pm$ 0.23	post-bomb NH2 2013: 1889 - 1911 AD (79.5 %) 1954 - 1955 AD (11.0 %) 1709 - 1718 AD (3.4 %) 1827 - 1832 AD (1.6 %)	post-bomb NH2 2013: 62 - 40 (79.5 %) -4 - -5 (11.0 %) 242 - 233 (3.4 %) 124 - 118 (1.6 %)	PLD - 31800 (AMS)
C 4	14A	5.78	シルト 質粘土層	土壌	1700 $\pm$ 20	-23.74 $\pm$ 0.23	321 - 397 AD (77.6 %) 257 - 296 AD (17.8 %)	1629 - 1553 (77.6 %) 1693 - 1655 (17.8 %)	PLD - 31799 (AMS)

ルタイプと低発泡タイプ (O) のものが検出された。これらの火山ガラスの主成分化学組成分析を行ない、調査地点周辺における 80 万年以降に降灰した広域テフラの火山ガラス主成分化学組成 (町田・新井, 2003) と比較したが、試料 T4 および試料 T6 に含まれる火山ガラスの主成分化学組成と一致するものは含まれていなかった。

放射性炭素年代測定

試錐資料から 4 点 (C1 ~ C4) を採取し分析に供した (表 3)。標高約 -7.5m (深度約 13.5m) よりも下位にある地層からは放射性炭素年代測定に適した試料を採取することができなかったため、数値年代が得られたのは標高約 -7.5m よりも上位層からである。標高 -6.07m ~ -5.91m の黒色 (10YR1.7/1) の粘土層の標高 -6.01m より採取した試料 C1 (土壌 (ヒューミン)) が 47982 - 46326 (BC 46033 - 44377) cal yrs BP (PLD-31802) と 4 万年前代であり、今回の試料の中ではもっとも古い数値年代を示した。標高 1.27m ~ 2.33m の黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質中粒砂層の標高 1.81m から採取した試料 C2 (土壌 (ヒューミン)) が 7250 - 7153 (BC 5301 - 5204) cal yrs BP (PLD-31801) と約 7000 年前代であった。もっとも地表に近い標高 5.76m ~ 6.28m の黄褐色 (2.5Y5/2) を呈するシルト質粘土層の標高 5.78m より採取した試料

C4 (土壌 (ヒューミン)) は 1629 - 1553 (AD 321 - 397) cal yrs BP (PLD-31799) であった。なお、標高 2.53m ~ 2.57m のシルト質中粒砂層から採取した標高 2.54m の試料 C3 (草本類) では暦年較正範囲が 1950 年以降を示す新しい数値年代を示した。

第4節 遺跡周辺の等高線図

東西約 3.0km、南北約 5.2km の範囲全体では標高 0m から標高 80m までの等高線が描かれる。解析範囲全体では南 (南知多町側) で標高 10m から標高 80m までと相対的に高く、北と西に向かい低くなる傾向がある (図 71)。解析範囲には北から順に山王川、杉谷川、富具崎川が東の丘陵地から西方の伊勢湾を目指して流下する。地形解析のために使用した 1969 年 (昭和 44 年版) の都市計画図 (1/3000) を基にすれば、解析範囲の南北には主要地方道常滑師崎線が通り、それと直交する東西方向には県道奥田内福寺豊浜線や県道野間河和線が通る。現在、主要地方道常滑師崎線の東側に並行して名古屋鉄道知多新線が通っているが、1969 年当時にはまだ開通していないため解析図の中には線路は入っていない。

解析図全体について、図の南端、南知多町では標高 10m ~ 80m までと範囲内では相対的に標高の高い場所である。いっぽう、南端の南知多町から北側には標

高0m～40mの相対的に低い地域がひろがる。さらにそれらの地域は標高10m付近を境として、標高10mを超える標高10m～40mの丘陵地がひろがる範囲と、標高10mよりも低い標高0m～10mの低地がひろがる範囲とに分けられる。標高10mの等高線を目安にすればそれらは東と西に明瞭に分けることができる。本論では主に標高10m以下に認められる地形の起伏についての特徴を、周りよりも相対的に標高の高い尾根地形と低い谷地形とに分けて述べる。

尾根地形を北から南へ順に地形要素を列記する。

1. 図の北、小原池の西にある小原から南へ石亀、奥田へと連なる標高2.0m～6.0mで東西約560m、南北約2000mの尾根地形がみられる。この地形は標高10m～30mで図の北東にひろがる丘陵地沿いにみられる。この尾根地形の南西端において、地形の南を流れる山王川が西方の伊勢湾へと注ぐ近傍では尾根地形が西側へ突き出した標高2.0m～3.4mの舌状地形が認められる。また、奥田では丘陵地の最南端において標高10mを超える島状の地形が連なりながら、標高2.0m～20mまでで南へ突き出した舌状地形をなしている。

2.1の小原、石亀、奥田までの南北方向に連なった尾根地形が奥田川を挟んだその南には、南奥田に標高2.0m～3.8mで南北約120m、東西約90mの島状の地形と、さらにその東に標高2.0m～4.2mで南北約195m、東西約600mの島状地形が隣り合って2つ認められる。

3. 南奥田において2つの隣り合った尾根地形からさらに南西にある若松には、伊勢湾との海岸線に沿って南北方向にのび、標高1.0m～4.2mで南北約1200m、東西約460mの島状の地形がひとつみられる。

4. 若松において海岸線近くにみられる島状地形とその南を流れる杉谷川を挟んだ南の対岸には、北の下高田から西の中新田までに広がる標高1.0m～7.0mで南北約1160m、東西約900mの島状地形がひとつみられる。

以上のように、解析範囲の標高10mよりも低い地域には5個所の相対的に標高の高い地形が認められた。

つぎに、等高線図から読み取れる谷地形について北から南へ順に述べる。

1. 図の北、小原池の西方にある小原、石亀、奥田へと連なる尾根地形にはいくつかの谷地形が認められ、それらは西方の伊勢湾側に開いている。小原には標高2.0m～5.0mで東西方向の谷の長さ約230m、南北方向の谷の幅約420mの谷地形がある。その南の石亀付近には標高2.0m～5.0mで東西方向の谷の長さ約420m、南北方向の谷の幅約370mの谷地形が、さらに南の奥田付近には標高2.4m～5.0mで東西方向の谷の長さ約300m、南北方向の谷の幅約390mの谷地

形、そのさらに南には標高2.6m～3.6mで北西-南東方向の谷の長さ約270m、北東-南西方向の谷の幅約200mの谷地形の計4個所の谷地形がみられる。

2. 現在の山王川の流路直下には標高2.0m～7.0mで東西方向の総延長約2500mの谷地形がみられる。

3. 新大町から外面にかけて、標高10m以上の丘陵地がつくる南北方向の丘陵地縁辺に沿って南から北方向に開く標高2.0m～3.2mで南北方向の谷の長さ約970m、東西方向の谷の幅約130mの谷地形がある。新大町はこの谷地形の谷頭にあたっている。新大町の東である権六に調査地点がある。この谷地形は現在の山王川で流路直下にみられた谷地形と合流する。

4. 若松の海岸線に沿ってみられた南北にのびる島状地形の北にひとつ、南にひとつの尾根地形がみられる。北の谷地形は標高2.0m～3.2mで北西-南東方向を向く谷の長さ約470m、北東-南西方向の谷の幅約500mで北西に開く谷と、標高2.2m～3.2mで北東-南西方向の谷の長さ約490m、北西-南東方向の谷の幅約590mで南西に開く2個所の谷地形がみられる。

5. 図の南東、標高20m付近の丘陵地にある杉谷池を源流として、西方の伊勢湾に注ぐ現在の杉谷川の流路直下にみられる標高2.2m～10.0m以上で東西方向の総延長約2340mの谷地形がみられる。丘陵地を開析するこの谷地形の北側端、標高10m付近が権六遺跡の調査地点がある場所である。

6. 杉谷川の南に認められた標高1.0m～7.0mの尾根地形のさらに南にある柿並にみられる、標高2.0m～4.2mで標高1.0m～7.0mの尾根地形の東から南を囲むような東西方向の総延長約900m、南北方向の谷の幅約150mの谷地形がある。

7. 開析範囲の南端で現在の富具崎川の流路直下にみられる標高2.0m～9.0mで東西方向の総延長約1190m、南北方向の谷の幅約140mの谷地形がある。以上11個所の谷地形が認められた。まとめると、解析範囲には標高10mよりも低い範囲には周りよりも標高の高い5個所の尾根地形と、標高の低い11個所の谷地形が認められることになる。

第5節 考 察

権六遺跡調査地点における地下層序と堆積年代

権六遺跡では14A区の1地点で試錐調査を実施し、地下の堆積物の状況を捉えた。深度32mのコア資料の地下層序は堆積物の粒径をもとに標高-10.97m（深度17.42m）で大きく2つのユニットに分けられる。標高-10.97m（深度17.42m）よりも下位のユニットは極粗粒砂から細粒砂サイズの砂粒子が卓越することで特徴づけられる。また、標高-25.55m（深度32.00m）

から標高-23.55m（深度30.00m）まではシルトの混じる極粗粒砂～粗粒砂や中粒砂からなる砂層が堆積し、その固結度は半固結状態であり、明らかに未固結な完新統堆積物ではないことが判別できた。いっぽう、標高-10.97m（深度17.42m）よりも上位層では粘土層やシルト層といった細粒な堆積物がみられる頻度が多くなった。下位層でみられた砂粒子の卓越する地層の堆積年代を得るために9試料の火山灰分析を実施し、ごく微量ながら7試料から火山ガラスが認められた。7試料の火山ガラスにはバブルウォールタイプ（Bw）からパミスタイプ（Pm）のものが含まれていた。火山ガラスが検出された7試料のうち、特に標高-1.01m（深度7.46m）の試料T9に含まれる火山ガラスの化学組成は始良Tn火山灰（AT）起源であることがわかった。また、試料T9よりも下位層に含まれる火山ガラスには始良Tn火山灰（AT）と主成分が一致するものはなかった。加えて、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）起源の火山ガラスは含まれていなかったため、試料T9の層準（標高-1.01m：深度7.46m）およびその下位層は完新統堆積物ではなくそれよりも古い堆積物となる。試料T9から検出された火山ガラスは始良Tn火山灰（AT）起源に対比された。始良Tn火山灰（AT）は約2万9000年前～2万6000年前の火山灰と見積もられている（町田・新井，2003）。このことから試料T9の層準付近はおおよそ2万9000年前～2万6000年前頃に堆積したものであると考えられる。試料T9よりも約5m下位で採取した土壌試料（標高-6.01m：深度12.46m）の放射性炭素年代試料C1は47982-46326(BC 46033-44377) cal yrs BP (PLD-31802)の数値年代を示しており、更新統堆積物が権六遺跡の調査地点地下に存在することがわかった。いっぽう、標高-1.01m（深度7.46m）の試料T9よりも上位の地層では、標高1.27m～標高2.33mの黄褐色シルト質中粒砂層の標高1.81mの層準から採取した土壌の放射性炭素年代測定試料（C2）が7250-7153(BC 5301-5204) cal yrs BP (PLD-31801)と約7000年前代の数値年代を示したことで約1万年前以降の完新統堆積物であることがわかる。この結果から、始良Tn火山灰（AT）が検出された標高-1.01m（深度7.46m）の層準と約7000年前代の放射性炭素年代を得た標高1.81mの層準との間には更新統と完新統との地層境界が存在することになる。それがどの層準にあたるのか、詳細な解析が今後の課題である。ところで、試錐層序の上部、標高5.76m～標高6.28mにみられる黄褐色シルト質粘土層の標高5.78mの層準から採取した土壌の放射性炭素年代測定試料（C4）は1629-1553(AD 321-397) cal yrs BP (PLD-31799)であった。権六遺跡の調査地点は標高10m以上の丘陵地の南側縁辺にある

が、少なくとも約1600年前から約1500年前代の頃には人為活動が行なわれるような環境にあったことがわかった。

調査地周辺の古地理・古環境

東西約3.0km、南北約5.2kmの範囲全体には標高0mから標高80mまでの等高線が描かれた。解析範囲全体では南端付近（南知多町側）で標高10mから標高80mまでと相対的に高く、等高線間隔も密なことから地形の傾斜が急であることが読み取れる。いっぽう、それよりも北では等高線間隔が広く、緩傾斜であることがわかる。この緩傾斜部分の標高10mを境に明瞭に分けられ、標高10mよりも高い丘陵地と、標高10mよりも低い低地部分とに分けられる。特に低地部分は西側半分に広がっていることがわかる（図71）。さて、標高10mよりも低い範囲には緩傾斜ではあるものの地形の起伏が読み取れ、多くの尾根状や谷状の地形が認められた。解析範囲には尾根状あるいは島状・孤立丘状をなして相対的に標高の高い地形が5箇所、谷地形が11箇所認められた。ところで、知多半島の伊勢湾に臨む西側縁辺には断片的に完新統の分布する場所が知られており、それらは北から順に東海市付近、常滑市付近、野間付近、内海にある。これらの地域の完新統は海岸平野を形成しており、砂堆や浜堤が発達している。権六遺跡周辺の地形解析図において標高10mよりも低い範囲に現われた5箇所の相対的に標高の高い地形も、現在その範囲を流下している山王川、杉谷川、富具崎川の流路方向には並行せず、海岸線ののびる南北方向に長軸をもっていることから、それらは砂堆地形を捉えているものと言える。

さて、ここで権六遺跡の周辺でみられる起伏をみる。権六遺跡の調査区は現在の杉谷川の流路の右岸側、美浜町権六の標高10m以上の丘陵地の杉谷川の流路をのぞむ南側縁辺に位置している（図71）。現在の杉谷川の流路直下には標高2.2m～10.0m以上で東西の総延長約2340mの谷地形がみられた。現在の杉谷川は標高20mほどにある杉谷池を源流として、西の伊勢湾をめざしてほぼ直線状に流下し、下長堀で南西方向に屈曲し伊勢湾に注いでいる。だが、標高値を基にした地形解析を行なった結果、かつて杉谷川が流れ下っていたであろう河川流路を推定することができる。例えば、権六の西にある新大町から、新大町の北の外面上にかけて、標高2.0m～3.2mで南北方向の谷の長さ約970m、東西方向の谷の幅約130mの北側に開いた谷地形が認められた。現在この周辺には南北方向を流路にもつ河川はみられないことから、この谷地形はかつて杉谷川が新大町から外面へ向かって流下していた履歴を示すものと考えられる。また、解析範囲の南

西にある下高田から中新田までに広がる標高 1.0m ～ 7.0m で南北約 1160m、東西約 900m の島状地形がみられたが、この地形の東と南を囲むように東西方向の総延長約 900m、南北方向の谷の幅約 150m の谷地形が認められた。現在、この谷地形の中を流れる大きな河川は存在しないが、これもかつて杉谷川が流下していた名残である可能性を指摘できる。なお、この谷地形の中には現在でも小さな用水がみられ、周囲よりも低い場所であることがわかる。さらに、図の中央西の若松では標高 1.0m ～ 4.2m で南北約 1200m、東西約 460m の海岸線に沿って南北方向にのびる島状の地形がみられたが、この地形の北の松中には標高 2.0m ～ 3.2m で北西 - 南東方向を向く谷の長さ約 470m の谷地形が、地形の南にある後田の北には標高 2.2m ～ 3.2m で北東 - 南西方向の谷の長さ約 490m、北西 - 南東方向の谷の幅約 590m で南西に開く谷の、2 個所の谷地形が認められた。ただ、この谷地形をつくる等高線の谷頭までを含めた谷幅が相当に広いため、波浪による寄せ波や引き波による浸食・堆積作用で形成された谷地形であると考えられる。以上のことから、現在、西の伊勢湾へ流下する直線状の流路である杉谷川は、かつては権六付近から新大町を越えて北の外面や、同じく権六付近から下高田付近を通り現在の富具崎川へと流れ下っていた時期があったものと推定され、権六遺跡の調査地点付近は河川流路が分岐する起点であったものと推定される。

謝辞

本論を作成するにあたり、試錐調査では株式会社アーキジオに、火山灰分析では古澤地質株式会社の古澤明氏に、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループの伊藤 茂氏・安昭炫氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林紘一氏・Zaur Lomatatidze 氏・小林克也氏にお世話になった。試料の整理・保管と図面作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
 古澤 明, 2003, 洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別, 地質雑, 109, 1-19.
 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東京大学出版会, 336p.

掘立柱建物や柱穴列、溝が遺構として確認できるのは12世紀末～14世紀前半にかけてのものがほとんどで、遺跡の西側にある14A区・14B区では、SI01、SB01～SB08、SA01～SA13、14A区008SD、同043SD、同049SD、同069SD、同070SD、同055SK、同056SK、14B区228SKなどがある。遺跡の東側では14C区の西側にあるSA14～SA16、14C区007SK、同020SK、同027SK、同028SK、同117SK、同090SK、同079SD、同区091NRの上面にて検出された土坑群、14D区024SK、同047NR、同048NRがある。

この段階の遺跡西側の変遷を出土遺物や遺構の位置関係から詳しくみると(図73)、平安時代末の可能性のある中世1段階(12世紀後半以前)には、14B区SI01、同SA01があり、続く中世2段階(12世紀後半～13世紀前半)の遺構として、中世1段階の遺構に併行する可能性のあるもので、14A区008SD、同070SD、同055SK、12B区SB07、同SA08、同228SKがある。この段階の遺構は14B区SA01と軸線を合わせて同時存在した可能性があるものである。その後中世3段階(13世紀前半～中頃)の遺構と考えられるものとして、14A区SA13、同043SD、同015SK、14B区SB01、同SB04、同SB08、同SA02、

同SA03、同SA04、同SA05、同SA07、同SA10があり、多くの掘立柱建物や柱穴列などの遺構がみられるようになり、柱穴列SA02の南北に掘立柱建物が軸線を揃えて並ぶ遺構配置となる。SB04は排尿・排水用の土坑や溝はないが、東西に細長い建物型式で、馬小屋の形態に類似する(篠崎2010)。中世2段階の溝はこの段階から中世4段階の遺構になる可能性がある。なお、柱穴列の14B区SA01とSA02は、14B区SB01～SB03の西にある柱穴の底の標高がその東西の柱穴の底の標高より高くなる傾向にあり(SA01の288SK・289SKとSA02の292SK、また288SKに対応する位置の柱穴がみられなかった)、この部分の柱穴がやや南に振れる点も考えると、この部分に南から北北東に通る出入り口があった可能性がある。中世4段階(13世紀後半)の遺構は最も多く、14A区SA11、同SA12、同056SK、同069SD、14B区SB02、同SB05、同SB06、同SA09がある。この段階には14B区に東西に伸びていた柱穴列SA01・SA02と共存しない掘立柱建物が営まれるものと考えた。中世5段階(13世紀後半～14世紀)の遺構は14A区049SD、14B区SB03、同SA06、同034SD、同361SK・同362SD、同420SK・同480SK、同495SDがあり、中世4段階以前の掘立柱建物や柱穴列などと重複する位置にある

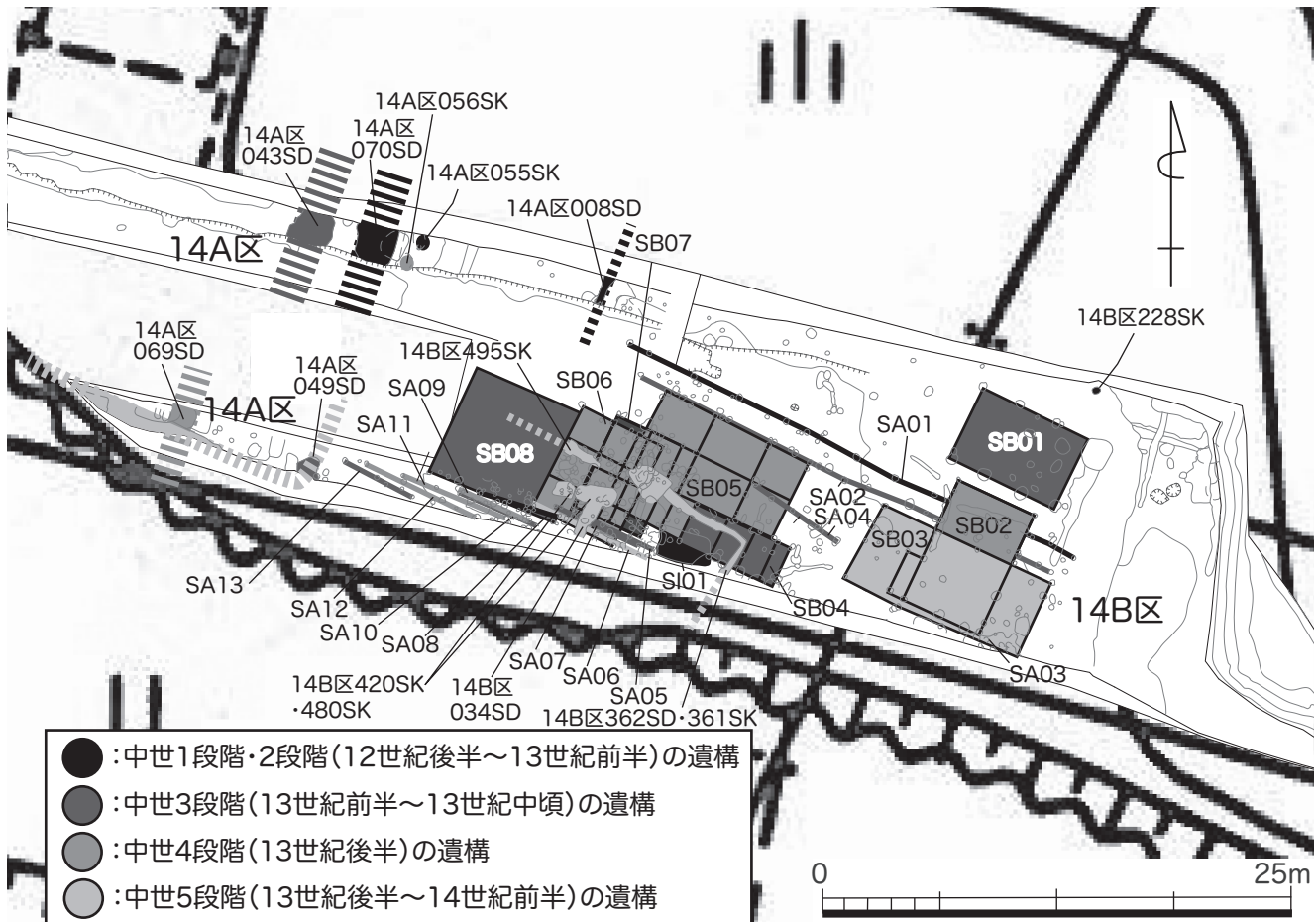


図73 中世の遺構変遷(1:400)

溝や土坑がみられるようになる。14B 区 SD361SK・同 SD362 と同 SK495 は一辺 11m 以上の方形区画を形成する溝と思われ、北北東に溝が途切れる開口部がみられる。この段階には掘立柱建物と柱穴列が減少する。

戦国時代

15 世紀後半～16 世紀前半にかけての遺構と考えられるもので、14A 区 018SK (16 世紀) 14A 区 035SD・036SD (16 世紀)、14A 区 053SK (15 世紀後半以後)、14B 区 383SD、同 418SK などがある。14A 区の南側から 14B 区の南西側を中心に遺構がみられ、遺構の分布が 14A 区・14B 区の南外側に移るようである。

江戸時代後期～近代

中世から江戸時代にかけてのものを含むが、14A 区 001SK、同 003NR、同 004SD、同 005NR、同 007SX、同 051SD、14B 区 174SD、同 177SE、14C 区 065SK・066SK、同 070SX・072SK・074SK がある。この時期のものとして、明らかに近代以後のものは含めていない。遺跡の西側では、14A 区にみられる自然流路 (14A 区 003NR、005NR) やこの自然流路より新しい溝 (14A 区 004SD、051SD)、14B 区にある井戸とそこからのびる用水溝 (14B 区 177SE と 174SD) があり、上流からの土砂の流入とその後の耕作地の再開発が行われた様子がうかがわれる。遺跡の東側では、鎌倉時代の遺構群を埋めた整地の可能性もある遺構 (14C 区 070SX・072SK・074SK) がみられ、谷状の窪地を埋めて耕作地などを造成したことが想定される。

第 2 節 主要遺物の状況

在地産の南部系陶器

本遺跡において最も多くの出土がある遺物として、在地の知多半島の古窯にて生産されたものと考えられる南部系陶器がある。器種には碗・小碗・小皿・広口壺・鳶口壺・甕、片口鉢Ⅰ類・片口鉢Ⅱ類などがある。参考にした研究によるものではあるが、知多半島産の南部系陶器は 12 世紀前半の常滑 1a・1b 型式から常滑 6b 型式までのものがあり、常滑 3 型式～6a 型式のものが主体となる。実測図化したものからの分析であるが、常滑 1a・1b 型式に併行する渥美古窯群産と考えられるものは渥美 1a 型式～1b 型式の鉢 (E003) と渥美 1b 型式の碗 (E360) があり、他に知多半島以外の古窯産のものとして尾張 3 型式の小碗 (E401) がみられる。

また 13 世紀後半の常滑 6a 型式までは碗・小皿・片口鉢Ⅰ類・盤・片口碗・甕などが多く確認できたが、常滑 6b 型式では片口鉢Ⅱ類を 2 点 (E289・E290) 確

認できたのみであり、同時期のものでは他に瀬戸 7 型式の碗 (E029・E234)、瀬戸 8 型式の碗 (E011) が確認できた。

以上のことから平安時代後期～鎌倉時代の遺構に関連する南部系陶器は 12 世紀中頃までは知多半島以外の尾張地域産や渥美半島産の碗や小碗、鉢が少数搬入されるが、その後はほぼ知多半島産のものが使われ、13 世紀後半～末以後は知多半島産の陶器が減少する中で、再び知多半島以外の瀬戸地域などから碗などが搬入された状況が確認できた。また、14C 区 001SX 出土の甕 (E293・E294) は、遺跡で発見した当時、江戸時代以後の甕かと見間違えたほどの赤色化した焼成不良品であり、他にも橙色化、灰黄色化した軟質の甕体部片が多数出土した。これらは、本遺跡が在地の古窯で焼成された赤色化した甕などの受け入れ先となっていたことを示す資料とも考えられるもので興味深い。

在地産の瓦

14B 区の建物跡を構成する柱穴などから出土した布目痕や粘土の小引き痕を残す瓦がある。実測図化したもので、丸瓦 4 点と平瓦 7 点の計 11 点があり、柱穴などの土坑から型式の判明する南部系陶器と伴出したものをあげると、14A 区 007SX より常滑 3 型式～6a 型式の片口鉢Ⅱ類 (E022)・碗 (E023～E028)・小皿 (E030～E033)・陶丸 (E034)・壺 (E035)・瀬戸 7 型式の碗 (E029)・青磁碗 (E036～E038)・土鍾 (E039) と平瓦 (E040)、14A 区 015SK より常滑 3 型式～5 型式の碗 (E044・E045)・伊勢型鍋 (E046) と平瓦 (E047・E048)、14A 区 043SD より常滑 2 型式～5 型式の碗 (E061・E063)・小皿 (E062) と丸瓦 (E064)、14A 区 069SD より常滑 2 型式～6a 型式の碗 (E092～E096)・小皿 (E097)・片口鉢Ⅰ類 (E098)・広口壺 (E099)・伊勢型鍋 (E100) と丸瓦 (E101) と平瓦 (E102) がある。丸瓦と平瓦のみで出土した土坑が 12 世紀後半～末の掘立柱建物 (SB07) や柱穴列の一部になるものと想定されたものもあるが、出土状況から考えると、出土した瓦の時期は 12 世紀後半～13 世紀後半の時期のものと考えられる。

これらの瓦の出土から、当遺跡で瓦を葺いた建物が存在した可能性もあるが、軒瓦がない点と出土した遺構が区画溝と考えられる溝や建物の柱穴の柱の根固めに用いられたものであることから、本遺跡周辺の古窯等から建物の柱材根固めなどの用途のために搬入されたものと考えられる。周辺の遺跡では、本遺跡の南西約 0.6km にある下高田丸山遺跡において本遺跡の瓦と類似した丸瓦と平瓦が出土しており、同時期に搬入された可能性が高い。

第3節 中世における権六遺跡の特徴

以上の分析から、本遺跡の中心の時期となる平安時代後期～鎌倉時代の特徴をまとめたい（図74）。

第1章において述べたように、平安時代末の権六遺跡は、康治二（1143）年八月の太政官符官牒に記された「庄園拾肆箇処」の一つにある安楽寿院領としての野間内海荘の一部であるものと思われる。そして『平家物語』や『愚管抄』によれば野間内海荘の荘司として長田忠致がおり、『平家物語』において忠致は源義朝の相伝の家来であり、義朝に従う鎌田正清の舅であったとされる。平治の乱以後は、長田忠致・景致父子は源平合戦後まで活躍するが、その間に平康頼による大御堂寺への「水田三十町を寄付し、小堂を建て、六口の僧をして不断念仏を修せし」が行われ、『吾妻鏡』にのこる建久元（1190）年の源頼朝の大御堂寺の墓参にいたる。この頃には野間内海荘の地頭には梶原景高の妻がその職にあり、彼女はのちに尾張国守護となる小野成綱の女であった（磯部・杉崎・福岡1983）。

さて、本遺跡はまさにこの歴史事象の舞台のほど近くに所在する遺跡であり、出土遺物からは10世紀後半以後のものが散見され、12世紀中頃以後は出土遺物量も増加し、先に述べた中世1段階の遺構群がみられるのである。本遺跡の14B区と14C区の間のにのびる丘陵上には、美浜町町史跡の千人塚があり、源義朝と鎌田正清の体が埋められたとする伝承も残る。今回の発掘調査時においても、遺構は確認できなかったが、14B区と14C区の間にある丘陵上に南部系陶器の碗が発見され、この千人塚のある平場付近から流れてきた可能性が考えられた。今回出土した柱材などの木材のAMS放射性炭素年代は、この平家物語の時期と対応していたが、当遺跡の遺構群は12世紀後半～末以後で、13世紀後半までのものが主体であることが明らかにできた。ちょうど当遺跡が盛んに営まれた中世2段階～4段階には、大御堂寺の伽藍が整えられ、野間内海荘の領家職は院の八条院領にあり、地頭職が源頼朝の側近である梶原氏の関係者になって、地域的には安定した状況にあった。中世2段階～中世3段階に機能した柱穴列SA01・SA02のような柵とその南北に掘立柱建物が配される建物群は、一辺30m～40m程の造成された区画の中にあるものと考えられた。この2列の柵と想定されるような遺構はあまり類例がなく、周囲に計画的に区画された遺構群の存在が想定される。全てを発掘調査によって確認できたわけではないが、遺構の検出状況と遺物の出土状況から想像すると、それらの区画が沖積地面から一段上がった高台から谷奥にむかって数段、東西に並んで続いていたものと思われる。今回の発掘調査によって検出された遺構と出土した遺

物は、遺跡の縁辺部分で、度重なる土砂の流入と土地開発の中で偶然埋没し残存した一部分を垣間見たものと評価できる。

またこの時期に伴う出土遺物として、青磁・白磁の碗と滑石製鍋がある。青磁と白磁の碗類は平安時代末以後の中世の遺跡で広く分布するものであり、本遺跡においても少数の出土がみられた。滑石製鍋は実測図化したもの（S008～S011）は、径をもつ器状のものであるが、長崎県の西彼杵半島を原産地とする石鍋の形態をほとんど残しておらず、その後の砥石などの転用が想定されるものである。しかし、愛知県の遺跡の中で滑石製石鍋が出土する遺跡は清須市朝日西遺跡や稲沢市下津宿遺跡、一宮市大毛池田遺跡などで、全ての遺跡から出土するものではないようである。本遺跡の場合、この滑石製品の搬入は太平洋側からの流通によるものと考えられ、これは渥美半島産の南部系陶器や三重県からの伊勢型鍋などと同様なルートを経たものと考えられるものである。

この広域流通の背後には、物語にある12世紀中頃の長田氏が源義朝・鎌田正清ととり結んだ関係や青墓宿の長者大炊が源義朝ととり結んだ関係のように、地域を超えた人々のネットワークによるものが背景にあるものと思われる。これらのネットワークが野間の地では、海を介してのものと考えておきたい。

参考文献

- 磯部幸男・杉崎章・福岡猛志 1983「第二章 古代から中世へ」『美浜町誌』本文編、第二編 歴史、美浜町役場
 篠崎譲治 2010『馬小屋の考古学』高志書院
 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の時・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社
 小澤一弘編 1992『朝日西遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 武部真木編 1997『大毛池田遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 樋上昇編 2013『下津宿遺跡』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第175集」公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

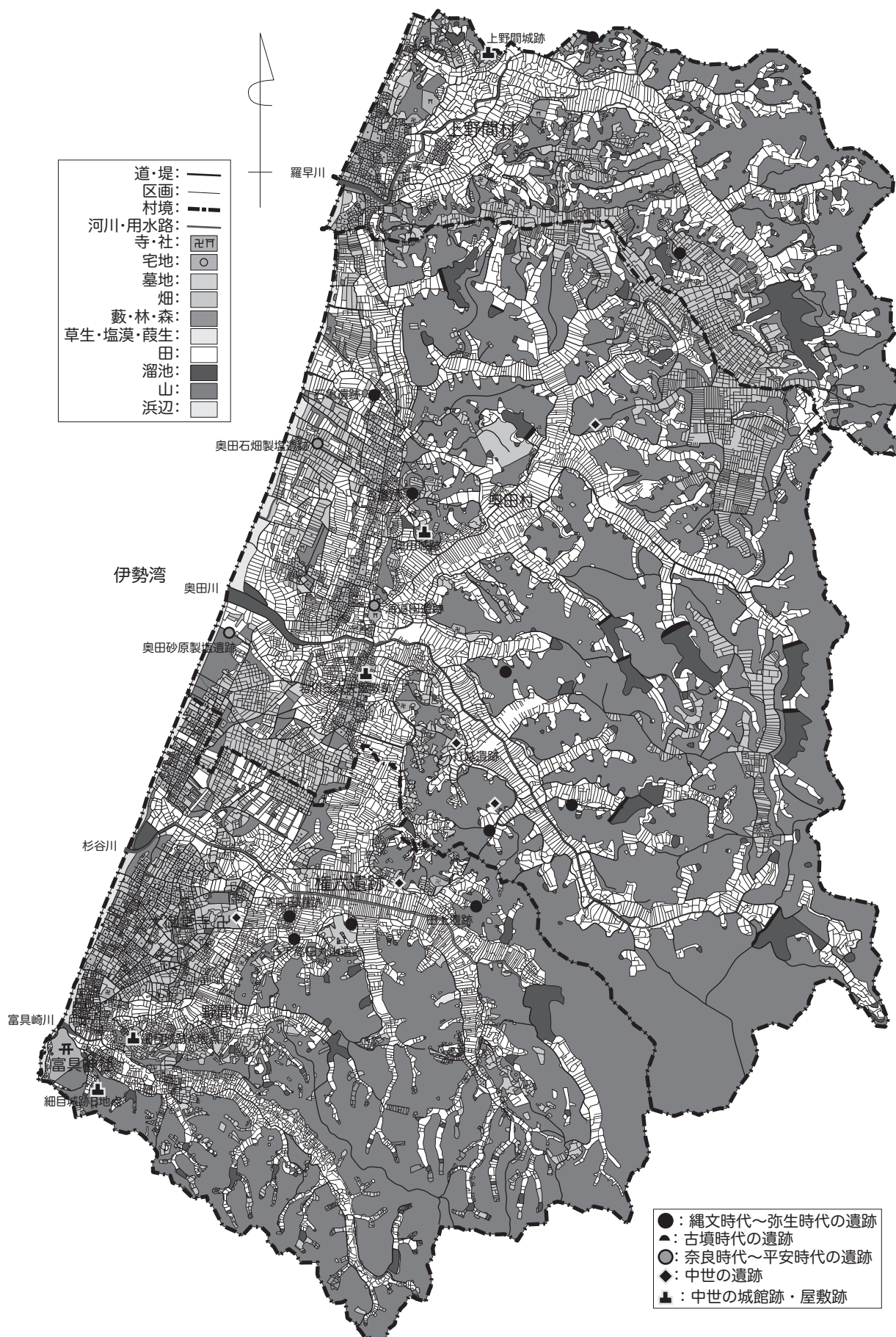


図 74 樺六遺跡周辺の地籍図 (約 1 : 30,000)



権六遺跡より伊勢湾を望む（東より）



権六遺跡遠景（南西より）

写真図版 2



14A 区 全景 (西より)



14A 区 北側 (西より)



14A 区 005NR 遺物出土状況 (南西より)



14A 区 051SD 遺物出土状況 (南東より)



14A 区 043SD・070SD・055SK (南より)



14A 区 050SK 土師器壺出土状況 (南より)



14A 区 035SD・036SD (東より)



14A 区 南西側の溝と土坑 (北東より)



14A 区 南東側の柱穴 (東より)



14A 区 015SK (北より)



14A 区 017SK (北より)



14A 区 019SK (南より)



14A 区 026SK (南より)



14A 区 033SK (西より)



14B 区 全景（北西より）



14B 区 掘立柱建物 SB01、写真左側に柱穴列 SA01・SA02 がみられる（東より）



14B区 550SK 南部系陶器碗出土状況(上層、南より)



14B区 550SK 南部系陶器碗出土状況(下層、南より)



14B区 225SK (東より)



14B区 228SK (南西より)



14B区 竪穴建物 415SI 検出状況 (北東より)



14B区 415SI 掘削状況 (西より)



14B区 415SI 完掘状況 (北西より)



14B区 415SI 内のカマド 435SK (南東より)

写真図版 6



14B 区 柱穴列 SA01・SA02 (南東より)



14B 区 109SK (南東より)



14B 区 211SK (東より)



14B 区 223SK (南東より)



14B 区 337SK (南より)



14B 区 568SK (東より)



14B 区 177SE (東より)



14C 区 遠景（南西より）



14C 区 全景（上空より）



14C 区 001SX とその下にあった土坑群（東より）



14C 区 021SK・024SK～026SK・116SK(北西から)



14C 区 079SD（北より）



14C 区 090SK（南より）



14C 区 091NR（北西より）



14C 区 091NR 古式土師器壺出土状況（北西より）

写真図版 8



14D 区 全景（上空より）



14D 区 047NR（北西より）



14D 区 047NR 出土木材（北西より）



14D 区 048NR（北東より）



14D 区 掘立柱建物 SB09（北より）



14D 区 南壁 044SK～046SK 検出状況（北西より）



14D 区 026SK（西より）



14D 区 051SK（南より）



E003



E004



E005



E006



E006 墨書



E007



E022



E023



E024



E031



E039



E047



E048



E049



E053



E060



E061



E065





E135 凹面



E136



E137



E146



E146 墨書



E147



E148



E149



E151



E151 墨書



E152



E160



E170



E174



E174 墨書



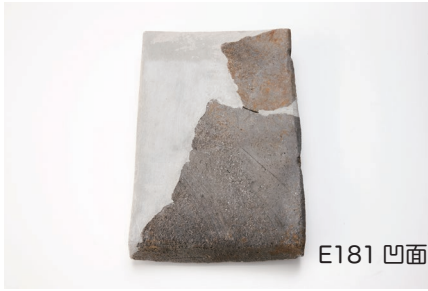
E180 凸面



E180 凹面



E181 凸面





E266 凸面



E266 凹面



E273



E276



E280 凹面



E283



E284



E285



E286



E289



E292



E293



E294



E297



E302



E305



E309



E310



E313



E314



E316



E318



E324



E325



E332



E338



E342



E345



E347



E348



E349



E360



E367



E373



E376



E379



E387



E392



E395



E398



E399



E400



E401



S001



S002



S003



S004



S007

剥片石器

砥石



S008



S009



S010



S011

滑石製鍋



青磁



W001



W002



W003



W004



W005



W006



W007



W008



W009



W010



平安時代末から鎌倉時代の出土遺物

報告書抄録

ふりがな		ごんろくいせき						
書 名		権六遺跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第207集						
編著者名		蔭山誠一、鬼頭剛						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2017年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごんろく いせき 権六遺跡	あいちけん ち た ぐん 愛知県知多郡 み はまちょうおおあぎのま 美浜町大字野間 あぎごんろく 字権六	23446	490119	34度 46分 25秒	136度 51分 44秒	2014.10.1～ 2015.3.20	2,400㎡	県道野間 河和線建 設に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
権六遺跡	集落	古墳時代 前期・ 平安時代 後期～ 鎌倉時代・ 戦国時代・ 江戸時代	掘立柱建物・柱穴列 ・竪穴建物・井戸・ 土坑・溝・自然流路		弥生土器・土師器・ 須恵器・灰釉陶器・ 灰釉系陶器・常滑産甕・ 施釉陶器・打製剥片石器 ・滑石製石鍋・柱材			
文書番号		発掘届出(26埋セ第65号・2014.8.27) 通知(26教生第1531号・2014.9.5) 終了届・発見届・保管証(26埋セ第133号・2015.3.9) 鑑定結果通知(27教生第1290号・2015.8.12)						
要約	古墳時代前期の掘立柱建物・土坑、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・柱穴列・溝・土坑などの遺構が確認できた。特に平安時代末から鎌倉時代の遺構と遺物は、区画溝で区画された内側を柱穴列で区画した屋敷地縁辺部の様子を示すものと考えられた。本調査地の北にある丘陵上には、平安時代末に野間で最期を遂げた源義朝公の伝説が残る美浜町町史跡である千人塚があり、その関連性が想定される。平安時代後期から鎌倉時代にかけての野間地域の歴史を解明する上で、貴重な資料になるものと思われる。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第207集

権六遺跡

2017年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社